

部報

昭和五十一年度



No. 22

北大馬術部

北大馬術部讃歌

作詩 三浦清一郎
作曲 滝沢南海雄

はるきたれば だいちひかゝる
しろがねのえんざん ゆめほうほうたり
たからかにいまぞいななけしわれ
らしゅんめのほまーれあり
ほまーれありほくだいほくだいお
おわがほこうわれらしゅんめの
ほまれあり

北大馬術部讃歌

一、
春来たれば、大地光る

銀の遠山、夢茫茫たり
高らかに 今ぞ嘶け！
われら駿馬のほまれあり

二、
時来たれば 旗をかざせ

奇雲の旅路に 意気軒昂たり
高らかに 今ぞ嘶け！
われら駿馬のほまれあり

三、
雲流れて 旅路遙か

奇春の孤杖 泥濘はばめど
凜然と 進みて行かむ
駿馬のほまれあるかぎり

北大！ 北大！ おゝ我が母校
われら駿馬のほまれあり



汚れなき虚空に

風は光り

雲は飛ぶ

麗わしの楡の木陰に

あらたなる夢をいつくしめ

大いなる大地に

太陽なす情熱に駆けめぐれ

その瞳

その姿

眼間に焼きつけられた人々の

生活というもの止むことなく続き



ハイ・エイム号と平野兄



ドン・ホッパー号と桑田兄（全日学）



天龍山号と横沢兄（全日学）



北勇号と石川姉



日本馬術連盟より“国内産優秀乗馬”に選ばれたスターライト号と長屋兄



51年度卒業生 左より 桑田兄、石川姉、水井姉、平野兄、横沢兄、佐野兄



北秀号離底式



一年日高合宿



離廐馬 北武号 51年12月離廐



離廐馬 北勇号 51年9月離廐

巻 頭 言

月日のたつのは早いもので、部長に就任してから四回目の巻頭言を書くことになりました。

先達諸兄姉におかれましては愈々ご健勝にてご活躍のこととお慶び申し上げます。わが馬術部員一同も雪の消えるのを待ちかねて益々張り切って練習に励んでおります。

冒頭から私事にわたることを申し上げ、まことに恐縮ですが、私、このたび二十数年間勤務して参りました北大を三月三十一日付で退職し、四月一日より酪農学園大学の獣医学科に奉職することになりました。

半澤先生御退官のあと満四年間第七代馬術部長の席を汚させて頂き、大過なく任を終えることができましたことを深く感謝申し上げますと共に、半澤前部長先生、岡田監督先生をはじめ馬術界の多くの方々、後援会、OBの皆様現役部員諸氏の暖いご指導とご協力に對し心から厚く御礼申し上げます。

この四年間を顧みますと、部員諸君は添田君の全日本学生中障碍優勝、長屋君の全日本中障碍優勝をはじめ、数々の輝かしい戦績を挙げてくれました、まことに好運に恵まれた時代に部長を勤めさせて頂いたことと光栄に存じております。

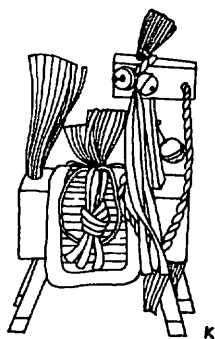
後任の部長さんには獣医学部家畜外科学教室の小池寿男先生にお願い致しましたところ、幸いで快諾を頂きました。小池先生には従来から故障馬の診療に一方ならぬご指導を頂いておりますので、OB

部長 河 田 啓 一 郎

諸氏もご存知の方が多いと思われませんが、最適任の先生にお引受け頂き、私としましても全く後顧の憂いなく退任できますことを喜んでいる次第です。

最後に北大馬術部の益々の御発展を心からお祈り致します。有難うございました。

(昭和五十二年三月)



所 感

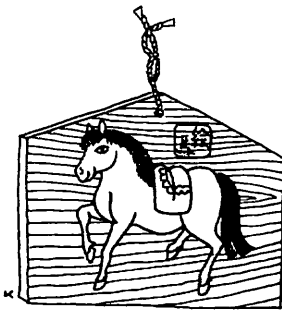
今回河田先生のあとの馬術部の部長をお引受けすることになりました。私は三〇年前に仕事で一時馬に乗せられてはありましたが、馬術に関しては全く知らずその点では部長としては適任でないと思います。しかし北大馬術部とは馬の外科的な病気を通じての關係は二〇年余におよんでおりこの間の馬術部の馬は殆どが一度や二度は私と接触する機会があり、私の治療の対照になったと思われ、永いつきあいであるともいえます。

先日の新聞で乗馬中の女子学生の馬が犬に吠えられて狂奔し、死亡事故をおこしたといういたましいニュースを見ましたが、スポーツとしての乗馬は生物である馬と人の関連するものであり、兩者の間が緊密でなくてはならないものでありながら、馬はそれ自体に意志を有することから他種のスポーツにみられない困難さがあると思われれます。

馬は家畜としては古いもの一つであり、歴史にも重要な位置を占め、人と馬にまつわる多くの物語りもあり、馬術にあっても人馬一体とか鞍上に入らずに馬なしとか種々と話題に事欠かず、一諸に生活すると、その表情の豊かなことは他の家畜にみられないほどで個性も強く、特に乗用馬はそれが強く現われる傾向があることはよく知られております。しかし一方人馬相互の意識の疎通は思っているほど容易でなく、なかなか困難であることも事実です。したがって馬術をスポーツとしてたのしむものは、生物としての馬の特

性についてよく知り、さらに個々の馬の特質やくせを承知した上でその長所を生かし短所を補い、それぞれの馬に合った取扱や注意を払うことが前述のような事故を防止する上に大切なこととなります。今迄述べたようなことは新しく書く必要もない常識であることは充分承知しておりますが、いつも同一の馬に接しておりますとつい馴れが生じ別の馬に接した際の油断となり危険を招くことが往々にしてあるものです。今回部長をお引受けするに当り、特にこのような点が気になりましたので述べてみた次第です。

小 池 寿 男



定 年

岡 田 光 夫

地方公務員に定年のない事は皆さん御承知のことと思います。そこで各都市によって年令は違いますが一定の年令に達する所謂肩太きと云われている退職勧奨しよがあります。札幌市役所も従来六十才で肩をたゝかれたわけですが、こゝ数年地方自治体の財政悪化の対策として人件費が槍玉に上げられ昇給期限の延伸・退職年金の引き下げをする都市がふえてきました。札幌市も従来六十才だったものを五十七才に引下げることになりましたので、高度成長の波に乗り膨張をつづける札幌市の建設に二十五年もたざざわり、オリンピック開催のための都市改造大事業をよい思い出にこゝらが身を退くべき時と昨年七月市を退職し、今第二の人生を歩んで居ります。今まで、役所では若い技術屋として外では若い部員諸君との交流の中で年令もあまり考えずにすごして参りましたし、気持も身体も若いと自負して居りましたがさてふと我にかえて自分の年令を数えた時に「あゝ年をとったなあ」としみじみ思いました。別に淋しいとも思いませんでしたがこゝらが人生の区切りだとあっさりやめたと云ったらいさゝかキザすぎるかもしれません。いづれにしても永い間地方公務員として袴を着ていた生活から自由な社会に生きられると云う期待を持った事はたしかでした。そして馬にもっと自由に乗れる。うまくすれば昼休み位少し延長すれば充分楽しめるだろうと思つた事も事実でした。しかし世の中はそんな甘くはありません。少くも第二の職場で何がしの給料をもらっているからには、

一つには永い間の勤め人根性がそうさせるのか又は厳しい民間企業の重苦しいふんい気がそうさせるのか、仲々思いどおりにはならぬものと感じて居ります。しかし馬に乗るのに何の努力もしないのではかえって楽しみが少いのではないのでしょうか。明日の日曜日には祭日にはと楽しみにしていてそれが実現した時又教段のうれしさが味わえるのではないのでしょうか。このチャンスを探すチャンスを求めることはゴルフも又同じであろうと思います。私はいつまでもいつまでもこの心を持ちつづけて馬に乗りつづけて行きたいと思つて居ります。それにつけても私にとって昨年これからも終生忘れることのない出来ない経験をいたしました。実は昨年十二月長屋君の全日本優勝の祝勝会の時に「今回は岡田さんの感謝の会も含まれているのですよ」と耳打ちされ一体どう云う事なのだろうと思つて居りました所私が第一の人生のピリオドを打つた機会に私に対する感謝の企画が進められていた事を知りました。祝宴に先立って花束と記念品をいただきました。しかもその記念品の上には「感謝をこめて北海道大学馬術部」の文字が記るされて居りました。本当にジーンとした感じが身体の中に走るのを感じました。退職の時どんな言葉を送られても感じなかつた感懐に胸を打たれました。部の皆さんの暖い気持にたい感謝の気持で一杯でした。私は昭和十四年予科を卒業した時部から練習の皆勤賞をいただきこれが大きな誇りでしたが、今度はそれにもまして、誰も持っていない記念品をいただきました。本当に有難うござ

います。正に身にあまる光栄と云う言葉がびつたりの出来事でした。
これからも出来るだけの努力を続けて行く決心を固めて居ります。
「皆さん、馬乗りに定年はありません。」
今なお御元気に馬に乗っていらっしゃる半沢先生、庄内先生をお手
本に私もまだまだ精進しなければなりません。



太秦杯、半沢杯の由来

半沢道郎

昭和三十八年に私が第六代の部長になってから、昭和十五年から二十二年間第四代の部長をして頂いた恩師太秦康光先生のご功績を記念して何かを部に遺したいと考えた。私が理学部に在学していた時に物理化学を教えて頂いた富永斉先生が、東北大学に移られ、東北大学の馬術部長をされ（阿刀田先生との関係不明）辞められた時に「富永杯」を寄贈されたことを知っていたので、太秦先生（当時函館工業高等専門学校校長）にお願いして「太秦杯」をご寄贈頂くことを思い付き、先生にお目にかゝつた時にお願いをした。早速ご快諾を得てカップ購入費を頂戴した。その折先生は北海道の学生馬術は基本の馬場馬術の練習を疎かにしているように思うから、馬場馬術のある種目の競技の優勝者に対するチャレンジカップとすることを希望された。カップは私が大通西十八丁目の双美商会で求めた。

昭和四十一年、加藤正昭君が主将の時に第一回の太秦杯争奪競技を行い北大の田中倬君が獲得した。第二回は四十二年に酪農学園大の杉山光君が、第三回は四十三年北大の春田恭彦君が獲得した。こゝまではカップの台座に年月、氏名が記録されているが、何の競技会の何の種目で争ったかは記されていない。またその後争奪戦が行われたか否かについても明らかでないので調べる必要がある。然し中断されていた事は確かだ、これは条件として馬場馬術競技に使う

ということで実施しなかったものと思われる。

昭和四十八年四月私が北大を定年で退職することになったので、太秦杯に倣って半沢杯を部に寄贈することにした。私の後を受けて第七代の部長になられた河田啓一郎先生は馬術部、北大乗馬同好会、北大馬術部後援会の共催で早速五月五日に私の退官を記念する馬術大会を北大馬場で開いて下さり、中障書飛越競技の優勝者に半沢杯を渡すことにされ、第一回は札幌乗馬倶楽部の布浦敏一氏がハッピー号で獲得された。第二回は四十九年五月三日同じく北大馬場で半沢杯馬術大会として開催、北大同好会の小野忠氏がドンホッパー号で、第三回は五十年五月四日、北大馬場で同じ競技会名で開かれ、小野忠氏が同じドンホッパー号で獲得された。第三回の時に私の健在の徴として乗馬姿を披露するよう、庄内先生と大池さんに煽てられて、札幌競馬場の高千穂号を借りて狂乱馬術を五分位やった。

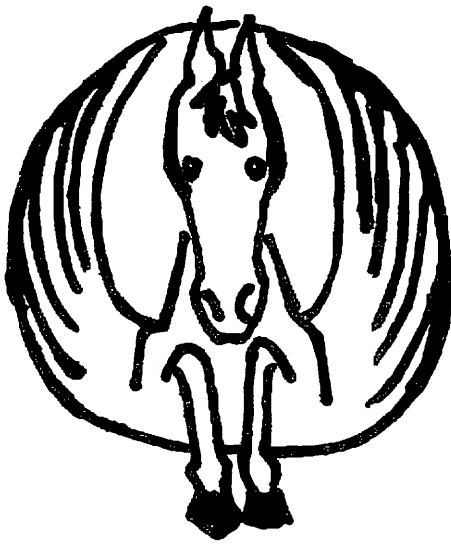
太秦先生が高等工専を退められ函館から引揚げられて札幌にお住いになられる様になった。太秦杯の行方が不明では誠に申訳が無いことで、半沢杯の名をつけた大会を開くのも如何かと考えていたので部員に行方を調べて貰ったところ、カップは部室にあることが判明した。太秦先生には大変失礼であったが昨年五十一年から太秦杯の争奪も併せて行い事になり、第四回太秦杯（カップの台座に第三回まで明記されているので丁度都合がよかった）半沢杯記念馬術

大会として開催することとなり、五月三日北大馬場で挙行、大秦杯は複合馬術競技の優勝者に、半澤杯は中障害飛越競技の優勝者に夫々授与することになった。北大の桑田壮平君がドンホッパー号で両杯とも独占する結果となった。ドンホッパー号は三年連続して半澤杯を獲得したことになる。

蛇足であるが昨年この大会にお礼の気持で障害一組を手製で作って寄贈した。不出来であるけれども未だ壊れなくて健在である。今年の大会にも一組進呈したいと考え、目下製作中である。

(参考は Paalman の本)。

この記念馬術大会は雪が無くなった直後に行われる札幌での恒例の大会として本年で五回目になり、近郊の馬術愛好者から楽しい大会として参加して下さるので本当に嬉しく有難いことで、主催者も参加して大会を盛んにして下さる方々にも誌上を借りて心からお礼を申し上げます。



卒部にあたって

卒部生一同

拜啓先輩諸兄殿

ここに部報を送り一年の総決算をお伝えすると、クラブは新入生を向え新たな活力を得て再びシーズンへと突入します。

我々、卒部にあたり、日頃の御無沙汰のお詫びとこの一年間の皆様の数々の御援助に対するお礼を延べさせて頂きます。そして又後援会の新参者として今後も宜しくお願い致します次第です。

クラブ生活を送る中で先輩方の御援助を頂く事は心強いばかりでなく、歴史的な背景の上に毎日の活動を送りうるという意味で、それは、我々にとってクラブを有意義なものにする為の根源的なエネルギーであった様に思われます。遠征先で昔話が聞けたり、お目にかかったことのない方からお手紙を頂いたりした時など、我々が必然的に或る重荷を負っている事を感じつつも、そうした重荷を担っている事で自分達がより意味のある毎日が送れるのだと思われたものでした。

そう思いつつ、又、先輩方の御援助に充分応えられるようにとより頻繁なOBとの接触をといることが部内で云われているのですが今猶、怠慢さから御無沙汰ばかりで申し訳ないことと申しています。部員の感謝の意を代表してお伝えすると共に、クラブは毎日確実に休みなく活動を続けており、その活動の中で先輩方の意を実現してゆくつもりです。という言訳にもならない言訳でお許し下さるようお願い致します。

馬術部の家系も年ごとに大きく膨れ上り、現役とOBの或はOB同志の直接的な交通がなかなか難しくなるにつれ、歴史というものが次第に抽象的な観念になりがちです。現役が根っ子を失なって浮き上ってしまったてはなりません。現役の積極的な働きかけを期待すると共に、先輩諸兄相互の交通が地方のOB会結成などの方向でなされる事を希望致します。

皆様の御自愛をお祈りします。



目 次

○ 巻頭言	部長	河 田 啓一郎	
○ 所 感	新部長	小 池 寿 男	
○ 定 年	監督	岡 田 光 夫	
○ 太秦杯、半沢杯の由来	第六代部長	半 沢 道 郎	
○ 卒部にあたって		卒 部 生 一 同	
○ 役員報告			
主将	三年目	矢 田 明	1
副将	三年目	長 屋 清 隆	2
主務	三年目	半 浦 剛	3
会計	三年目	山 川 恵	5
馬匹	三年目	本 城 敬 文	8
飼料	三年目	山 本 裕 介	9
馬具・備品及び施設	二年目	岩 田 正 勝	10
作業	二年目	中 畠 孝 幸	10
	二年目	木 村 憲 子	10
薬品	二年目	浪 内 陽 子	11
文化	二年目	三 好 功 悦	11
記録	三年目	笠 間 淳 子	12
	一年目	国 枝 保 幸	23
	三年目	半 浦 剛	25
	三年目	長 屋 清 隆	26
	三年目	長 屋 清 隆	29
○ 馬の頁 調教報告			
スターライト号	三年目	長 屋 清 隆	34
羊蹄号、北離号	三年目	山 川 恵	36
疾風号	三年目	本 城 敬 文	38
天龍山号	四年目	横 沢 敏 夫	45

ドンホッパー号	四年目	桑田 壮平	46
ハイエイム号	四年目	平野 雅裕	49
北燕号	三年目	矢田 明	51

新馬紹介

北楽院号	三年目	本城 敬文	53
「北楽院」の由来			54
北稜号	三年目	矢田 明	55
北美号	三年目	山本 裕介	56

離厩報告

北勇号	四年目	石川 淳子	58
北武号	三年目	半浦 剛	59
北秀号	三年目	山本 裕介	62
離厩馬の過去			65

○北隼号

北隼号の過去			72
北隼号の死亡に関して	二年目	三好 功悦	75
北隼号調教報告	四年目	佐野 淳之	78
何か云ひたかりつらむ	昭和48年卒		
		西村 正二郎	97
先輩からの手紙	昭和8年卒	武田 朝男	99
	昭和30年卒	鎌田 正人	99

○先輩寄稿

○水産馬術部より

ダイバレード号調教報告		藤原 一郎	101
卒業生紹介、自己紹介、雑感			101

○ あしあと

四年間の思い出	平野雅裕	104
四年間をふり返って	桑田壮平	105
なつかしく思い出せば	石川淳子	106
思い出	水井とく子	106

○ あすなろ物語

雑感	一年目	国枝保幸	108
僕のポーズノート	一年目	太田敬	108
ある晩思ったこと	一年目	島村努	109
ざっかん	一年目	成田慎二	110
ひとりごと	一年目	西川理一	110
雑感	一年目	日南田ゆり子	111
雑感	一年目	水島洋子	111
雑感	一年目	吉田円	111

○ 自己紹介、他己紹介

○ 馬のひとりごと

○ 名簿

役員報告

主 将

我々の課題

矢 田 明

言うまでも無い事だが、我々には、馬術部を運営し、発展せしむ様努める義務が有る。同時に、諸活動の根本と成る可き一冊の、制作の必要性を強く感ずる。馬術部と有り有機体には、指針となる一貫した何かが是非とも必要なのである。

北大方式は、馬匹の飼育法から始まり、部の運営法、人間の指導法、そして、自然馬術理論に基いた北大なりの合理的な調教法の具体案、同時に練習方法とその実際、等でなければならぬ。

試行錯誤なるものは、人間の成長には不可欠かも知れぬが、馬、そして馬術部と言う名の生命には、甚だ有害なのである。時には必要にならうが、愚行に削減される時間は惜しむ可きであろう。

我々の以上の意見と、OBの皆様の御意志を、一冊の書の中に反映して行こうと決意している。

話を元に戻すが、部活動に欠かせぬ事柄を考えよう。協調である。しかし、部員の一人一人が、その責を全うし且つ二つの独立した個人と成り得た時に初めて協調が意味を持つ。すなわち、団体と言う概念に甘んじ、寄生虫の集団、鳥合の衆に成り下がっては、決し

てならない。次元は低いが、追求する価値の有る問題である。甘えてはならない。後退は許されない。

年々都心化を窮める札幌に、しかも市の中心に現馬術部はあり、馬が歩ける所は加速度的に狭められてゆく。そんな悪環境でも、フルに活用すれば、まだ馬術部は存続出来る。しかし、十年後、この地に馬術部が在るか、私は不安である。要するに、たとえ、馬術部の流れは変わらなくとも、外界に対して相対的に変わってゆく。この事も忘れてはならない。長い話になるが、兎にも角にも、我々は日々練習し、上達し、馬術より道を得、そして試合には全力で勝たねばならないのである。

北単号に関して

現在の我々を導いて来た馬であり、尚、活躍の期待されていた馬を、部員の不注意、管理の落度により他界させてしまいました。

北単号を育てて来られた年代の方、特に、彼の調教責任者で在られた先輩方には、謝罪のしようもなく、以後も顔向けが出来ぬと覚悟致しております。申し分けありません。

反省を十分し、これからの活動の戒めとして行きます。

馬の出し入れについて

昨年の春から、現在に至るまでに、三頭、離厩し、同じく三頭の新馬を入厩させた。少し出入りが激しいが、試合に勝てる馬の育成に力を入れねば、二・三年後には又、馬が居なくて苦しむ破目に陥る危険が有る。矢張り今から新馬を作る可きだと考えた。幸いにして、新四年生の数も七人と多く、小栗先輩を初め、力強いOBの方々が在札されております。何如にしても、良馬を多く作りたい。

試合予定

発行日程を考慮し七月から予定を書きます。

七月三十一日

日韓親善馬術大会

八月三日―八日

北日本学生馬術大会

八月二十、二十一日

北海道馬術大会

九月三・四日

全日本公認馬術大会

旭川

帯畜

一人でも多くの関係者に観戦していただける様、簡単ですが、夏の大会予定を記しました。

副将

長屋 清隆

例年部報にこの欄は無いはずですが、何か書けと言うので、最上級生という立場の厳しさを味わって色々考えたことの一つをごく簡単に書いてみます。

現在、部の構成員であるところの一年目から四年目まで誰一人として、かつての「低迷」と言われた頃の事を知る者は居らず、幸か

不幸か苦い思い出というものを持たない。我々四年目が新入部員として入部した年の秋に、添田さんが全日学制覇を成し遂げられ、又国体出場・七大戦優勝、更には全日学で団体を組むなど、輝かしい戦績の中で我々は育った。そして、そうした輝かしい戦績というものが充分可能な事として定着してきた昨今、馬術部の更なる発展、栄光を目指す戦力の一翼を担う者として最も気掛りなのは、部に一体感が欠けてくるような事が無いだろうか、という点である。北大馬術部を代表するのが最上級生であり、代表的な馬がスターライトヤドンホッパーであっても、部を構成するのは下級生をも含めた全部員であり、新馬を含めた全部馬であるの言う迄もない事でありながら、部員一人々々、特に上に立つ者の意識に上らない場合があり勝ちなのではないか。部を代表する「顔」だけが遊離してしまうことを最も恐れる。それは単に試合を始めとする対外関係のそとづらだけに限ったことではなく、寧ろ内面的な問題だと思う。部を運営し、或いは又、下級生を教え部馬を調教してゆく時、上級生の頭だけが徒らに先走ることには許されまいんじやないか。理想を揚げて夢を追い求めることに終始し、現実の場に一足飛びに理論を当て嵌めようとする事、理想を現実と同次元まで引摺り降ろす事は、少し馬に乗れるようになった最上級生などが犯し易い誤ちであると思うが、現に最上級生である我々自身が自ら戒めなければならぬ事だ。その上で、更に理想と闘志に燃えて、毎日を戦ってゆかねばならない。

馬術部に不測の事態が起きた時、窮地に陥った時、部を救い出し立ち直らせるのは、部員一人々々に漲る一体感であろうと思う。それを如何にして生み出してゆくかは、それぞれが毎日の生活の中から

見出すしかないだろうし、これからの我々の課題でもある。

昨年度は道内はもちろんのこと、中央での試合に於きましても、先輩諸兄の御観戦、更には並々ならぬ御世話を戴き、誠に有難うございました。今年の試合予定は前記の通りです。変更があるかも知れませんがほど予定通り行われると思えますので、よろしく御観戦くださいますようお願いいたします。

主 務

半 浦 剛

序

昨年十月に佐野兄より主務を引継ぎました。当初は、部員総会の為のクラ館予約一つにしてもまごまごしていたのですが、やっとそうした雑多な仕事にも慣れ、もっと主務として、部というものを大局的に見て行動しなければと思つて居ります。雑事にかまけてばかりいてはならないと思ひます。そして一方では雑事を処理して行かなくてはなりません。

副務として、滝華が私を助けてくれますし、各馬連関係、先輩関係は副将の長屋がやってくれています。後援会はいつも、事務局の江口兄に頼り過ぎるばかりで申し訳無く思つて居りますが、こうした事に甘えずに、何か部に残すべく頑張るつもりです。

部財政

詳しい収支報告は会計報告があります。ここではその概要を述べ

るにとどめます。

現在、部年間予算は三五〇万円を越えようとしています。支出の内訳は、飼糧一〇〇万、鉄代一〇〇万、遠征八〇万、薬品二〇万、馬具・備品三〇万が予想される主なものです。一方収入の主なものは、学馬連補助一〇〇万、アルバイト一〇〇万、学生部援助九〇万、後援会援助、OB寄付等三〇万、部費一五万等が予想されます。

これは全く大ざっぱなもので、すべてが流動的なものですから、厳密に計画経済という訳には行きません。

さて、飼糧と鉄代について述べますと、現在燕麦一袋三、四〇〇円で四年前の二倍強となつて居り、とてもそれに学生部援助が追いつかぬ現状です。昨年は、子馬の誕生、盗難や、七帝戦が北大主管であつた為に、それに体育掛予算が相当使われたとかで、学生部援助が基準額七〇万円しか出してもらえず、渡部商店の滞納金がかかりの額になつてしまいました。そこで不本意ながら雪祭りの夜間アルバイトを部員に押し付けて、その収入二〇万全額と一〇万を加えて三〇万円を渡部商店に払いました。

昨年とはかく学生部援助が少なく、赤字が増えてしまいました。今年はこの事のない様、鋭意交渉するつもりで居ります。規準額七〇万円という概要をくずさなくてはなりません。四年前の学生部援助規準額六〇万、燕麦一袋一、六〇〇円、一方現在、規準額七〇万、燕麦一袋三、四〇〇円で如何に学生部援助が物価の上昇に立ち遅れているかがわかります。

馬の頭数十一頭を崩せない現状で、少しでも飼糧代を減らさねばなりません。そこで今年二月下旬より、先輩の南部兄の御好意で木田製粉より糞を一袋当り二〇〇円程度安く現金買ひして居ります。この場を借りて御礼申し上げます。

鉄代も近年上昇の一途を辿り、現在冬鉄で改蹄費一頭当り八、五〇〇円も致します。改蹄は、年間十二―十三回つまり一か月一回の割で行なっていますが、これを慎重に一カ月に五日間延ばせば、一回分約一〇万円が浮く道理です。馬匹の本城とも相談して、馬体管理上支障のない程度に考えて行かなくてはなりません。貴重な現金収入である学馬連補助が全部鉄代に消えてしまわない様、配慮すべきだと思います。

次に乾草ですが、昨年は、栗沢の川森牧場で乾草運びのバイトをして乾草を分けてもらったり、先輩の八木さんの御好意で市有地で草刈大会を行なって何とか冬季の乾草を確保して助かっています。しかし春にはやはり現金で買わなくてはなりません。

今年も乾草運びのバイトをして乾草を分けてもらうという方式で行きたいと思っています。他のバイトをして現金を得てそれで乾草を買うより効率が断然良いと思います。

アルバイトは現在、中央競馬、道管競馬合せて一〇〇万円程行なっています。その他、不定期のバイトを二、三行なっていますが、これが部員の限度ですし、部生活を圧迫するようなバイトは極力避けるべきではありません。

又近年、部費の値上げも時々話題に上り、部費の値上げは厳格にという慎重派と、物価の上昇がこれだけあるのだからという推進派に分かれるようです。確かに現在の五〇〇円を一、〇〇〇円にすれば馬一頭分の飼糧代が出る勘定です。しかし、現在部員は種々の出費があり多額滞納者が出る現状に鑑み、慎重に考えるべきでしょう。

施設・備品

施設、備品は一部の物を除いて全て学生部の物品援助で賄っています。今年は、目玉として、厩舎の東側から飼糧庫を通ってポロ捨

て場裏までU字側溝を付けていただく事になりました。業者を入れるのは人件費が高いというので敷設は僕たちがやらなくてはなりません。三二メートル分のU字側溝、セメント、砂、砂利、が雪溶けと併に到着するはずですよ。

それから、野外に時計を設置しようということで昨年、佐野兄が交渉して来ましたが、なかなか良い返事がもらえません。そこで、今年の卒部生が卒部記念にと時計を贈ってくださることになりましたが、相当高価なものですから、学生部にも援助していただくと考えて居ります。

次に、厩舎移転の折に作っていたいた固定障碍等の老朽化が目立ちます。昨年は半沢先生にパーと袖にもなる支柱を贈っていただき本当に助かりました。今年には道自馬大会が北大馬場で開かれますので、障碍施設を整えねばなりません。各方面に御援助を御願ひする次第です。

北隼号の事

七年間、我部に貢献し、常に明星として活躍して来た北隼号は、左顎を他馬に蹴られたのが原因で、今年一月三十一日に部員に見守れながら亡くなりました。管理上の不手際からこの様な事になったのを反省するとともに北隼号を育てて下さった先輩諸兄にはお詫びの言葉を述べたいと思います。心から北隼号の冥福を祈ります。

遺骸は山透号の墓の東隣に埋葬致しました。雪溶けとともに清掃し、碑を建てるつもりで居ります。

部長御転職の事

四年間、馬術部の部長として御尽力下されました河田部長が、今年四月をもって、酪農学園大学の方へ御転職される事となりました。長年の御尽力に対して感謝するとともに御転職の後にも我部を見守

って下さいます様御願ひ申し上げます。

後任部長については、先生、諸先輩の方たちとも相談して、最急に御報告致す所存です。

結び

僕らが一年目のときから見まして、何か種々の面で転換期が来ているのではないかと思えます。(最上級生になった人は全て感じる事かもしれません)他でもない我々の背にのしかかっているのです。牛の如く、遠くを見渡し、のししと前進していこうと思えます。

最後に、僕を主務として立ててくれる部員諸兄に感謝すると共に、その寛容に甘えぬ様頑張りたいと思えます。

会 計

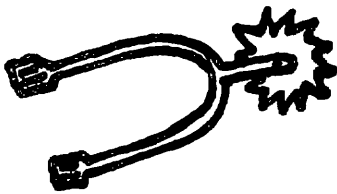
山 川 恵

親のスネをかじってのんびりと生活している我等学生さんといえども、ことクラブに関しては社会の風の冷たさを身にしみて感じさせられます。ことに最近の物価の上昇には目を見張るばかりでとてもついていけない状態です。

昨年をみますと、クラブの借金が百万を越している時期もあり、今までのように「赤字だ」といっているだけではとてもすまされない状態になってしまいました。なんとかしなければとてもやっていけないということで、まず部員全員がクラブの会計状態を知るために会計監査を設け、全員が「赤字」ということを心に刻みつけて、

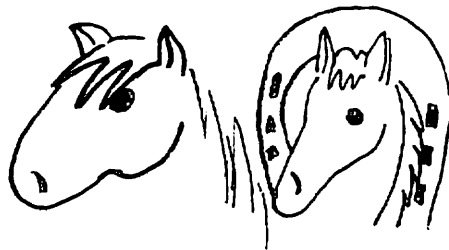
無駄を省き、物品を粗末に扱わないようにしました。また、雪祭の人数計測のアルバイトをしたり、一ヶ月約十萬かかる濃厚飼糧を、少しでも安い購入方法に変えたりしています。しかし、濃厚飼糧に関して学生部の援助だけではとてもやっていけず、また蹄鉄等の値上がり、遠征の増加と同時に国鉄運賃の大幅値上がり、赤字解消の先ゆきは暗そうです。部員の個人負担にしても、強制バイトと部費ですが、この他にエントリー料、遠征旅費など、本来ならばクラブから出さねばならないようなものでも個人の負担となっており、試合が多くなってくると、こちらのほうもたいへんです。

以上、毎年同じような暗い報告しかできないのですが、今後とも部員一同頑張っていこうと思っておりますので宜しく御援助御願ひ致します。



S 5 2.1 ~ S 5 2.8 の収支予想

収 入		支 出	
部費、入部金、滞納金	30万	飼 料	100万
アルバイト	86	(1ヶ月10万+乾草20万)	
(2月雪祭のアルバイト、大学祭を含む)		蹄 鉄	80
補 助 金	20	馬具・備品	8
そ の 他	40	薬 品	16
(6月道自馬大会を考慮)		遠 征 (十和田・旭川・帯広)	55
学生部からの援助(3月・8月)	69	文 化	4.5
計	245万	記録・事務	14.5
12月現在手元	104	その他(エントリー料を全て個人負担とする)	14
計	349万	計	292万
		12月現在借金	85
		計	377万



決 算 報 告

S 51. 1 ~ 51. 12

収 入	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
部費・入部金	27,200	34,030	16,600	53,970	48,565	128,372	79,300	20,963	38,330	35,730	19,660	67,727	570,447
アルバイト	0	17,200	0	0	77,000	86,145	356,070	292,447	102,268	46,632	0	0	1,397,450
補 助 金	0	0	0	0	15,000	0	105,000	133,000	1,100,000	15,000	277,500	5,400	1,650,900
そ の 他	50,000	800	22,000	173,131	22,035	17,700	49,000	145,010	27,100	180	172,862	149,224	829,042
計	77,200	52,030	38,600	227,101	162,600	232,217	589,370	591,420	1,267,698	517,230	470,022	222,351	4,447,839
支 出													
飼 糧	0	0	4,500	0	311,240	0	6,250	0	0	0	0	51,985	841,840
蹄 鉄	0	0	100,000	0	0	0	302,500	184,000	0	210,000	0	180,600	977,100
馬具・備品	0	7,390	4,950	13,000	12,005	28,910	14,600	10,850	1,300	5,820	17,850	940	117,615
薬 品	1,088	0	15,135	1,088	5,130	31,060	4,250	73,520	12,360	2,200	29,835	20,395	196,061
逓 征	0	0	0	0	0	0	122,300	55,800	80,000	5,000	372,800	0	635,900
文 化	0	0	4,205	48,642	3,620	42,197	7,370	290,118	47,888	10,000	16,240	22,090	492,370
記録・事務	280	2,340	800	95,419	8,650	5,348	21,025	5,200	1,600	1,110	29,720	12,570	184,062
そ の 他	41,266	3,886	36,342	102,826	51,100	136,575	71,561	81,765	48,632	188,200	31,570	27,040	820,763
計	42,634	13,616	165,932	260,975	391,745	244,090	549,856	701,253	191,780	422,330	498,015	783,485	4,265,711

備考：エントリー料等個人負担のクラブ立替はその他の支出に入れました。

馬 匹

本 城 敬 文

一昨年より馬の飼育管理ということで馬匹飼料を一人で見てきたのですが、より充実させようというねらいから今年はまだ二分して、飼料を山本君、馬匹を私が横沢兄から引継ぎました。さてその仕事ですが、まだまだやり足りない所ばかりですが、概要を説明いたします。

まず馬の出入のことでありますが、六月北楽院号が春田先輩の紹介で高松厩舎より入厩、九月北勇号をすずらん乗馬クラブへ離厩、十月北美号を小栗先輩より入厩、同月北稜号を獣医学部より入厩、十二月北武号をすずらん乗馬クラブへ離厩、一月北隼号死亡、四月北秀号離厩予定、となっており現在二歳馬の北離号を含めて、牡馬一頭、牝馬六頭、駒馬五頭、計十二頭でやっています。

北隼は十二月下旬パドックより放馬し、他馬に蹴られ下顎骨左部骨折。以後皆の看病の甲斐なく日増しに栄養状態が悪化し、一月三十一日永眠いたしました。これは放馬という管理の悪さから発生した事故であり、人為的ミスで優秀な馬を死に追いやってしまった事を深く反省いたします。まったく北隼にも皆様にもお詫びの仕様がありません。二度とこんな不幸を起こさぬよう注意します。

さて、各馬の馬体状況を簡単に述べます。

北秀：左飛節内腫。冬期に跛行することあり。

羊蹄：十二月凍結路上で転倒し右膝裂創、完治。

二月蓄膿症の手術、予後良好

スターライト：左前後肢管骨骨瘤に熱感。

疾風：左前後肢管骨骨瘤に熱感。蹄蹉腐乱良好。

天龍山：右前後肢及び左前肢管骨に骨瘤、熱感あり。

蹄蹉腐乱良好。

ドンホッパー：左前蹄丘追突、完治。

ハイエイム：右前球節裂創完治。左前肢管骨骨瘤に微熱。

右後肢管に血腫、良好。

北燕：左半膜様筋萎縮症。右前肢管骨骨瘤に熱感。

北楽院：左前肢深屈腱炎既往。左前肢管骨内側及び右後肢管骨外側に骨瘤、微熱。

北美：左前肢腱鞘炎完治。

北稜：右後肢繫帯炎。

北離：運動不足。

だいたいおわかりいただけだと思いますが、ほとんどの馬が足に疾患があり、あまり強い運動を要求すると跛行するおそれがあります。これは馬場が硬いことにも原因があると思うのですが、現状では砂をできるだけ多く入れてもらえるよう学生部にお願ひするしか手はなく、とにかく馬の様子を見ながら練習し、熱があれば冷やすことを続けています。

馬体の健康管理は獣医学部の先生方の御協力によるところがほとんどで、跛行、創傷等の診断治療をお願いしています。日常の管理としては、朝・夕の体温測定、四肢の熱感の有無等は調べています。一昨年より続いている月一度の体重測定では、平均して一二三月に体重減少、八九十月に増加すること、ほとんどの馬が一昨年より徐々に体重増加していることがわかりました。また、春には寄生虫卵検査を行い、駆虫薬を必要に応じて投与しています。伝貧検査、日本

脳炎、インフルエンザ予防接種も春に実施しています。

また馬に不可欠な改蹄ですが、太田さんには革片を入れてもらったり、厚尾蹄鉄を装着してもらったりで骨瘤や腱炎の予防治療にいろいろ気を使っていたいています。

馬体管理の改良点は多々あると思います。四月からは毎月血液検査を実施する予定ですし、獣医の先生による講義もするつもりですが、しかし、最も重要なことは日々の馬との接触において人間がミスをおさないことです。放馬や創傷のほとんどは注意により防げます。馬という動物の性質を理解し、人間が無理をしなければ事故は防げます。

今年もまた前進していかなばなりません。皆様方の御援助を御願ひ致します。

飼料

山本裕介

横沢兄の馬匹飼料の役を半分、つまり飼料を昨年の秋に受け継いだわけですが、もう半年、ただ飼料を買えばとばかり考えていた私は、その単純な考えでは、この役職は、無意味であることが、（これは、当然なことですが）このごろ実感として、ひしひしと湧いてきた次第です。馬の死活にかかわることであると同時に、クラブの財政状態の行方に、一義的役割を果たすのが飼料でして、このことはもっと、部員全体で意識されるべきだと思います。結局如何にしてより安い飼料を入手するかですが、今まで、多くの方々のおかげで

なんとかやってきましたが、これからは苦しくなる一方の財政を考えると、もっともっと積極的に動かねばならないと痛感します。そのためにも、いろいろな方面との交渉を上手にやる必要があります。

現在、濃厚飼料（塩、カルシウムを含む）は、一頭月約一万一千円かかり、おもに渡部商店より購入していますが、少しでも安いものをおもひまして、三月より南部先輩の飼料会社より、麩だけ購入することにしました。南部兄には、大変お世話になりました。乾草は、冬期で一頭一カ月六千円で去年春から、今年の春までの分を全部、栗沢町の河森牧場のお世話で、購入又はアルバイトの引き換えという形で、入手しました。また、市役所の八木先輩に草刈場所を、お世話していただき約五十個作りました。寝むらについては、佐合氏の紹介で、余市の農家から、また、例年のごとく北大農場から堆肥と交換に入手致しましたが、それだけでは、どうにもならず他からの供給を考えています。

飼料と馬体の関係については、今まであまりその科学的內容が受け継がれていないというところで、代々の飼料担当の方々は、承知の上であったかも知れませんが、もっと部員全体にその知識を浸透させるべきであると思ひ馬匹の本城とも相談し、伝統的に受け継がれている我部の飼養管理をふまえて、より合理的な飼養の手がかりになればと思ひ、科学的な飼料と馬体についての知識を私たちなりにまとめてみようと計画しております。

馬具備品及び施設

岩田正勝

施設は九月以来ですが、馬具備品は、成り立てで、よく現状がつかめていないのが現状です。大ざっぱに見たところ、ほとんどの馬具が長年の使用でいたんでいる状態で、もし使用不能になった場合、予備は一つあるかないか位です。修理等に関してもっと調査する必要があります。部員諸兄も、この事を考えて、馬具備品等大切に扱って下さい。

施設に関しては、当初いろいろなアイデアを持っておりましたが、あいにくの大雪に埋まってしまう、春の雪割を待っている状態です。施設といっても、根本にあるのは部員諸兄の馬に対する思いやりや、快適な生活に対する構えなのは何もありません。シーズンに入ってあわてないように、オフの間に準備を予めしておくつもりでいます。大きなものは馬場坪から、小さなものは、蹄油のハケに至るまで、施設の範囲は非常に広いので、細かい所に神経を配りながらも、大きな目で見ることが必要とされます。

今年、やろうと思っていることは、
1. U字側溝の設置
2. 新障子の製作
3. 馬場坪、パドックの柵等の根本的改善 等です。

何といっても一人の目は知れていますから、気のついた所はどしどし注意して下さいれば幸いです。

作業

中島孝幸

馬の上にいるよりも、作業をしていることのほうが多いというクラブの性格上、作業にも、馬に乗る時と同様に熱意を表わし、かつ悦楽を得なければならぬのです。「作業」という役職には、クラブ員を統制管理して、仕事を課すという管理職的イメージが濃いのですが、私の理想としては、多人数の力を十分集約して、作業を能率的に短時間で終わらせる為に走り廻る小間使い的イメージを皆が持つてくれるようになります。

木村憲子

作業の任を授けてから、部活動の生活的な部分に目を配ってきたのですが、半強制的に作業を割当てなければならぬことが、割当てる側として辛いところです。

毎日の馬との生活において、ちょっとした作業でより改善されることが多々あります。そういうことを、こちらからわざわざ強制するという形ではなく、自主的に処理していくという形にもっていかれたらと思っています。毎日、少なくとも一頭の馬の世話をしています。自分がこの馬のためにやってあげなければならぬという自覚があれば、自主的に作業が出来るようになると思います。その足りない部分を補っていくべき細やかな注意力を持ちたいと思います。あとは各自の自主性に頼るしかありません。例えば、馬の毛布が汚

れていても、それをこちらからの強制的作業で洗うのではなく、チーフサブチーフの自主的作業という形に持っていったらと思っ
ています。そうはいっても、なかなかうまくいかない面があり、ど
うしても強制に頼らなくてはならない時もあります。少しずつでも
良い方向に持っていったらと思っています。一日の作業にしても計
画的に能率良く片付けることに気付かなくなってはなりません。
作業という労働なしに部活動は成り立たないということをおまえ
て、やっていきたいと思えます。

薬 品

浪 内 陽 子

諸兄諸姉の中でやや医療に明るいという と私自身勉強になると
思い、役職の務めを果す様努力はしておりますが、天性のドジで時
時御迷惑をおかけいたしております。

しかし、なんと人間と動物の違いかな?!いくら馬が人間より遅し
いからと言って、これでいいのかしら……:~:~:~:と思う事もしばしばあり
ます。しかし人間ほどお金をかける訳にもゆかぬでしょうし、いか
に安いコストで治療するかを考えるよりは、当然の事をながらケガを
させない、傷をつくらないという予防的な事の方が重要だと思っ
てきました。もともと動物の身体には自己再生能力があって、ほとん
どの傷は自然治療するのだし、薬はその働きを助けるにすぎないの
だから、なるべく薬を使わない様にといい考え方で、これからもや
ってゆくつもりです。

馬体の事については、獣医学部の本城兄に頼りきってしまい、私
自身、勉強不足を痛感しています。又私たちが治療できる範囲も限
られています。獣医の諸先生や先輩諸兄には御親切な診察や御助言
をいただき本当に諸先生、諸先輩の御好意に支えられている部分が
大きいと思っております。心より感謝しております。この紙面を借
りてお礼申し上げますとともに、これからもよろしく御指導御助言下
さいます様、お願い致します。

もう一つ常々感じている事は、部員の衛生知識、衛生観念をいか
に啓蒙するかに頭を悩ませています。どうすれば理解してもらえら
のでしょうか。いや、成人というのは、わかっているもできないとい
う面が大きいのかも知れませんが……。又、冬とても寒い中での練
習ですし、身体にとって良いはずはありません。今は障害なくても
年令がふえると、特に中年くらいになれば、きつと腰痛や関節痛に
悩まされる様になると思っていますので、十分に注意し、身体をいたわ
って欲しいものと思っております。

最後に、「諸兄諸姉 薬品の取り扱いには清潔にしましょうネ」

文 化

三 好 功 悦

既に五ヶ月この役職を続けて来たが、最近ようやく僕なりに「文
化」が、つかめてきたような気がする。

就任当初、「文化」という言葉自体、至極抽象的であり、捉え所
が無かったのだが、機能としては、八ミリ、写真関係の仕事、いく

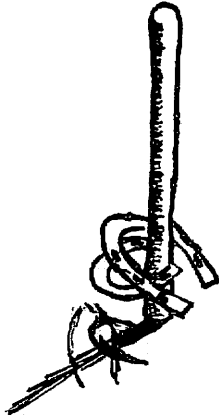
記 録

つかの行事の企画等を行うという事は漠然と解っていた。今年度から新たに V. S. Littauer 著 "Common Sense of Horsemanship" を文化、記録と共同で和訳するというおまけまでついたのだが、これらの仕事を通して今感じることが、文化から部員への二通りのアプローチが可能であるということである。

具体的には、技術的に参考になるような写真撮影、"Common Sense" と和訳等を通しての馬術的アプローチと、ポートレートなど記念品の写真撮影、種々の行事の企画を通しての、娯楽的アプローチである。これらは共に、前者は技術的に、後者は相互連帯の強化によって、形は違っても部活動に還元されるものである。

このように、文化は部員とクラブとのつながりを、練習以外から引き出し、それを支持してゆく役職と考える。

しかし現実には、文化として活動する時間の大半が写真の整理であるということなどから、つい文化のほんの一面にとらわれがちになってしまう。もう一度気を引き締め直して取り組まねばと痛感している次第である。

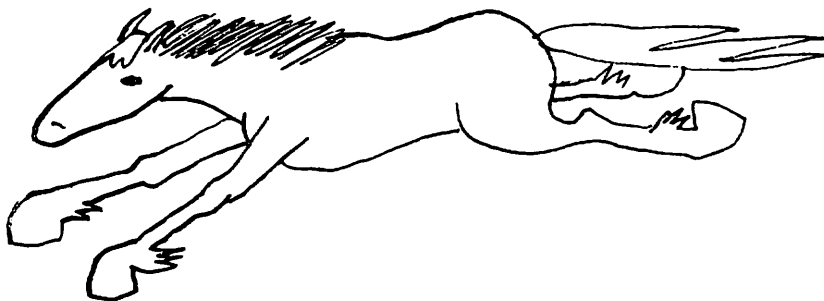


昭和51年度行事報告

4月	4	対東北大定期戦 於北大
4月	13 ~ 17	雪割合宿 (2・4年目)
4月	18	三大学定期戦 於酪農大馬術講習会
5月	25 ~ 5/1	第4回太秦杯・半沢杯記念馬術大会 於北大
5月	3	新歓コンパ
5月	10	遠乗会 盤溪スキー場
5月	23	お返しコンパ
5月	30	お返しコンパ
5月	5 ~ 6	大学祭
5月	13	対酪農大定期戦 於北大
5月	27	草刈り大会
7月	10 ~ 11	第11回北海道自馬馬術大会 於日高育成牧場
8月	19	帯広へ貨車積
8月	28 ~ 8/1	北日本学生馬術大会 於帯畜大

笠 間 淳 子

3月	1月	12月	11月	10月	8月
30	6 27	25 12	13 21	25 28	25 30
5	9	4	7	11	11
30	2	4	7	4	9
追出レコンバ	初乗り、初詣 北海道神宮 合宿(2・3年目及び1年目の半数) 部内スケート大会	祝勝会(後援会主催) 関東北女子戦 於福島競馬場 合宿(2・3年目及び1年目の半数)	全日本馬術大会 於馬事公苑 全日本学生馬術大会 於馬事公苑	役員交代コンバ 1・3年目合宿 第31回国体 於佐賀競馬場 七大学定期戦 於馬事公苑	北海道馬術大会兼国大予選 於帯畜大 着札 日高合宿(1年目) 3・4年目合宿
対東北大定期戦(52年度) 於東北大					



昭和51年度戦績報告

○対東北大定期戦（4月4日 於北大）

・一年目戦

負 岩田、木村、飯島 北大 -8.0 東北大 0

・二年目戦

負 山本、失田、笠間 北大 -8.3.3.7.5 東北大 -2.0.7.5

・三年目戦

負 平野、佐野、横沢 北大 -7.5 東北大 0

・女子戦

負 石川、山川、水井 北大 -7.7.7.5 東北大 0

総減点 北大 -31.6.1.2.5 東北大 -2.0.7.5

○三大学定期戦（4月18日 於酪農大）

・ジュニア戦

1位 半浦、中島、岩田、三好 北大 -1.4.4 畜大 -1.4.6.2.5 酪農 -1.6.6.5

・シニア戦

2位 桑田、佐野、長屋、本城 畜大 -2.8.8 北大 -3.0.4 酪農 -4.7.0

○第4回太秦杯、半沢杯記念馬術大会（5月3日 於北大）

・複合（太秦杯）

			馬場減点	障害減点
1位	ドンホッパー 桑田 北大(4)		-8.7.3	満点
2位	隆 孝 佐藤 自馬		-8.8.0	"
3位	天龍山 横沢 北大(4)		-8.8.0	"
4位	北 武 半浦 北大(3)		-9.4.7	"
失権	北 秀 山本 北大(3)			(3反抗 第1ドラムバー 第4カマボコバー 2拒止)

・小障碍（北大乗馬同好会楯）

			障碍減点	
1位	ドンホッパー 蛭子 北大(2)		満点	(タイム 6.1秒)
2位	スターライト 長屋 北大(3)		"	(タイム 6.3秒)
3位	北 武 中島 北大(2)		"	(タイム 6.4秒)
5位	北 燕 矢田 北大(3)		"	(タイム 7.4秒)
10位	ハイエイム 岡田 北大同		-7.2.5	(第2積木バー 1拒止 タイム減)
11位	天龍山 石川 北大(4)		-1.1	(2落 レンガ 1拒止)
失権	北 勇 平野 北大(4)			(第4b平行 第9aレンガ 2拒止)

オープン	天龍山	半沢	北大同	満点
"	北秀	山本	北大(3)	"

•中障碍

1位	ドンホッパー	桑田	北大(4)	満点
2位	隆孝	佐藤	自馬	-4
3位	北隼	佐野	北大(4)	-15 (第4b平行 第8パンケットバー、 第10平行落下 タイム減)

o対酪農大定期戦 (6月13日 於北大)

•複合

			馬場	障碍
1位	ドンホッパー	桑田	北大(4)	-108.99 -20 (2落)
2位	疾風	本城	北大(3)	-131.0 -2 (タイム減)
3位	ハイエイム	平野	北大(4)	-118.0 -34.75 (1逃 2落 タイム減)
6位	北燕	矢田	北大(3)	-144.5 -54.75 (2逃 1落 タイム減)

•中障碍

1位	ドンホッパー	桑田	北大(4)	満点
2位	北隼	佐野	北大(4)	-4 (1落)
失権	ハイエイム	平野	北大(4)	(馴致失権)

•小障碍

1位	ドンホッパー	滝華	北大(2)	満点
2位	驟鷲	桃野	酪農	-0.25
失権	ハイエイム	岩田	北大(2)	(危険防止のため)
"	疾風	三好	北大(2)	(平行横木にて3反抗)
"	北燕	中島	北大(2)	(ついたらにて3反抗)

総合得点	北大	23点	酪農大	4点
------	----	-----	-----	----

o第11回北海道自馬馬術大会 (7月10・11日 於日高育成牧場)

•総合(シンザン杯)

			調教	耐久	余力
1位	柏栄	齊藤	帯畜大	-147 $\frac{2}{3}$	0 -1
2位	ヒダトモス	齊藤	旭川乗ク	-161 $\frac{2}{3}$	0 -10
3位	月光	風間	帯畜大	-186	0 -30
失権	北武	半浦	北大(3)	-188	-80 失
棄権	天龍山	横沢	北大(4)		

• 初心者障碍

1位	柏 秋	米田 旭川乗ク	満点
2位	スターフロンティア	斉藤 フロンティア	満点
3位	柏 峰	吉田 旭川乗ク	-4.5
失権	北 武	石川 北大(4)	
棄権	天 龍 山	山川 北大(3)	

• 中障碍

1位	テ レ サ	谷 北星乗ク	満点
2位	クリタケ	二宮 日高乗同	"
3位	隆 孝	佐藤 札幌市役所乗同	-4
7位	ドンホッパー	桑田 北大(4)	-7.25 (ダブルa 1拒止 垂直落下)
12位	ハイエイム	平野 北大(4)	-20.25 (ダブルb ドラム横木 門ビ落下 1落馬)
失権	北 隼	佐野 北大(4)	(1巻のり 1落馬 ダブルa逃 b落下 箱横木拒止)

• パルクール、ド、シャス

			タイム	減 点
1位	隆 孝	佐藤 札幌市役所乗同	76"	86"
2位	ドンホッパー	桑田 北大(4)	94"	112"
3位	ヒダトモス	斉藤 旭川乗ク	88"	114"

• 六 段

			1回目	2回目	3回目
1位	ゼファー	布施 北星乗ク	満点	満点	-8
2位	ジョリー	鎌田 北高乗同	"	-4	
3位	クリタケ	二宮 "	"	-4	
8位	北 隼	佐野 北大(4)	-8		
失権	ハイエイム	平野 北大(4)			

• 選抜障碍

1位	テ レ サ	谷 北星乗ク	満点
2位	隆 孝	佐藤 札幌市役所乗同	-4
3位	クリタケ	二宮 日高乗同	-4
4位	ドンホッパー	桑田 北大(4)	-8 (ドラム横木、ついで横木 落下)

○ 第12回北日本学生馬術大会 (7月28~8月1日 於帯畜大)

• 総 合

			調 教	耐 久	余 力
1位	柏 栄	斉藤 帯畜大	-67 ² / ₅	満点	-10
2位	大 雪	佐藤 "	-76 ⁴ / ₁₅	"	-10
3位	柏 勝	大下 "	-57 ² / ₁₅	"	-30
4位	天龍山	横沢 北大(4)	-90 ¹ / ₁₅	-5.6	-12.975 (1逃 タイム減)
8位	ドンホッパー	桑田 "(4)	-71 ⁷ / ₁₅	-69.2	-20 (2落下)

14位	北 燕	矢田 北大(3)	- 84 $\frac{1}{3}$	-156.8	-10 (1 落下)
15位	ハイエイム	平野 " (4)	-102 $\frac{9}{10}$	-136	-30 (1 拒止 2 落下)
16位	北 隼	佐野 " (4)	-102 $\frac{1}{10}$	-145.2	-30 (3 落下)
失権	北 秀	山本 " (3)	- 66 $\frac{29}{30}$	-191.6	3 反抗
"	北 武	半浦 " (3)	- 77 $\frac{4}{15}$	失権	
"	疾 風	本城 " (3)	- 71 $\frac{7}{30}$	タイム失権	

• 中障碍

			第1走行	第2走行
1位	柏 美	永田 帯畜大	満点	満点
2位	スターライト	長屋 北大(3)	-11 (2 落下 1 逃)	-4
3位	柏 栄	斉藤 帯畜大	-8	-12
8位	ドンホッパー	桑田 北大(4)	-23 (4 落 1 拒止 1 落馬)	-13
9位	北 隼	佐野 " (4)	-16 (4 落)	-27
15位	天龍山	横沢 " (4)	失権(経路違反)	-31.75 (5 落 2 反抗)
失権	北 武	桑田 " (4)	(第1カマボコバー 3 反抗)	
"	ハイエイム	平野 " (4)	(")	(第1拒止 第3.2拒止)
"	疾 風	本城 " (3)	(第1反抗 第3乾渉 2 反抗)	(第3 $\frac{1}{9}$ 逃 第9水濺 2 逃)
"	北 燕	矢田 " (3)	(第3.1反抗 第7b 2 反抗)	

• B障碍

1位	トレント	風間 北里	満点
2位	スターライト	笠間 北大(3)	" (バラージュ 1 落)
3位	コンコルド・ハットリー	橋本 北里	"
4位	ドンホッパー	岩田 北大(2)	-4 (1 落)
8位	ハイエイム	山川 " (3)	-20.05 (2 落 1 反抗 落馬 タイム減)
9位	天龍山	中島 " (2)	-28.375 (1 落 2 反抗 落馬 タイム減)
失権	北 勇	石川 " (4)	(スタート前 1分)

• 選手権

男子	1位	鈴木 酪農大
	2位	桑田 北大(4)
	3位	風間 帯畜大
		平野 北大(4)
女子	1位	風間 北里
	2位	小野寺 帯畜大
	3位	長崎 酪農大
		石川 北大(4)
		山川 北大(3)

団体成績

中 障 碍 2 位 (-9 4)

総 合 3 位 (-5 2 0.4 4 5)

総合順位 3 位 (1 位帯畜大 2 位東北大 4 位北里大 5 位酪農大 6 位岩手大)

<全日本出場権利は次の入馬が獲得>

中 障 碍 スターライト 長 屋 (3)

ドンホッパー 桑 田 (4)

北 隼 佐 野 (4)

天 龍 山 横 沢 (4)

総 合 天 龍 山 横 沢 (4)

ドンホッパー 桑 田 (4)

o 北海道体育大会 (兼国体予選) (8 月 7. 8. 9 日 於帯畜大)

・ 総 合 調 教 耐 久 余 力

1 位 隆 孝 佐藤 自馬 -66 $\frac{2}{3}$ 満 点 -13

2 位 柏 栄 斉藤 帯畜大 -56 $\frac{1}{3}$ " -40

3 位 ドンホッパー 桑田 北大(4) -77 $\frac{1}{3}$ " -20

6 位 ハイエイム 平野 " (4) -95 " -60

9 位 北 燕 矢田 " (3) -88 $\frac{2}{3}$ -27 1.5 2 -50

13 位 天龍山 横沢 " (4) -87 $\frac{2}{3}$ -56 3.3 6 -76.5

失権 北 秀 山本 " (3) -76 $\frac{1}{3}$ 失 権

" 北 武 佐野 " (4) -85 満 点 失権 (第 2 ビラビラ、
3 反抗)

" 疾 風 本城 " (3) -78 -9 7.4 4 " (ビラビラ、乾
濛パー
ついたてパー
各 1 反抗)

・ 中障碍

1 位 スターライト 長 屋 北大(3) - 4 (1 落)

2 位 柏 栄 斉 藤 帯畜大 - 4

3 位 テレサ 鈴 木 北星乗ク -12

4 位 ドンホッパー 桑 田 北大(4) -16 (4 落)

6 位 北 隼 佐 野 " (4) -19 (" 、 1 反抗)

9 位 疾 風 本 城 " (3) -20 (" 、 " 、 タイム減)

14 位 ハイエイム 平 野 " (4) -32 (8 落)

15 位 天龍山 横 沢 " (4) -39 (9 落、 1 逃)

・婦人障碍

1位	スターライト	木村	北大(2)	満点
2位	テレサ	桜田	北星乗ク	"
3位	ドンホッパー	水井	北大(3)	"
失権	北勇	石川	"(4)	(ダブル 3反抗)

・小障碍

1位	テレサ	小林	北星乗ク	満点
2位	柏峰	井上	旭川乗ク	-12.5
3位	柏秋	米田	"	-13
失権	北秀	蛭子	北大(2)	(障碍間 1分)
"	天龍山	三好	"(2)	(第1反抗 第5 2反抗)
"	北武	飯島	"(2)	(第4 a 1巻のり1反抗 b 1反抗)

・六段

1位	隆孝	佐藤	札幌市役所	
2位	柏栄	斉藤	帯畜大	
3位	ジョリー	鎌田	日高乗同	
6位	北隼	佐野	北大(4)	(第1完飛)
棄権	ハイエイム	平野	"(4)	

・大障碍B

1位	テレサ	谷	北星乗ク	- 8
2位	ドンホッパー	桑田	北大(4)	- 8 (バラージュ)
3位	スターライト	長屋	"(3)	-10 (2落)
6位	北隼	佐野	"(4)	-17 (3落 1反抗 タイム減)
10位	ハイエイム	平野	"(4)	-24 (4落 1落馬)

<国体への出場権利獲得入馬>

スターライト	長屋 (3)
ドンホッパー	桑田 (4)

o 第1回北海道地区馬術大会 (10月23日 於岩見沢競馬場)

・複合

				調教	耐久	余力
1位	柏栄	斉藤	帯畜大	-79	0	-20
2位	月光	嵐間	"	-61	0	-40
3位	テレサ	谷	北星乗ク	-62	-33.6	-40
4位	北燕	矢田	北大(3)	-94.34	-23.2	-21
失権	北秀	山本	"(3)	-99.34	失権	
"	北武	半浦	"(3)	-90	"	
"	疾風	本城	"(3)	-85.67	"	
"	ドンホッパー	小野	北大同	-77.67	"	

・小障碍

1位	ストレート	管浪	帯畜大	満点	
2位	ハイエイム	長屋	北大(3)	"	(タイム 56")
3位	スターライト	飯島	"(2)	"	(" 57")
9位	羊蹄	平野	"(4)	-4	(1落)
13位	ドンホッパー	浪内	"(2)	-7	("、1逃)
失権	北武	中島	"(2)		(ダブルBトンネル)

・バルクール、ド、シャス

1位	柏勝	大下	帯畜大	-120	
2位	柏栄	斉藤	"	-132	
3位	ハイエイム	平野	北大(4)	-143	(4落 タイム103")
6位	ドンホッパー	桑田	"(4)	-183	(2落 1拒止 落馬 123")
12位	疾風	本城	"(3)	-241	(139")
失権	北秀	山本	"(3)		(反抗 1分)
"	北燕	矢田	"(3)		(石垣オクサー)
オープン	北秀	鎌田	北大同		失権

・中障碍

1位	ドンホッパー	桑田	北大(4)	満点	(バラージュ 1落)
2位	テレサ	谷	北星乗ク	"	(" -20)
3位	スターライト	長屋	北大(3)	-4	(1落)
11位	ハイエイム	平野	"(4)	-12	(3落)

・大障碍B

1位	スターライト	長屋	北大(3)	-4	(1落)
2位	ドンホッパー	桑田	"(4)	-8	(2落)
3位	隆孝	広川	岩乗ク	-12	
オープン	ハイエイム	平野	北大(4)	-41.5	(7落 2拒止)

<全日本馬術大会出場権利獲得人馬>

ドンホッパー	桑田	(4)
スターライト	長屋	(3)

○第31回国体 (10月25~28日 於佐賀競馬場)

・成年障碍

1位	ソロ	相沢	茨城
2位	山陽ゆずりは	青野	兵庫
3位	サンドクリケット	桜井	静岡
10位	スターライト	長屋	北大(3)
失権	ドンホッパー	桑田	"(4)

○七大学戦（10月31日 於馬事公苑）

- ・予選リーグ 矢田、長屋、山本、本城、半浦
1勝1敗（総減点により 東北大、北大、京大の順）
- ・4位決定戦 山本、半浦、本城
勝
- ・決勝リーグ 矢田、長屋、山本、本城、半浦
1勝1敗（勝率により 東北大、北大、名大の順）

1位 東北大学	3位 名古屋大学	5位 東京大学
2位 北海道大学	4位 九州大学	6位 京都大学

○第28回全日本馬術大会

・パルクール・ド・シヤスB

1位	メジロダイヤ	宮崎	日大	82 [#] 3
2位	インターニホン	衛藤	日馬連	84 [#] 6
3位	アミゴ	杉谷	杉谷乗ク	85 [#] 9
8位	ドンホッパー	桑田	北大(4)	96 [#] 7
13位	スターライト	長屋	北大(3)	103 [#] 5

・中障碍

1位	スターライト	長屋	北大(3)	満点(タイム45 [#] 8 バラージュ)
2位	シルバーシャーク	折田	鹿児島	
3位	姫神	千葉	岩手	
	ドンホッパー	桑田	北大(4)	(決勝戦進出)

○第19回全日本学生障碍飛越競技（11月）

〃 総合馬術競技

障碍			第1走行	第2走行	総減点
1位	柏栄	斉藤 帯畜大	満点	-4	-4
2位	ダイニングフラッグ	上手 農工大	-4	満点	-4
3位	紅葉	埜 拓殖大	-4	-0.25	-4.25
10位	ドンホッパー	桑田 北大(4)	満点	-12	-12
〃	スターライト	長屋 〃(3)	-8	-4	-12
27位	北隼	佐野 〃(4)	-27.5	-4	-31.5
	天龍山	横沢 〃(4)	失権	-30.25	-105.25

・総合				調教	耐久	余力
1位	第二白翔	早坂	中央大	-49 $\frac{2}{3}$	0	0
2位	ムネヒサ	島田	日大	-54 $\frac{2}{3}$	0	0
3位	メジロダイヤ	宮崎	日大	-60 $\frac{1}{6}$	0	0
7位	ドンホッパー	桑田	北大(4)	-76 $\frac{1}{6}$	0	-10
31位	天龍山	横沢	"(4)	-98 $\frac{1}{2}$	-42	-40

団体成績

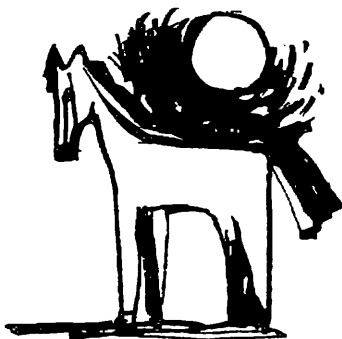
・障害	1位	同志社大学	-32
	2位	日本大学	-43.5
	3位	関西学院大学	-47
	4位	北海道大学	-55.5
・総合	1位	日本大学	-230 $\frac{3}{5}$
	2位	中央大学	-259 $\frac{7}{12}$
	3位	同志社大学	-332 $\frac{7}{12}$

女子戦

・個人戦	1位	柏崎	宇都宮大
	2位	泉山	弘前大
	3位	糸賀	岩手大

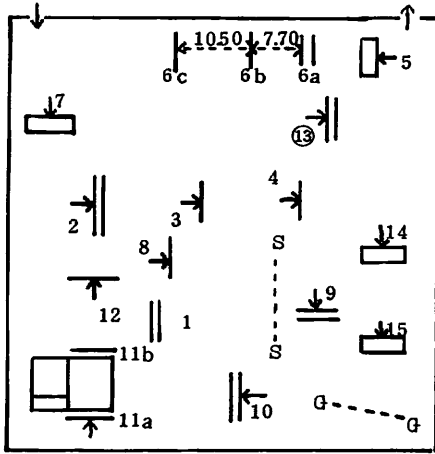
○第21回関東東北女子学生馬術大会 (12月12日 福島競馬場)

・個人戦	笠間(3)	(2回戦まで)
	木村(2)	(1 ")



国体、成年障害飛越競技 (団体・個人)

所定時間 110 秒 制限時間 220 秒 全長 650 m 分速 350 m



(注) 11a 11b は完全閉鎖障碍

種類	高さ	幅
1 竹柵横木	100	110
2 ツイタテ横木	80	100
3 コンビネーション	130	80
4 乾草袖オクサー	120	130
5 トラケーネン	130	100
6a トンネルノガオクサー	120	130
6b 六角垂直	130	
6c カマボコオクサー	125	130
7 水濠オクサー	130	130
8 アーチ	120	
9 花壇オクサー	130	140
10 カスミ山型横木	140	160
11a バンク跳上り横木	120	40
11b バンク跳下り六角横木	130	100
12 ビラビラ	130	
13 自然木三段	100	120
14 水濠		350
15 レンガ	140	100

国体観戦記

10月27日 於佐賀競馬場

ドンホッパー
スターライト
長屋清隆 (3) (4)

国枝保幸

10月27日、佐賀県鳥栖市佐賀競馬場は熱気に包まれていた。第三十一回国民体育大会馬術成年障害飛越競技が開始されたのである。天高く馬肥ゆる秋。空は真宵に暗れ上がっていたと思う。「と思う」と書いたのは、私には空などのんびりと見る余裕などなかったのである。私が馬匹をやっていたスターライトが長屋兄とともにこの競技に出場するからである。出場順位三番アッと言う間に終ってしまった。今でも思い出される事は……

緊張した面持ちで出場を待つ二人(一人と一頭)。スターライトの方が落ち着いていたようだ。「北海道大学長屋選手乗馬スターライト号御入場ください。」敬礼。そしてスタート。小さな体を勢一杯のばして、流れるように障碍を飛越していくライト。彼女が障碍を飛越する度に歓声と拍手が起った。完走して引き上げるライトと長屋兄にまた大きな拍手が送られた。私はその熱い奮闘気に吞まれてすっかり上気してしまった。

これぐらいの事しか思い出せないのである。恐ろしいほど大きくてきれいな障碍、多勢の観衆。今でも目に浮かぶのはこれらの光景ばかりである。

報告(諸々の資料を参考にして)

障碍は御覧のように相当大きなものです。今年から中障と大障の区別をなくし中障馬も大障馬も同じ高さの障碍を飛ぶことになったのである。大きさも中障と大障の間ぐらい、(なんでもコースビルダは東京オリンピック選手の佐々信三氏だったらしい。)当然中障馬のスターライトには不利な条件である。正直言って「ライトにこんな大きな障碍飛べるのかな。帰ってこないのじゃないかな。」と

心配だった。

前述したとおりライトは出場順位三番目であった。ライト、それとも長屋兄のくじ運が悪いのか、ライトの順番はいつも早い。前に出る馬がたつた二頭ではどんな経路か判然としないまま順番が回ってきてしまった。

スタートして第一へ。難なく通過。通過後内へ入られる。しかしなんとか第二へ向け通過。第二は相当難しい障碍で桑田兄もドンホッパーに二度止まれたのだが、失権した馬の多くが、第二でつまづいたのである。第三第四第五をスムーズに通過。第六のトリプルへ。見てもわかるように障碍間の距離がちょっと変わっている。第六で最初の落下。落したのが不思議なくらいで飛越フォームは完璧であったと思ったのだが、長屋兄に聞いて見ても「遅れたつもりはないし、よくわからない。」と言っていた。第七第八通過。第九はかなり難しい障碍であったがこれも無事通過。第十第十一第十二通過。第十三落下。この幅と高さでは、いくらライトが名馬だといっても中障馬にはやはり難しかったのかもしれない。第十四の水濺へ、通過のように見えたが「落下」と放送された。おしい。長屋兄自身は「自分の失敗だ。最終障碍を意識しすぎて遅れてしまった。」と言っていた。

結局三落で十位。しかし三落しても、嫌ったりすることもなく、飛越後の体勢が大きく崩れるほどの落下もなかったの、いつものスターライトの流麗な飛越を見ることができた。

ドンホッパーは四十番目の出場だった。この時、私は牽き馬をしていて、試合を見ることができなかった。しかし厩舎に設置されたスピーカーからドンホッパー三拒止失権の放送が聞こえて来たときは我が耳を疑った。第二を一回及び第五で止まったのだった。「あの

ドンが。」私にはドンが失権するなどとは到底考えられなかった。それだけこの障碍経路が難しい事を表わしていると思う。大障馬ノイチカルの失権。大障碍馬ミスターコートはスターライトと同じ成績だったし、なによりも全国からこれだけ多くの名馬が来ていながら、満点馬が一頭もいなかったことである。

結局この競技一落同志四頭がバラージュをした結果、茨城のソロが優勝した。

ドンホッパーは六段にも出場したが、最初で第五を落してしまつた。優勝は佐賀のハガクレであった。北海道からもう一人畜大の斉藤兄が柏栄で出場していたが、成年総合馬術競技で優勝したことは御存じのとおりである。またこの競技には島根代表として昭和四十八年卒の西村正二郎兄も出場しておられた。乗馬は、なんと天龍山や疾風と馬場を駆け回っていたトルディクイントだった。初めての試合だということだった。馬場の成績は、悪かったが、耐久及び余力で健闘し、第九位にいられた。

最後に

10月25日開会され、28日閉会。私達が競馬場を去る頃には鳥栖は元の何もない静かな田舎町に戻ろうとしていた。「団体はお祭りなんだな。」という思いが頭をよぎってまた消えていった。学生の試合と違うものを感じたのである。10月28日夕刻、次の試合全日本に備えライトとドンに乗せたトラックは早速東京へ向けて出発した。秋の遠征はまだ序盤戦であった。

七 帝 戦

10月30日

矢田 明(3) 長屋 清隆(3)
山本 裕介(3) 本城 敬文(3)
半浦 剛(3)

久しく中断していた七帝戦が再開して三年目となり、今年から馬術戦も国立七大学戦の正式種目として認められ、その重要度も増す事となりました。主管校になるはずの阪大に馬術部がなく、順番からして、北大が主管を受け持つこととなり、試合を離れての苦勞が多かった今年の七帝戦となりました。

千葉先輩の御好意で今年も馬事公苑で開くことができました。まず試合形式を考えなければなりませんでしたが、鞍数が限られていた為、総当り戦が不可能なので、三チームづつのリーグ戦を行って、上位校が決勝リーグを組むという複雑な方式をとりました。矢田、半浦が、四日程前に上京して、東大の助けをかりて打ち合わせを行い、十月三十日の当日には、国体から帰ってきた長屋を始め、三年目全員と、使役用員の一年目数名が馬事公苑に集まりました。

地元の東大の助けを借りたとはいえ、大会の運営をしながら、試合をこなして行くのはなかなか大変でした。北大は東北大、京大と共にAリーグを組み、第一試合で顔馴染とはいえ宿敵東北大と対戦しました。試合前皆で体操なんぞを始めて、意気を大いに高めようという話であったが、主管校の悲しさで、試合準備に忙殺され、結局やれず終いで、あわたたしい中で東北大戦に望みました。三名戦で結果は二人喰われて負けたのですが、前段での失権、落馬がた

り、かなりの減点差を作っていました。昨年も第一戦で東北大と対戦して負けているのですが、東北大は事貸与戦に対しては、何かとまわっているというか、壺を心得ているというか、とにかく強いのです。技術的なレベルはかわらないと思うのですが、北大は、荒い扶助をしたり、馬に頼り過ぎたり、何かもう一つ一定したものを持っていないということだと思います。次に京大と対戦です。京大は三年生が試合があるということで二年生が来ていて、負けたら、末代までの恥だということで、奮気して、今度は勝つことができました。減点差はそれ程大きくはなかったのですが、やはりひいき目に見なくとも、一年のレベル差はあった様に思います。ところがおもしろい事に東北大が京大に、何が間が差したのか、二人喰われて負けて、三校とも一勝一敗となり、総減差で北大は東北大に続いてリーグ二位となり、決勝リーグ進出の望みを継ぎました。

Bリーグも三校とも一勝一敗となり、これも総減点によって一位名大、二位九大、三位東大となりました。二日目は、決勝リーグ進出をかけて、九大との対戦が始まり、一勝一敗一分けでしたが、相手方の失権があつて減点差で大差がつき勝つことができました。決勝リーグは、北大、東北大、名大の三校で生まれ、その第一試合でも宿敵東北大と対戦です。昨日の試合を見て、名大には勝ると見て、東北大に勝てれば、あの優勝カップを一年ぶりに札幌に持って帰れると踏んだのですが、その気がいり、荒い扶助という悪い方向に働いてしまい、又も前段での失権がたたり負けてしまいました。名大戦は案の定大差で勝つことができましたので、なおさら、あの失権が惜しまれました。東北大は名大にも勝って優勝、二位北大、三位名大、となり以下四位九大、五位東大、六位京大という結果でした。試合後の閉会式で千葉先輩の話で、昔は七帝戦は学生馬術の指導

的な役割を果たした大会であったということであったが、現在自馬制が普通となり、この様な貨与戦は少なくなっています。そういう事も考え合わせて、今年より国立七大学戦の正式種目として認められた馬術戦をどのように発展させて、どのような所に位置付けすべきなのかを考えていかなくてはならないと思います。現在の状況の下ではすぐ自馬大会にするのは到底無理ですが、将来その方向で話合ってもいいでしょうし、又、貨与戦として技術的な向上を旨としたもっと大きな、それに徹するなら徹した大会にするとか、いろいろ発展の方向はあると思います。親睦会といっても年一回最上級生だけが三人四人と集まっても、それはそれなりに意義があるといえませんが、やはり、全日学か何か自馬大会で一堂に会して、いろいろ話し合いたいものです。

最後になって大変申し訳ありませんが、いろいろ本当に御世話になった千葉先輩をはじめ馬事公苑の方々には御礼のいいようもありません。又御忙しいところを駆けつけて下さった武田先輩、千田先輩、三浦先輩、その他先輩諸兄本当にありがとう御座居ました。

(文責 T・H)

第28回全日本馬術大会

11月6・7日
於日本中央競馬会馬事公苑

ドンホッパー 桑田 壮平(4)
スターライト 長屋 清隆(3)

試合に出ていた関係で、ドンホッパーを始め他の馬の事は詳しく書けません。スターライトとの参戦記です。

佐賀国体を10月28日に終え、その足で馬事公苑までトラックにて直送、同30日早朝入厩。

従来、北日本馬術大会が予選であり、これが北日本学生馬術大会と重なる場合が多く、出場が難しかったのだが、昨年度より北海道地区が分離し、道内だけで予選を行なえるようになった。そのワタは二頭であるが、岩見沢で行なわれた予選では畜大その他の強豪を押えて、スターライトとドンホッパーの北大コンビが権利を獲得した。

今大会には、モントリオールオリンピック出場入馬を始め国体には顔を出さない入馬も数多く出場しており、お祭り気分にも似た華やかさを感じる国体とは対照的な緊張感の漂う雰囲気への引き締まる思いだった。

第1日目第1競技バルクール・ド・シヤスB、スターライト1番、ドンホッパー38番。経路は当日の朝になって発表、試合開始は7時半、しかも出場番号1番とあってプログラムを見た途端に愕然としたのだが、実際準備運動も満足のゆくものではなくただ緊張のまま出場。敬礼の時審判席に千葉さんの姿を見たと思いつつスタートへ。

スタートライン直前の回転で馬転、立ち上がる彼女に辛くもしがみつきのスタート。脱げた鎧をはくのに第5障害あたりまで手間取り、結果は満点ながらタイム103秒5で62名中13位。鎧をはくだけの精神的余裕さえあれば少なくとも100秒は切れたはずだが。

ほとんどの馬が100〜110秒以上である中、杉谷選手が85秒という驚異的なタイムを記録、もはや優勝は決まったかに見えた。

38番ドンホッパーは彼の本領発揮で、スピード感はそのほどもないのにもかかわらず実に回転よく、86秒という好タイムを記録したのだが第9障害の落下があり、結局8位であった。落下さえなければ4位につけたのに。そのあとに出場した日本大学の宮崎さんが、杉谷選手を3秒上回る82秒で優勝、2位、3位のオリンピック選手を押え、見事だった。第1日目のバルクールA、大障害Bはいずれも杉谷選手が優勝。

第2日目第6競技中障害飛越競技予選。

試合開始8時で、出場頭数52頭、スターライト20番、ドンホッパー39番。

スターライトは第1障害左ヘグッと寄れてアセるも通過、第6障害までは順調だったが第7障害誰も落下しないツイタテで騎手が遅れて落下、どうにもしっくりこない鎧を意識しつつゴール。千葉さんに「せっかく馬はよく飛んでいるのに騎手が邪魔をしてつまらんミスをするなあ。」とお叱りともつかぬ調子で言われて頭をかいた。落下による右後肢つなぎの傷の治療のため、それ以後の試合は見られなかったが、ドンホッパーは満点でゴールしたとのこと。

午後の決勝戦へは上位20頭が出場できることになっていたが、満点馬が14頭であったため一落下の馬も出場できることになり、ホッと胸をなでおろす。決勝戦は上位27頭で争われることになった。岩見

沢乗クの広川さん騎乗の隆孝も含め北海道勢は3頭。

試合の進行が遅れ、午後2時からはずの決勝戦が開始されたのは、日が西に傾き始めた頃。

時間的制約による進行の都合上、満点馬が三頭出た時点で、落下なり反折なりの過失を犯した人馬はその場で直ちに退場という非常に手厳しいものとなった。

スターライトは12番、もうそれまでに満点馬が4頭出ている。途中で退場させられた人が「たったの1つしか飛んでないのに……。」とぼやく声を耳にしながら入場門の前へ。スターライトは実に落ちていて、馬場の中の人馬をじっと目で追っている。

11番の人馬はバラージュの経路を意識しすぎたのか、第3障害の次で経路違反のため失権。前の馬がゴールするのを見届けてからなら覚悟を決められるのだが、国体の時もすぐ前の人馬は失権しているし、バルクールBでは1番であるなど、どうも今回の遠征では開き直る暇も何もあったものではない。なんだか肩すかしを喰ったような気持ちで入場。

馬場の中央で敬礼、ベルならぬ鐘の音を聞いてスターライトはもう自分から走り出す。馬場を半周してスタート。第1、第2通過、第3へはやや外へふくらむ。第4通過、第5のダブル前肢を軽く当てたが通過。第6、第7通過。第8、苦手の水潦だが踏切は合った。思わず掛け声をかける。苦手といっても俺に苦手意識があるだけなのだ。第9通過、バンケットを回って第10、幅のある六角斜め三段。通過、真直ぐ第11へ。グングン前へ出て行く。手前で彼女自ら歩度を調節、通過。すぐUターンして最終のダブルへ。前傾するのみ。ゴール。満点という実感は湧かない。彼女とコンビを組んで以来、小障以外に満点の試合はあまり無かったから。

バラージュに備え、馬匹の西川に馬衣を取ってこさせて装鞍したまま着せ、曳馬させる。試合も見ないで、スターライトが大人しく歩いてゐるのを見ていた。

21番ドンホッパーは好調で第6まで通過したにもかかわらず、何でもないような第7ダブルのBの垂直を落下、非情な鐘が鳴って退場。落下があっけなかつただけに、無念の一語に尽きる。この決勝戦にも3名のオリンピック選手が出場していたが、いずれも過失のため途中で退場している。結局満点は7頭で、直ちにバラージュが行なわれることになつた。使用するのは、順に第1、第2、第3、第9、第11、第4、第12の各障害で、いずれも高くしてある。

さてバラージュ開始である。1番岩手の馬は満点でゴール、タイム55秒4。続く2番鹿尻島の馬も満点でタイム54秒5。のっけから満点を出されてしまうと果たして自分も満点で帰れるかどうか余計に不安が募り、55秒が重く押し掛かってくる。ただ、両方ともバラージュの割には障害前で基本に忠実すぎて(?)走行になめらかさが欠けるのが目についた。

3番北海道の隆孝、4番静岡の馬(もと小野さん所有でドンホッパーの実姉)はどちらも一落であつた。

5番いよいよスターライト。逸るのか入場門の前でチョロチョロする。呼び出しを受けて馬場へ。敬礼、スタートラインまで決勝戦と同じコース。場内放送の解説が「さきほど流れるような走行を見せた長屋とスターライトです」と言うのがまるで人事のように耳の中を通り抜ける。スタート。第1から意識して追つた。第2へは更に追う。第3への回転は今度はさすがにスムーズ。通過、すぐ第9へ向ける。途端にググッと向かつて行く。障害が高くなつてゐるのがわかる。通過、着地と同時に強引に左へ回転。余りにも強引なため

馬体の左腰がグッと沈み込む。馬転するかとも思えるほどだったがよく耐えた。本村さんに教えられた通り後肢だけにつけたクランボンが効いていた。スタンドに起こつた大きななどよめきが微かに意識の中に忍び込む。が一瞬のうちに馬体は立ち直り、第11へ。これも適確な踏切でスムーズに通過、第4へ。彼女自ら経路をはしよつて斜めに向かう。

観戦していた山本は落とすかと思つたそうだ。通過後すぐ左へ。最終障害が意外に近く、意外な速度で目前に迫る。ただ追うだけ。Aの垂直の手前で短く歩度を調節、適確で力強い踏切。Bはただただひたすらに体を投げ出すのみであつた。通過。ゴール目指して最後の追い……… ゴール。

場内アナウンスが「かなり早いタイムが出た模様です。手許の時計で45秒云々」と言うのが聞こえる。敬礼、休めにして思い切りほめてやる。退場門目指して駆歩になる。スタンドから改めて大きな拍手が巻き起こつた。

今までで最高の出来だ。これで負けても悔いはないという不思議な爽快感に包まれる。……… やがて最後の馬が過失を犯し、スターライトの優勝を告げる場内アナウンスが流れる。本村さんや山本が駆け寄つて乗って「この野郎」と言つて頭をどやされた。うれしいというより気恥ずかしい。

大障害Aを挟んで表彰式。夕闇に包まれ、照明を浴びて乗馬のまま鈴木日馬連会長から表彰を受ける。スターライトは落ち着いていて、会長から愛撫を受けた。

それにしても、決勝・下見・バラージュ・表彰式と、四たび同じ馬場に曳き出された彼女の気持ちはどんなであつたらうか。わけもわからぬまま、そのたびに緊張と恐怖に耐えようとしたであらう彼女

の気丈な性質を知ればこそ、よけい心が痛んだ。

今大会の障害部門では、中障害に北大、バルクールBに日大と学生が勝った他は、バルクールA・大障害B・特別大障害・大障害Aの全てを杉谷選手が制覇した。

なお、スターライトの今大会の成績によりカップ・馬表彰等よりもより飼育補助金として2万2千円、更には国内産優秀乗馬であるとして後ほど日本馬術連盟より奨励金10万円を頂きました。

全日本学生三大馬術競技

11月13日〜21日

於 日本中央競馬場会馬事公苑

障 害

北 隼 佐野淳之(4) ドンホッパー 桑田壮平(4)
天龍山 横沢敏夫(4) スターライト 長屋清隆(3)

総 合

ドンホッパー 桑田壮平(4)
天龍山 横沢敏夫(4)

三年目 長 屋 清 隆

国体・全日本と遠征中のスターライト・ドンホッパーに加え、札幌から北隼・天龍山も入厩。北日本地区のワクに欠員が生じた為、

ハイエイムも出場出来そうだったので一緒に連れて来たが、北日本地区から中央の幹事会へハイエイムの子備馬登録というのがなされていなかった為に結局出場出来ず涙を呑んだ。畜大も同じ厩舎、相部屋で、道内での宿命の(？)ライバルも全国大会ともなれば身内同然、おまけに幹事連中の下馬評では北大と畜大が優勝候補の筆頭に揚げられているといううわさもあってお互い大いに士気があがったが、結果的には裏目に出ることとなった。

13日は入場式。ひらめく旗と会場の雰囲気にも動ぜぬのは先頭の北隼だけ。あとの三頭はあっちこっちとキョロキョロソワソワ。14日の馬場馬術、15日の休みを置いて、16・17日は障害馬術競技である。コースは昨年同様東京オリンピックの大障害の経路を使用。馬場馬術は雨の中で行なわれたが、16日はカラリと晴れ渡った青空の下、芝馬場にて第一走行が開始された。出場馬102頭。国体からずっと一緒だった畜大の斉藤さん、桑田兄と、絶対満点で帰ってきて北海道勢三頭(柏栄・ドンホッパー・スターライト)でバラージュをやるうなどと話していた。その柏栄を含め二・三頭満点馬が出る中、28番佐野兄騎乗の北隼が出場。第6までスムーズに通過したものの第7への回転と、第8から第9への回転は何れも出口へ向かう為に向け切れずに走られて反抗となり、第9と第13のAの落下、それによりタイム超過で減点²⁷⁵に終わった。

序盤戦とは打って変わって失権馬が続出する中盤、54番長屋騎乗のスターライト出場。満点を意識。第2から第3へがやけに長い。第6つまる。第8から第9へ。騎手が逸るのは逆に馬が障害を見て踏切で一つはいつた為人馬が衝突、前肢で大きくヒッカケて落下し、はね上げられて危うく落馬しそうになった。スタンドでワーッと声が挙がる。「ああ落下してしまっただけ」不届きにもそう思っ

た瞬間ガックリしてしまった。第10はかろうじて通過。第12水壕、下を見すぎてついでに後肢で落下。結局二落でゴール。78番横沢兄騎乗の天龍山。やや出ていない気もしたが第5までは通過。ところが第6で二拒止。第7を通過して第8トリブルのAを落下しBで拒止。失権のベルが鳴る。スタンドで観戦中の水野さんを始めみんなが地団駄踏んで悔しがった。相変わらず失権馬が大半を占める中、93番桑田兄騎乗のドンホッパー出場。固唾を呑んで見守っていたが、安定した走行ぶりで満点でゴールし、ヤンヤの喝采。

17日第二走行。NHKの放送時間の都合で成績の悪い順に出場である。18番天龍山、第2と第4落下、第6はなんとか通過。第8のAを飛んだが勢いなくBで拒止。2回目も同じ。3回目かろうじて通過。第9落下。結局減点³⁰でゴール。涙を流さんばかりに喜んで水野さんがすっ飛んでいく。38番北隼。前日の走行がまるで嘘のように通過してゆく。第9を落下しただけの減点4でゴール。とても信じられなかった。後で佐野兄らと「去年（本村さん騎乗の第二走行）が二落で今年は一落だから来年は満点だな」などと冗談半分に話したのだが、まさかこれがボウズの生涯の有終の美を飾る試合になるうとは……

60番スターライト。優勝争いから遠のいたとあって気は楽だった。第1から第2への回転ですべった為か第2を落下。第6またもつまる。第9今度は慎重に推進して無事通過。第12水壕また遅れてしまったが落下は防げた。どうしても水壕に対して苦手意識がつきまとう。タイム90秒6、減点4。タイムだけは両日共最も速かった。72番ドンホッパー。騎手に堅さが見られ、馬の飛びがやや不自然だ。手に汗握って見守っていたが、第7を落下、一同アッと声を挙げる。続く第8A、更には第9でも緊張が緩んだのか大きくヒッカケて落

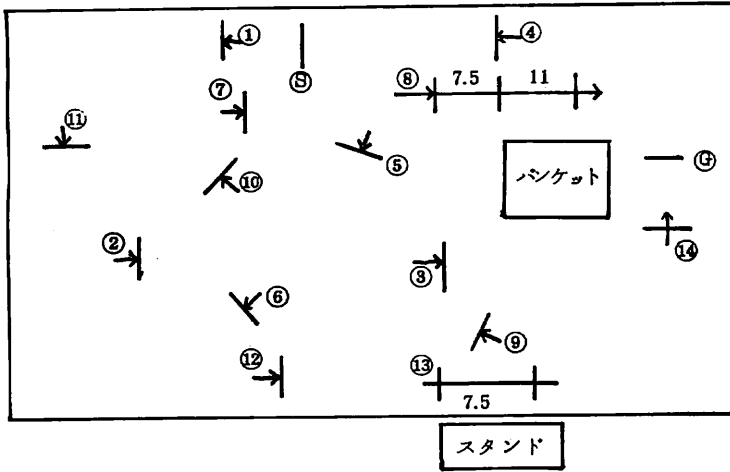
下。みんなガッカリ。結局個人ではスターライト、ドンホッパー共に10位、北隼は29位、団体ではわずか8点（二落下）そこそこの差で三年連続四位に甘んじた。

一日おいて19日は総合馬術競技の調教審査。天龍山は減点⁹⁸ $\frac{1}{2}$ 、ドンホッパーは同⁷⁶ $\frac{1}{6}$ 。20日耐久審査は豪雨を突いて行なわれ、天龍山は第3・第4の反抗とタイム超過を合わせ減点42。ドンホッパーは規定タイム8分の所を6分37秒というすばらしい速さで満点でゴール。翌21日は雨もやみ、最後の余力審査が行なわれた。前日の雨で馬場がぬかるんでいる為に馬転する馬が相次いだので、準備馬場にいた横沢兄に知らせに行った丁度その時、呼出しを受けて入場してしまっただけで済まぬ。案の定、馬転してしまっただけで済まぬ。もう少し早く知らせに行っていたらと悔しさに地団駄踏んだ。ドンホッパーは前日迄の成績では6位であり、満点ならば入賞できるとあって祈る思いで見えていたが、何でもなさそうな垂直を前肢でヒッカケて落下、入賞の夢は消え去った。

北大と共に下馬評に揚がった畜大は、障害個人優勝の柏栄を除けば失権が相次ぐという惨憺たる結果であり、総合の団体で5位につけたもの予想外の不振ぶりはとも他人事とは思えない。北大もスターライトやドンホッパーの気負い過ぎ、天龍山の力不足（？）などの為に前評判だけに終わった。個人はともかく、団体で好成績を収めるのはなかなか難しいものだと思つづく。今年も前途多難だが、今年こそは現役馬全てを馬事公苑に送り込んで個人並びに団体で上位入賞をねらうつもりです。今は亡き北隼号の健斗を讀えて参戦記を終わります。

国体・七大学戦・全日本・全日学と今回の大遠征を通じ、半沢先

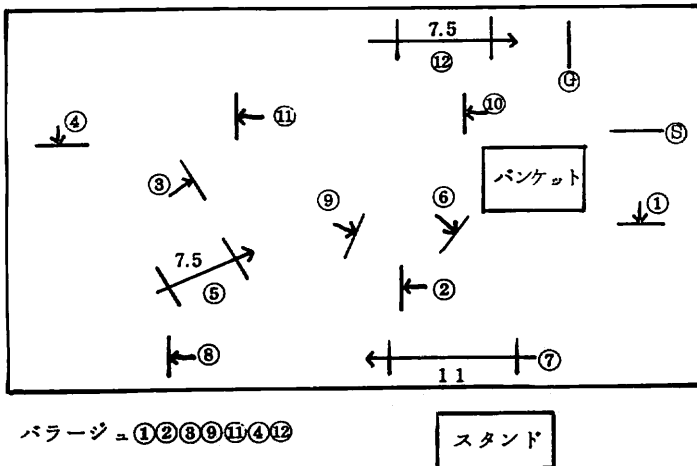
全日本学生障碍飛越競技会



- | | | | |
|--------|-------------|-----------|-----------|
| ① オクサー | ⑥ 芝カマホコオクサー | ⑨ 白箱 | ⑬ A. ビラビラ |
| ② レンガ | ⑦ レンガ | ⑩ 竹柵斜め三段 | B. オクサー |
| ③ ツイタテ | ⑧ A. 垂直 | ⑪ トラケーネ | ⑭ 六角斜め三段 |
| ④ 垂直 | B. ドラムオクサー | ⑫ 水濶 | |
| ⑤ 石垣 | C. オクサー | (幅 3.5 m) | |

生や東京OB会の方々を始め、諸先輩には細かな事まで大変御世話になりました。東京OB会の方々とは大見兄以外はいずれも在札或いはつい最近まで札幌におられた先輩ばかりでして、なんだかまた下級生に逆戻りしたようでなんとも言えぬ安らぎを感じました。御多忙中にもかかわらずわざわざ応援に来てくださった先輩諸兄に、末尾ながら厚く御礼申し上げます。

全日本馬術大会
中障碍飛越競技決勝戦



パラージュ ①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫

- | |
|----------------|
| ① 斜め三段 |
| ② オクサー |
| ③ 石垣 |
| ④ トラケーネ |
| ⑤ A. オクサー |
| B. オクサー |
| ⑥ レンガ |
| ⑦ A. 垂直 |
| B. 垂直 |
| ⑧ 水濶 (幅 3.5 m) |
| ⑨ 石垣 |
| ⑩ 六角斜め三段 |
| ⑪ 斜め二段 |
| ⑫ A. 垂直 |
| B. オクサー |

調教報告

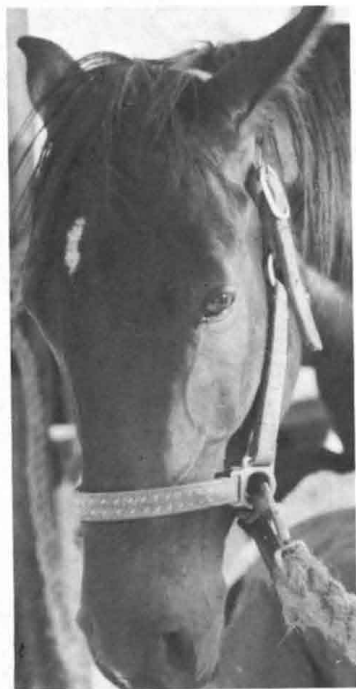


スターライト号と長屋兄

馬の夢



ハイ・エイム号と岡田監督



ドン・ホッパー号



疾風号(右)と天龍山号(左)



羊蹄号と佐野兄



北勇号と石川姉



北 駿 号



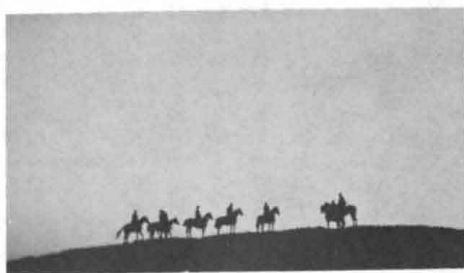
北 稜 号



北 美 号



北 燕 号



スターライト号調教報告

牝 ア・ア 栗毛

昭和41年4月4日生

沙流郡門別町産

父 トモスベ

母 銘乾

体重 460 Kg

長屋 清隆

スターライトの調教などとは正直いって身の程知らずもいいところであり、この一年間というものの、スターライトに俺が調教されたんだと思えるくらいなので、一応その経過を記します。

スターライトのチーフとしては松井さん、添田さんに次いで三代目に当たるわけですが、添田さんによる全日本学生馬術大会での優勝を始めとする数々の戦績が重荷にならなかったと言えば嘘になる。引き継いだ当初は俺は俺なりに乗ってやると開き直っていたのだが、それからの半年間というものの馬との衝突の繰り返して絶望的な毎日の続くなか、何度となくスターライトのチーフを返上すべきではなからうかと思いつけていた。そして七月初めの経路回りでは垂直障害で二拒止され、絶望のドン底へ……………。

そんな折だったので、北海道自馬馬術大会のバルクールで四位ながら満点でゴールできたことは、涙の出るほどうれしいものだった。この時やっとスターライトとの絆が結ばれた、というより彼女を信

頼してやれるようになり、目の前が急に開けたようで、更に彼女の信頼を獲得するためにも、練習形態を軌道に乗せられるよう気を使うことが出来るようになった。結果的に、試合場に於けるスターライトの素直さ、勇敢さに救われた形となったのだが、それでも三・四年目のミーティング、或いはその頃来部されていた服部乗馬クラブの吉岡さんらのアドバイスが非常に有効なものでした。頼みの綱の添田さんは既に卒業されており、苦しい半年間だったが、空回りしていたお互いの歯車がやっと噛み合い始めたのだと思った。現在でも完全に噛み合っているとはとても言えない状態なのだけれども、これからの課題として、調教者としての立場から彼女を理解し、包み込んでやれるような冷静さ、包容力を身につけて乗っていかなければならぬ。スターライトのチーフとしての真価が問われるのはこれからだと思います。

日頃の練習内容に触れてみます。引き継ぐ時に添田さんに言われたことは、

- ・ ていねいに乗ること。
- ・ 毎日の練習に一つの山を作り、常に馬も人も良い状態で練習を終えるよう心掛ける。又、調子が良いからといって更に無理に要求を高め過ぎたりやり過ぎたりしないようにする。
- ・ 一つの要求を課してそれを馬が受け入れたら、一呼吸か二呼吸おいて次の要求を待つのを見計らってから要求を課すようにし、馬が混乱しないよう配慮する。
- ・ 常に馬の精神状態を見ながら運動し、飽きがかないよう気分転換を図る。
- ・ 特にスターライトの性質上、騎手と衝突すると動物としての浅薄さで意地になって後に退けなくなる所があるので、例え表面

的に馬なりになっていても、全体的な流れを通して、結果的に騎手の要求通りになっているような扱い方も時には必要である。常に騎手が馬よりも優位に立つべきであるという考え方だけを押し通すと失敗する。

・障害は、やたら大きなものを飛ばすより小さくても変化のあるものを数多くこなした方が良し、そうすべきである。又、松井さんからも注意を受けたことですが、特に障害では馬なりでなく確実に推進すること。

・速歩ではチヨコチヨコしたせわしない走り方をせぬよう、体全体を使って大きな歩様をさせる。
などが大まかな点でした。

現在、毎日の練習は概ね輪乗を主体に行なっています。スターライトには以前から右手前で肩から内へささる癖があるので、歩度の伸縮や回転などでは焦らせぬよう、落ち着いたペースで行なうよう留意しています。左右の脚に対する反応は比較的敏感で、駈歩の発進などもスムーズに行なえるようになり、焦らせぬよう注意すれば、ゆっくりしたテンポの駈歩も出来るようになりました。ただ、まだまだ気分的にムラがあり、調子の良い時と悪い時との格差がはっきりしているの、なんとか一定のペースに持ち込もうと苦心しています。最近やや気になっっていることに、左手前の駈歩運動中の不正駈歩があります。馬が焦り気味な時には、騎手が少しでもバランスを崩したり、小さな回転をしたり、歩度を伸ばしたりすると途端に不正駈歩を行ないます。岡田監督や小栗さんらに伺っても、「気にすることは無い」とおっしゃられるので、専ら騎手のバランスを良くするのと、焦らせないように心掛けています。

練習では輪乗の他、キャバレッティと障害を組み合わせたものや

不整地、横木をバラバラに並べたものなどを常用しており、特に障害へは注意深く、しかも力強く向かうよう気を使っています。

長い冬期間は雪が深いために色々な運動が満足に出来ないのが現状で、他の馬に比べてかなり蹄の小さいスターライトにとってはなおさら走りにくくて冬の運動というのは悩みの種ですが、細かな点にまで気を使って乗ることが容易でない代わりに雪を利した体力作りとしては割に有効でした。雪が融けてからは馴致の他、体力作りも兼ねてあちこち外乗に行き、低温研裏の通称「北大富士」と呼ばれる小山を常歩で登り降りしたり、農道など柔かい所を見つけて速歩や駈歩を徐々に取り入れたりしていますが、馬場内の運動と違って馬の示す反応に安易に対処すると失敗する危険性が非常に高くなるため、迂闊に軽々しく対応しないようかなり気を使わなくてはなりません。最近だんだんと慣れてきました。

スターライトに今年度も騎乗するに当たって、調教上の根本的な事柄から些細な点に到るまで、やらなければならぬ事が実に多くて困ってしまいます。技術的にも精神的にも隙間だらけで「人馬一体」には程遠い。実質的になると半年というのは余りにも短かすぎるが、しかしこれからだという気がする。来年はまともな調教報告を書くつもりです。

羊蹄号と大いなるおまけ

北騮号の二年

羊蹄号

牝 ア・ア 鹿毛

昭和44年3月4日生

音更町十勝種畜牧場産

父 サラ ハマテツ

母 ア・ア 久亭

体重 498 Kg

北騮号

牡 鹿毛

昭和51年2月23日生

北大馬術部産

父 ドンホッパー

母 羊蹄

体重 333 Kg

三年目 山川 恵

昨年の馬術部の話題の中心は、スターライトもさることながら羊蹄とその大いなるおまけ北騮ではないだろうか。この話題の二頭に最も多く接してきた者として一年間を振り返ってみよう。

一昨年、岩見沢の親善馬術大会を最後に、羊蹄の試合活動は丸一年ブランクになった。この試合の頃、既に軽快で敏感な羊蹄はなく、腹部は明らか大きな大きさを示していた。この後も、暮いっばい練習に使っていた。大きなお腹を抱えて重そうに走る羊蹄を見ると、蹴つとばして走らせるのが可愛そうになるのだが、話によると軍隊では産む前の日まで乗っていたという事で、休ませなかった。正月になって鞍傷を作ってしまった、結局その後もずっと休ませることになった。この頃の羊蹄は以前のように曳馬で外に行つて急に跳ねた

り、大型車を怖がって走ったりということもなく、非常に落ち着いており、物にびくついたりすることもなかった。ただ、他の馬に対してはすぐけんかをしかけ、全く険悪な状態だった。一月末頃から一週間に一度獣医に通うようになった。とにかく出産予定日がはっきりしないので、獣医の先生方に心電図をとって頂いたり、前兆となる特徴を教えて頂いたりした。お腹の中で仔馬が動いているのが見られたのもこの頃である。私達の予定では、出産の兆候が表われたら何日か入院させる形で、仔馬は家畜病院で多くの目に見守られて生まれるはずだった。しかし、二月二三日早朝、羊蹄は何の前ぶれもなく誰にも見守られずに事を起こし、済ましてしまった。思い返してみても、陣痛の表情もなく、食欲も減ってはいない。私達は完全に欺かれたのだ。しかし何はともあれ安産でひと安心といったところだ。生まれた仔馬は馬房を転がり出て、コンクリートの通路の真中にいた。第一印象、四肢ばかりがやけに大きいアンバランス体。まだ毛は湿り、膜の切れ端もついでいて、いかにも頼りなげだった。第一日は彼にとってさんざんの日だ。ひとりでこの世にとび出し、ひとりで立ち上がったのはいいものの母親は知らんぷり。お腹をすかして母親にヨタヨタ近づいても、ママの方は逃げ回っているしまただ。羊蹄は母親になりたてで、乳は張っているのだがそれを子供にやるのを知らないのだ。知らないというわけではないのかも知れないが、とにかく慣れていないので気味悪がったようだ。仕方なく、羊蹄を繋なぎ初乳を搾ってから与えたりしたが、満足に飲める訳がない。明らかにお腹をすかせており、人の指を吸ったりする。まだ自分の保護者を認識していないようだった。夕方頃、気味悪がる羊蹄を温かいタオルで慣らし、仔馬を乳房に近づけ、やっと吸いつかせることができた。親子とも、そして人もやれやれといった気持ちだ

った。二日目は第一日目よりしっかりしてきて、もう自分の保護者をはっきりと認識していた。四日目、初めて外へ出す。勿論親と一緒に。びったり寄りそって片時も離れない。まるで歌に出てくる通りだ。他の馬達は、肢ばかりがやけに長いこの動物の出現に目を刺いて息づかいを荒くしていた。六日目、仔馬の左後肢飛節外側に傷を発見。傷は少し日が経っているようで、表面は乾いて汚れがついているように見えていた。しかしよく見ると内部はかなり深い傷でかなりあわてた。生まれて一週間にしてもう傷を作ってしまうとは。

これはどうやら親に踏まれて作った傷のようだった。直りは速いだろうが、場所が場所だけに後に影響が無ければ良いかと思う。治療の際心配した人間への恐怖心の方は大丈夫だったが、傷跡は現在でも毛が生えず、一生残ると思われる。三月になって、一日二時間ずつパドックに出す。雪の上に寝糞を敷き、外でも横になれるようにしておく。外に出す時間は少しずつ長くしていった。私は三月の始めから二週間程福島の講習会に行っただが、二十日頃帰って来てみると、頼りなかった赤ン坊はやんちゃ坊主になっており、ペロペロ管めていたのが咬むようになっていた。出産後一ヶ月、羊蹄の方は運動不足でブクブクとお腹が出ているため、夕方馬場で曳馬をする。この時、裸馬に乗って少し運動させることもあった。仔馬は最初一時も離れなかったが、少しずつ冒険心を起こし、親と離れる時でもでてきた。しかし、まだ離れすぎると急に不安になるらしく、一目散に追って来る。全くこの必死さはたいしたもの、東北戦のための小障碍オクサーを飛び越したのには本当にびっくりした。

羊蹄の運動は外に曳馬に行けないため馬場内のみで行なわれた。仔馬がついてまわらなくなった頃、装鞍して騎乗するようになった。平野兄にも見て頂き、調馬索から始めていった。まだ走ることに慣

れていないのか、調馬索を使つての回転もやりにくそうだったし（特に右回転駆走は出にくかった）騎乗しても脚に対する反応は鈍く自分のペースを変えようとしれない。脚を使つてもビヨコンビヨコンとおかしな歩様になり、歩度を伸ばすことができなかった。この頃は専ら羊蹄の肉体訓練と、私が柔らかな拳というものを学んでいた時期だった。とにかくこの時期の羊蹄は停止が悪く（人馬共に）ねばらせてしまい、どうしてもきれいな停止ができなかった。羊蹄にとっては非常に多くのことを学んだ時期だったと思う。六月になり、朝皆と一緒に時間に騎乗するようになった。しかし、やはりチビ助がくっついていてそのため、皆とは離れて三角地での騎乗。一年生も乗せるようになる。馬の方も少しは軽くなり、停止も人間の方が要領がつかめてきた。母たる羊蹄は非常に落ち着いており、一年生が上で何をやろうと走り出すこともなく、以前とはうって変わった様子だった。

八月十三日、他馬がようやく遠征から帰って来た時、いよいよ離乳させることになった。この時チビ助は24Kgに達しており、一馬房に二頭はいかにも狭そうだった。生まれて一ヶ月二ヶ月の間は遊び相手になって咬まれても踏まれてもさして気にしないでいられたが、八月のこの時期24Kgの仔馬をプロレスをするのはたまったものではない。おまけに身体は柔らかく、四肢は高く上がり、人間がちよっと隙を見せると前肢で飛び掛ってくる。こうされた人間の方はグッと踏んばらなければ潰されてしまう。こんな調子の腕白も母親あつてのことである。三日間程親からひき離し、獣医の馬房に隔乳する。なんと親子の呼び声の凄まじいことか。羊蹄、北雛とも有らん限りの声で嘶き続ける。親と離して三日目の朝、北雛は約1mの馬房の柵を飛び越え、馬場の羊蹄の元へ一目散。またまたやり直しである。

そして呼び声……。ようやく厩舎に帰って来た北離は一人前に一馬房を与えられたが、ショボンとして見る影もない。人間にも従順で咬みつきもしない。しかし、そこは子供のこと、三日もするとまた手に負えない悪戯者になった。

離乳後の羊蹄、やっと馬場で本格的な運動をやりだす。曳馬も外に行くようになる。子と離れた当初は運動の最中に嘶き始めたりしてやりにくいこともあったが、乗っている方は知らん振り続けていた。羊蹄は半年以上らくに障碍を飛んでいない。まず飛ぶことに慣らすことから始まった。キャバレッティ・インアンドアウト等口とはほんの軽い接触だけで落ち着いて飛越させるようにした。しかし、飛越後突っ走ったりすることも間あった。平場では輪乗りできちんと口と接触した運動をしようとした。十月岩見沢の試合、小障碍でエントリーしたが、羊蹄の方は乗り手次第でどうにか帰って来れるようになっていたが、人間の方に問題があった。経路回りになるとあも馬が変わるのか。凄いスピードで突っ走る羊蹄、それをおさえようと引っ張ってはまた興奮させ……。全くまだまだ何もしできないのだなあと痛感させられた。試合は平野兄に出て頂き、一落下で帰って来た。省ると、羊蹄に乗って教えたことは徹々たるもの、反対に非常に多くのことを学んだ。結局、羊蹄という馬、母親たる時は山のようにどっしりと落ちついていても、子供から離れるとたちまち自分も子供のように憶病になってしまうのだ。運動中に他の馬を怖れたり、大型トラックを怖がったり、こういった馬に乗る人間は、思い遣りと落ち着き、とにかく馬を包み込んでしまう力がなければならぬと思った。

その後の羊蹄は、十二月街乗中凍った雪の上で転び、右前肢膝を自分の足で踏んだらしく、三針縫い、三週間程休んだ。また、二月

には、二年前の冬に手術をした蓄膿症が再び悪くなり、またしても鼻梁に二つ穴をあけるはめになった。蓄膿症はまだ洗浄を続けているが運動には差し障りない。しかしあまり元気がないようである。一方チビ助の方は、体重³⁴⁰Kg、今北大馬術部部員にとって最も恐ろしい馬である。春近し、より大きく、より逞しくなってほしい。アザの絶えることがなくても部員諸君よ、気にしない、気にしない。可愛がってやろう。

疾風号調教報告

騎手 ア・ア 栗毛

昭和45年5月31日生

沙流郡門別町美原産

父 ア・ オーパーマイン

母 ア・ア ミストビハヤ

体重 534 Kg

三年目 本城 敬文

一年間疾風に乘ってきたわけですが、調教上大きな汚点を残し皆の期待にそえなかったことをまず反省しなければなりません。今迄順調に調教が進んできて一昨年は全日学の総合でかなりの成績を収めたのですが、昨年は障碍を逃避することが多く第一障碍や乾壕・水壕で左に逃げる事が目立ちました。その原因はまったく調教者

にあり、騎手の未熟故馬をだめにしてしまつて何も言いようがありません。

彼に乗り始めたのは一昨年十二月。それでまず感じたことは、歩度が伸びないこと（速歩及び常歩で、駈歩はまだやる時期ではないと思ひほとんどやらす）故にキャバレッティがスムーズに通過できないこと。障碍も出せないためにつまつてまたぐことが多く、騎手も随伴しにくいこと。歩様はゆつたりとして大きくて良いが騎手の未熟さ故馬の動きについてゆけないこと。口が軟いこと。したがつて回転は良く、停止もややねばるがまあまあである。馬がすなおであること。等でした。

この中で前に出せないというのは騎手の未熟なためであり、馬のリズムに合わないため騎手がバランスをくずし、ハミガロに当りいくら一生懸命脚を使つても有効な脚にならないためでありました。実際、前チーフの柴沼兄が騎乗するとよく前に出て伸長速歩もきれいに伸びていました。

そこでまず最初は、とにかく馬の動きに慣れることと前に出すこと（もっぱら速歩で）を目標に騎乗しました。十二月、一月と乗つていくうちに少しは出るようになってきたので駈歩運動もとり入れていきました。そして一月下旬には、副扶助として声をいれることを試みてみたところかなりの効果があったので、歩度の伸縮もだんだんスムーズにいくようになってきました。しかし駈歩運動を始めたものの、右手前駈歩がなかなか出せず、巻乗りをしてもだめでした。これは今から思えばハミ受けと騎座が悪いことに帰因していたようです。

障碍は馬が出るようになるに従つて徐々に程度を高めていきました。しかし脚を使えばすぐそれに反応して出るところまでは程遠い

もので、脚に対するすなおさと前進氣勢を求めることは以前にも増して必要を感じてきました。それと踏切の安定をはかること。思うように出せず緊張の作り方もしらなかったこともありましたが、踏切が不安定でつまることが多く、たまたま速くから踏切り騎手の体が遅れることがありました。そこで、中障碍とキャバレッティを利用することを心がけました。又、騎手の随伴を改善するため、もっと短い鏡で騎乗しても推進できるようにすることが必要になってきました。（疾風に乗り始めたころは、とにかく前に出すために長めの鏡で騎乗していました。）

二月下旬、添田兄に騎乗してもらつたところ「速歩は重くない。出たら邪魔せず静かに乗つて馬のリズムに合わせることを。駈歩は重い。発進を多くすること、週に一度くらいは短い距離でいいから鞭を使つても出すこと。常歩、ゆっくりでいいから大きく歩かせること。」ということを言われました。これらはわかっているつもりなのですが、毎日の騎乗ではただがむしやらに前へ前へと乗つてきたのを反省させられました。今から思えば、もっと停止、発進、後退を頻繁に行つて扶助に敏感に反応するようにすべきであつたと反省しています。

二月頃から徐々に実戦的な経路回りを始めたのですが、出せないために腰をつけて踵でこねまわす脚、拳の動揺が騎手の欠点として指摘されました。これはもう意識してなおす以外ありません。そして馬の方では、駈歩、発進、伸縮、回転、踏切の安定が不足していることが明確に現われました。

さて馬体に関するのですが、左前肢管内側、両後肢管内側に骨瘤があり熱感のあるときにはブロー氏液や雪で冷やしていましたがところが四月に獣医で骨軟症と診断され、治療を受けるはめになり

ました。原因はCa不足らしく、Ca剤の注射投与、青草をできるだけ食わすこと、飼料にカルシウムを多く入れること、日光浴を多くさせることを行い、肢の骨瘤に対しては蹄を立ち気味にし両前肢蹄には皮を入れてもらいました。

骨軟症のため、太秦杯半沢杯記念馬術大会は参加できず、デビュー戦は対酪農戦になりました。総合馬を目標にしていたので、五月中旬から調教審査の練習も少しずつ始めました。調教審査にあたり注意したことは、真直進させること、隅角をきちんと回ること、全体にかなり速いペースで回ること、運動のきれ目をはっきりさせること等でした。具体的には、停止はまず脚を使って拳を控える。発進はスムーズに特に駈歩発進では頭を上げないように、反対駈歩は少々大きく回ってもとにかく手前を換えないように、伸長速歩、伸長駈歩では追いつぎて駈歩になったり興奮したりしないように、アビュイエは運動全体のリズムが乱れない程度に努力する。伸長常歩は騎手も馬もあせらないようにということでした。今でもこれはそのまま当てはまるのですが、調教審査で問われる基本的な運動課目の調教は普段からもっと適確になされなければならないと思われまます。基礎的な停止、発進、後退、回転をくり返すことによって馬はもっと良くなってくるはずです。今まであまりにも無駄が多かったような気がします。

それから調教審査の時の騎手の姿勢ですが、馬場鏡で座骨を付けて騎乗することが果してどれほど馬に害を与えるものかどうか疑問であったし、一般の審判員の目は正反動を正としているので少しでも点数をかせぐためにはやはり馬場の姿勢をとった方がいいと思ひ、そうすることにしました。毎日少しずつ正反動での騎乗を練習するにあたり注意したことは、体を起し、前方を見ると、鞍の前の方に

座し膝をできるだけ下げること、拳を低く静定すること、脚を振らないこと等でした。しかし馬の反動を腰でぬくということは体も堅く、今までそういう乗り方をほとんどしてこなかった私にはなかなかうまくいかず、体がはね上げられ拳も動揺して馬口にガチガチあたるが多かったような気がします。そのときは当てないよう気をつけて乗っていました。が、拳の動揺は早ハミに通じるので馬口に悪影響をおよぼすのは当然でしょう。正反動では騎座が安定するまで手綱は持つべきではないと思います。

さて話は少しそれましたが、対酪農大学戦では複合と小障に出場しました。これは北大で行ったので馬もそんなに興奮しないだろうと思っていたところが、実際の試合となってみると午前中の調教審査では、準備運動で落着いた駈歩が出来ず当然反対駈歩も出来ない有様でした。それでも常歩で二十分位歩かしていると徐々に平静さをとりもし、馬場内の待機馬場で駈歩発進、反対手前の練習も出来るようになりました。そしていよいよ本番。試合で馬場の経路を回るのは初めてでその緊張も手伝って途中で経路を忘れるし、馬も興奮していて停止が悪く、いつもなら簡単に出来る左手前駈歩も出ず伸長駈歩でははねて手の内からはずれて走り出しました。これは騎手がまだ慣れておらず馬の状態を適確に把握できなかったこと、騎手の騎座が悪く扶助も正確でなかったことに帰因していたようです。そして午後から障碍。準備運動では興奮気味でどんどん前に出ていました。しかしそのため脚を使うのがおろそかになり、本番でのスムーズな歩度の伸縮、回転はできませんでした。ペースも少し遅く時間減点をくらってしまいました。随伴もまだ遅れ、後半口を引っ張ってしまいました。全般的にはまあまあだったのですがそれは北大の馬場でやった試合だから当然といえば当然のことです。次の小障で

は二年目の三好君が騎乗したのですが、準備運動では恵迪裏の草地で速歩、駈歩をやったときは前へ長く出ていて、準備馬場でもまあまあの動きをしていました。しかし本番では平行で三拒止失権。まさか失権するなんて思いもよらなかったことで、その原因は騎手がつぶれて押せず、従って馬の緊張が足りなかったこと、誘導が悪かったことであると思われました。その後すぐに私が騎乗し経路を回ったのですが、スムーズに何の不安もなくゴールを切りました。しかし下級生が乗っても安定して小障くらいは帰って来れる馬だと信じきっていたのにあっさり裏切られました。いや裏切られたというよりそこまで調教もせず、馬の状態を見極めていなかった自分に責任がありました。

さてその馬の状態というのですが、現在どの位の事を馬に要求しているのか、どの位の緊張で障碍を飛越すればいいのかが完全に理解できておらず、馬に無理困難束縛を課していたためにいくつかの失敗を犯してしまいました。具体的には不斉地でクレイターを駈歩通過しようとしたところ左逃避、乾潦を組合わせたダブルで拒止野外障碍で逃避拒止曳馬時の興奮等です。もちろんこれからは毎日というわけではなく、それらのトラブルの後ではかならず通過して替めることはしていたのですが、これらの積重ねが決局夏の大会で墜落に繋がったのだと思われれます。調教は易より難へ、丁寧にかつ自信を持って進めていくべきなのですが、騎手の焦りと技量の欠除が問題の軽視と相俟って最悪の結果へと結びついたようです。

まず最初の遠征試合は日高育成牧場で行われた道自馬馬術大会です。遠征では多かれ少なかれ馬も興奮するのですが、これは街乗、曳馬をくり返すことよって馴致が進めば、どこに行っても落ち着いた馬になるはずですが、馬の本来の性格もあります、時間をか

けていろんな環境に慣らしていけばどんな馬でも平静な状態を保てるようになるでしょう。ところが彼の場合、日頃の馴致が不十分であったため日高幌別の駅で貨車から降した時になりに興奮し走り出す、蹴る、立ちあがるでそれをなだめるのに必死でした。そして約1時間歩いて育成牧場に着いたのですが、そこでもなかなか興奮は静まらずろくに曳馬もできませんでした。

大会にはバルクールに出場しました。準備運動でも興奮しており、良く前には出ますがたえず首を上げ周囲の様子をうかがっています。できるだけ落着かせようと常歩で声をかけてなだめながら停止発進を繰り返しました。障碍も歩度の伸縮を入れて10個など飛越し、いよいよ本番。第二障碍垂直を通過し左へふくらんで右回転し第三の水濼へ、このときは騎手が水濼を意識しすぎ回転が大きくなりすぎました。そして右回転して第四障碍ピラピラとつい立バーのダブルここで確実に歩度をつめて回転し真直障碍に向けられなかったため左へ逃避。二度目で通過しました。第七障碍では大きな飛びについてゆけず遅れたため落下。全般的に見て、馬が脚に敏感に反応せずあまり前に出ない、だからベースが悪い、回転や障碍前で体がつぶれて脚が使えていない、誘導が悪い。まったく騎手の欠点をさらけ出す結果となっていました。

帰礼後、北日本学生馬術大会への貨車積を目前に控えて経路回りをしました。結果は最悪でした。土塁から右回転して乾潦バーに向う時左へ逃避。平行で拒止。ここでも馬が信用できなくなり残りの三障碍は尻鞭で飛ばせました。この日は下級生の練習中でも潦とダブルにした机椅子障碍で拒止しており、これら反抗を示した時の懲戒がすぐ実施されなかったのが悪影響を与えてしまったようです。翌日同じ経路も回ってみたのですがこのときはまあまあでした。要

は馴致不足ということなのでしょうが、初めての障碍でも騎手の命ずるまま通過しなければならぬのに。結局馬が騎手を信頼していない（騎手が悪いため信頼できない）調教がそこまで進んでいないということでしょう。

次の遠征では北日本学生馬術大会で帯広へ行きました。この時の貨車降しても興奮はしていましたが日高のときほどではありませんでした。約一週間試合までに日があつたのでできるだけいろんな所に行き、川にも入って水の馴致にも努めました。総合のステイブルには川渡りがあると聞かされていたので小一時間も歩いて川まで行つたのです。しかしこのときの失敗が後にステイブルでの悪い事態に繋がると思つてもみませんでした。その失敗とは、水の馴致をしようとして近くにある小川に彼を向けたところ足元が不安定であつたせいもあるのですがそれがいやがつて駈歩で一目散に厩舎の方へ帰ろうとしたのです。約百m走つてようやく止め、懲戒してから再び向けてようやく通過しました。彼にしてみれば恐怖心が先に立ち、とにかく逃れたい一心でのことだったのでしょうが、大丈夫だと思つて安易に向けた騎手の判断の甘さ、反抗を示そうとしたときすぐに対処できなかつた騎手の未熟さ、馴致不足が招いた結果にほかなりません。

北日学での最初の出場種目は中障碍。その第一走行では第一障碍カマポコバーで左逃避、尻に鞭を入れて向けなおし通過。第二ドラム平行落下。第三乾潦平行左逃避、二度目は拒止。第一・第三の左逃避は脚で押してハミを受け強い緊張状態を保つてアブローチするといふことが出来ていなかったし、第三での拒止は体がつぶれて押せなかつたためでした。そして第二走行。とにかく体を起こして強いハミ受けて脚を使うことを念頭に置いてスタートしました。第一

に向けたときから左へよれ、それをなんとかたてなおして通過。第三はまだ体がつぶれていて右逃避、すぐ速歩におとして馬を落着け真直向つてから駈歩発進し通過。それで波に乗り途中騎手が遅れることもありましたが、どんどん前に出ていき、第八障碍まで通過しました。ところが第八障碍を通過してから鑑をはいてそれから水縁に向つたのですが、そこで緊張が緩んだよう左逃避。次に向けたときは体がつぶれて押しきれず拒止。もちろん次に鞭を入れて通過させましたが。濁水で見慣れぬ踏切板がついていたためちゆうちよしたのでしょうが、あのままのペースで向けていけば通過できたかもしれません。昨日よりはましました。失権は失権。

次の出場は総合調教審査。彼は思つたより落着いていて、どうにか各課題に無難にこなし点数は71/30とまずまずの成績でした。そしてむかえた翌日の野外騎乗。第一乾草置き障碍を左逃避し、狂奔していくら引張ろろがまったく止まらず、2m近い高さの草群をつつ走り輪乗にもちこもりにもあせつて手綱だけ引くもんだからなかなか曲がらずもうどう仕様もありませんでした。そのうち騎手がバランスを崩し首にしがみついたまま疾走するもんだからお手上げで仕方なく落馬しました。すると嘔みたいに彼は停止。そこでもまた飛乗つて障碍に向かうとするとまたまた狂奔。脚を使って止めようとしてもため、拍車を使つてもため、なだめようにも彼は必死。いよいよ道路にとび出しスタート地点近くにもどつてきました。そこで人垣に会いようやく停止。誰かの声が耳に入ってふと口を見ると衝がはずれて口の外に出ている。あわてて近くにいた下級生になおしてもらつて三度目のスタート。今度は速歩で落着かせて向かい一度は推進不足で拒止しましたがその次に、どうにか通過。この間約六分。

第二通過。第三壕バンケットも左逃避しそうになりながらどうにか通過。あとはもうひたすら出すのみ。途中で木に頭をぶつけたり、曲がり切れず行きすぎたりでさんざんでしたがどうにかゴールを切りました。しかしスタートを切ってから走り回っていた時間と走行中またハミがはずれているの気づき下馬してなおした時間が大幅なロスタイムとなりタイムオーバー（8秒）で失権してしまいました。しかたなく翌日の余力審査はオープンで参加することにしました。ところが、ステイブルで追突をしまい余力審査前の馬体検査で破行したため出場を断念せざるをえなくなりました。

狂奔の原因については前にも少し述べましたが馴致不足と騎手の技量のなさによる調教の崩れと見るべきでしょう。この時の彼にはきつすぎる要求でもあったと思われる。無理困難束縛を廃せという障碍飛越馬調教の原則からはずれては馬が悪くなるのも当然です。易より難へと調教はだんだん高度な要求を課していくようになるのですが、それを焦らないこと、安定する期間を長くすることに注意しなくてはなりません。

それから一週間おいて道体。総合の調教審査は無難に終え、野外乗。コースは殆んど北日学と同じだったので第一障碍さえまともに通過できればあとは帰ってこれるだろうと思い、とにかく第一で逃げられて狂奔されることだけは避けようと思ひ速歩で第一障碍に向きました。しかし走られまいとするあまり脚がおろそかになり左逃避。次には通過。あとは気を抜かず前へ前へ。コースはもう知っているの伸せる所は思い切り伸びました。途中、障碍前で左逃避し、巻乗りをしてしまったのですが減点区域外だったので減点にはなりません。あれだけスピードを出したつもりなのにタイムはそれほど早くもなく、ステイブルにはかかりのスピードが要求

されているというのがわかりました。

次は余力審査。出場前に特に注意しようと思ったのは、回転で外に持っていられないようにするため確実に歩度をつめ急回転では速歩までおとすこと、もしも逃避されたらすぐ速歩におとし落着けて真直向けそれから駈歩発進して向かうということでした。ところがこのためにかえって脚がおろそかになり高い緊張をつくれないうで障碍に向う結果となり、逃避したり推進不足で拒止したりする過失を繰り返してしまいました。また全般にスピードがなく、ペースがまったく良くありませんでした。第二障碍ピラピラ左逃避、第三黄緑バ―落下、第六乾壕バ―左逃避、第九水壕落下、第十ついで立バ―拒止。第十障碍は完全に誘導ミスで、もっと速くから真直向けていれば通過できたはずでした。

そして帯広で最後の出場は中障碍。もう前に出すしかない、体を起こして脚、衝をうけて脚。第二黄緑バ―落下、第七ダブルついで立三段騎手が遅れたため落下。第九トリブルa平行推進不足で不安定な飛越をし、騎手も遅れて落下。トリブルbドラムオクサー障碍間で体がつぶれて推進できず不安定な飛越、騎手遅れて落下。トリブルcユニットバ―、b飛越後体がつぶれたままで左によれ左逃避。二回目に向けたときは、障碍間ですぐ体を起こし脚を使えばいけるという確信を持って通過。残りは完飛しやとゴール。なんと帯広遠征中初めてのゴールでした。

十月に入って岩見沢へ遠征。まずバルクールに出場しましたが、誘導がまずく回転前に歩度をつめて余裕をもって回転し障碍に向けるという基本的なおろそかになりただやみくもに前に出すという誤りに陥ってしまい二逃避。

総合にも出場しましたが調教審査では準備運動中にうまく出来た

各種の運動がまったくできず、全然いい所なく、ステイブルは第三障碍乾塚山形三段で左逃避三回で失権しました。馴致不足ということももちろん考えられますが、それにもまして反抗を示したときの騎手の断固とした態度と適切な扶助があればその過失を最小限にしないとめられたはずです。

以上長々と失敗と下降の記録を書きました。自分でも嫌なことは思い出したいのですが、失敗に目をつぶりその原因究明を怠って改善の努力をしない限り向上は望めません。自分が同じ過失を繰り返さないためにも、他の人が同じ過ちに遭遇しないためにも必要であると思ひ筆を進ませました。

昨年の失敗の最大の原因は騎手が技量の点においても頭脳的点においても未熟であったため正しい調教（障碍飛越馬の調教）ができなかったこと、したがって高すぎる要求はできないし課してはいけないのにそれを彼に押し付け無理困難をしていたため反抗を招いてしまったこと、それに対し騎手の技術不足のため適切な処置がとれなかったことにあります。これは裏をかえせば日頃真面目に馬に乗っていたにもかかわらずであるということになります。今になって思えば何故一二年目のときも一生涯練習しなかったのか、もっと知識を豊かにしなかったのか、何故もっと彼のことも真剣に考えてやらなかったのか。要するに情熱と知識の不足です。クラブの学習会で読んだ本は、ミューゼラー、カブリリーペーバー、リッターワーム、ミーティングでいろんな話もし、自分でも他の本を読んだり前の調教者の方々に話を聞いたりもしましたが今になって思えばまだまだ情報不足でしたし理解もできていませんでした。クラブはかなりの豊富な情報源があります。それをもっと活用すべきです。そして調教方法をもっと理解すべきです。近年イタリー式のみでは馬がで

きないと言われるようになっていますが本当にそうなのでしょいか、理解が足りないのではないのでしょうか。何も自分が理解しているというわけではありませんが、私は疑問を感じてはいません。

話が横道にそれましたが、これからの彼に必要なのは、脚拳に対する従順さとあらゆる環境での平静さです。具体的に言えば、停止発進、歩度の伸縮回転がもっとスムーズにできるように。馬場でも野外でも騎手が邪魔することなく脚と拳で緊張を維持しながら落着いて障碍を通過すること。ゆったりした大きな歩様で前進氣勢をもって運動し移行をスムーズに行うことです。その方法としては、首を下げさせ輪乗りで停止、発進、後退、前肢旋回、輪乗りの開閉等を数多くやり、脚の推進及び側方扶助と拳の減脚扶助に敏感にさせる。障碍を特別視しないで低障碍をもっと多く通過させる。街乗を多くし、いろんな物に慣れさせる。騎手は方向、スピードを確実に要求し馬がすなおに服従すればその動きに追いつき決して邪魔をしない。馬に無理な要求をせず、徐々に程度を高めていく。

今述べたことはすべての馬にあてはまる基本的なこと、あたりまえのことですが、そのあたりまえのことがきちんと行なわれていなかったといわねばなりません。もう一年彼に乗ることになりましたが、この原則に帰ってやりなおすつもりでいます。

大いなる友よ

汝が瞳 我が胸中にあり

汝が疾駆 我が眼裏にあり

友よ いざゆかん

道いずこなるとも

天竜山号

騎 サラ 黒鹿毛

昭和43年3月6日生

浦河郡浦河町産

父 サラ ネヴァービート

母 サラ カンキヒメ

体重 555 Kg

横 沢 敏 夫

四十七年夏に競馬生活を捨て、北大馬術部に将来を担う新馬の頭として入厩したが、四十七・八年は肢の故障で休ませることが多く、調教に当たられた南部兄・吉野兄又、小栗コーチ他のOBのかたもやきもきしていたことと思われず。四十九年には水野兄の熱意で、酪農戦小障でデビューし、秋には岩見沢の大会で中障に成績を残し、目覚ましい進歩でした。そして遂に五十年夏、阿部兄が騎乗して、全日学に出場するに至りました。

私は五十年秋から引き継ぎましたが、実際に騎乗したのは一月からでした。

彼はニブイと言える程に温和であり、又、勇敢な馬である一方、神経質な面も持っている。騎乗して問題となったのは、口が非常に神経質だということです。非常に素直な性格で、又興奮しないということとで補われていますが、ハミを嫌い、首の伸展が得られないのはこれからの進歩が望まれません。私の拳も考えながら基本から始め

ましたが、常歩、速歩の蹄跡及び輪線上での運動のみという日が続きました。雪解けの頃、常歩、速歩で不整地、キャバレッティ等をはさみ首の伸展、歩幅の増大を求めているうち、足場が良くなったためか、やや良くなって来ました。運動量は少な目で肢の心配は全くと言っていいほど有りませんでした。

三月の対東北大戦及び四月の酪農大での道内三大学戦（共に貸与馬）に出しましたが、いかにも重たく、前進氣勢が見られません。この頃、外での馴致と共に、走らせることを始めていました。ただし、外で走らせるのは、充分落ち着いた状態とし、徐々に馴らしていくことにしました。

五月の太秦杯・半沢杯大会で、複合に出て3位という成績はまずまずでした。

しかし、其の後キ甲が熱を持ち、2週間ほど騎乗できずに様子を見ていました。この間に対酪農戦が有り、前試合から一月後の状態を見るべく期待していましたが残念でした。天龍山はキ甲が高く幅が有り、以前から鞍傷の跡もあって、注意して装鞍しておりました。が恥ずかしい次第です。

やや回復したころ騎乗したところ、ハミをぐんぐん引く様にして前へ出るのに驚かされました。長い間、調馬索のみの運動ではあったのや足の具合、背の具合も良かったと思われず。しかし、其の後充分注意して控え目に運動していましたが、6月下旬に再発し全く面目立たずです。道自馬を見送り、あわや北日本までもかかるかと案ぜられました。貨車積みの一週間前にして回復のきざしが見られ、2日前にやっと騎乗して軽い運動と経路回りをし、あとは帯広へ乗り込みました。

この頃の帯広は夏の盛りで、日中32度までも気温が上がった日も

「縦長のドンと横長の僕」

騷 中半血 黒鹿毛

昭和46年6月30日生

父 サラ オーシヤ

母 トロ ハゴロモ

体重 512 Kg

桑 田 壮 平

あり、乗り込んでからは馬の体力だけが気がかりでした。総合では、全日学出場の権利を得ることができた。ほとんどぶっつけ本番で、長い休みで体力面も心配されたのに、汗だくで走ってくれたのはうれしかった。しかし、一週間後の道大では私の未熟さが暴露された。学生の大会での障碍逃避を意識し、人も馬もちこまっていた。帰ってから二ヶ月で全日学である。今回の内容では慌てざるを得ない。幸い足も背も酷使に耐えてくれ、体力も充実している頃だ。障碍飛越の基礎を再確認して障碍経路の練習を考えた。障碍間の誘導と障碍上での随伴。

あっという間に場所を馬事公苑に移していた。練習場は狭く混雑している。広い野外で走らせたかった。

中障碍では六番障碍二拒止後、八番トリプルで拒止され、敗退。総合競技80頭近くの出場馬、調教審査では最後方。野外走行と余力審査に望みをかける。が、野外で二反抗、余力で入馬転と一落下。雨のしほぼ降る中、諸先輩、部員達の応援に申し分けない結果でし

た。

しかし、余力審査に於いては、前日の野外走行で思う存分走りまくったこともあり、前進氣勢旺盛、飛越も良く、あわよくば満点かと思われましたが、ゆるい回転で足をすべらせ馬転、その直後の障碍は押し切れずに足を当て落下してしまいました。最後の試合の最後の経路で、やっと満足のいく走りをしてくれた感じでした。

この一年間、最初は私の都合で、途中も私の不手極で、騎乗時間が非常に短くなったことは、天龍山又、クラブにとって大きな損失でした。

引きついで今騎乗している岩田君、これから2年間つき合うことを頭において乗って下さる。

肢が細長くて胸幅のない、横からの力に対して如何にも不安定に思われる「ドン」と、足が太く短くてたるまみたいな「僕」という、このアンバランスなコンビができたのは僕が三年目の秋であった。当時主将であった添田兄にドンで全日学総合競技に出場するチャンスを与えられたのが切っ掛けで、この馬と卒部まで付き合わせてもらうことになった。今から思えば随分と迷惑をかけたのによく耐えてくれたとしか言い得ない。所詮、迷惑をかけずに乗るということは理想でしかあり得ないと言ってしまえば全部片付いてしまうのだが（ここで言う「迷惑」とは、馬が人間の意志に従おうとしているのにそれを人間が邪魔していることである。）それでは余りにも馬と人間という有機体のつながりの中身を無視してしまっていると思う。少なくとも「馬術」を志す者であれば、馬と人間のつながりがどうあるべきかを踏まえたいうえでその理想に一步でも近づくべく努力しなければならぬ。（これは自分の四年間の部生活に対する反省であるのだが。）前置きが長くなりましたが以下「ドン」と「僕」

の短かった一年間の思い出を綴ってみたいと思います。

僕が乗り始めた頃のドンは非常に重たく感じられた。これは多分に自分の脚と拳の拙さにより、意志の伝達が充分に行なわれていなかったことが原因と思われる。要するにドンと僕との折り合いがついていないのである。添田兄や小野さんにいろいろ指導してもらおうが自分の中でそれを消化していくことができず、思う様に動かない。暗中模索の日々を送る。全日学が近づくにつれてそれは次第に焦燥と不安に変わっていった。おまけにそのテスト段階とも言える岩見沢親善大会では経路違反という始末。恥ずかしい事であるが、時には自分の技術の未熟さをドンに転嫁してやたらと拍車に頼った事もあった。

この様な状態のまま全日学に臨んだのであるが競技場では怪我の為、一度も練習が出来ず、一時は試合出場も断然せねばならぬ程に悪化した。(詳しくは昨年度の部報の「全日学観戦並びに参戦記」を御覧下さい。)まさに絶望的であったのが、試合当日の準備馬場で、信じられない事であるが、ドンが今までとは比べものにならない程よく動くのである。その時に添田兄に受けた注意は「手綱をもっと短く持ってどんだん脚を使え。」だけであった。この注意が切っ掛けでドンと僕とのつながりの一つの段階が偶然にも試合当日に到来したと言える。その段階とはドンと僕とがやっと同等の立場に立ったという事である。従ってまだそこに余裕はなかった。しかしドン本来の素直さに助けられて全日学の総合でゴールを踏むことはできた。

全日学の遠征が終わり一息ついたところで、全日学で一つの段階を経た今、次は余裕をもってドンに接することができる様に、この冬の間にはドンと僕とのつながりをより密なものにしようと考えた。

即ち、自分の日常生活の中でドンと接触する時間をできるだけ長く取る事と、騎乗時に際してはまず第一に脚に対する順応性である。

歩度の変換、伸縮を重点に置いて一つの課業から次の課業への移行ができるだけ素早く行なわれることを目標とした。次に拳に対する順応性であるが、幸いドンは左右の回転においては、若干右回転の際に内方に入ってくる傾向があったが、首を上げて反抗するという事はなかった。ただ拳を柔軟にすることを念頭に置いた。しかし実際は、拳に頼ってくるというよりも、拳に突っ掛かってくる事の方が多く、なかなか良い状態にもって行けなかった。勿論、良い状態というのは脚・拳・その他騎手の各部が一体となって馬に進気勢をもたらず時にも可能なのであるが、それらのアンバランス、特に拳の作用が積極的であった為に拳に突っ掛かってくるという事態が生じたものと思われる。拳は柔軟に、かつ馬の口に対しては受動的に(つまり引っ張らないこと)ということはいくら言っても言い過ぎにはならない。これから馬に乗っていく部員諸兄は常にこの事に注意してもらいたい。

障碍飛越に関しては、障碍上での頭頸の伸展が生命であるので、低い巾障碍を中心に練習を繰り返した。

冬の間はドンに乗っていても自分自身に向上の跡が見られず、暗い毎日の連続であった。

四月になって雪が解け、馬場がまともな状態に戻ると、心なしか馬の動きも活発になつた様に思われ、少なくとも昨年の全日学の時よりも後退はしていなかったと少しは安堵感が持てた。

五月の太秦・半沢杯、六月の対酪農戦は、自分の馬場であったことが幸いして少しばかり余裕をもって試合に臨むことができた。

そして七月の道自馬。今年初めての外の試合ということで少し

緊張し過ぎたこともあり、中障、バルクール・ド・シヤス、選抜障
碍に出場したが、バルクール・ド・シヤスでは二位になったもの
内容はあまり納得のいくものではなかった。まだまだドンとの仲が
うまくいっていない。

それが如実に現われたのが次の帯広での北日本学生大会である。
中障と総合に出場したが内容はヒヤ汗が出る程で、ヘタをすれば全
日字の権利も取れなくなるといった惨憺たるものであった。

しかしそれから一週間後に引き続き帯広で行なわれた道体を経て、
今まで精神的、技術的に自分に欠如している部分を克服することに
より、ドンとの折り合い、即ち信頼関係を得ることができた。それ
は落ち着きと、障碍前につめることによる馬の緊張感の増加である。
要するに、それまで僕の精神的、技術的な未熟さにより、ドンと僕
との信頼関係を僕の方から崩そうとしていたのである。ドンにどれ
だけ迷惑をかけていたのか測り知れない。

夏の長い遠征が終わってしばらくすると秋。残る道内の試合は、
今年から行なわれるようになった公認大会兼全日本馬術大会予選の
みであった。自分としてはバルクール・ド・シヤスで上位を狙おう
と思ひ、毎日その調整に励んだ。即ち、スピード、回転、最短経路
を念頭に置き、低障碍を一つ一つついでいねいに飛越することを心掛け
た。この頃は役員も交代し、部の運営上の責任も取れ、毎日ドンと
接するのが楽しくて仕方がなかった。卒論もそっちのけでドンと散
歩した日もあった。

そして公認大会。しかし本命のバルクール・ド・シヤスは気負い
すぎて落馬までしてしまいガク然。もう出場権はあきらめて気楽に
臨んだのが幸いしたのか中障で優勝、大障Bで二位となり、結局全
日本大会の出場権をスターライトと共に得ることができた。

そして十月下旬から十一月下旬まで約一ヶ月間、佐賀国体、全日
本、全日本学生と長期遠征を行なうことになった。

国体では自信過剰から充分な準備運動を怠たり失敗。猛省を余儀
なくされた。全日本では二度と失敗は繰り返すまいと障害を一つ一
つついでいねいに飛ぶことを心掛け、まず納得のいく結果であった。

そしていよいよ四年間の部生活の総括とも言へべき最後の全日字。
障碍の第一走行ではただ障碍を一個一個ついでいねいに、ということだ
け念頭に置いたのが功を奏して満点。第二走行では優勝という二文
字が目前をちらつき、自分の中で平静を取り戻そうと必死になる
が極度の緊張感がそれを妨害し、結局三落。ドンへの信頼感を忘れ
てしまったのである。また僕がドンを裏切ってしまった。

残る総合競技では、もうドンを裏切るまいとそれだけ頭の中に置
いて競技に臨む。結果は七位であった。しかしドンを裏切る、裏切
らないというのは僕の一方的な解釈であってドンには多大の迷惑を
掛けたことであろう。でも僕の気持ちに充分応えてくれたのは確か
だと思ふ。ありがとう、ドン。

最後に、これからドンに乗っていく人へ、若干の指針になればと
思い二・三の項目を述べて終わりたいと思ひます。

①ドンの長所、即ち障害に対する尊重性を損わない様に障害（主に
低障害）をていねいに飛越する様心掛けてください。そして同時に
器用性も養える様に障害の配置を考えて下さい。その際、首を充分
使えるよう拳、上腕を柔軟に。

②歩度の変換、伸縮が素早く行なえる様に毎日練習を繰り返して下
さい。そしてそれは脚、拳、騎座の総合作用であることを忘れずに。
③拳に充分手応えのある常歩ができる様練習して下さい。その際、
拳は馬の口に対してあくまで受動的であることを忘れずに。

④うまいかないのはまず自分に非があると考え、常に反省を忘れない様に。

ハイエイムに騎乗して

牝 ハンター 栗毛

昭和41年生

オーストラリア産

体重 573 Kg

平野雅裕

エムへ

今僕はお前の調教報告を書こうとしている。お前は可笑しく思うだろうね。確かに教えられたのは僕の方でお前じゃない。試合に出る事は常にお前と勝負をすることだった。そして僕はついにお前に勝つことが出来なかった。しかもその敗北感の故に今一層お前を懐しむことが出来る。

道自馬一あの最初の公式試合で、お前との勝負が始まった。最初の中障ではお互いに腹の読み合いだった。馬転したあの時、僕は「ざまあみろ、お前独りじゃ駄目なんだ」そう思ったのだ。僕も足を捻挫したしお前も後で見りゃ傷がバックリ口をあけてた。お前はもう試合はご免だと云った。ハミもかけさせなくて大暴れし

たっけね。でも僕は負けたくなかった。無理失理ハミをかけてバルクールに六段とお前を引っ張り出した。「私を飛ばせようっていうの、私は飛びたくないっていうのに。」そしてお前は見事に僕に勝った。そして道大会の野外障害でだった、お前の勝利が確定したのは。「私に任せていらっしゃい」お前はそう云って先頭きって帰って来た。僕はただ鞍にしがみついているだけだった。

調教か騎手の鍛錬か

僕がもう一度やり直せるものならば全く別の方針をとるだろう。その意味で後悔が残りそして部と水野兄には申し訳ないことと思えます。

具体的を調教経過とその反省点に関しては昨年の水野兄の報告が詳細に亘っている。僕が書こうとしても、あれ以上のことを書けないどころか、繰り返すことさえ出来まいと思う。そしてその点が何より僕としては悔まれる所である。

後継者は先づ水野兄の反省点に立ち戻ってそこから出発して欲しいと思う。つまりあの水野兄にさえ「結局はへたくそだったのだろう」と云わしめた所からである。

僕は、昨年、自分を上手いと思えるだけの自信家ではなかったけれど、下手でも良いのだと開き直れる程には慢心家であり又阿呆であったようである。

こうした考え方は大方我部員の共有する「感情」ではないかと思う。というのは、リッターウワー流の調教は、下手な乗り手による処女馬の調教方針だと云えそうだからである。平均的騎手による平均的馬の調教だと云い代えても同じ事である。

僕はその忠実な生徒として、考えていたことといえば、下手な自分としては如何にすれば馬に飛越を「教えられるか」にあった。

何よりもエムは不器用なのが一切の欠点の源泉にあるだろう。馬転、障碍への突進、落下、拒止、全てが小細工のきかない不器用さにあるに違いない。従って課題は、側方の柔軟な回転と、落着いた速歩からの飛越―しかも踏切りを近く障碍に高さを与えて前駆を使って飛ばせるようにしなければならぬ。

恐らくそれに間違いはなからう(但しそれで馬を作る―或は作り代えるとするなら、五年や六年かける覚悟をしなければならぬ苦であった)。

間違いがどこにあったかと云えば、下手な乗手の平均的馬の調教というのが一つの調教のモデルに過ぎない事を見過して、自分の技術の至らなさを馬の調教不足に転嫁してしまった所にある。平均的馬なるものは欠点のない人間はないと云うのと同様皆無であろう。多かれ少なかれ持つ馬の欠点を乗手がカバー出来るのでなければならぬ筈であった。その為には馬を支配しうる技術の獲得が先決されなければならぬ。

もとより調教或は騎乗を受身にする事と、馬を支配しうる技術を持つてゐる事とは少しも矛盾するものではない。ただ調教と技術の鍛錬を同じ鞍の上でしなければならぬ時互いに角逐することが生ずるのである。

例えば、エムのあの大きな(そして理想的と叫びたいのだが)弾道を描いた飛越に関しては、水野兄の評価と世人の評価が相反する。見る者にとってそれは驚異ではあつても、賞讃の的になることはない。僕はあの飛越を味わつた者として水野兄の評価を是としたい。そして、人の云う様に馬を規制したならば、あの飛越が損われやし

まいかと恐れるのである。そんな気兼ねが僕を受身にさせ、自分の技術への反省を怠り、結果的に馬に敗けることになつたのでないかと思ふ。

僕は僕の責任であるものを部に押しつけるつもりはない。ただ僕の主将としての責任を含めて反省するならば、部内での批判が余りに乗手を消極的なものにさせるものでなかつたかと思ふのである。

「馬を妨害してはならぬ」この当り前のことを殊更に、それさえしなければ名人だと云わぬばかりに高言することがどれだけ技術の向上を妨げていることだろう。

後継者には是非とも馬に勝つて欲しいと思ふ。エムがただ跨つてさえおればよいというようになつたらぬ馬じゃない事を胆に命じていて欲しい。そして、「馬の運動の中にどれだけ人の手を入れられるのだろうか」という水野兄の提出した疑問を念頭に置いてそれを乗り越えていって欲しいと思ふのである。

ハイエムに関する限り問題は調教にあるのではなく、乗手の鍛錬にこそあると思ふのである。

北燕号調教報告

躑 サラ 鹿毛

昭和46年3月14日生

勇払郡鶴川町産

父 サラ マタドア

母 サラ リュウウエー

体重 559 Kg

矢田 明

北燕号 一年経った現在

邂逅

昭和四九年十一月入厩。あれから二年と四ヶ月になる。一瞥した印象は「驢馬のような牛。」であった。当時の彼には人の心を感わす個性があった。小生、若干一年目ながら、先輩に尋ねた。「あの馬、牛といっしょに居たのですか。」

生物学なんぞ知る分けてはないが、生物らしい学的に彼を表現すれば

(無益な行動に必要な機能を最少に发育させた馬)猶、彼にとって有益な行動とは、ただ食べる事であり、走る事や、躍れる事、雌馬を見て騒ぐ事等は無益な事ではなかった。驚くべきは五才にして、生殖能力が完全でなかった事、その夏、帯広で一度、放出するのを見たのが最初で最後だった。五〇年の盛夏道体の前の出来事だった。

昭和五十年十月、北燕号の調教責任者となる。輪乗り、外乗、キ

ャバレッチ、の繰り返し、調教も知らず、只、本村兄のしていたと同じ事を続けた。

昭和五十年十一月十日、北燕鞍傷を負う。私が馬匹係で、三重県に遠征していた時の事だった。悪い鞍で装鞍した為と思われる。十一月二十四日帰札した時に私の目が見たものは、少し腫れ、一円貨大に皮の剝けた、背であった。治りかけたものの、判断が甘く、さらに悪化し、十二月手術という事になる。それから、二月中旬まで三ヶ月間、騎乗出来ず。手術後、曳き馬が出来る様に成った時から、私なりの調教を始めた。

調馬索

曳き馬中に、舌鼓による発進と、口笛の停止を教える事から始めた。次に、速歩と駆歩の号令を教えねばならなかったのだが、馬術を始めて、二年も経ぬ小生にとっては、馬を相手に、大声を上げる事は、勇気が必要とする作業であった。慣れてしまえば、何とも無いのだが。輪線に変えてから、速歩を中心に一日、三十分くらい回した。最終的には、速歩、駆歩の号令を返上して、舌鼓の二拍子と三拍子にて代用した。午後の雪の馬場での三十分の運動は、発汗する程のものだった。

右手前については問題は無かったのだが、左手前の運動がどれ一つを採っても、ぎこち無く、左の腰が弱いのを痛感した。持久力は低かった。体力も無かった。

長所と短所

まさに表裏を成していた。運動機能が低い為に、物に驚きたくても体が動かない。本当は、元来の性格であろうが、外界に対する反応が極く穏かである事。馴致に関しては、勇気のある馬と言える。人の行く所ならば殆ど行った。「目くら、蛇に怖じず。」の如く、

恐れを知らぬ故に、乾霖に二度も埒り込んだ事があった。馴致の失敗は、もう一つ有る。

昭和五十一年六月十三日、対酪農大字戦の時であった。北燕も二年生で小障に使うことになり、今想えば、小生の判断が甘かったのであるが、その走行中、衝立の二段、H九十、百十、W百を逃避された事である。その直後に、何とか飛越させたものの、人馬共に、今も非常な悪印象として、記憶している。

北日本学生、於、帯広の中障一走行目の第七障碍・Bで、失権した時は、気が変になりそうだったが、その障碍がやはり衝立の三段であった事は、馴致の失敗の表面化と、受け取れた。応援に来られて居た本村兄には、本当に申し分けが無かった。二日後の総合競技では順位は十四位であったが、生還出来た事は何より嬉しかった。競技の度に馬に無理を強いた為に調教、特に、大事な口向きに関しては一年経っても少しも良くなかった。競技に出る、その後は、また一からやり直し、これで進歩出来るわけが無い。その上、大きな骨瘤までも作ってしまった。一頭の馬の責任者として恥かしい限りである。

足の調子が悪く、2ヶ月ほど、あまり乗っていない。三月も半ばの現在、ようやく見せ始めた地面を探しては常歩を続けている。

予定
四月中、常歩、坂の昇降、野外馴致、常歩での扶助の徹底。五月中、足が良くなり次第速歩を入れてゆく。短かくまとめ、足の影響を最少にする様注意、減却扶助の追求、体力作り。六月中、体力と共に持久力をつける為に、二日に一度くらい駆歩を長く入れる。部班にはあまり使わない予定である。7月中、駆歩の制御の向上、今までの成果が見られるはずだ。五月・六月には野外を走りまわるつ

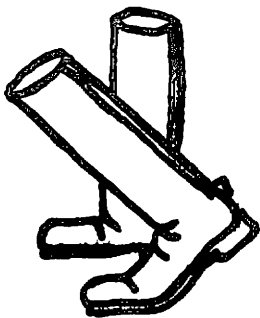
もりでいる。昨年、野外騎乗で失敗した経験を生かし、スピードの維持を重視する。

無理をしないで、人馬の一致を目標に進めて行くつもりである。

余談

私の馬術は馬術と呼べぬかも知れない。立場上、口にすべき事ではない。しかし、入部当時、馬を敬い、畏れ、馬の絵を描き、馬の反応に心をときめかせ、馬と野外を歩きまわる事にこの上無き楽しみを見出していた、あの頃を想いと実に幸せな気分になる。馬を動かす事、調教する事を、馬術と言うのなら、私の、親馬術であり、今までの三年間の殆どが、この馬と親しむことに費されたと言っても過言では無い。

友を持つことは、実に素晴らしい事である。たとえ、それが人で無くても。



新馬紹介

北楽院号

駟 サラ 鹿

昭和47年4月6日生

静内産

父 ミンシオ

母 ジェラルディンツ

体重 564 Kg

競走名 マイキュービット（高松厩舎）

本城敬文

私が彼に乗り始めてそろそろ半年になろうとしています。今の期間を振りかえってみて思うことは、まず随分と時間がかかったということです。新馬故、時間が十分必要で焦りは禁物なのですが、無駄な時間も多かったようにも思えてなりません。それを反省しこれからの前進の材料とするために今迄の経過を追っていきたいと思います。

昨年六月、春田先輩の紹介で高松厩舎より入厩しました。馬格のある牡馬で鹿毛五才。左前肢深屈腱炎でしたが乗馬にはさしつかえ

ないだろうということでした。そして入厩後まもなく春田先輩の執刀で去勢されました。

最初は平野兄が調教にあたられ少しづつ運動していたのですが、七月になりほとんどの部馬が遠征で離れし部員も少ししか残っていない状態になって実質的に調教は中断された形となりました。八月後半になり他馬が帰札してよいよ彼の本格的な調教が始まりました。しかし調教責任者は確定しておらず、一応平野兄が中心に騎乗していました。このころは口との軽い接触を保ち常歩、速歩及びキャバレッティ作業がほとんどであったようです。

十月になって駟歩発進や単騎での街乗が課業に加えられました。障碍飛越ではキャバレッティで50cm位の単一及び連続障碍を練習していました。飛越は首を使って大きな飛びをするのですが、前肢で落下することが多いようでした。

さて十月下旬からいよいよ私が騎乗するようになったのですが、まず最初の感想として、常歩でよく歩き歩様も大きい。脚をまだ良く理解していない。速歩発進が悪い。停止が悪い。常歩でハミが口になんか少しくもあたるかと巻きこむ。速歩でハミが出てくる。左によれる、等であった。そして不斉地騎乗では慣れていないためか非常に入るのをいやがったり、脚を使用しても前に行かずはねたり後退したりすることがあったが、これは新馬故仕方のないことで、徐々にいろいろな場所に慣れて平気で歩くようになりました。

また馬体については、左前肢管内側と右後肢管外側上部に骨瘤があり熱のあることがあるので注意する必要があります。

以上の事柄から騎乗に対して特に注意したいことは次のことです。

- ①脚を大げさに使って脚を憶えさせる。
- ②口に軽く接触する。

③ 輪乗りで停止、発進を行ない口向きを良くする。

④ 頭を下げさせる。

⑤ キャバレッティで足さばき及び飛越の練習。

⑥ 街乗を多くし馴致に努める。

⑦ なるべく叱らないでほめることを心がける。

もちろん以上のことは調教の進度に合わせ三種の歩度で行い徐々に要求を高めていくのには言いまでもありません。

最初はハミを口中でも遊ぶことが多かったのですが、脚でどんな前に出し口に軽く接触することを続けていくとだんだんハミに出てくるようになり、停止も口笛停止を続けていくと良くなりました。また回転も輪乗を繰り返すことにより良くなりました。飛越も足にあてなくなりましたし街乗でも落ちついて行ける所が多くなりました。速歩の歩様も大きくなりましたし、駆歩も前より安定してきました。とにかく新馬なので調教の進度による変化が大きく、良くなっていくのがはっきりわかります。

前記の事柄は、四月現在でもほとんど変わっておらず、これからも慎重にかつ自信を持って調教を進めてゆかねばなりません。彼は次期北大を背負って立つ馬です。今年一年小障レベルでの安定を一応の目標としてできるところまでやってみようと思っっています。

「北楽院」の由来

話は中国の梁の時代に遡る。

儒・仏・道を修め、本草学にも秀でた陶弘景(四五六一―五三六)は、役人としての生活に飽き足らず、六朝時代の識者の間に流行していた隠者の系譜を継承し、茅山に隠居し、仙薬の研究に耽った。しかし、その著書「神農本草経」などに述べられるような化学的知識と道教の神秘思想を深く理解するなどの博識の為に、梁の武帝からしばしば意見を求められていたので「山中の宰相」とも称されていた。

陶弘景の血を引く唐代の陶暹睦は、当時世界最大の都市であり、東西文化の華咲く首都長安で、インドから伝った仏教と天文学を学び、天文台の台長を務めると同時に植物に関する知識も広く、「大唐草木経」を著し、芸術分野に於る書道の顔真卿(七〇九―七八六)や詩の李白(七〇一―七六二)、孟浩然(六八九―七四〇)らと共に、唐の文化を担う知識人として活躍していた。また彼は、若い頃玄宗(六八五―七六二)とも交流があり、「開元の治」と言われる善政の基となった思想的及び科学的相談役としてお互いに尊敬し合っていたが、玄宗が楊貴妃を寵愛するようになり、政治が乱れてくると、後の天文台長となった瞿曇悉達(人類中最もすぐれた者の意)とも呼ばれるインド人及びそれらに迎合する自国の学者達との不和と相俟って浴陽の南の苜蓿山に隠居し、彼を慕って集まる若い学者や文人たちと語り、自由で高尚な精神を有する所謂楽人としての生活を送った。

玄宗が皇帝になった頃、陶暹睦は、助言のお礼として、しばしば

馬などの品々を贈られていたが、茫山に移ってからは交通の手段として元より、広大な自然を歩き回る為、或は趣味としての乗馬の意義は大きいものとなった。唐代は中国では特異的に女性尊重の時代であったこともあり、娘の彩貴も訪れる芸術家などと自由に意見を述べ合い、自らも詩や歌を作っては楽しんでいたが、決して世間に広く発表するということはなかった。余談ではあるが、酔って水中の月を捕えようとして溺死したと伝えられている李白も晩年は此処に出入りし、実は、創作に限界を感じていた彼が、無名な彩貴の溢れんばかりの才気に触れ、自ら命を絶ったという説が一部にある。陶暹睦は彩貴にも馬術を教え、彼女は女子で唐一番の名手になったと伝えられているが、現在残っている唯一の女子の騎馬像である唐の「騎馬女子像」(泥像)は、彼女がモデルであると言われる。

また、ここに集まる新進気鋭の学者や芸術家達も乗馬に秀で、多くの洛陽や文化の中心地たる長安へ馬を駆って出掛け、論争を挑んだり、意見を交したり、作品を披露したりしていたので中央の文化人らから驚異の目で見られていた。そして、陶暹睦を中心として茫山に集う馬術が巧みでリベラルな識者の一群を彼らは「南楽院」と呼ぶようになった。「南」は首都長安から見ると南に位置するということから、「楽」は「楽人」などに用いられる如く、自由かつ創造的で心身共に豊かな生活を楽しむ、という意、「院」は元來は、上皇や学者の居所及び役所など公共的な建物或はそこに住む人の敬称であるが、ここでは、陶暹睦の下に集う精神共同体或は生活を共にする集団(彼を主とする家族のようなもの)として意識されたものと解釈されている。

この話からヒントを得て、北大の北を入れて「北楽院」とした。

以上が「北楽院」に纏る物語であるが、一度命名されたら(生物に於て、新しい命が産み落とされたら次に来る生という運命の必然性を負っていると同様に)その由来や意図を乗り越え己自身のものとして歩み出さねばならない。「北楽院」の名を永劫のものとするか否かは彼の双肩と現役部員の努力にかかっている。

(文責・命名者・S)

北 稜 号

牝 サラ 栗毛

昭和43年5月11日生

父 タマナー

母 ミスキリシマ

体重 558 Kg

競走名 ローヤルタマナー

(高木厩舎)

矢 田 明

十月十八日に入厩して以来、ほとんど小生だけが乗って来たのですが、今日に至っても調教に関してほとんど進歩が無いのは、現実です。馴致に関してはかなり進んだと感じている。人や環境にも慣れて来た。良く遠くに行くときに、一人で興奮する事があるが、そんな時私は声をかけながら、「よくやるよ。」と高々と上げた首を見ています。異様な物音に私にとびつき、その度にふみつけられそう

になるのには閉口するが、けっこう勇気の有る馬である。馬体の硬さ、足の悪さは、直ってゆくと思う。

北稜 雌 十才 通称 雪子
経過、ノートより

10/19 曳き馬の時、人に付いて来ず。差し出す餌もよく食べない。スタートライトの馬房を借りているが、汗をかいている。

11/5 30分づつ曳馬と騎乗、常歩でキャバレッテ1、内速歩10分、脚の使用で前進を見せる。

キャバレッテ13回 30センチの横木二回通過後下馬、愛撫。

この頃、少し前肢に熱を持ちはじめ。

12/31 ドラム、飛べず。不斉地に長く行く様にしている。かなり、何処でも行く様になる。

2/30 足が腫れる。フレグモーネと判明。体温39度上がる。

3/24 30分馬場内で常歩、速歩で停止発進、回転、キャバレッテも停止が良くなりつつある。その後、街乗。例の川まで来て、行かせようとすると後退、止めて愛撫し再度推進、川の中に入る。彼女鼻までつけて水を飲む、向う岸に上がらず、深みへ。小生、うろたえるも、彼女、すかさず取って返す。彼女の腹、びしょぬれ。

ずっと裸蹄のまま乗って来たのだが

4/3 装鉄

4/8 常歩、30分、回転が良くない。右の口に反抗を見る。甘えてくれるのだろうか。(榊井兄が、乗られ、甘えていると言う。)不斉地を巡って終る。足の熱がかなり有る。

鉄をはいて居らず、長い間乗っていたために、かなり足に熱が出ていた頃だった。

北美号調教報告

牝 サラ 栗毛

昭和44年4月10日生

静内産

父 スパニッシュエクスプレス

母 ゴールデンメルド

体重 520 Kg

競走名 メールエクスプレス

山本裕介

昨年八月、下飯坂先輩の紹介により、小栗先輩が購入され、しばらく調教された後、私も、乗るようになった馬である。

調教と言っても、新馬調教は未経験で、未熟であるので、調教報告といったたいものにはならないかも知れないが、簡単に状況を報告したいと思う。

十一月から十二月にかけて、左前肢管内側と、左後肢飛節内側の熱が原因かと思われるが、速歩において跛行が見られ、常歩の日々が一カ月近く続いた。又、馬場陳結もあって、激しい運動は出来なかった。しかし、一月に入ると跛行がなくなってきたので、少しずつ速歩の量を増やしていった。さて、調教内容であるが、次に挙げる基本事項を必ず履行し、憚らないように心がけた。

①馬にわかりやすいオーバーな脚作用による推進。

②脚と逆鞭による頭頭の進展低下にびったり追隨する挙とそれに

よるハミ受け

③ キャパレットティ訓練

④ 街乗、野外馴致

② については、この馬の場合、首の伸展低下、ハミの引き具合は形だけであるかも知れないが、大変良好であると思われる。

③ についても、非常によく下を注意して、落ち着いて、またぐようである。

難点としては、重い程度である。馬場内では、落ち着いているのはいいのだが、脚に鈍感であり、常歩にしろ速歩、駈歩にしろ、必死で脚を使って前へ出さねばならなかった。興奮して暴走することは馬場内では絶対にないが、脚を使ってもそれを相応の歩度が得られないということは、バタバタと脚を使い、馬を妨害している騎手の脚にも問題はあるが、脚扶助をよく知らないものと思われる。小栗さんの助言もあり、対策として野外での伸ばした速歩をやることにし、その時に必ず脚を添えるようにし、脚理解の一助とした。野外から帰った後では、少し出るようにはなった。また、障碍訓練と合わせて、前進氣勢という言葉は、正確には当たらないと思うが、馬に刺激を与える意味で、伸ばした駈歩での小さな障碍通過を行なった。飛越と言うよりは、駈歩歩様の延長みたいなものだが、とにかく前へ前へと出す様にして、歩度減退を許さないようにした。本来の歩様の大きさ、柔かさにより、馬は美にスムーズに障碍を越えた。

二週間程この訓練を続け、キャパレットティでの基本的障碍調教に入ろうとした時期に運悪く、雪で足をとられて、左前肢指屈腱の軽い腱鞘炎を起こし、練習が途切れた。一週間程で治ったが、その後の運動の増やし方に慎りを生じ、速歩で跛行が見られるようになり

三月現在快方に向っているが、また常歩に逆戻りしてしまった。正に騎手の不注意である。前記の他に、回転の悪さ、野外での落ち着きのなさ、体力の欠如が、難点であるがそれらに關してまだ本格的には、手をつけていない。しかし、新馬である故に、調教如何でいくらでも、改良されると信ずる。

故障、地面凍結のため、調教速度は遅く、充分な調教はなされていないのが、以上のような状況であることを報告する次第である。



離厩報告

北勇号を通して

石川 淳子

部員たちが、長い間、汗水流して育ててきた北勇号でしたが、惜しいことに、彼は、昨年の九月、ある乗馬クラブへと離厩していきましました。離厩してから半年。今は、北大にいたときよりも、少しくましくなっていて、結構元気に暮らしている様子です。

北勇号との縁のはじまりは一年目で、彼のサブ・チーフになったときからです。北勇が、周囲のものに、特に動じやすい気性であることは、周知のことと思います。そこへきて、臆病者だと自認している私が、曳馬についていけば、彼としても、さぞかし、心細かったことでしょう。三年目の秋から、私が北勇号に乗り始めたことは、彼にとっては不運だったかもしれない。が、決まった以上、北勇号と、しっかり手を組もう、と思いました。

北勇は、びくびくしていて、知らないところへは行きたがらないという印象が強かったので、街乗や曳馬に、できる限り多くの時間を費やしたつもりです。そして、人間が妥協しないように、いつも、目的地をきめて行くように、心掛けました。が、いったん、馬が冷静さを失うと、それを落ち着けようと慌って、かえって

思うようにいかなかったことも度々ありました。そういう時には、馬が躊躇する一歩手前で、脚を使いなりして処理することが大切でした。このことは、馬と人間の心理を知ることにも役立ちました。馬を知るといよりも、北勇の場合、心の通い合いみたいなものを求めた方がよいと思ったのは、ちょっと、感傷的すぎたかもしれません。

私が、北勇号に乗ってきて、反省することは、人の助けをあてにしすぎていた、ということでした。さらにいえば、技術の未熟さを理由に、自分で創意工夫することを怠っていた、ということでした。さらに実際的に言えば、平野くんに頼りすぎていたということでした。平野くんが騎乗すれば、さすがに、北勇は、ハミにかかった、緊張した動きをしました。そして、障碍でも、結構大きいのをこなしました。私もそれに近づこうと、まねをしました。結局、それは、単なるまねでおわってしまい、自分のものにはできませんでした。技術のないものが段階を越えてまねをしても、うまくはいかなかった、ということなのでしょう。それから、自分でイメージを持ちながら、また自分の力を考慮して、やってきたつもりです。足りなかったのは、何が何でもやる、という意欲だったと思います。そこで、まずは、原点にかえって、馬のびのびさせた動きをさせるように心掛けました。柴田兄からは、こぶしを絶対に動かさないことと、ハミをきらって、首を上げて、こぶしを引かずに、脚をさらに使うことを、再三、いわれました。このことを忠実に守れたときには、北勇は、大きく、のびのびとした速歩をしました。それから、いつも、その動きを目標に乗っていきましました。一日の練習の流れは、次のようだったと思います。まず、放棄手網にして、馬が、要求された歩度になるまで脚を使って伸ばしま

北 武 号

半 浦 剛

した。そうしてから、少し手綱を短く持って回転したり、不整地を通過したりしました。障碍は小さいものばかりで、騎手に自信のないものは、できるだけさけることにしました。そして、これらの運動は、正確であること、馬を怖らせないということが目安でした。北日本学生馬術大会の行なわれた帯広での練習も、これを主流にして、やりました。江口兄に指導していただいたときは、仲立ちになってくれる人がいるというだけで、結構大きな障碍をとぶことができました。が、帯広で行なわれた、二つの試合の結果は、ともに、失権でした。この試合を通じて、自分が馬の落ち着きと緊張との接点を知らなかったことを感じました。そして、技術うんぬんよりも、一番情けなく思ったのは、最後まで、北勇と一体となれなかったことでした。試合も終わり、ついに離厩が決まったときには、北勇の将来性を少しもひきだしてやれず、すまない、と思う気持ちでいっぱいでした。

しかし、今年の春の半沢杯で、北勇号は、ずずらん乗馬クラブの名馬として、小障碍でみごとに満点でゴールしてくれたようです。北勇号は、まだまだ、私たちに、その片目の勇姿をみせてくれることと、信じています。

僕の手によって、北武号の離厩報告を書かなければならないのは悲しく、辛い事です。大きな部の流れというものの中にあつて、仕方のない事なのかもしれません。しかし、自分自身の問題として考えると、僕がいけなかったのではないか、結局執着心が欠けていたのではないかという問いばかりが起こってきます。

順を追って御報告致します。

十月終りに北武の担当となりましたが、十一月初めにあつたという間に左後肢のケイクンが悪化して十一月一杯馬休にしてしまいました。AD軟荷のおかげで、十二月より、桑田兄、佐野兄の注意で乗り始めました。寒い間は、全身を使って前へ出るといふ事に主眼を置き、その他

- ① 一日なり一週間なりの運動量、緊張度の波を考えて、馬を疲れさせない、飽きさせない。
 - ② 運動の合間に常歩による全身運動を入れる。
 - ③ 練習の最初か最後に30分、街乗を必ず入れる。
- 等を練習の骨格としました。

「とにかく前進氣勢を養いたかった」Forward Impulse という語に魅力を感じた。これだけではいけないことはわかっていた。しかしこれが無くして、障碍は飛べぬと思った。野外を走った後退からの速歩発進を多くとり入れた。キャバレッティよりも、駈歩での連続障碍通過を増やした。これらは全てその延長線上にあった

と思います。

障碍は、小さいものを数多く飛ぶようにしました。速歩は、キャパレティにこだわらず、種々の運動を課す途中での巾のあるものや固定障碍等を飛び、駆歩でも同様にして、そのアプローチでは、その前進氣勢をぐっと拳で受けてやるように努めました。そのタイミングがわかってくると、余り障碍前で詰まる様な事はありませんでした。

回転は、右回転が幾分硬いようでしたが、別に逃げるという様な微候はありません、回転のとき逆鞭を使って頭頸を上げさせぬ様努めました。銜はあまりいじりたくありませんでした、否、いじれなかつたと言った方がよいかもありません。更に拳で口を邪魔する事を恐れました。為に、銜に対して大変中途半端な態度しか取れなかつたのが残念です。銜への脚での追い出しと頭頸の伸展低下が表裏一体なもので、それには、強靱な脚と軟らかい拳が必要な事が、感覚としてわからぬままシーズンに突入しました。

そうした状況下で兎にも角にも、一月・二月と二回の経路廻りを、拒止の徴候もなく、無難に終え、二月二十九日に四・五年生との對抗戦があり、思わぬ事が起つたのである。僕を背に乗せたブーが右回転からのダブルの前でても動かなくなってしまったのである。ショックであった。試合後、外街でブーは何にくわぬ顔でトボトボ歩く。涙。痛恨。裏切られたと思った。騎手の拙劣を寛容に甘受してくれる馬にしたかった。しかしそれが全く甘かつた事を言下に叱咤された。吉野兄の堅固な騎座、強靱な脚、軟かい拳、眼の当りに叱してその雲泥の差に愕然とし、うまくならねば馬との信頼関係は作れぬと思ひ知らされた。

雪溶けは遅かった。雪割りも進まぬ狭い馬場で対東北戦があった。

僕は出場しなかったが。北武出場、障碍も小さく、四回全て満点。又、四月十七日に酪農大で道三大学戦があり、北武と天龍山が貸与馬として出場、北武はシユニア戦に出て無難にゴールを踏み、いよいよ試合シーズンの到来であった。

半沢杯・太秦杯に向け、騎手の姿勢に留意しつつ、乾縁・水濂馴致、連続障碍を多く取り入れ、練習に励んだ。しかし無心ではなかった。常に恐怖にも似た不安と微かな期待と爆弾を抱える緊張感があった。当日五月三日は快晴、複合に出場。馬場は下手は下手なりにまとめようとしたが、種々の運動が駄目なのに、まとまりがなく、患袖裏を少し走って来て、祈るような気持ちで経路走行。信じられないような前進氣勢と大きな飛越。満点。歓喜。四位。小障も中島君が出場、満点でゴール。数秒の差で三位になってしまったものの、僕はうれしくて仕方がなかった。あの大きなブーを抱き締めたい気持ちであった。

馬体の故障はずっと無かったが、六月中旬の対酪農戦の四日前になって突然跛行が出た。練習で左肩を痛めたらしく、酪農戦は自重せねばならなかった。

シーズン突入と共に障碍の程度も上げ、高い緊張度の持続も要求するようになり、外見的には無心を装っていましたが、内心は、あの爆弾を持ったような恐怖と自分の騎座に対する気後れがあり、焦っても来ました。練習と試合の差をどうしても詰めることができなかつた、否、知らなかつたと言った方が正しいかもしれない。

昨年の道自馬大会は七月十日十一日の両日、浦河の日高育成牧場で開かれ、強行日程ではありましたが、北大から唯一頭総合に出場しました。調教審査。大きな失敗はなかったが、初めての場所の為か物見をして、真直ぐに進まずのが困難であった。耐久審査。全長

5kmを越す、起伏のある長大コースであった。準備運動を十分に
して、すでに汗をびしょりにしてスタート。第一第二を無事通過し
て第三の何の変哲もない林間の自然木前で突然膠着。右鞭を左鞭に
持ち換えて二拒止の末三度目にやっと通過。後は疲れる様子もなく
ゴール。余力。少し準備運動を抑え、スタート第二のダブルaで三拒
止失権。膠着ではなく拒止であった。踏み切りの文字通り踏切がつか
なかつた。脚不足は歴然としていた。

一旦帰札してすぐに北日字の為帯広に貨車積みであった。当地の
練習は、踏み切りのタイミングを定着させることに主眼を置き調整
しました。中障は桑田兄が騎乗して出場されましたが、第一障前で三
拒止失権となり残念でした。第二走行を棄権し、総合に気を取り直
してとにかく最後までという気持ちで出場した。調教審査は無難に
まとめ、これまでで一番よい点が出た。二日目の耐久は、第三・第
四の大きな乾壕と白樺三段を通過できれば行けると思った。第三を
何無く通過して、第四を意識し過ぎた。詰めよう詰めようと思つて
口を邪魔したに違いない。踏み切りを誤って拒止、二度・三度と拒
止。失権。何んと四度目に騎手の力みが無くなったからか、綺麗に
通過、勢いでゴールまで走破したものの残念で仕方がなかつた。三
日目の余力はオープンで出場したが、第二の黄緑バーでこれは拒止
でなく膠着であった。

その後同じ帯広で道大会がありました。学外実習の為、北武を
佐野兄に託して帯広を後にしました。余力の第二でやはり膠着して
しまいました。

九月になって岩見沢で昨年から全日本の予選大会があり、短イス
ティープルのある複合に出場しました。正直言ってもう試合に出る
気力には欠けていました。良いところなく失権でした。最初からやり

直さなければという思いばかりが募った。しかしやるべきことが
判然としなかつた。いやたくさんあったが、どれもこれも希望につ
ながらなかつた。憂うつ、消沈の日々であった。

しかし何かを行動に移さなければならなかつた。幸いにして、十分
にはないにしろ、一年前よりも、感覚も鋭くなり、騎座も固まっ
てきた。リッターワを頼りに、ソフトコンタクトでの頭頭の伸展低
下を主眼に冬場に向かうことにした。

クラブの方では、新馬を何頭か入れて育てて行くべき時期が来て
いた、そこで在来馬の離厩を考えねばならなかつた。今までかわい
がっていた馬を手放すのは辛い事ではあつたけれど、屠場に出さね
ばならぬ状態まで置いておくよりも、という判断の下の決定であつた。
北武が選ばれた。

すずらん乗馬クラブより年末も押し迫つた十二月二十八日に馬運
車が来て、クラーク先生別れの地である島松へと去って行きました。
同地で別れる時のブーの泣き声は忘れられません。バス停まで歩き
ながら、涙がこぼれ仕方がなかつた。あの悲しげに遠くを見つめる
大きな目、おどけた表情、大きなまるまるとした体。あんな素直
なかわい奴はいない。惜別。

ブーを下さった加藤さん、かわいがって下さった今井さん、吉
野さん、桑田さん、その他先輩諸兄、現役諸兄のみなさんには何と
申し上げたらよいのかわかりません。どうもありがとう御座居まし
た。

北秀号に乗つて

山本裕介

一昨年11月に横沢兄の後を受け継ぎ、調教と試合を目指すことになったが、正直言つて路頭に迷つたと言おうか、鞍数も少なく、下手くそな私に、一体この馬が調教できるのだろうかと不安でいっぱいだった。実際、調教報告を書けるような資格は到底ないような成績であるし、彼女に与えたものより彼女から得たものの方が、はるかに多かつた。しかし調教するのだという意欲は誰にも負けなかつたつもりだ。以下その経過を簡単にたどることにする。御存知の通り、10年近く我部に居て、多数の諸先輩が、調教なさり、基礎的な扶助、脚の了解、飛越の仕方については他馬を寄せつけず、頭もよい馬であるが、競技、特に障碍となると、反抗、硬直癖の著しい馬である。自分の技量を棚上げするわけではないが、一種の癖馬である。しかし、そういう馬であるが故によい何とかしてやろうという気持ちの方が強かつた。

11月、まず第一歩として輪乗を正確に描くことから始まつた。脚の使い易さから、座骨を着けた輪乗の方が、うまくいった。口向きについては、頭を譲らせることを目安としてハミを受けた。口が堅く、きついハミ受けでないと譲らせられなかつた。原点到戻つて、極く軽い接触でやるのと、絶対に譲らせるといふ両論があつた。いずれにせよ脚の強い推進が前提であり、根本的に大きな差違はないのであるが、実際やってみると、私の技術不足から、頭では、軽く軽く

と思いつつも、体では、逆に引っぱり、そうしないと思いどおりの動きを課せなかつた。強いハミ受けであるならば、強い推進が伴うのだが、まだまだ騎手の方は推せなかつた。結局するすると暮れまで来てしまつた。

12月末、跛行。3年前の左後肢飛節内腫の再発で、完治は無理である程度の跛行は仕方なく、だましましたし乗れということで、一カ月間馬休、常歩のみの日が続き、若干の跛行を残したまま徐々に普通の運動に戻していった。

2月。常歩が半分以上を占めていたが、主に街乗、それから馬場にて輪乗、軽く障碍といつたパターンが続いた。常歩では、踏み込みが難点で、ハミを受けようとする、拳の硬さ、脚の荒さから、憔悴気味のちょこちょこした歩様となつた。これに対しては、内方脚にて腰を外へ振らせるようにすると、後肢の踏み込みは良くなつた。脚への従順さを養うためには、特に輪乗での内外方脚の使い分けをはっきりと行なつた。開閉はもちろん種々の旋回、さらに二蹄跡運動へと発展させるようにしたが二蹄跡はまだであつた。このころはまだ、脚も効果的でなく拍車にたより口をきつくしがちで、正確な合図として了解されず、もともと輪乗を重ねる必要があつた。ただ常歩が多く、速歩駈歩での思い切つた運動ができなかつたので、調教の進度は遅く大きな時間的ロスとなつた。その証拠として2月末ころに行なわれた対OB戦では、小さな小障碍を、第3障碍まで各一拒止で失権、私にとって、デコの癖を自馬として、初めて体験することとなつた。馬は、頭を挙げ興奮し、騎手を無視して、止まることは、目に見えていた。競技と練習では、何かはつきりと違つた要素が、馬の頭の中にあることは確かである。普段の障碍への恐怖感がそれにより起揚され、反抗となつて現われる。練

習でのスムーズさを考えると、競技場での彼女の行動は、理解しがたいものがあつた。

その後約一カ月、沈静を頭に置き、輪乗を丁寧に重ね、直線上での歩度の伸縮、特に、駢歩でのそれを重視した。障碍では、キャバレッティを使用してのアプローチの沈静 in and out の組み合わせによる連続障碍訓練、障碍前での輪乗↓飛越↓輪乗、輪乗の線上の小障碍の飛越、障碍前後の停止などを行なつたが、飛越後の停止には、大量のエサを与えるようにしてかなり徹底的に行ない、顕著な効果が現われことは、収獲であり、障碍への突進も多少矯正された。特に駢歩では力で押え気味にして勝手に走り出すのを防いでいた事は、伸縮の繰り返しと停止、騎手の騎座の安定、脚での静かな推進により、軽い方へ向かつた。放棄手綱でも、落ち着きを長く維持出来るようになった。4月初めの東北戦では、他人が乗つたのではあるが、満点でゴールした。一步前進であつた。

4月に入つてからは、暖かくなり馬場も柔かくなり、足の方も良い様なので、障碍練習に徐々に重点を置いていった。この頃には、毎日の練習で、必ず経路を想定し、10〜20個の障碍を、駢歩通過し、最好調に達した時にさつと切り上げて馬を楽にしてやる様にしていった。競技場での反抗に対しては、結局ひたすら脚と拳への馴致を進めるのみであつた。四月中頃の三大戦では、酪農大の馬場で貸与馬に出したが、3人とも失権、競技後、私が乗つてみたところ満点でゴールした。誰が乗つても帰ってくる馬には程遠いが自馬でスムーズに走行できたことは、自信となつた。

五月、半沢杯。それまで徐々に登り調子であつたので不安を残しながらも、期待は大きかつた。複合の調教審査では、人馬共に興奮

してしまい、腑甲斐無い成績に終わった。馬は競技を意識し始めた。障碍では、絶対にハミをはずさないとの忠告を守り、第2まではすばらしい飛越をしたが、第3への左回転で左方への押えにスキを見せてしまい、真直ぐに向けようとした時には一瞬遅く、左へよれた。何とか完全に切られるのは防いだが、左端にて拒止速度で向け直し通過第4のかまぼこバーへ左回転、見せたたん反抗、後退。向け直しても、飛ぶ気なし。騎手は、拍車をぶち込む他、能がなかつた。全然わからなくなつた。思い直して、小障に出場、速度飛越で、無過失ゴール。何とか救われた。まだまだ、駢歩での制御、ハミ受けが出来てなかつたのだろう。とにかく、また振り出して戻ってしまった。もう一度、輪乗からやり直してあつた。

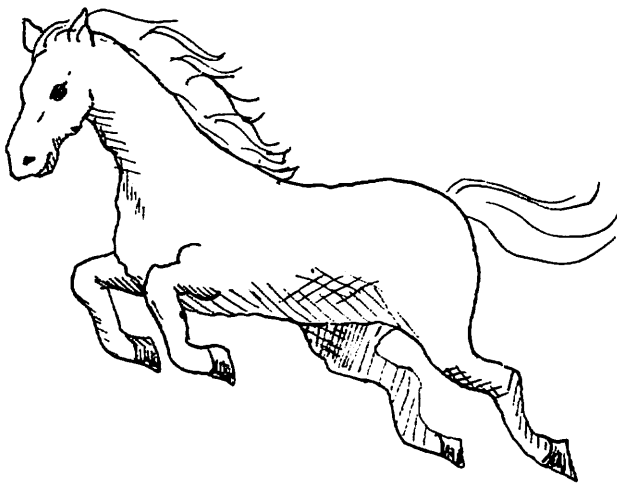
5月〜6月にかけて、また跛行、一カ月馬休及び常歩のみ。そのため、酪農戦と日高での道自馬には出場出来ず、大きく後退してしまふ北日字の貨車積まで満足を調教が出来ず人間は、他馬がどんな障碍をこなすのを横目に憔悴に憔悴した。帯広に行つてからは、当然絶対的時間がなく、ぶつつけ本番の形で、総合競技に挑んだ。調教審査は、自分でも意外で、どうか興奮せずに無難にこなし、参加馬中4位という好成绩だつた。耐久は未経験であつたが、馬は前年の北日字でゴールしているため、余力ほど不安はなかつたが、どうなるか解らなかつた。ただ、第一が難物で第一さえ飛べば、あとは調子に乗るだろうと思つたが、案の定、第一で2反抗、ここで終わったのでは、死んでも死にきれないと情けなくなり、必死の鞭と拍車、長い反抗の後、3回目に飛越した。

それ以後、一つ一つ推しまくり最大の緊張を要求しながら走つたが、途中2反、1反で規定タイムオーバーでやつとの思いでゴールした。何か月ぶりのゴールであつたか、とにかく嬉しくて仕様がなかつた。

た。彼女とのつきあいの中で、最高に感激した一瞬であった。余力は一番の不安であったが、情けない結果となった。第一は速歩飛越、第二は、駆歩で向けたが脚で出ないで左へよれながら左端で拒止。全く反抗的で、落ち着いて向け直そうとしたが、脚に反応せず拒止失権。障碍飛越においては、半沢杯以来全く進歩はないという結果と相成った。

それ以後、道体、岩見沢大会と下降の一端を辿った。競技と練習という、状況の差による彼女の心境の変化をどう取り去ればよいのか、どうしてもわからなかった。私の無感覚さ、技量不足が大いに災いしたことは確かであり、外見だけで彼女の動きを判断し、本当に正確な、細かな動き、反抗を普段の練習で、感じ得ず、低いレベルで自己満足していた感が強い。それに、彼女は馬であるということをもっと認識すべきであった。つい感情的になり、反抗を人間的に扱ってしまった。あまりにも馬の自由を奪い過ぎ、細かな、押え付けるような運動が多く、口に苦痛を与えていたのではなからうか。

デコは、この四月で離厩し、中標津の牧場へ行くこととなったが、最後のデコの調教者としては、正に失格してしまった。誠に、彼女には、悪いことをした。長い間御苦労さんと言いたい。



離厩馬の過去

北 勇 号

駒 中半血 鹿毛
昭和36年生

年 月 日	大 会	種 目	成 績
47 5/21	対酪農大学定期戦 (於 江別市井上愛馬クラブ)	小 障	3
8/12~16	北日本学生馬術大会 (於 帯畜大)	小 障	失
8/18~20	北海道馬術大会兼国体予選	小 障	6
48 5/20	対酪農大定期戦 (於 酪農大)	小 障	4
6/30~7/1	北海道馬術大会 (於 北大)	小 障	9
8/3~7	北日本学生馬術大会	小 障	6
9/1. 2	北海道馬術大会 (於 札幌競馬場)	中 障	失
10/7	道内親善馬術大会	B 障	5
49 5/3	半沢杯記念馬術大会 (於 北大)	小 障	失
6/2	対酪農学園大学定期戦	小 障	3 1'4 6
6/22. 23	道自馬馬術大会 (於 北大)	小 障	4 (-4)
8/1~5	北日本学生馬術大会 (於 岩大)	バルクール	4 (2落 -27.5)
8/24. 25	北海道馬術大会兼国体予選 (旭川競馬場)	複 合	6 (-10)
11/16~25	全日本学生三大馬術競技	複 合	10
51 5/3	太秦杯・半沢杯記念馬術大会	B 障	(障3落1反-42.75)
7/28~8/1	北日本学生馬術大会	中 障	3
8/7~8/9	北海道馬術大会兼国体予選	小 障	9
		婦人障	8 (-14)
		中 障	失 (場外)
		複 合	16 (-19.75)
		障 碍	25 (138.2.-37)
		障 碍	失
		小 碍	失
		B 碍	失
		婦人障	失

昭和51年9月離厩

恵庭市 すずらん乗馬クラブへ

北 武 号

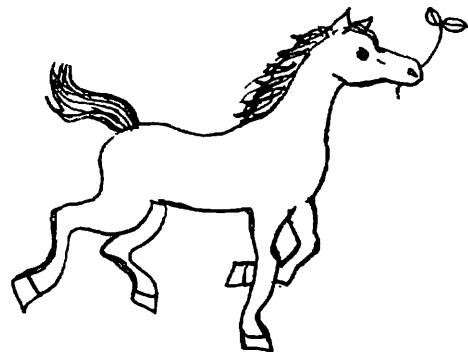
騎 トロッター 鹿毛
 昭和40年4月17日生
 北海道河東郡音更町産
 父 トロ ビージェー
 母 中半 コテンプル

年 月 日	大 会	種 目	成 績
45 5/17	対酪農大学定期戦	小 障	2
5/31	道自馬大会	小 障	2
8/23~ 26	北日本学生馬術大会 47年 再 入 厩	標準中障碍飛越 総 合	失 失
47 8/18~ 20	北海道馬術大会兼国体予選	中 障 小 障	1 2 4
48 5/5	半沢杯記念大会 (於 北大)	小 障 バルクール 中 障	1 失 失
5/20	対酪農大学定期戦 (於 酪農大)	小 障 複 合 中 障	1 1 1
8/3~7	北日本学生馬術大会 (於 帯畜大)	中 障 総 合	失 失
9/1~7	北海道馬術大会 (於 札幌)	複 合 中 障	5 失
49 5/3	半沢杯記念馬術大会 (於 北大)	中 障	失
5/11.12	東日本馬術大会 (於 馬事公苑)	中 障 バルクール	失 失
6/2	対酪農大定期戦	中 障 複 合	1 2
6/22~ 23	道自馬馬術大会 (於 北大)	中 障 複 合 六 段	1 4 1 0 1 1 0 落下
8/1~5	北日本学生馬術大会 (於 岩大)	B 障 碍 中 障 総 合	3 失 6 (全日学権利)

年月日	大会	種目	成績
8/24~ 25	北海道馬術大会兼国体予選 (旭川競馬場)	小 障 婦 人 障 中 複 合 障 複 六 段 障 綜 合 障	5 失 (ドラムバー) 失 (ドラムバー) 1 3 3 失 権 棄 権
11/16~25	全日本学生三大馬術競技	綜 合 障	失 権 棄 権
50 5/25	対酪農大学定期戦 (於 酪農大)	複 合 障	失 (第 8 水濼)
6/21. 22	北海道自馬馬術大会 (於 北大)	小 複 合 障	失 (第 8 水濼)
7/31~ 8/5	北日本学生馬術大会 (於 北里大)	小 複 合 障	失 (山形 3 段)
8/16~ 18	北海道馬術大会兼国体予選 (於 帯畜大)	綜 合	失 (第 6.3 拒止)
10/11. 12	道内親善馬術大会	関門飛越 小 障 中 障	2 (1 反坑) 5 (バ-ジュー-8) 5 (- 9)
51 5/3	太秦杯・半沢杯記念馬術大会 (於 北大)	複 合 障 小 障	4 3
7/11	北海道自馬馬術大会	初 心 者 障 碍 綜 合	失 失 (余力にて)
7/28~ 8/1	北日本学生馬術大会 (於 帯畜大)	中 障 綜 合 障 B 障	第一走行のみ 失 (耐久にて) 棄
8/7~9	北海道馬術大会兼国体予選 (於 帯畜大)	小 障 綜 合	失 失 (余力にて)
10/2. 3	北海道地区馬術大会 (於 岩見沢)	複 合 障 小 障	失 失

昭和 5 1 年 1 2 月 雜 既

島松 松崎さんへ



北 秀 号

牝 中半血 栗毛
 昭和40年6月2日生
 北大馬術部産
 父 中半 北彗
 母 中半 北涼

年 月 日	大 会	種 目	成 績
45 8/23~26	北日本学生馬術大会	標準中障障	5 位
11/ 2~10	全日本学生馬術大会	中障総合	出場
46 5/16	対酪農大定期戦 (於 北大)	複 合 中 障 小 障	3 位 2 位
7/4	北海道自馬大会 (於 札幌競馬場)	複 合	失
7/30~8/3	北日本学生馬術大会 (於 北星大学)	綜 合 標準中障	失 失
8/14~15	北海道馬術大会 (於 旭川近効公園特設馬場)	複 合 中 障	失
47 8/12~16	北日本学生馬術大会 (於 帯畜大)	中 障 綜 合	失 失 (余力にて)
8/18~20	北海道馬術大会兼国体予選 (於 帯畜大)	綜 合 中 障 小 障	失 (余力にて) 6 5
48 5/5	半沢杯記念馬術大会 (於 北大)	小 障 パルクール、ド シヤス 中 障	2 1 失
5/2	対酪農大定期戦 (於 酪農大)	小 障 複 合 中 障	失 失 失
6/30~ 7/1	北海道馬術大会 (於 北大)	複 合 小 障 中 障	失 失 棄権
8/3~7	北日本学生馬術大会 (於 帯畜大)	綜 合 B 障 碍 (新人。新馬障 害)	失 7

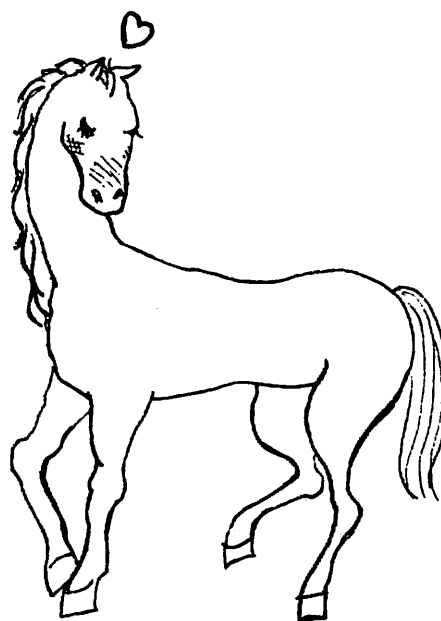
年 月 日	大 会	種 目	成 績
9/1~ 9/7	北海道馬術大会 (於 札幌競馬場)	小 障	失
10/7	道内親善馬術大会 (於 岩見沢)	小 障	失
49 5/3	半沢杯馬術大会 (於 北大)	小 障 バルクール、ド. シヤス	失 (第3 ハシゴ 3反)
6/2	対酪農学園大学定期戦	小 障	3 満点バラ - 4 ジュ
6/22. 23	道自馬馬術大会 (於 北大)	小 障 中 障	1 1 (1反 - 8.5) 失 (乾壕M字にて 3反)
8/1~5	北日本学生馬術大会 (於 岩大)	B 障 碍 総 合	失 失 (第1机にて)
8/24. 25	北海道馬術大会兼国体予選 (於 旭川競馬場)	小 障 複 合	失 3 1
10/13	道内親善馬術大会 (岩見沢競馬場)	関門飛越	失 (場外) 失 (場外)
10/13	道内親善馬術大会	中 障	失
50 5/4	半沢杯争奪馬術大会 (於 北大)	バルクール、ド. シヤス 小 碍	失 (第3. 4. 10拒止) 失 (第1・3反 抗)
5/22	対酪農大学定期戦 (於 酪農大)	複 合 小 障	失 (第2. 4. 10反抗) 失 (S前 1分反 抗)

年 月 日	大 会	種 目	成 績
6/21. 22	北海道自馬馬術大会 (於 北大)	複 合 小 障	失 (第 2 . 3 拒止) 失 (S 前 1 分 反抗)
7/31~ 8/5	北日本学生馬術大会 (於 北里大)	総 合	失 (余力最終にて)
8/16~18	北海道馬術大会兼国体予選 (於 帯畜大)	総 合	失 (余力にて)
10/11. 12	道内親善馬術大会 (於 岩見沢)	B 馬 場 社会入障碍 小 障	1 位 3 (バラージュ 満点)
51 5/3	太秦杯・半沢杯記念馬術大会	複 合	失
7/10	北海道自馬馬術大会	バルクール. ド. シヤス	棄
7/28~ 8/1	北日本学生馬術大会	総 合	失 (余力にて)
8/7~9	北海道馬術大会兼国体予選	小 障 総 合	失 失 (耐久にて)

年 月 日	大 会	種 目	成 績
10/2.3	北海道地区馬術大会 (於 岩見沢)	複 合 バルクール。ド。 ンヤス	失 失

昭和52年4月 離厩

中標津 竹下牧場へ



栄光の歳月に抱れつつ
北隼の魂よ
我々の心に永遠なれ



全日学 北隼号と佐野兄

北 隼 号

生年月日 昭和36年4月20日

有珠郡伊達町産

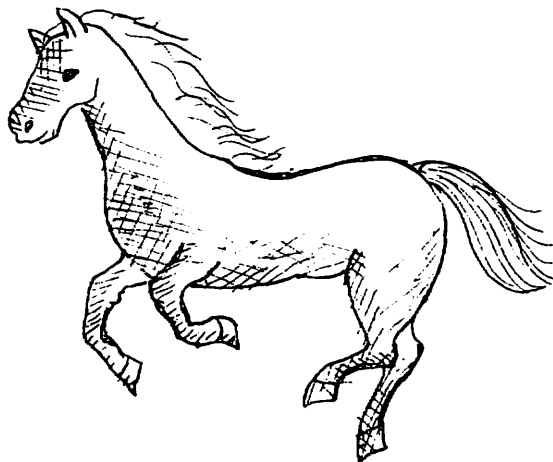
父 ガルガドール

母 ライジングマンナ

牡 サラ 鹿毛

昭和45年 4月	入厩		
47年 5月21日	対酪農大定期戦	中障碍	1位
		バルクール、ド. シヤス	4位
8月12~16日	第8回北日本学生馬術大会	中障碍	11位
		総合	7位
8月18~20日	北海道馬術大会	総合	7位
		中障碍	7位
11月14~20日	全日本学生三大競技会	中障碍	20位
		総合	20位
48年 5月 5日	半沢杯記念馬術大会	小障碍	失権
		バルクール、ド. シヤス	失権
		中障碍	2位
6月30~7月1日	北海道馬術大会	複合	7位
		中障碍	6位
8月3~7日	北日本学生馬術大会	中障碍	6位
		総合	6位
9月1~2日	北海道馬術大会	中障碍	6位
10月 7日	道内親善馬術大会		
11月	全日本学生三大馬術競技		
49年 5月 3日	第2回半沢杯馬術大会	中障碍	5位
5月11~12日	東日本馬術大会	中障碍	33位
6月 2日	対酪農大定期戦	中障碍	2位
		複合	4位
6月22~23日	第9回道自馬馬術大会	中障碍	15位
		複合	
8月 1~5日	北日本学生馬術大会	中障碍	7位
		総合	5位

	8月24～25日	第21回北海道馬術大会	中障碍	18位
	11月16～25日	全日本学生三大馬術競技	複合障碍	23位
昭和50年	5月25日	対酪農大定期戦	総合	失権
	6月21～22日	第10回北海道自馬馬術大会	中障碍	3位
	7月31～8月5日	第11回北日本学生馬術大会	中障碍	14位
51年	11月14～21日	第18回全日本学生馬術大会	六段	4位
	6月13日	対酪農大定期戦	中障碍	6位
	5月3日	第4回太秦杯・半沢杯記念馬術大会	中障碍	16位
	7月10～11日	第11回北海道自馬馬術大会	中障碍	2位
	7月28～8月1日	第11回北日本学生馬術大会	六段	失権
	8月7～9日	北海道体育大会(兼国体予選)	総合	8位
	11月13～21日	第19回全日本学生馬術大会	中障碍	16位
	12月20日	放馬し、他馬に蹴られてあご骨骨折	中障碍	9位
52年	1月23日	寒さと栄養失調のため倒れる	六段	6位
	1月31日	再び倒れる。午後3:30永眠。	大障碍B	6位
			中障碍	27位



北隼号の死亡に関して

三 好 功 悦

去る一月三十一日、昨年十二月の放馬事故による左顎の骨折で療養中の北隼号は、全部員の必死の看護の甲斐もなく栄養失調とおりからの厳しい寒波の中倒れ、再起の見込みもたらず、同日午後三時頃、皆の見守る中、薬殺致しました。

生前お世話になった、河田部長、岡田監督、小栗先輩はじめ諸先輩、小池先生、野田先生他、獣医外科の方々、自ら先頭に立って治療に八方手を尽して致だいた本城兄、昼夜を問わず看護にあたってくれた、佐野兄、笠間姉、島村兄、太田兄他、現役部員の方々には深く感謝すると共に、失礼ですがこの紙上をお借りしてお礼申し上げます。

そして、今回このような事故を人間のミスから引き起したという事実を深く反省し、二度とこのような不幸を繰り返してはならないという決意を固め、ここに北隼の最期の姿を書き残そうと思えます。年の瀬もおしまった十二月二十日、北隼号はバドックから放馬し、馬場内に放馬されていた牝馬を指して、埒をぶち壊して侵入しました。そこで下顎をけられた訳ですが、当番が発見した時は、馬場内で茫然と立ち尽くしていたという事で、現場を目撃した者は一人も居ませんでした。

僕が事故後初めて彼の姿を見たのは、その日の夜で彼の状態は、口を半開きにし、舌をタラリと出したまま、したたり落ちる唾液をすすることができず、もちろん飼付けも口にせず、唯、濁った瞳で

虚空を見つめているだけでした。口元に燕麦を持っていくと、僅かに反応を示しますが、咀嚼することはできず、口に入れた燕麦を全て唾液と共に流し出してしまおうといった状態でした。

翌日、さっそく獣医で診てもらいましたが診察の結果は骨折で全治二〜三ヶ月、その間如何に体力を維持させるかが最大の問題と言われ、早い内に処分した方が……ということ目の前が真暗らになって帰りました。

その日から死ぬまで、食べさせる事、飲ませることが最大の課題になりました。

まず飼付けについては、濃厚飼料のドブ飼から、咀嚼ができない彼のために、より消化の良いようにと、燕麦マッシュ、フスマ等を煮て「オカユ」にして与えました。濃厚飼料は「オカユ」で解決されたのですが、最後まで泣かされたのが粗飼料の摂取についてでした。乾草を押し切りで細かくすることから始めて、水に長時間うるかす、煮てハサミで切るといったことまでやってみました。どれも五十歩百歩で、結局最後までなるべく柔い乾草を出来るだけ細く切って水にうるかせ、「オカユ」に食べづらくない程度に混ぜて与え続けました。色々工夫した飼付けでしたが一週間から十日の間は、きれいに食べるといことは、一日の内の二食（夜飼いを与えていたので一日合計四食）だけという日が続きました。この頃、佐合さんから人参を大量に差し入れていただき、飼食をよくすることで頭が一杯だった僕には、天の助けとばかり、細くきざんだり、おろしたりして飼に混ぜてやりました。

水については、一日20〜40ℓは必要と聞かされていたのですが、飼に含まれる水以外は一切飲まないの、三日目から獣医でカテーテルを使って飲ませました。しかしこれも一回に5〜6ℓ程度で、

根本的な解決策が必要でした。その後一升ビンで飲ませる練習をしてみました。これも効果があまりなく、結局、飼の水を増すしかないということになりました。幸い、この頃一食のオカユの中に6〜7ℓの水が含まれているのが解り、これでなんとかなるだろうと思っていました。しかし、後に脱水症状で倒れたことを考えると、全然足りなかったわけです。

このようなことを一週間ほど続けている間、北隼の状況はいいますと、日記から引き出してみます。

十二月二十一日

外傷は多々あるが、すべて大したことなし。目に精気が感じられず、動作全て緩慢。しかし、悪い材料ばかりの中にも、痛みがいくらか柔いだが、舌、上顎の動きが多少活発になる。

外に出すと、すぐ震え出し、道路に出たがらず、車を極端に恐がる。

・水・粗飼料・安静……がりがりになってもいい。とにかく生きさせること。

十二月二十二日

舌が活発に動く。しまいに噛もうとする。柴沼兄より後肢、腰の沈下を指摘される。だいぶまいっている様子とのこと。

十二月二十三日

大分元気がでてきたように見えるがひいき目か？ただ、すぐ下がるはずの吸収熱が下がらないのが気がかり。

終日馬栓棒を噛む。舌の動きは活発だが、何もしていない時はやはり、口の中に舌をおさめず。唾液が少なくなってきたのは自分でなめるからか、枯渴からか心配。腫は僅かに元気有り。いななくことも有り。

飼食いがよくなってきた。後は水、

獣医へ向う時、踏み込み悪い。特に左後肢が接地する時に腰が沈む。車を恐がる。

十二月二十四日（今日より合宿）

舌を口の中におさめていた。

体温はかなり落ち着く。

上唇と舌で必死に噛もうとする。

十二月二十五日

外に出て歩きたがっている様子有り。

十二月二十六日

人參のすこし大きめのものを噛みくたくようになった。下の歯も使っている。元気あり。今日はじめて、寝ている姿を見る。

十二月二十七日

曳き馬十五分、よく歩く。踏み込み良し。

一週間ほどたつて彼の仕草はすべて好材料に受け取れました。それ程、日々元気になっていく様に思われたのです。

しかし、十二月二十八日、突然、体温が上がり、一時は四十度を越し、肺炎、気管支炎の疑いができました。さすがにあわてましたが、この熱もテラマイシンの注射によって大事に至らずに、一〜二日でおさまりました。

熱が下った頃から、天気の良い日の暖い時に、十五分ぐらい曳き馬をして、彼の気分転換をはかろうと思いました。実際彼も、外に出すと喜んで歩くように見え、非常にたのしく見えました。しかし、やはり二十分ぐらい歩かせると、疲労の色がだんだん見えてきました。また、馬服を脱がすと、肉の落ちようは隠すべくもなく、全く目を覆いたくなるように、やせコケていました。年明けての一

月八日、体重測定をしたところ、十一月二十八日から65Kgも体重が減っていました。

この体重の事を除けば、一月二十二日までには全く順調と思われしました。二、三十分の曳き馬中も、元氣よく歩くところから、飼食の量を、運動で解決できないかと考え始め、パドックに出す時期をうかがっていました。そして二十日から三日間、パドックに出したのですが、飼食の量にはさほど変化はありませんでした。

破綻は二十三日にやってきました。前日の夜飼いも元氣よく食べた彼が、朝倒れていたのです。当番が起こすと立つのですが、練習時間中に再び転倒、体温が下がり始めました。すぐに馬房のすきまに、毛布をはり、保温をよくし、ネワラでのマッサージを始めました。原因は、栄養失調と水不足、その日のうちにリングル6ℓ、ブドウ糖4ℓ、砂糖湯9ℓが与えられました。

一時はかなり下った体温も、皆で交代でやったネワラのマッサージが効いたのか夕方にはもちなおしました。そして、夜通しの看護の結果、ネワラ、乾草をムシャムシャ食べるようになりました。もっとも、一日何も食べてなかったのだから当然かも知れませんが。

その後、水の量を増やし、一日50ℓ60ℓ飲ませ続けました。また、馬房の中に本城兄のコタツをつるし、極力、温度を保つように努め、馬体には何枚も毛布を巻いてやりました。一日50ℓ60ℓの水による排尿は大変なもので、ネワラはひどく濡れ、馬房から尿が通路にあふれている状態でした。これほど、「冬」をうらんだ時はありません。

三日三晩ほど交代でマッサージを続け、その後は検温をしながら様子を見ていました。この頃、彼は四食ともきれいに食べたというより飲んでいたので、しよせん「カユッバラ」、乾草は相変ら

ず食べられませんでした。馬体は、見る影もなくやせ細り、尻、腹、背、肩の筋肉はほとんどなくなっていました。たぶん、400Kgを割っていたと思います。

このような状態で迎えた一月三十日朝、練習後、肛門にポッカーリと穴があきました。肛門筋弛緩はかなり未期的症状とのことで、早速、野田先生に診ていただいたところ、エースレーションを試し、馬房の濡れをなんとかしろということでした。そして野田先生の指導でその日の内に、ネワラをすべて外に出し、馬房を乾かし始めました。

夕方には、多少収縮し、なんとかもち直すと思っていました。

翌朝、9時20分頃、本格的に馬房を乾かす為に、馬房を移そうとした所、転倒しました。彼は立ち上がろうと首を大きく振りますが、後肢がついて来ず、顔を通路のあちこちにぶつけて、血だらけになりましたが、倒れたままでした。野田先生に診ていただいたところ、とにかく立たせろ、だめなら吊り上げろとのことでしたが、しかし、早いか遅いかの違いだということでした。

彼は時折、首を振り、四肢をばたつかせますが、全く空をかくといった状態で、痛ましきだけがつりました。

結局、午後三時頃、獣医の方に薬殺して致しました。

彼の亡骸は、岡田監督、小栗先輩はじめ、多くの人の見守る中、羊蹄の馬繋台の斜め後ろに土葬し、翌朝七時より葬儀を行いました。

一応、拙文ながら、彼の最期を書き終えましたが、蛇足ながら、もう少し書きたいと思えます。

まず、この事故は、彼の放馬が直接の原因ですが、それ以前に放馬しないような最善の策がとられていたか問題になります。具体的には、パドックの馬栓棒がしっかり固定されていたか、あるいはほ

つと以前の、ひもで馬栓棒を固定しなければならぬような状態にあるパドックを使用することにも問題があったと思います。パドック整備に関して、もちろん使用する馬のチーフ、サブチーフに責任はありますが、これは、それだけの問題でなく、全部員の責任になると思います。

彼の四十九日を過ぎた現在、もう一度「事故」について見直さなければなりません。前述のパドック整備にしろ、引き綱にしろ、あるいは、練習中の交馬、並馬にしろもっと慎重にならなければなりません。

馬同志だけでなく、馬と人、あるいは人の事故についても、厳しい態度にして厳し過ぎることはないでしょう。

このような、彼の残した教訓を忘れることがなければ、天国にいるボーズは、決して北大馬術部を見捨てることはないと思います。ボーズ、長い間本当にごくりうさん。

合掌

北隼号調教報告

佐野淳之

先ず、私の不甲斐無さから、連絡等に関して不行届ばかりで御心配をお掛けした西村兄、則近兄、本村兄はじめ諸兄に対して深くお詫び申し上げると共に、有形無形を問わず北隼の事を慈しんで下さった全ての方々、及び彼の父ガルガドル、母ライジングマンナに対し、慎んでこの拙文を拜げる。

被調教と言うべきか。彼に与えしもの少なく、得たるもの頗る多く、且つ深遠甚大であった。

白い原稿用紙に向うと、今まで見た彼の姿が浮んでは消え、浮んでは消え……………。

最初の一行も判らないままに言い訳が先走る。

＊

調教報告とは、私が現役の頃は、主としてそれまで乗ってこられた先輩方が練習した事や騎乗して感じられた事などを知る為の手段であり、自分が乗っていく上での、一つの指針となった。その意味に於て、後輩諸君が二度と乗ることの出来ない北隼について「書いて何になるんだ」と、亡き後の興奮冷めやらぬ内はそう思っていた。しかし、落ち着いてくると、調教報告の持つ重要な役割りが一つ一つ明らかになってきた。つまり、第一に、卒部された諸先輩方に対する本来の意味としての調教状態の報告として、次に、同じ北大の馬場で、人と馬が何を考え、何をやっていたのかという事どもを後輩達や後れて来た人々の為に、文章として残してゆく責任、最後に、一年の締め括りとしての自分の気持ちの整理及び為し得たこと或は未完成部分を明らかにすること、即ちある馬に関する自分自身に対する責任、以上三つの責任が課されていることを悟り、厳肅な心持ちで筆を下ろすことにする。それに「今まで乗ってくれた人達はきちんと書いてくれたのに、最後の一年がしょぼく書いていちゃあ俺の人生纏まりがつかないぢゃあないか。しっかりしてくれよ。」と言いたげな彼の囁きが、ポブラの梢を震わせて聞こえてくる様な気がする。

もう一つ「お前そんな事今頃判ったのか」と言われついでに、も

う最後ですから心のままを告白しておきます。私は、正直言って四年間馬術のみに全ての情熱をかけてきたとは言いがたい。馬術部以外（恵迪での生活他の活動など）に精神的比重を掛ける割合の多かった下級生の頃の私しか御存知でない先輩方の中には、あんな奴が天下の名馬に乗るなんて怪しからんと思われた方があるかと推察いたしますが、ある人には恵迪が私の青春の全てでしつと言い、又ある人には馬術が……とは一寸言えない事です。あらゆる事が私の中で信念づけられた、たった一つの精一杯の真実でありました。但し、上級生となるに従って、責任に対する自覚が脹らんでくると同時に、自分自身の気持ちとしても、馬術及び馬術部に関する理念なり行動なりを部員の一人として、或は主務や北準のチーフとして主体的に思索し実践してきたことは事実であります。四十年史に寄せられた三浦兄の文章を意気感ずると共に、少なくとも最後の一年その情熱の全てを注ぎ込むことが出来たことを幸せに思う次第であります。

少し余計な事を書き過ぎたような気もします。馬術部を全うされたOBの方ならそんな事百も承知の事だったのでしよう。

何はともあれ、私が北準と一緒に暮らすことが出来たということは大変光栄に感ずると共に、これからの私の人生に於々何時までも心の大きな支えとなってくれるであろうことを信じて疑いません。前置きが長くなってしまいました。北準の十七年間の短い一生を締め括る最後の調教報告として恥ずかしくない様、真摯にこの一年を振り返ってみることに致します。

この報告の性格上及び私の気持ちの上からも、この一年の事は漏らさず記載して置きたいと考えた為、読んで参考とするには必ずしも必要でない事までも、或は各各に就いて細かすぎると思われる程

諄諄と述べ過ぎてしまった嫌があり、余りにも龐大となり、加えて文章が羅列的且つ体裁の悪い結果となりましたことを予めお断わり申し上げ、冗長さを、諸兄の寛大さの名に於て御容赦頂きたく存じます。

願ふらくは私に僅かばかりの勇氣と才気の与えられんことを。又、中途で筆を絶たぬ様空からの叱咤あらむことを。

＊
ほくしゅん呼称ポーズ

牡 昭和三十六年四月二十日生

享年十七歳 生存日数五、七六四日弱

＊

三年目の冬に、来るべきシーズンへ向けての馬配を決め、私は北準に乗ることになった。

入部した頃の彼の記憶は、一番道路側のパドックと、奥にいる他の馬とは反対側つまり部室の正面の馬繋台（その頃は未だ四本柱に結わえ付けるだけだった）を独占し、又、数少ない牡馬の中でも取り分け牝馬にうるさい馬として特に印象が深かった。そして、去年の部報にも書いたが、以後、疾風と共に、最も付き合ひの長い馬となった。二年生の冬に陸上競技場の方へ外乗に行ったら、白いノーズクロスが雪で陰れた穴に落ちて動けなくなっているのを伝える為に駆歩で（後で考えるとよく引っかけられなかったものだ。必死だったんだなあと思う）馬場へ戻ったことがあったり、曳馬から帰って来て馬場の一番近い所に牝馬が寄っていたりすると盛んに興奮して下手をする引きずられることもあった。そんな事もあって彼には昔から生傷が絶えず、サブチーフとしては最も治療技術の上

達する馬として、又、薬品係としては最も頭の痛い馬だったと思う。思い出すことを並べていたら切りがないし、かと言って筆も遅れがちになってしまうので、実際に引き継いでからの事に移ってしまおうと思う。

＊

とにかく、拒止、逃拒を知らぬ馬として絶対の信頼を置いていたが、欠点としては、落下の多い事、回転（特に右）が悪いこと、それに私としては、つっぱしられやしまいかという危惧があった。そして全て結局は自分の技倆に係ってくることなので、北半の様に「人間（？）の出来た馬を調教する」というのは少々おこがましい気もしたが、それを行なうてゆくことは絶対的な命題として、同時に、自分の姿勢、拳、脚操作等の向上に努めた。つまり、技術の向上↓冷静かつ正確な飛越↓少ない落下ということであるが、騎手の技術の向上を持っているだけでは何もしないで、OB諸氏のアドバイスや書物を通して、先人の残した様々な調教法を学んで、馬の側にも努力をさせねばならない。

一つは西村兄に習った「通過したらすぐに停止をすること」（特に、最後に低い単一をつけたキャバレッチに於て）である。これは単に馬に冷静さを要求するというだけでなく、試合前などで騎手の方がつい先走りがちになるのを落ちつかせるという意味に於ても有効な手段である。正月を過ぎる頃までは障碍はほとんど飛ばず、キャバレッチや、極く低い障碍の二〜三步前から速歩を出し、越えたら停止するというような事以外では、比較的ゆったりとした輪乗りで左右の脚及び拳と、馬の動きとの関連を体得することに重点を置いた。後でも述べるが、他の馬と比べ、北半のよくやる頭を極端に下げた輪乗り（速歩）が必ずしもよくないことが判った。また、輪

乗りに於て、則近兄の言われる「交差するくらいの拳」と開き手綱を適宜使用して、冷静且つ正確な平場での運動の基礎を養い、又、鞭の使用は必要最少限にとどめ、このことが拳への注意をより促し、感覚をつかむ為に役立った。それと、例えば一年間の運動課題のスケジュール或は一日の運動内容の組み合わせ方など、大きな意味での練習課目の連関（後肢旋回、前肢旋回の輪乗りに於る端緒性、停止からの各歩度への正確な発進及びその逆の繰り返しによる馬の脚への注意高揚つまり脚に対する従順性の育成、輪乗り或は蛇乗りその他に於て手前を変換する際に、騎手が極端に、この言葉で言い過ぎなら明確に姿勢を変えてやることによる。合図としての扶助の重要性↓意志の疎通感など）を把握することは実際に調教をしていく上で忘れてはならぬことであるが、と同時に、狭義での運動と運動の切れ目に細かい神経を使わねば、それらをより有効に生かすことにはならない。具体的な一例を示すと、北半の場合は停止が落ちつかず、又後退もそれに加えて巻き込んだようになる傾向が見られたが、それを少しでも緩和しようと思ひ、脚の併用を習知し、左右の拳の強さを加減してみたり、手綱の緊張度を変えてみたりはしたが、その時の彼の精神状態を慮ると、停止なら停止、後退なら後退という状態に対する苛立ちであると思われたので、銜をはずさずに次の運動を連続的に課すことによつてその気持ちをしちらに向けさせることが最も有効な手段であると思つた。つまり、馬に、次に来る運動の指示に対する精神的準備をさせることにより、身体の方もそれを受け入れられる体制にせざるを得ないと言う事である。方法としては消極的であり、次の運動の方に気をとられていると本来の目的の方が好い加減なものになつてしまひそうな危惧はあつても、人間の方が冷静な懸引をすることにより結果的に停止や後退自体の向上

に繋った様に思う。「次の運動」というのは、条件反射にならない程度の常歩発進で充分だろう。停止、後退した事に対する「休め、愛撫」は声をかけてやることで振りかえた。

北隼の落下は前肢を当てるものが多かったが、一般的にも、前肢での落下が多く又特に拒止などによるよりも落下によって勝負が決まる馬に於ては、騎手がつい飛越の時に下をみてしまい、その結果かぶさることに成り、前軀に負担をかけてよけい落下を招く。通過した後ふりむかないということと共に、気をつけたい問題である。

試合に関する計画としては、春に行なわれる二つの試合は馬と人との調和を得る一つの過程として、何かをしてやろうと言うよりは寧ろ感覚し、成可く多くを得てやろうと考え、次に道自馬を踏み台にして、夏は主導権を握る。しかし馬体の状態としてはこの頃が最悪なので、少なくとも全日学への権利だけは何とでも取っておきたい。これは一つの宿命であると思った。また秋には絶好調になるという話を聞いていたので、人間の方も合わせ、人馬共ベストで望めると目論んでいた。しかし、年令の事も考えて、各試合に於る出場種目も最低に抑え、一日の練習時間も、やるべきことをやったら時間内であっても成可く早めに上げるように努めた。また総合競技に強い(但し調教審査は例外)という誇り高き北隼ではあったが、去年の十和田に於るステイブルでの信じられない程の困憊を見ていただけに、余程コンディションの良い場合以外は棄権せねばならぬと考えた。一時調教審査に於る点の悪さをなんとかしようと大勦の使用を考えたとあつたが、馬場だけに出るつもりはないし、総合も前述のような理由があつて断念した。また、下級生を乗せて小障などに出場するということも上記の事由及び技術的な点で諦めざるを得なかつた。

本村兄が取り入れられたマルタンガールに就ては、試合の時は非常に有効であると感じたが、絶対的によしとはせず、あくまでも補助的手段と見做し最終的には外しても乗り切れる自信をつけねばならないと思つた。また、拍車は初めのうちは着けないうで乗ろうと考えた。

以上の様な計画も、目論みと現実との乖離によって修正を余儀なくされたこともあつたが北隼の気質に負うて大きな困難にぶち当たつてどうしようもなくなくなるということは起らずに済んだ。

そして、一昨年の全日学障得飛越競技第二走行を本村兄が二落でゴールした時の素晴らしい飛越と騎乗ぶりが目に焼きついているので、常にそれを振り返つて一つの指針とした。

次に、各試合を中心に順を追つて一年間の経過を辿つてゆくことにする。

＊

先ず馬体の面から見ると、体重は一昨年までは四七〇〜五〇〇kg附近にあり、丸々とした西村兄の頃の写真と比べると可也筋肉が落ちてきたように感じる。怪我の方は伝説的になる程多かつた。牡馬なので時々無茶をやるということにも頭を悩まされたが、常に気を付けていなければならぬものとしては、前肢管内側の骨瘤、左後肢の交突、及び右後肢全体に時々起る腫れであつた。この三つは引き継ぐ前からあつたものだが、一番目の骨瘤は、運動量の違いもあると思うが、ほとんど熱も出ず、腫れも大きくならず心配せずに済んだ。交突に就てはこの一年最も悩まされた怪我であり、以前より酷くやるようになった。特に、パドックに放している時に、右足を左足の上へ乗せて傷を一層深めるといふものに致つては、いくら克蘭ポンを外して、又蹄鉄を端の短いものに取り換えてもらったところで、

正に焼け石に水といった有様であった。最後の右後肢の腫れについては、恐らく立ち腫れだったと思うが、その一本だけポーと腫れるので気になっていた。しかし運動に差し支へる程のものではなかった。

＊

前に述べた様に正月頃までは障碍練習は殆んどやらなかったが、感を養っておくためにもキャバレッツを用いた運動や、単一に竹箒やバケツを並べた小さい障碍を常歩、速歩で通過したりしていた。北車には必要のないものであったかも知れないが、少しは注意を払って、障碍をよく見ながら飛んでいると感じたことが取得だったように思う。徐々に、キャバレッツによる単一或は連続障碍も加えてゆき（勿論通過したら停止させる事も忘れずに）二、三月になると、踏み切りを置いた七、八十cmの障碍を繰り返し用いたり、則近兄が四十八年度の部報に書いておられたように障碍をいろいろと組み合わせてたりして踏み切りの安定と騎手の感覚習得に重点を置いた。疾風から替った頃は、踏み切りのタイミングが異なる為背を邪魔することもあったが、騎手としては随伴がしやすく且つその体得が早い連続障碍（粗雑に或は無神経に流れぬようにせねば意味がない）や比較的難しいが故に得ることも多い単一障碍を使用してゆく過程で、それを克服することが出来た。

前軀の負担軽減の為に鞍を心持ち後ろにやってみたり、飛越の時の前傾の程度を変えてみたりして、落下防止の足掛かりを色々と模索した。遊佐氏の著書の中の「障碍の尊重」という項に一頑丈な固定障碍を使用せよ、「手でバーを持って、飛ぶ瞬間に約10cm下げた障碍の高さを実際より高く見せるとよい」ことが書いてあったが、前者は、レンガ障碍などですら何回壊してでも平気な顔をしている

という前科を持つている北車には余り効果はなく、後者も試みてはみたが、障碍の高さに就ては可否を問わない北車にとってはほとんど期待は出来なかった。パラージュでは、本村兄も以前述べられていた様に、バーが足に当るのを気にしないどころか、特に鉄管を用いた場合は蹄だけをちょこんと当てて、却ってその音を楽しんでいくようにも感じられ、こちらが遊ばれている様で悔やしいのでやめた。

まあこの頃は、馬場に散らばせた低障碍を連続的に飛んでも落ちていていたし、回転、歩度の変換も満足すべき状態だったので、なんとい馬なんだろうと改めて見直し、悦に入っていた。ところが、三月中旬に初めて経路回りをやったときのことである。初めてという事で緊張していたらしく（馬よりも人が）、練習の時と同じように乗り、誘導の仕方でも学ぼうと考えていたが、2、3個飛んだ後直線になると頭を上げて突走り出し、回転の時に大きくふくらんで馬場の端から端までもっていかれてしまった。この時ほど前に乗っておられた3兄が手の届かぬ人のように思われたことはなかったし、自分の未熟さを身をもって知らされたことはなかった。いちばんいけないのは体をおこしていなかったことであり、手綱をひっぱりすぎたことだった。

深く反省をし、落下を防ぐというのもうまく誘導ができてからの話なので謙虚に自分の姿勢から直すことに努めた。他の練習内容としては、輪乗りの途中に小さな障碍を置き、なにげなく通過させること、そして輪乗りを開いていって直線に近づけ同じようなことをやった。又、二つの輪乗りの接点に障碍を置き、随時手前を換えて飛越した。これは馬に落ち着きをもたせるだけでなく、飛越後の体勢のたて直し、及び着地後の手前を定め、回転をよくすることに役

立った。経路回りはその後程度、形をかえて何回かやったが徐々に向上しているとはいえ、完全に自信をつけるところまではいかななかった。またスピードに馴れようとして駆歩で必要以上に追ったこともあったがこれは百害あって一利なしであった。西村兄が島根に行かれてしまいう前に乗っていたら「馬が障碍を意識しすぎている。障碍の飛びすぎではないか」と指摘され、その通りだったと思ひ、多少あせっていた自分を反省した。

＊

そしていよいよ彼との最初の試合である五月三日の太泰杯、半沢杯記念馬術大会となった。

20分程曳き馬をしてから出番の一時間程前に鞍をつけ、30分外乗する間に気をつける事及び経路を頭にたたき込むと同時に気を落ちつかせ、準備馬場では回転にとつて重要な外方の拳、脚の意識を確認するために後肢旋回をし、輪乗り（特に右手前）及び発進（常歩、速歩）停止等をやった。障碍は5、6回除々に高くして、手前を交互に変えて駆歩で通過して呼び出しを待った。次が出番になったとき前の人の走行を見ながら、経路回りの事が思ひ出され、あの二の舞をふむんじゃないか、いやあれを教訓として今日まで練習を重ねてきたんじゃないか、などが瞬時に頭をかすめ、かつて試合へ出たときの10倍も緊張した。ついでにここで告白しておくが、離れてみていると私という人間は緊張などするようには見えないかもしれないが、これを含めて以後三回身のふるえるような緊張を覚えたことがある。道自馬で失敗した後の北日本大会、及び全日学の第一走行前である。呼び出しがかかると意を決して常歩で（常に常歩で）入場する。マルタンあり、拍車なし鞭なしである。例の如く落ちつかずに斜め横歩のようになつたり、その場速歩のようにもなり、脚、

拳に対しては極めて敏感な反応を示す。まず速歩で障碍を2つ中に入れた輪乗りをし、駆歩を出す。ひっかける気配はないようだ。

スタート、1・2・3：スピードはかなり出ている。冷静に冷静に。6から7へ向う直線が北大の馬場としてはかなり長く、もっていかれ気味であることを感ずる。7を通過した後不整地に入り、気をとり直す。次の土塁を通過した後180度近く回転して9へ向う経路は以前の経路回りで失敗した時と同じコースである。経路回りでは勢いよませて強引にまげようとしたからもっていかれてしまったのであるから、今日は土塁を飛んだ後一回止めるような気持ちでやるうと決めていた。そして完全に、とは言えないまでも大きくもっていかれずに次の障碍を飛ぶことが出来、結局4落でゴールを切り3位に入った。終ってから、以前の経路回りの醜態を見られている市川さんに「心配してたよりよかったじゃないか、本村だって最初はあんなもんだったよ。」となくさめられ精神的、肉体的に脱力していた体に生気が戻ってきた。のもつかのま兄が2年内でなしえたことを一年間でなんとかせねばならぬという厳しい道標を想ひ、「いざ試合になったら落下なんかいくつしてもよいから何とかひっかけてくれずにゴールだけはしたい」と、レベルの低いことを考えてしまっていた自分に鞭打った次第。

＊

五月末にバドックからつづけて放馬をしてしまった。スターライトに肩を蹴られ大事には致らなかつたものの引き継いでからこの時まで一回もしなかつたのに悔やしかつた。昔から前科があるためか放馬というものを首をくくらねばならぬ程には思っていたのだから、後になって文字通り致命につながつたことを考えると恐ろしい。

6月初旬、大学祭期間中に鎌田さんが来礼され乗っていただく。

蹴られた所が治ったばかりで常歩しかできなかったが、脚でゆっくりと押し出し、開き手網にして素直にハミに出るようになることを示してくださった。このことは逆に馬がどれだけハミを意識しているかという確認にも使えるので後々まで運動のきれ間などにやってみた。しかしなんといてもこの時の北隼が、神経を集中させて鎌田さんの次の指示を緊張して待っているのを見るにつけ、上には上があるものだとしみじみ思った。またこの時少しも興奮を伴わない緊張というものがなげないことをやっているようにもみえる中に作り出されるものだといいことを、まざまざと知らされた。

＊

そして6月13日。対酪農大學戦である。以前は、他の理由もあつたであろうが、馬も人も興奮がつのらないうちに出場してしまおうということ僕が乗っていた頃は全て北大の中では一番に出場した。(唯一の例外は北日本の総合である。)この試合ではマルタンガールをつけないで出場した。馬体の方が完全ではなかったので、前の試合よりは軽いものとし、かわりに曳馬の時間をふやした。この時は騎手の方が比較的落ち着いて臨むことが出来たので、誘導もミスをせずに1落でゴールを切りドンホッパーに次いで2位になった。後で写真を見ると、手網を短く持ちすぎていることがわかる。また着地する前に次に回転する内方の手網を開いて回転を少しでもよくしようとした。ミーティングの折に、落下するのは踏切りが近過ぎた前肢が充分に上がる前にひっかけてしまふ、そしてその時は人間が下をみていることが多いと言われ、その後の練習時に気を配った。踏切りが近いことは西村兄からも言われていたことであり、脚が流れるものもこのせいだと伺った。そしてこれを矯正するために、キャパレットのあとに連続3つ前後の障障(単一或はオクサー)を置

き、それぞれを随時移動して、うさぎ飛び、一問歩、二問歩用と取り混ぜ、且つその距離を若干長めにし、これを通して常に適切な踏切りをするように練習した。そしてキャパレットを除き、適宜障障の前に横木を置き最後にはそれもと除いて通過した。特に、輪乗りから外れてそれを飛び、飛越後また輪乗りに戻るといふ方法は落ち着いた運動をするということと、内容が粗雑にならないという点で有益であった。(ただし手前を適当に換えることは必要)また連続障障を行うといふことは、人間の方としては、飛越前、中、後の拳の感覚を養うために非常に得るところが大きかった。

＊

これまでに述べた二つの試合は、北大の馬場で行なわれたものであつた。

＊

このことの重大性を七月十日より日高育成牧場で催された道自馬で思い知らされるのである。

練習は馬場と走路を使用した。走路へ出ると、速歩でもやろうとするものなら運命付けられた競走馬の血が興奮するの、すぐには駆歩を出した。馬場の練習では、比較的興奮は少なかったが、あり余る程の前進氣勢を示した。

それが却って「いい飛びをする」という感じを抱かせ、後で考えると、そのときのわずかな回転の悪さの意味を気付かせなくしていたのである。

北隼の気性は、練習時と北大での試合時の違いよりも、もっと大きな違いを北大での試合と他地での試合に露見させた。定期馬場に入ると、そわそわしてまともに止まることもせず、あつちへふらふらこつちへふらふらという有様であった。声をかけても全く気が付かない様であった。

そして決定的なことは、彼が馬場に入ることを拒否したことである。後日、本村兄に伺った時には、三重での全日学の時も初めは嫌がったし、そういうことも何回かあったと言われたが、自分としては初めてのことだったし、まさか北隼がそんなことをしようとは思っても思っていないので、正直言って動揺した。今まで北隼で全日学などに出場された先輩方が「実はボーズは気が小さいんだ。」と言っておられたことを、彼の男っぽさと豪快さしか見えなかった下級生の頃にはそんな事は信じられなかったが、この時には実感として感じられた。

草地の真ん中にあるような馬場なので距離感がつかみにくかったが、注意すべき箇所を覚えスタートする。一、二と飛越した後すぐにラチがあり、しかも厩舎の方向だったので曲がり切れず、ラチ止めをしてしまふ。そして次の障碍上で、馬の飛ぶ方向と騎手の方向が食い違い、左へ倒れそうになり右の蹬が脱けてバランスが取り戻せない。(本村兄も前にそんなことを経験したことがあると八ミリを見ながら話されたことがあった。)しかも、それを助長するかのようになり、右へ走る。落馬。そして縁、垂直の後、一番気を使っていた鋭角に右回転してのダブルである。垂直を飛んだ後歩度を落としたりたまでには、予想以上にうまくいったのだが、右に向けようとした途端ガーと持っていられる。巻乗り。完全にちぐはぐになってしまった。七、八、九、十と飛んで、又出口に向かい大まわりしすぎて十に極端に斜めに向かい、しかも歩度が落ちていたので、飛び越せずついにベルが鳴ってしまった。決して拒止などというものではない。自分の考えの甘さと未熟さ故に、北隼の名に泥を塗ってしまった。自分の横っ面を張り倒したい位悔しかった。と同時に、そこにおられたOB諸氏及び馬匹をやってくれた後輩初め現役の諸君に会わず顔を持たなかった。絶望・悔恨・自虐：世の中の全ての

悪魔的言葉が全身を駆け巡っていた。

午後六段へ出場したはずだが、どこで何をしたんだか全く覚えていない。ただ、厩舎に帰ってから、肉体的及び精神的に疲労困憊し、馬場へ戻る気力もなく、北隼の馬房の前に置いてあった寝ワラの上に身をうずめて、半ば放心状態で虚空を見つめていたという記憶だけが残っている。

次の日に小川の下流に見つけた大きな川へ、少し熱のあった後肢を冷やしがてら、曳馬に行く。柳類の林が育つその岸辺には、彼と私以外に人の気のかかったものは何一つなかった。最初は水に入るのを少しためらったような素振りを見せたが先に立って呼ぶと、ジャボジャボと入ってきた。初めは浅瀬にいたが、歩き廻っているうちに膝くらいまでつかり、さらに深瀬で流れの速い方に自ら何かに取り憑かれたかでもしたように、どんどん歩いていこうとしたが、自分もズボンや靴をはいたままだったし、足をとられそうになるので、引き止め、「ボーズどうしたんだよ。」と問うても、野生の眼差しで一蔑し、何も答えてくれなかった。それはまるで仔馬だった頃の川の思い出にひたろうとしたか或いは又、来るべき死への予感に対する指向のようでもあった。いや単に冷たい水の心地良さに魅かされただけなのかもしれない。

帰りの貨車積の時、北隼を先に入れ、後から北燕を入れたら、尻を寄せていって貨車の壁をいやというほど両脚で蹴飛ばした。北燕はもう一両の貨車へ入れることにして、なだめすかしたり逆に怒ったりしたが止めないので、北隼も一回外へ出し落ち着けてからもう一度入れたが、それでも何回か蹴り、やっとのことで慎めることが出来た。

貨車が動いている最中に、あばれ出して飛び出し滅茶苦茶になっ

たことが三年程前にはあつたが、入れる時にこのような状態になつたのは、まず無かつたと思ふ。

＊

お互い不信感の塊のようになって帰礼したが、案の定右後肢が腫れ、それを冷やしている時に、「外へ出ると馬も心細くなつて人間に頼つてくる。外乗や曳き馬の時に馬との信頼感が生まれるんだ。」という、私が一年生の冬に吉野兄に連れられ、北武に乗って石狩街道沿いの神社まで街乗に行った折に伺つた言葉をふと思ひ出した。

このことではっきりこの遠征での一番大きな間違いに気付いた。つまり、自分一人で何やかんや考えている間に、彼は知らない土地へ来て、又昔苦しんだことのある走路というものを、馬房の鉄格子から眺め、口に出すことの出来ない孤独と不安で一杯だったに違いない。何故そんなことに気付かなかつたんだらうか。激しい自責の念とポーズに対してすまないという気持ちで一杯になつた。

一昨年、疾風を連れて酪農大へ行った時に曳馬をしても初めは突然走り出したり、蹴つたりだったことも思ひ出し、見慣れぬ土地だから落ち着かないのならば、一時間でも二時間でも曳馬をして一緒に見て廻り、それでも駄目なら一日中でもそばにいてやるべきだったとつくづく思う。

＊

岡田監督に言われたように、回転の時に頭を下げて逃げる傾向があることを防ぐために、下げそうになつたら手綱をちょっと許して脚を使うことなど、実際に騎して頂いて拝見したが、自分でやると未熟なためあまりうまくゆかず、どつちつかずの状態だった。しかし太奏杯、半沢杯の頃から、真剣に頭の位置の問題を考え始め、岡

田さんに見ていただいたりしながら、やはり以前のは下げすぎであると思ふようになった。というのも輪乗りでは、拳などの操作で簡単に頭を下げるが、それが実際にハミを受けているのではなく、ある意味で衝から逃げている（重っている？）と考えられるからである。つまり、飛越前後及び輪乗り以外の運動に於る頭頭の位置を是として、下げすぎは見せかけであると割切るところから始めた。夏頃までには人馬共抵抗なくそれを習得し、結果として、回転の悪さや落下の防止に少しも役立つたと信じている。

＊

日高から帰って、そして10日もたたないうちに北日本、道大会へ向けての帯広遠征である。運動には支障のなかつたものの、まだ右後肢にやや熱が残っていたので、農場のわきの理想的な蹄洗場で帯広を去るまで、念の為冷やし続けた。東北大の連中も、そこに馬を連れてきて、正に井戸端会議的雰囲気であつた。よく整備された防風林の間をぬって農業高校の方へ曳き馬や外乗で出かけた。帯広へは今までに何回も来たことがあるせいか比較的落ちついており、最もこたえたのは（そんなにバテた様子は見せなかつたが）近來希に見る猛暑であつたにちがいない。試合が近づくにつれて不安が高まる。北隼は実績が示す通り、成績はどうあれ必ず帰ってくる馬である。それを先の試合で汚名を着せたのは自分の責任でしかない。西村兄から教えて四年連続全日本へ行かれたのに、ここで断ち切つてなるものか。また老いたとは言え、まだまだ北大の主戦力だし、これからのためにも、ここでくじけては何にもならぬ。他の事を考えようとしても水が低い方へ流れるように、そんなことが頭の中で渦を巻いて離れない。苦しまぎれに名古屋の本村兄へたわごとを認める。また、励ますつもりで言われたのだと思ふが、あるOBから、「

北隼は俺たちが現役の頃は、北大の花だったんだ。失権なんかしたら、承知せんぞ。」と真顔で言われ、シーズン前になら気をひきしめる為にプラスとなったであろうが、試合前に言われたため、ますます緊張し、かえって孤独感と重圧感にさいなまれる。この頃が私の三大緊張の二番目である。北隼の方は、やや暑さにまいているものの、外乗と、きめの細かい、かつ、運動量を抑えた練習により、調子は悪くない。そこへキリストの如く本村兄現わる。わざわざ名古屋から飛んで来てくれたのだ。氏曰く「道自馬の失権が相当こたえているようだけど、則近さんだって、俺だって、一度は失権したことがあるし、あの添田だって、二年生の時に、ひっかけて失権したのを覚えているだろう。とにかく、北隼は春と秋に調子がよくて、夏はどん底なんだから、全日学の権利さえとっておけばあとは何とでもなるさ。それに、この障碍なら、多分二走行ともゴールを切りさえすれば行けるだろうから、気楽にやれよ。」どんなに元気づけられたか言い表わすことは出来ない。全てふっきれたとは言えないが、とにかく絶対ゴールだけは切るぞと誓って、いよいよ本番となった。

名前が呼ばれ常歩で入場する。本村兄が、ハコ番長をやってくれている。横を通り過ぎる時、声には出さず、「ガンバレヨ」と目と唇で合図され、私はモゴモゴと言って頷く。スタート、無我夢中である。落下に気をとられている間もなく次々と通過する。傍目から見ると顔はひきつっていたかも知れないが、ひっかけてられずにゴール。安堵感あふれ、ラチにもたれて本村兄に手を振る。交替してから先人に頼らず、自分で何とかやっていかねばならぬと考えていた私だが、この時程、心強い精神的援助を受けたことはなかった。翌日の第二走行では、やや疲れが感じられ、前肢をひっかけて落下をふや

した。また乾燥で落下をし、バランスをくずして行きすぎてしまい、次の障碍前で巻乗りをとられ、前日より成績が悪かった。結局9位に甘んじ、全日学への権利は、この時点では絶対的なものとはならなかった。

中障の権利がとれたら、総合は棄権する予定であったが、そんな状態なので、馬体の調子も考慮に入れて出場することに決めた。しかし、夏の弱さを知っていたし、あのコースならゴールを切りさえすれば上位にはいれるという感じだったので、十和田での本村兄のように北隼と心中する覚悟でとばすことまでは思い切れず、速歩でやるつもりでとにかく無事にゴールだけは切ろうと決めた。調教番査は、今年は、個々の課目について北大の馬場で何回か練習したことはあったが、全部通しては回ったことがなかったので、前日に帯広の街の喫茶店で経路を覚え、重要ポイントを頭に入れた。

当日は、北大の中では出場順番を最後にしたので、前にやっている人を見ながらもう一度、経路を確認して装鞍した。準備馬場では、落ちつかせ、かつ歩様を大きくするために、キャバレッチを多く用いた。馬場は、二面に分けて使われた。第一馬場の方では、落ちついていて、アビュイエも、停止後退も結構うまく出来た。しかし、第二馬場へ入ると、運動が次第に大きくなるにつれて、頭が上がりがちに成り、駆歩で半円を三つ連らねた輪乗りでは大きく膨らんで、ポイントが大きすぎてしまうこともあったり、それに併って、騎手が姿勢の方にまで気が回らなくなって、手綱を短く持って馬の口を押さえ過ぎた嫌いがあった。後で話を聞くと、中間速歩と尋常速歩の区別をもっとはっきりやった方が良く、つまり、中間速歩を伸長速歩の一步手前のところ迄持ってゆくと良いと注意された。

そして、午後からのステイブルである。前練習を早めに切り上

げて、背番号を着けると、戦地に赴く兵士が日の丸の鉢巻を締める様を気分になる。

スタートボックスに入ると、帰ろうとして、振り返り、ボックスを倒したりして、興奮気味。秒読みが始まる。風が心地よく、これからの長く険しいコースへの前奏曲としてはそぐわない。スタートゆっくりとした駆歩。足場が悪い為もあって、疾ばすことはしないが、調子が出る迄は、もう少し駆歩の歩度を伸ばそうと思う。しかし、ステイブルに於る第一障碍の大切さと難かしさを感じる。北隼ですら、ビビっているらしく、思う程伸びない。乾草を並べた第一障碍、少し寄れて通過、第三障碍は、道路と並行して掘ってある水路越えだったが、誘導を誤り、一旦、減点区域をはみ出してしまい、改めて向け直す。着地点がぬかる人でいて、少し足をとられるが、倒れることも無く、無事通過。しばらくは、農道を通る直線コースである。伸びる、伸びる。まだ、こんなに元気が残っていたのかと、信じられない程である。下が堅いので、若干押さえめにはするが、彼の前進氣勢に、押され気味だった。四・五の後、ちよっと左に寄れて、草地の中を走る。防風林の枝が、顔に当る。競馬でもやっているかの様に、体を極端に倒して、避けながら走る。右へ回転して、タイヤを並べた障碍のところ畜大OBの坂口さんの顔が見える。通過して森へ入る。あっ、と気付いた時にはすでに遅く、右へ曲がる道を通り過ぎ、前方の林の際の草地へ突っ込む。自分の体なんかどうなってもいいというような突っ込み方だったが、さすがに、十六年生き抜いてきただけあって、すっくと立ち上がる。後は、森の中のくねくねした道を行くだけであるので、主に速歩で行く。最初から予定していたことではあるが、後で、人馬転でおじけづいて速歩にしたんだろうと言われ、一応弁解はするものの、走り

出してからのボーズの体調を冷静に判断できたならば、何も速歩で回らなくてもよかったような気が、後になってみるとする。いや、あの時、めちゃめちゃ走らなかつたからこそ、後の試合にガタが出てこなくて済んだんだとも思い直し、結果論的にはどう考えられようとも、その時の判断はあれで最善だったんだと自分に言い聞かせる。しかし、一諾に死んでもいいという様を本村兄のようにはな切れぬ自分の気持ちに対する淋しさが残る。その後は、過失なく通過して、森を出てから駆歩を出してゴール。覚悟していたもの、予想以上にタイムをオーバーして（実際、タイム以内に帰って来た馬は数える程だった。）大減点をくらってしまった。北隼は、汗びっしょりで疲れ切ってはいたが、去年程ではなく、思ったより元気がそうだった。水野兄の好きだった（失礼）アリナミン注射を後つぎの本城獣医にうってもらって、翌日の余力への鋭気を養う。

余力では、同じ馬場での三回目の走行だったので騎手の方も馬の方も慣れて落ちついて来て、疲れをカバーし、うまく回った。三落だった。

しかし、ステイブルを作った畜大の連中が驚いていた程、（他の馬には悪いが）予想外に失権や過失が少なく、十六位という散々たる結果であった。しかし、第一の懸念の北日本大会が全て終わった。あとは審判を待つのみである。最後のコンパで、この大会を終えて帰る東北大の連中と、全日学で会えることを期して、又この後同じ畜大の馬場で行なわれる北海道大会へ備える。

もう、畜大の合宿所、碧雲寮の風呂、農業高校の敷地、帯広の街の一部は、我家の庭のように知り尽くしていた。唯一の欠点は、うだるような暑さである。馬体管理に気を使うと同時に、自分の身の置き場にも困ったものだ。日中は日蔭で昼寝をしようものなら、汗

ぐっしょりで目が覚めるし、街へ冷房を求めに行ったり、学生会館のロビーで太陽に当てられた蛙の様にドラァップと伸び切って苦しんでいた。なお時々、先聲から差し入れられるスイカやジュースが冷やしてある時は、何故かみんな、精気が漂っている様に見えた。

北日本大会が終わると、2日間は馬休にし、涼しい森の方へ曳馬に行ったり、足を流水で冷やしたりして、体調の回復に努めた。一時、お互いに気まずい空気が漂っていたのが、人影もほとんどない様な林の中を二人っきりで走り抜けるというステイブルのお蔭もあって、この頃になると、精神的にも一体感を感じるようになり、乗っていく上でも、人間の方も冷静に判断・操作が出来るようになり、それに従って、馬の方も落ち着いて確実に飛ぶようになってきた。一つの大きな重荷になっていた大会を乗り切った開放感に加え、帯広での長い合宿のような遠征生活、北半の体力の回復、調子の向上など、全てが良い方向に働いていた時期であったような気がする。一週間程後に、同じ馬場で北海道馬術大会が催された。中障と六段にエントリーし、第一日は中障である。この時は少し張り気味であるかと思われる程、元気が良かった。

歩度の伸縮をあまりやらなかった為、雑な飛びとなってしまい、四落。それに、ゴチャバー（バーをたくさん使って色々と組んだもの）で落下したあと、右回転で出口の方に向かって大きく回ってしまい、一反抗を取られた。また、連続障碍にはある程度自信を持っていたのだが、踏み切りが合わなかったせい（障碍間で前傾し過ぎていたこともあるかも知れない）トリブルで二つも落下してしまっただけではなかった。結局六位だった。

翌日行なわれた六段飛越競技及び大障碍Bでは、終生忘れることのない歓喜を味わうことが出来た。一つは六段での百三十完飛

である。広く世間をみれば、百三十を完飛するぐらいの馬は五万と？いるでしょうが、北半の落下癖を知る者としては、驕り上からずにはいられませんでした。乗っていた方として、気持ち良かったと言いか、うまくいったと思っただけは、ハミ受けの感じが実によく伝わって来て、瞬時瞬時に於る緊張の度合、脚のタイミング、またそれらの結果としての歩度のコントロール及び踏み切りの位置が正確に行なえたことである。この競技は、出場番号が十五番だったので、馬場に入って、みんなで常歩の輪乗りをしている時に、前の人のやっているのを見て、スピードと間歩の感じをだいたい掴む。名前が呼ばれると、輪乗りを外れ、スタートライン付近で小さい速歩の輪乗りを二・三回やり、駆歩をして二周する。障碍に向けると歩度が伸びるので、手綱だけだと引っぱって落下につながると思ひ、腰を入れて適切な歩度に保つ。障碍間では、体を真直ぐ立てて、障碍上で急速に前傾しかもつぶれずに済んだ。この時の衝受けの感じと、一つ一つ大事に通過していった時の感じは、今でも生々しく覚えていられる。

ところが、二回目の百四十になると、馬が障碍を意識して、盛んに前へ出たがり、歩度が伸びがちになる。初めの二・三個は前回同様、押さえて行つたが、これでは引つ張り過ぎてやしないかという懸念が一瞬頭をかすめ、少し押さえを甘くしてしまつたが為、次の障碍から踏み切りが近くなり、前肢で引っかけ、百三十・百四十を落下してしまつた。後で出来上がった百四十を飛んでいる写真を見ると、確かに踏み切りが近過ぎ、前肢が十分引き上がらないうちバーが当たっているのが、歴然としている。また、騎手の方も、落下を意識し過ぎたとみえて、障碍上で下を見ており、被さる様になって前軀に負荷をかけているのがわかつた。馬の体力、気力、能

力共に、完飛できぬものではなかったと、今になってみれば思うので、その時の自分の判断の欠陥を痛感する。

前日の中障で、午後に行なわれる大障Bの権利が取れたので、主将と相談し、馬の調子もいいし、馬の体力も十分だし、消耗もしていないということで、また、やる意義有りとして、出場することにした。自分としても、高さは最高百四十であるが、今の調子なら十分に行けると考え、乗っけても、前述のように全然体力、能力への不安を感じなかった。実際、下見をしても、飛んでいても、北隼のお蔭で何も恐れるものはなかった。

結局、三落一反抗でゴール。一反抗は、中障の時と同じ様なケースで、全く面目なかったが、唯一の喜ぶべきことは、帯広へ来てから、四回の経路走行に於て必ず落下という目にあってはいたピラピラをきれいに飛んだことである。それも、今迄で一番高い百三十五センチであった。障碍の程度が大きくなると、北隼も全身を使って一生懸命飛ばうとしているのが乗っていて感じとれた。

さて、長かった帯広での日程が全て終了し、帰りの貸車積である。日高での貸車積の時にあばれたので今回は慎重かつ危険のないように注意したが、無事入ったと思ったのも束の間、しきりの為に吊つてある畳が尻に触れるとズズッと尻を寄せて以前の悪夢が再び蘇ってきた。両後肢で狂ったように後ろに蹴り上げる。悲しくなる。何も聞かずに2、3回蹴る。仕方なく一旦出そうとするが、パッと前へ出て僕は反対側に積んだ乾燥に押し上げられる。一瞬死ぬかと思っただけで彼の目を見ると結構穏やかで、声をかけてやってなんとか無事に外へ出す。落ち着いてから、今度は一歩一歩なだめすかしながら入れ、やっと治まった。雨が降っていた。

＊

翌日、桑園に到着し北大まで連らなって帰る。(いつも先頭だった。)破行が感じられて乗っていくのはつらかったが、車や人の通る街中では万一の場合があるとまずいので北大の南端についてから一緒に歩いて既合まで帰った。

次の日になると右後肢の破行がますますひどくなる様子なので獣医学部の家畜病院へ連れて行って小池先生に診察していただく、今日はレントゲンはとれないのではっきりとは言えないが、最悪の場合は骨折ということもありうる。とにかく、ブローで、できれば流水で冷やしなさいと言われ、目の前が真っ暗になり、さしあたって今自分たちが出来ることは冷やすことしかないと思い、朝夕は水道水で流水冷却、それ以外はブローで様子を見た。翌日の朝、レントゲンをとり、家畜病院の診察室で現像を待っている間の、北隼の顔を見上げる時の彼のいじらしさと、何もしてやることのできぬ我が身のわびしさよ。

結局骨折はまぬがれたものの、極度の腱鞘炎ということで曳馬はもとよりバドックへも出すことのできぬ散々たる日々が続いた。一週間程して破行は弱まってきたが、右後肢に負重出来ず、足を上げることも出来ないので前肢しか蹄洗出来なかったため、終日馬房に入っていたこともあって、蹄又腐乱気味になり、これが長いこと治らないので苦労した。九月にはいると右後肢腱鞘炎も治まってきて曳馬が出来るようになる。待ちわびたように大好きなクローバーを無心に喰む。乗れるようになるのはまだ先だが、毎日看病してきた苦労が吹き飛んでしまうのはこんな時である。そして、この頃、全日学への出場権の連絡があり、北隼も連続5回目の出場が決定した。この時の安堵感と歓喜は口に表わすことが出来ない。(しかし、他の地区と比較して北日本地区は全日学の枠が少なすぎるように感じ

られるがなんとかならないものだろうか。)

しかし、無慈悲にもいやなことは続くものである。パドックで、良くなってきた右後肢で左後肢を踏み蹄冠部を深く傷つけてしまった。左後肢の交突は例年のことで治療には慣れているが、本当に泣きつらに蜂という感じで、今日はかなりひどく、これを怪我の多い北軍にとっては毎年何CCもうっているマイシリンを一日10CCで四日続ける。また、ブローを赤チンとリパノールにかえ、包帯を本村兄伝受の方法で巻く。

家畜病院へ通院することが何回もあったが、九月中旬に腰骨の感じなどからCa不足と言われ、Ca注射を何回か打ってもらったこともあった。

治療に追われた毎日で一ヶ月以上も馬休が続き、周囲からは「もうだめじゃないのか。」とか「出すことも考えに入れといて下さい。」などと言われ、それらに反駁や言い訳や正当性を主張し、一方では心の中でくやしさに泣きながら「バカヤロー。」と呼びつつ、こちらまで言われるようになった栄光の北軍に対し、すまないという気持ちと、「今にみてる。」という気持ちとが交錯し、サブチーフの諸君と共に来るべき全日学へ向けて黙々と全快の為に励んだ。本村兄の時だって何回そういうことがあったか知れないが、北軍はことごとく不死鳥のように蘇ってきたのだから。しかし、乗れなくなったとしても、北軍は名督部馬とでもして、北大馬術部と一緒に暮らして隠居生活をするに値する馬であるというのは、彼の偉大さを身をもって感ずることの出来た人々のみが発することの出来る空しいつぶやきでしかなかったのだろうか。クラブに置けない様になつたら俺達でひきとって養ってやろうやと本村兄と夢のようなことを語りあっていたことも結局絶対不可能なまま終ってしまった。

*

十月に入ってからようやく乗れるようになった。交突の上をまた踏んだりして、馬休しなければならぬ日もあって不安は残ったが、飼も増やし、総体的に回復の兆し、著しく、また、幸い北軍は馬休が続いたからといって簡単に調教のくずれするような馬ではなかった。

十一月になると伝説通り北軍は復活してくれた。傷は残っていたが、破行もなく、体重も五百kgを越し、体調・運動の状態も本村兄の伝え通り秋の絶好調期に突入していった。

人間の方も、馬休の続いた中で冷静になって過去の失敗と成功を振り返り、馬術部生活四年間の総決算へ向けての技術的、精神的な考えを固めることが出来たのが不幸中の幸いと言えるかも知れない。

*

スターライト・ドンホッパーは、全日で既に東京に行っているのに、鷲田さんのトラックで天龍山・ハイエイムと共に全日学に向けて出発した。今度こそ事故の起らないようにと、小野さんらのアドバイスもあって沈静剤を打ち(実際は積込みが遅れたので効果は切れていたのかも知れないが)且つ、北軍の場所は比較的広くとり、後と横には乾草を積んで万全を期し、無事東京馬事公苑に着くことが出来た。

馬事公苑は五回目の北軍であったが今回は覆い馬場の南に新築したばかりの厩舎であった。彼は北海道にいる時は牝馬を見ると盛んに興奮するが、馬事公苑に来ると人が変わったようにおとなしくなる。内弁慶といふかなんといふか可笑しくもなり、愛惜しくもなる。

後肢に若干熱を持つ事があったので毎日水道で冷しながらも馬事公苑での生活に早く慣れようと人馬共大いに歩き回って肉体的及び

精神的に高揚していった。

今までの経過及び後に述べる成績を見てどうか笑わないで下さい。実は障碍飛越競技で優勝をねらっていたのです。

というのも北隼を功勞馬にしてやりたかったからなのです。功勞馬の資格が二十才以上で十年以上部馬として活躍したものの或いは全国的な大会で優勝したことのあるものというのを聞いていたので、功勞馬などというものを意識してやる奴があるかと言われるかも知れませんが、馬体の状況からいって牡馬でもあるし、前者の資格に達する見込みはあまりない事、絶対ゴールは切るがなかなか勝てないので、こちらへんで花を咲かせてやりたいと思ったのです。

後にも記しますが、この頃の北隼は私から見れば、後者の資格を得ることの可能な状態にあったと信じています。只騎手としての自分の技術的・精神的弱さにより、御承知のように、残念ながらそれを達成することは出来ませんでした。

さて準備運動は、はやる気持ちを抑え、比較的軽いものとし、北大の馬場でやった事以外の事はやらなかった。又、股巻はこの一年ステイブルを除いてつけない事にした。パラージュの事については前述したが、同様の意味で障碍に当てるのは馬の体力や技術によるものではなくて、障碍というものの尊重と潔癖さに欠けるものと見做し、当てる痛いなら当てるなという、今考えて見れば、肉を切らせて骨を切る或いは失敗すれば骨も切られるというような、少し無謀な賭を挑んだ訳である。

競技は芝馬場で行われるので、前肢は小さいクランポンをはめ、後肢は、来る前に札幌で太田さんにつけてもらった裏がギザギザの蹄鉄である。

第一走行当日になると、さすがに緊張してしまふ。恐らくイライ

ラして馬匹諸君に嫌な思いをさせた事もあっただろうが、そこまで気が回らなかつた。反対にいろいろ気を使ってもらって大変喜しかった思い出はある。私は過去に経路違反をした覚えはないが、こころもしやったりなんかしたらそれこそ死んでも死にきれないので、絶対に忘れないように何回も復習し、実際の障碍を見て確かめた。待機馬場へ行ってからも落ち付かず小便したくなったりそわそわしたりしながら、準備運動を済ませた。馬もやはり興奮気味で、良く飛ぶが大きく回られすぎる嫌もあった。

出場番号二十八北大ではトップである。

名前が呼ばれ前の人馬と入れかわりに芝馬場に入る。いつものようにゆっくりと常歩で入場し（さすがに広いので中央に出るまでに時間がすごく経過したように感ぜられた。）審判席の方々に向かって敬礼。千葉さんの姿が見える。大きな左手前の速歩の輪乗りをし、駆足にしてスタート。第一障碍通過、二通過三、四、五……、六を飛んでから、大きく右へ回り七へ向おうとした時に埒の所まで行ってしまい、巻き乗りをして一反抗を取られてしまった。そして、第七レンガ、第八トリブル、ここまではすべて落下なしで通過した。

（後で聞いた事だが、周りで見ていた連中は、まさかあの北隼がこんなに落さないなんて思っていなかったと驚いていたそうだが、その時何が何やらわからなかつた。）右へ大きく回って、入口と反対側の埒ぞいに走り右へ百二十度ほど回転して第九の大理石障碍へ向かうとしたところ、張り裂けるような悪夢がおこつた。第九障碍に向うには、一旦出口の方へ向ける事になるが、その時強引にそちらへ持っていかれてしまった。そこであわてて衝を引張って戻そうとしたのが却ってそれを助長してしまつて「斜に手前を変え」じゃないが馬場を突走ってしまい全く情けない（当人よりもその時見ていた

北大関係者の人々の方がよっぽど惜げなく感じたと思う。なにせ本人は必死で周りの事なんか気にしている余欲なんぞこれっぽっちもなかったのですから。状態になってしまった。

何とか体勢を立て直し、埒ぞいにゆっくりとした駆歩で再び向う。

心配そうに見ている部員の姿が目に入って気を取り戻す。九落下、十、十一、十二通過、十三ダブルAのピラピラ落下、B通過、十四最終通過、ゴール。全く精根尽き果てた。経路の長い事、余計な事をやった事、北隼の元気の良い事、とにかく第一走行が終ってホッとしたが、自分の悪い所が皆出てしまった感じだった。

そして減点のアナウンスがあり、もう自分に対して無性に腹が立った。後で、応援に来てくれていた水野兄、柴沼兄、平野兄や、現役部員らのいる観客席に行き、不肖を詫びると同時にいろいろと注意をしてもらった。

やはり一番いけなかったのは、萎縮してしまい体が起きていなかった事であった。その他、誘導の仕方など細かい点についても意見を述べてもらったが、自分としても翌日の第二走行は、最後の試合として、悔いのないよう、あらゆる事を考慮に入れてベストを尽くそうと意を決した。

第一走行と第二走行で違った点と言えば、馬及び人が少しはリラックスしてきた事を除いても、声をかけて馬を、延いては自分を落ち着かせた事。強引に曲げようとした時に口を開いて銜がはずれたのがわかったので、北大の馬場でも何回か使った事のある独逸鼻革を付けて、口を開かせないようにした事。今までの短い拍車では十分役割を果たせないと感じたので桑田兄に長目の棒拍を借りてそれを付ける事にしたことである。

そしていよいよ僕としては馬術部最後の、結果的に見れば北隼号

にとっても最後の試合、第二走行の日を迎えた。

準備馬場でマルタンガールを一穴つめ待機馬場へ向う。

第二走行の出場番号は十六番であった。名前が呼ばれ、昨日と同じ様に常歩で入場し敬礼する。

騎手の落ちつきが全てにプラスの影響を与え、自分にとって馬にとって、最も良い面を引き出してくれた。「ポーズ。いいか、いくぞ。」と声をかけ、ぐるっと回ってスタート。

1通過、2通過……通過するたびに声をかけてやる。声をかけてやれるという事が騎手の冷静さを測かるひとつの指針だとすれば、ゴールして出口を出るまで冷静だったと言う事が出来る。6を通過して7へ向う。昨日、反抗されたところだ。昨日と違う何か(いろいろな点で違っているが、恐らく体を起しておさえたという事が、最も大きな要因だった様に思う)働いて、何の支障もなく7へ向い通過。8トリプル通過。愈々正念場の9へ向う。埒ぞいに、歩度を落して声をかけながら近づく。右へ回転。出口へ向くが、体をいっばいに起こして、外方の脚、こぶしで必死におさえる。勝った。9通過。いや前肢でチョコンと当てる落下。今までは、歩度は思い通りに来ていたんだが、9から10にかけての直線で伸びてしまい、ちょっとあせるが、一步ゆずって10通過。左回転で元の歩度にもどし、11トラケーン通過。12水壕通過。13ダブル。昨日はAのピラピラを落したが、今日は両方とも無過失。そして、ついに最終障碍を通過して、一落でゴールを切る。

昨日の走行は、今までで、成績としても最低で、内容もひどかったのに比べ、今日の走行は、最も良い成績であり、内容も最高であった。つまり、どたん場になって、將に天国と地獄、双方を味わったことになる。終ってみると、第一走行の失敗が口惜しくならな

かった。後に出場するドン・ホッパーとスターライトに団体入賞の望みをたくしたが、第一走行満点のドン・ホッパーが3落、2落のスターライトが1落と、念願の入賞はならず、昨年と同じ四位に止まってしまった。

最後の走行だけみれば、今年はどうしても抜くことの出来なかつたドン・ホッパーには勝つ、スターライトとはタイで終れる事が出来たと叫びつつも、それとは裏返ししの罪の意識が空しく自分にふりかかって来ることから、逃れることは出来ない。もし自分が第一走行に於て、少しでもうまく乗っていたら、北隼もそんなに疲れさせずに済んだであろうし、また団体二位になる事も、不可能なことではなかつたと思うと、桑田君、長屋君には、もちろん全ての現役の諸君、OBの諸兄に対しても、申し分けないという気持でいっぱいである。札幌に帰ってきてからも、その事を思い出すたびに、眠れず、暗闇をみつめたまま、或るいはふとんに顔をうずめたまま、自分の意志と無関係に頭の中でドラマが演じられ、又東京での自分の気持そのままを再体験し、当時と同じ心境が現在の自分の心の中でうずまき、大きな圧迫で全身を包んでしまうことが何回もあった。今この文章を書いている筆も、いやおうなしに滞りがちになってしまう。特に彼が逝ってからは、天国への手みやげとして、彼自身はそんなものいらんよと言うかもしれないが、優賞カップのひとつ、リポンの一本でも持たせてやりたかつた、悔む事しきりである。

第三走行まであつたなら、絶対満点で帰ってこれたのに、と思うのは誰でも同じことであるとはしても、最後の最後になって、北隼と一体となって運動する自信が得られたのは、何とも学生馬術四年間の皮肉としか言いようがない。大会が終わっても、札幌へ帰る気はしなかつた。初めのうちは部員も何人か残っていたので、一緒に

出かけたが、家へ呼んできたりして、気が狂いそうになるのがすぐわれたが、やがてみんな帰ってしまつたと、さびしさとおつれきの狭間で、形而上学的なことを考えてみたり、馬術とくつつけて形而上学的馬術論を書く構想をねつたりしていた。しかし案の定、中学や高校時代の友達と飲みに行つたりしているうちに、アルコール漬けになり、(なんせ札幌へ帰るまで2週間ぐらい、飲まない日はなかつたくらいですから) 全て過ぎ去つた遺物として置きさられてしまつた。

＊

ようやく気持ちが落ちついて札幌へ帰ると、北隼は元気でやっているし、既にクラブは来シーズンへ向けて始動していた。

冬場に向けての体験と注意を話したり、傷の様子をみたりする程度で、当番も手入れもやらなくてよくなったので、教養部に用のある時(学部へ行つても週一回ぐらいは、懐しの校舎で勉強したいと思つ時もあるでしよう)、手入れをたのまれた時、或いはひきつぎする人の為に練習に来た時ぐらいしか、顔を出さなかつた。何せ、授業の方と御無状していたので、その挨拶巡りや、たまっているレポートの処理でいそがしくて。

そして、今までサブチーフとして頑張ってくれた三好君が、次に乗ることになつた。

魔の日の二日前の土曜日。僕が今までやって来たこと、考えて来たことの反省の上に立つて、来シーズンこそ花を咲かせてやるべく、いろいろな方法や注意について、乗りながら示した。又、下りてからも話した。実際、結果的にみても、調教方法に間違いはなかつたと信じるし、後は騎手の方がいかに会得し冷静に乗れるか、と言う問題になるので、自分の失敗したところを、うまく彼が克服してく

れさえすれば、栄光は夢ではないと信じていた。全日学の時の8ミリが残念ながら、写っていなかったので、何とも言えないが、第一走行と第二走行の差をみれば、自ずと何が良いのか、何が悪いのかが明確に露見していたはずである。

そして一日前。十二月十九日(日曜)は、三好君が実習で札幌不在となるので、僕が乗って外乗を中心に軽い運動をした。(この時、島村君の写してくれた写真が、ボーズの最後の元氣な姿となっていました。)

＊

事件の翌日に寮へ電話があり、顔を骨折したとの事とんで行った。

飯も食えずに口をもごもごさせて不甲斐なさそうな目でこちらを見るのは、全く不憫でならなかった。畜生、ボーズなんて人間から見ても男らしくて偉大だと思いのに、振った奴はどこの牝馬だ！と怒ってみても、所詮こういふ場合は男の方が悪いもの。そしてそれを管理する人間の責任であることは否めない。又、この事も、馬という生き物を扱うことにへたに慣れてしまったクラブ全体の雰囲気も作用しているものなのであろう。今まで放馬した事があっても致死までには至らなかったのが幸いと言えば幸いだっただけのことであるので、「慣れる」ことによる危険不感症(特に、馬休の日の当番がのんびりしてしまうのは判るが)に対する警鐘として、なんとかしてこの教訓を無駄にはしたくないと思う。

当分流動食しか食べられず、それも多くは望めなかったののみる痩せ細っていった。しかし、次第にアゴが始っていくに従って量も多く食べられるようになり、小さく切ったニンジンくらいなら咀嚼出来るまでになった。皆で交替で徹夜の看病を続けていたが、

乗り切ったように思えたし、その後、日光に当てさせる為にパドックへ出したり短時間の曳馬をすることも許されたので、このまま回復するかの様に感じられた。

ところが一月三十一日、再び電話が鳴る「ボーズが倒れた」と。ただ横になっているボーズの口元に餌を持って行ってやると、強烈な生への執着の為か無心に口に入れて噛む。そして今までボーズに何本となく打ってきた注射の全てがおまえの生を賃定する薬であったのに、最後の一本だけがそれに反する薬で満たされていたなんて、少しは気付いたんだらうか。次第に簿れてゆく意識は何を映し出していたのか。私はその全てに嫉妬し、又、手を差し伸べてやりたいと思う。

なんと呆気ない死の訪れだろう。私たちはおそらく、彼が死ぬのならば試合場に於て障碍をバタバタとなぎ倒してゴールした直後を想像していたに違いない。しかし平静な時にやって来たということとは、逆説的に、障碍のプロに徹して生を全うしたとも言える。埋葬の時におまえに言ったが、我々から見れば不憫でしゅうがなく思えるかもしれないが、大勢の人々に見守られて逝けるなんて幸せと考へなければならぬ。我々にとって死を目前にしなくてもすむ他所への離厩という事は、馬の方にとってみれば必ずしも幸せになる保障はないのだから。

私たちはおまえの死を絶対に無駄にしない事を誓う。だからいつまでも私達の心の中に安心して住んでいてほしい。新しい顔が入って来たら、そちらにも火を燈して下さい。そして全ての馬たちの為に北隼の根性の乗り移らむことを

＊

原稿を依頼されてからペンをとるも、ボケーッと想い出に浸っていたり、写真やプログラムや馬体管理表などを見ながら一人で笑ったり涙を流したりしている時間の方が何倍も長かった。また前書きにも書いたことであるが、何のために書いているのかと自問してみたり、突然書けなくなって何日も机の上にはぼっておいたり、絶筆しかかったこともあった。また書く時の精神の状態（それはつまり当時の精神の状態とつながっている訳だが）によって文体やら言葉づかいやらに差異がみられ、読みづらい箇所があるかも知れないが、御容赦願いたい。そんな訳で部報の発行が遅れたのも全て私の責任であります。ここに深くお詫び申し上げます。

また、セントオールとして3才の夏、S 38年7月21日に中央競馬の札幌競馬場にデビューし、新馬戦千mを1分2秒9で優勝し、続いて北海道三歳ステークスに快勝したのを皮切りに、その年1着2回2着1回3着3回着外1回という成績を収め（太田君調べ）、後に乗馬となり、北隼として北大の栄光への脱出の点火剤として活躍したボーズがその生を全うする最後の年をどのように通したかという事を詳細に（自分の試合中心に述べてしまったが）記録しておきたいという我儘の為に文章が余りにも冗長になってしまったことをお許し願いたいと思う。

*

生をさずけてくれた神に、北隼は下界でどこまで成長したかと問われれば、最も信頼されるべき個体となり、競技に於いても、少なくとも学生の間では全日本の一流どころと同じレベルで戦えるようになったと胸をはって言わしむることができる。尤も、落下が少なくなつた、特にレンガなどにぶち当たって壊すことがなくなつたと言つても、人間の方が調教の成果だなどと独りよがりしているだけで、

今ごろあの世では、「なにを言っておるか。この年になってガキみたいにならぬ茶をするのもあまりみっともないものではないからな。ことに障碍に突っ込んでケガでもしたとなると、新しい馬たちに示しがつかないし、自分の体は自分で大切にしなければならぬ」と思つて慎重さが少しは出てきただけなのに。」とつぶやいているような気もする。そう言えば最近是一年生の部班で一人だけひっかけ馬場を走り回るといふこともなくなつた。（49年度入部生以前の新人生なら経験ある方も多いと思われませんが）

そろそろ北隼も「止まる」んじゃないかなどささやかれつつも、最後まで我々の期待を裏切らないで北大馬術部のために頑張つてくれた。最後の裏切りは「復活」しなかつたことであるが、あんなに衰弱した体をさらすことは自尊心の強い北隼ならば、敢えて（もし手段をもっていたとすれば）自ら命を断つたとも考えられる。

葬式の際に、三好君が一言もらした言葉「ボウズゴクロウサン」で全てが言い尽されているような気がする。喩えは悪いが、私に示した時の感慨と似ているんじゃないかと憶測する。私は彼の想い出と共に去ることができる。しかし三好君をはじめ、現役部員の人々は、その死を乗り越えて生長しなければならぬ宿命を負つてしまった。しかしどんな形ではあれ、（月並みな言葉ではあるが）彼の死に報いるべく努力して欲しいと願う。

未熟な私が北隼の最後の調教報告を書くことに対し、誠なる光栄を感じると共に、北隼に代つて、彼と暖かく接してくれた方々に対し、心から御礼申し上げます。

何か云ひたかりつらむ

西村 正二郎

昨年の暮れに、長屋君の手紙で北隼のケガを知った。あの人にケガはつきものだから、まさか死のうなどとは思ひもしない。今年に入つて2月始め、朝練習に行くとき下宿のオバアサンから、「昨晚電話があつて、アンタが学生の時騎つてた馬が死んだ。」と聞かされた。3、4日経つて南部君に電話したら、間違いなく北隼が死んだと云う。あの上に瘦せさらばえて死んでいったかと思つたと不憫でならない。しかし、彼の死を目のあたりにした現役部員はもつと辛かつたろう。考えようによつては、北隼の死はあれでよかつたのかもしれない。盛りを過ぎてまで競馬に走らされ、もう障碍馬としての命も過ぎた、何処でもなく果てるより、見とる人のいる場所で死んでよかつたと思ふ。しかし、もとより北隼の気持ちはわからぬ。人は死の間際、幼時期からの全ての記憶が脳裡に去来すると云う。彼にも、舟馬の傍らで草を喰む幼い日の光景は甦入つただろう。何れ云ひたかつたであらう。

始めて彼を見たのは私が1年目のとき、昭和44年の11月、全日学（加藤公敏兄）に出場した北隼を小倉から連れて帰つた日だつた。ランランとした眼な差しとそれにかわる長い前髪を覚えてゐる。入厩したのはその年の10月。札幌乗馬クラブから……その悍性の強さが手におえないらしく……同好会の馬として、岡田監督が一升瓶と交換して来られたとか。競走馬時代、最後の追い込みになると鼻血を流し乍ら走つた、と言つたのもこの頃聞いた話だ。彼の名は榊井さ

んのかで、慶応大学に慶隼と云う馬がいたけど北隼と云うのはどうかと云うことで、部員総会の多数決で決まつた。

昭和45年の春から夏にかけて、彼は小栗さんと一諸に日高の北大牧場にいた。小栗さんは1本か2本のバーだけで、北隼を調教しておられた。牧場で、小栗さんや松井さんが跨つての北隼の散歩は、実に軽やかに見えた。軽やかすぎて、将来自分がひっかけ廻される馬だとは、この時分はまだ夢にも思わない。この年7月、札幌競馬場で道大会があつた。小栗さんが北隼で、複合と六段に出場された。落下はあつたけれど、障碍に突き進む気迫は北大の馬ではないような気がした。

昭和46年。7月末の北日本学生（於北里大学）に、梶村さんが北隼で出られるはずだつたが、右前肢の管骨髄がおかしくなつて、7月半ば（頃か？）獣医で焼いてもらった。北隼の分、貸車に余祐が出来て、北日本学生の総合に北隼が連れて行って貰える事になった。十和田の真夏の傾きかけた日射し、青空のもと、寒いような震えるような、ゆめ忘れ得ぬ想ひも北隼の御陰かと考えると、妙な因果を思ふ。この年の秋、今の場所に新厩舎新馬場が完成し、11月下旬馬場開き大会があつた。初めて北隼で試合（小障）に出た。満点だつた。しかしその内容たるや惨憺たるものだつた。小栗さんに「もう少しどうにかならないかなあ、と注意さる」と日誌に書いてゐるし、やたらめつたら回転ごとにくらまれたのを覚えてゐる。しかし、北隼が癖馬と表裏紙一重、カミンリのような鋭さを秘めた馬だとは、当時の私のセンスと技術はまだ気付かないでゐる。この頃の北隼の飛越は、オクサーなどはかなりダイナミックな飛びをしてゐたように思う。後に見るような一歩踏み込んでの飛越……翌年、馬事公苑で騎つていただいた時、千葉さんはこれを勇気がないと評されたが……

：は、私の拙劣な技術が与って大である。

昭和47年の3月末から、北隼のチーフとして騎り始めた。当時の写真を見るにしても、想い出すにつけても、恥ずかしさとおぞまじさが先に立つ。かすかなほほえまじさも湧いて来る。とにかく面食らった。集約すれば、私が下手糞だったの一言だが、北大のどの馬とも違う、まして今まで騎り慣れてきた北隼とは180°違う。障碍に好んで向っているのか、突進しているのかも見当がつかなかった。当時の私の技両と乗馬感覚たるや、したたかなものである。毎日毎日、小栗さんと天と地の隔りを痛い程感じた。どうにかやっていたのではないかと思え始めたのは、夏の帯広での北日本学生、道大会が済んでからのことである。それも、帯広で帯畜OB杉山さんに種々教えていただいた御蔭だと思っている。そして、全日学前の秋の頃が絶高頂であった。調和の靈感は程遠いにしても、伊式の入口付近には佇んでいるのではないかと思ふような飛越もあった。全日学での佐伯さんの誇大な誉め言葉と、蹄ってからの小栗さんの「思ったより良かったな」との一言は、やはり嬉しかった。

技術的なことも何か書きたいと思うが、私が試みた方法は皆変則なもので、書いて書き残すことはないような気がする。仮りにあるとすれば、何らかの形で今に残っているであろうと思う。

北隼はケガをよくした。帯広での、北日本学生が始まる2、3日前のケガは、今思えば笑い話だ。霧の深い朝、馬房の馬栓棒を真二つに折って東北大の初花と二人、点々と血痕を残して4㎏ばかり舗装道路を逢引きしていた。牝馬初花が散ったかどうかは定かでないが、東北大の女子部員が私をまるで痴漢かなんぞのように見る目にはまいった。その時バラ線で切った肢を治療する際、畜大の田川君が誤って毛細血管を切つてしまい血が噴き出すしまつ。それを見て

いた医者になろうかと云う日君（敢えて名をふせまず）が、気分が悪いと云って青ざめたのは、今も知る人ぞ知る。思えば、ケガをする度に、私は北隼の気性や気持ちちが少しづつ理解出来るようになっていく。秋頃は、素き馬で草を食べさせて貰うのが嬉しのか、行くとないて寄って来るまでになった。それも最初は遠慮がちにないていたのが、次第にエスカレートしてきて、「ボウズ」とか「コラ」とか呼ぶと、パドックの向こう隅から「ブヒーン」と嘶いて駈けて来て私の腕と云わず胸と云わず、愛情表現のつもりが、時折アザが出来る程噛みつくのにはよわった。雨の日にもなくから、馬衣を着せて連れて歩いた。たまに、こっちが風呂に入ってキレイな格好をしていくと、しばらく呼ばないと泣かないこともあった。いずれにせよ、足音か、姿か、臭いか、声で、北隼は俺がわかると云って喜んでくれたが、2、3日林学科の実習で留守をして江口君に素き馬を頼んだら、「僕でもなきましたよ」と云う。正直がっかりした。でも、あの時点では確かに、私と北隼の間は一本の糸でつながっていた、と思うことにしている。

榎井さんと、「北隼も今の新馬（スターライト、羊蹄、疾風、天龍山）が、デビューするまでの中継ぎだ。」と話したことがある。9歳まで競走馬生活を送った馬としては、よく今までもった。小栗さんの地道な調教の賜だと思う。則近君も本村君も私以上の成果を挙げて、北隼も充分中継ぎの役割を果たした。唯、スターライトに続く馬が2、3頭は出ないと、北隼も冥土で成仏しかねます。頑張っ下さよ。

武田朝男

名馬「北隼号」の訃報に接し、全部員のこころの内が察しられ申し上げる言葉ありません。同じく馬場を共にした人たち、同厩を貨車で過した人たち、傷ついた体を看護した人たち、触れる違なく別れて了ったかも知れない部員の誰か、その気持ちは夫々にわかるような気がします。まして七年の期間といえ、既にその間、乗って、且つ、他所に去った人もいる筈、訃を聞いてどんな心がするであらうか。

栄ある「栄光の七年」の歲月と共に北隼の魂よ永遠なれ。

合掌

鎌田正人

寒中でも皆さん元気で練習の事と存じます。

さて北隼号の件、御報告に接しました。骨折後、一ヶ月余、看病は大変御苦労と思いますが、予後を見通して思い切って処分する事も一面で愛馬心の発露と考えます。

寒さと栄養失調などと聞くとなんとも可愛そうで胸が痛みます。人間どもの勝手な解釈とも考えられますが、今後の教訓として充分検討されますよう希望致します。

先は右所感をお知らせ致します。

敬具



先輩寄稿

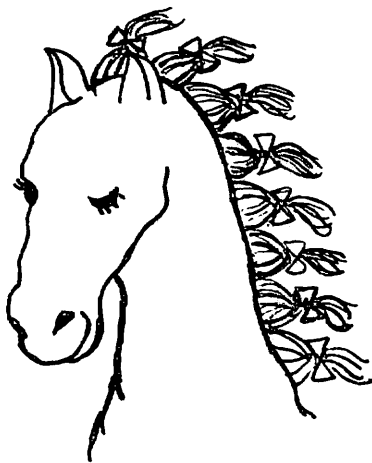
森 本 悌 次

昨年二月に所用で札幌へ行って半沢先生にお会いした時、「多い
時で月に十数回馬に乗ることがあるよ」といわれて、先生のお元氣
なこととびっくりさせられました。と同時に北大馬場で雪の中を乗
せてもらって何としても乗りたくて、帰ってから我が家から車で五
分位のところにある乗馬クラブ（といっても三才の新馬一頭を入れ
て五頭のミニクラブ）へ通りようになりました。一年になります
鞍数にして四十鞍位乗った計算になります。何しろ十六年振りのこ
とで腹の出た中年男には仲々きつくて、乗った後二、三日はかなり
痛みます。それでも日曜日の朝になると又のこのこ出掛けています。
仕事で外を車で走っていても他の乗馬クラブの近くを通りかかると
一寸コースを変えてついつい寄ったりしています。

毎年一回の在京OB会の乗馬会には出たりしてはいたのですが、
実際に度々自分で乗るようになって、我々の学生の頃とは色々とな
っているのに驚いたり、又馬に教えられたりしています。例えば馬
の種類が変わっています。我々の頃はご存知の中半血が多くて、北大
は勿論東京の大学でも一部を除いてはほとんどがそうであったもの
が、現在では軽い馬ばかりで一面では能力的にはすぐれた素質を持
っているけれども他方では調教、練習の面で以前とは違った困難が
あるとも思われます。しばしば東京のOB会の会合で問題になる現
役諸君の乗り方（というか調教、練習方法）についてもこの点にさ
かのぼって考えねばならないのではないかと思うことがあります。

更に自分自身も暫く振りで乗って、自分が如何に忙しい生活に振
り廻わされているかと痛感しています。ついつい馬にもそれを要求
して拒止されて反省したりしています。人間の生活は変わっても馬の
精神構造が変わるはずがない訳です。

又、三才の新馬を扱うのに、古馬の積りでいて大変な目にあつた
りもしています。学生時代は団体の中での練習で無我夢中であつた
ものが、今度は一人で乗って、又、違った面を馬から教えられて方
一步からやり直しています。



水産馬術部より

ダイパレード号調教報告

藤原 一郎

・経過・

昨年一月末に右前肢を故障して以来三月末まで休養、更に四月の強化練習で函館競馬場へ連れてゆき運動を始めるが、再び悪化し、足を焼く、五月中旬まで休養、その後軽い運動を行ないながら様子を見る。六月中旬より本格的に乗り始めたが、時すでに遅く北日本など全大会に出場できなかった。その後九月よりチーフが児玉に交替する。この時点では阪上兄、栗原兄と調教方針を検討する。現在児玉がケガのため藤原が騎乗している。

・現状・

ダイパレード号は御年十四才の高齢であり、昨年半年以上休ませたことによりいっそう老化が進んでいるようである。この老化をいかに抑えるかが大きな問題であり、更に体力と筋力の強化をはかることが重要なポイントである。莫然とした運動では、この最大の問題の解決は進まない。解決の方向としては、深雪を利用した走行、インターバルトレーニングを考えている。これらの基礎的体力増強訓練の後に、本格的な調教、すなわち障碍に対する調教を行なう。パレードは落着いた(?)馬であり、初心者の方々としても調教しやすい馬である。水産学部という特殊な環境で、それも劣悪な条

件で調教してゆくには適当な馬であろう。基本的には体力、筋力の増強が進んでくれば、そして騎乗者との意志の一致をみれば、今夏の大会においても恥かしくないだけの成績をおさめることもできるだろう。

以上、経過並びに現状の報告である。調教計画、方針はさらに細かいところを吟味しながら検討を重ねている。函館へ来てから乗り始めた者がどんな調教を行なっているか、大会を楽しみにして下さい。

卒業生紹介

阪上 泉 兄

札幌時代より五年間馬とともに過ごした鬼のような人、函館に来てすぐ主将になり、新生馬術部の中心となって活躍、試合出場にはめぐまれず、道大会十五位(ダイパレード)ぐらいのものである。しかし、函館へ来てから乗り始めた者にとっては、良き師であり、兄であり、神様です。飯よりも、女よりも馬を愛し、馬とともに生きてこられたのです。

今春卒業し、秋にはアメリカへ殴り込みをかけにゆくそうです。兄の健闘を期待して、凱旋される日を楽しみに待ちたいと思います。

栗原茂樹 兄

新生馬術部にあって、阪上兄の後をうまく処理してゆき、事務的な面でその才能を発揮された方です。阪上兄とは違って、華麗に馬に乗ってこられました。服装も比較的きれいで部の美観をささえて(？)おられました。ただ、試合経験もほとんどなく、弘前大との定期戦においてその実力のほどをいかに発揮されて、勝利に大きな貢献をされました。

将来は馬を持ち、華麗に馬に乗ってゆくことを望んでおられるようです。社会人としての栄光をつかみ、そして馬乗りとしての望みをも達せられんことを祈っております。

山形県立寒河江高校出身 漁業科3年

兄 玉道明

会計と副主将をやっています。現在ダイバレード一頭いますが、厩舎を学内に入れて二頭にしたいと思います、学校側と交渉中で、みんなハリキッテいます。調教は、今のところ冬で障碍の練習はなかなか出来ないのです、基礎的な調教をやっています。雪がとけたら、どんどん障碍の練習をやって行こうと思っています。今年是非北日本大会に出場しようと思っています。

斉藤 美砂子

去年の秋、函館の学部へ移行して大学生活も残り二年半、教養時代のようにブラブラしているのも味気ないなと思っていたときのこと、校内の空地でダイバレードがバカバカとのんびり歩いていた。馬は好きだし乗りたいなとかねがね思っていたので、馬術部にはいつてみようということになった。目下のところ冬の寒さでだいぶめがっているが、春になればまた元気が出て来るだろう。

バレードはハンサムでおとなしい、函館競馬場の馬のように走ったりはねたりしないところがいい。しかし、すねると全然いうことをきかない。思いどおりに動いてくれるときはとてもかわいいのだが。そして飼付するときにも。

オーバーな表現を使えばクラブにはいつてからは毎朝が戦いだ。馬には乗りたいが朝早く起きたくないので。そしてそれ以前に夜早く寝れないので。しかしバレードと一緒に野山を走り回れるときのためにがんばろう。

私の当番日誌

化学二 中 野 菜穂子

朝日を浴びながら、誰もいない海辺を馬に乗って駆ける夢を見た。三十分ばかり遅刻だ。厩舎の戸をこじあけたとたん、キングコングの様なバレードのいななき。足をばたつかせ白眼をむいている。早く餌をやらないと「なにをしているのだ！」とばかりに鼻づらでぐいぐい押してくる。(夢と現実のこの違い)思わず涙が出てしまいたい。そうな寝わらあげ。(注・強烈なアンモニアが目にしみるのだ。)こ

れが終わる頃は、パレードもすっかり気嫌を直してくれるだろう。新しい寝わらをたくさん入れてサービスと思ったら、さっそく用をたしてくれ。複雑な心境……。

最後は恐怖の引き馬だ。にんじんをやって祈る様な面持ち、「あばれないでね、パレードちゃん」。しかし猫なで声も通用せず、哀れパレードのヘッドイングをくらって、雪の上にノックダウンの私なのでした。教訓、馬の方がずっと賢い。

「冬のある一日」

水産学部二年 大原 律子

耳元でジリジリと目ざまし時計の鳴る音。もう10分寝ていたい。そんなことを思ってもたまたましているうちに6時。「あっ、いけない」とあわてて目をこすりこすり蒲団の中から飛び起きる。寝坊な私にとって冬は特に辛い。雪道を白い息をはきながら走る。厩舎にたどりつくと、先輩はもう来ていて、又も遅刻。「遅いぞ」と先輩の一言。彼は、私など無視して黙々と乗っている。黙って見ていると手も足もかじかんでくる。そこでしかたなしに、ウロウロと歩き回る。交替の合図に救われ、勇んで乗る。ところが私が乗ったとたんパレード号はちっとも動かない。私より馬の方が利口で、初心者などの命令には従れない。「脚を入れる、脚を」と先輩の怒鳴り声。そうこうしながら30分が過ぎる。下馬するのとくたくたとなる。でも気分は爽やかで、キラキラと光る白い雪が目染みる。

はげめず、よせず

水産二年 おだじまれいこ

あまりよろしくないときは低空飛行でゆくよりしゃあない(時々不時着も入る)。今日の目黒記念はトナリへいってテレビを視る気力もせず、ラジオをぼさっと聞いとった。＃じ＃なんて書きとらな
い、いやや、いやや

が、「アタシ、幽霊部員だから書かない」と口にするとうんだ。今日は湯の川へ獣医用体温計を求めてショッピング、明日から朝夕検温開始、オバケにはなれない、少しづつでも輪郭をはっきりさせてゆかにやあ……

毎週日曜バイトに通っている藤原さん、児玉さん御苦勞様(もう少し待ってください、4月には家教のクチを見つけますから)

コンスタントに体を動かすこと。
最後に、パレード元気でいておくれ。

あしあと

卒部生の皆様、四年間の間、大変御苦勞様でした。ここで、この四年間をふり返っていただきましよう。先輩方にも、かわいらしい？一年生の頃があった筈です。

「四年間の想い出」

平野 雅裕

サロンへの勧誘……モノローグ

何時のときからだろう、サロンという言葉があらゆる悪名の代名詞になってしまったのは。サロン、それを閑談といおうか、社交的懇親的集会といおうか、或は同好会といひ代えてもみようか。いずれにしても、それは我々にとって断然排斥すべきものであるのに変わりはない。

単なる同好会じゃないのだから。

然り、それで全ての「愛好家」は一掃され、上級生の威信と共に全ての不愉快な忍従が肯定される。

部の至上目的の為に部員各個は無にすぎない。

然り、おまけに馬さえ無にすぎないのだ。まるで個人と離れて至上目的なるものが存在するかの如く。

在るではないか。勝つことだ。勝つこと、それこそ部の至上

命令だ。

そう云われるならば別に異議を申し立てるつもりはない。ただ、僕のサロンへの入会をお断りするだけだ。そもそも僕のサロンの会員など一人だって居らぬ位の事は重々承知の事なのだから。

僕のサロンのメンバーは馬術というものを貴人のスポーツと考えるものだ。美の中の美、遊びの中の遊びと考えるものだ。全ての風俗な感情と虚栄心を超脱して馬を語る資格のある者だ。早い話が手本を馬に求めて馬を語ろうとする者だ。

僕がかつて馬を愛した。馬は全ての美、全ての純心、善意肯定そして全ての愛の象徴として考えられた。そうしたものとして僕は馬を愛した。馬の話をするには、現実を離れて夢の中で人と交わることだった。馬術部に入るときにどんな期待を持っていたことだろう。僕の同期の女の子が部報に書いている、「だから人間と馬のいる馬術部に入った。」と。彼女は少時く居てから退けて行っちゃった。それもその筈だ。彼女の期待していたような意味での人間もそして馬もそこには居なかつただろうから。

部を前にして、そうした夢の消え去るのを見るのはつらい。あの練習中の冬の空の様に押しつぶされた冴困気はどうだ。あの剣突くばった話しぶりはどうした事だ。一体僕達は何の話をしているのだ？ 何の練習をしているのだ？ それも思かな質問である。何の練習か、それは大学の運動部にとって本質的なことではないのだから。馬がボールに変わっても部の本質は何等変わるまい。そしてまたボールを愛することとボールを蹴ることを愛することは全く別のことなのだから。そう悟って以来、僕は馬のことはすっかり忘れてしまつてボールを蹴ることに夢中になった。

夢中といつてもかかつて馬と夢の中に戯れたのとは違う。勝負の世

界という現実界だった。そこはあらゆる喜怒哀楽を含んだ正に現実界の縮図だった。

そして今、誰もが現実から逃れて夢の世界に行けたらと希望するうちに、僕もこのクラブからこそ逃げ出そうとしている。すっかり忘れていた馬達の事が再び頭に浮かぶ。一体馬は僕等のそうした喜怒哀楽を何と思うのだろう。

「そうね。あなた方は勝利を目先すって言うけれど。勝利ってお方がそんなに気難しい方でしたらあたしは御免被りたいわ。馬術における真実ですって、どうか馬って言葉は使わないで丁載。あたし達は決して言い争いは致しません。そんな種にもなりたくないの。真実なことはといえば、もうすぐ雪も融けて春の太陽が照れば青草がいっぱい芽を出すでしょう。あたし達はこの春を精一杯楽しみみたいの。春はすぐに行っちゃわ。今は楽しく時を過す他に何の真実があつて。」

「四年間をふり返つて」

桑 田 壮 平

四年間の現役生活を終え、馬術部と自分というものを少なからず客観的に眺められるようになった今、頭の中にあるのは「もっと頑張れたのに」という批判的な自分と「俺ができるのはこれくらいなんだ」という諦観的な自分といった二つの自分である。

ここで各年目をふり返ってみると、
一年目

クラブ活動はあくまで余暇活動の一つなんだ、という気持ちに朝の早起きのつらさなどが加わって、部生活にもう一つ馴染むことができず、かといって他に何をしてもなく、中途半端な気持ちに早く見切りをつけたいとただ悩むことが多かった。

二年目

大学生活で何か一つ、つらくてもやり通せばそれがたとえ余暇活動であっても将来、それはきつと自信につながると思ふ、ただ一生懸命やるのみと部活動に専念した。後半には北武のチーフとなり、馬を一頭任せられたことに対する責任感と部生活に対する充実感が湧く。

三年目

出る競技いづれも失権で、自分のそれまで持っていた自信が根本からくずれ落ち、今まで俺は何をしてきたんだと精神的に滅入る。しかし、とにかく自分に負けてはならないと増々部活動に専念した。そしてシーズン終了後は馬術に対する興味というよりは最上級生としての責任感が自分の中の大半を占める。

四年目

次から次へと競技に追われ、自分をみつめる余裕もなく、あつという間にすべてが終わる。

そして現在、果して自分はクラブに何を為し、クラブに何を残し得たか、その答はまだ自分にはわからない。恐らく二、三年後に何らかの形で表われるのではないだろうか。やはりそれまで責任を持たなければならぬと思う。

最後に、現状に甘んじることなく北大馬術部の前進に向けて努力されんことを願ひまして筆を置きたいと思ひます。

なつかしく思い出せば

石川 淳子

とうとう、馬術部に4年間も居すわってしまいました。今は、これで、ひとつの区切りがついたんだナア、と、感じています。そして、校内で、馬をみかけたり、部員たちが働いている様子などを見たりすると、他人ごとではないように思う反面、もう、私は関係ないんだ、馬とすぐす充実感は、もう味わうことはないんだ、と思ったりして、ひとりさびしく、感傷にひたることも、ときには、あつたりします。今の生活よりは、馬術部にいたときのそれとは、かけ離れてはいるものの、ふと、厩舎を訪れて、馬の顔など、なでてみれば、頭のどこかから、はやく着がえて、当番をこなさいよ、という声が聞こえてくるような気がします。そして、えっ、と思つてふり向いて、顔も知らない、はつらつとした瞳をした新入生を見れば、ああ、もう昔のことか、と我にかえつたりします。これからも、馬をみれば、きつと、こんな錯覚に陥いると思います。やっぱり、私は、馬術部が好きなのです。

思い出

水 井 とく子

卒部といっても、私の場合実質的に馬術部で過ごしたのは、2年

と少しでした。他の人より長く厳しい冬が一回少なかったわけですが、光陰矢の如しという様に、年月の経つのは早いものですが、私の場合振り返ってみると、大変長い2年間だった様に思われます。この2年間には本当に教え切れないぐらいたくさん思い出が残りしました。人間というのは都合の良いもので、辛く苦い経験というも過ぎてしまえば、忘却の彼方へ消し去ることができ、楽しい脚色さえ可能です。私の2年間も良いことばかりではありませんでしたが、何故かいやな経験は輪郭がぼやけてきています。

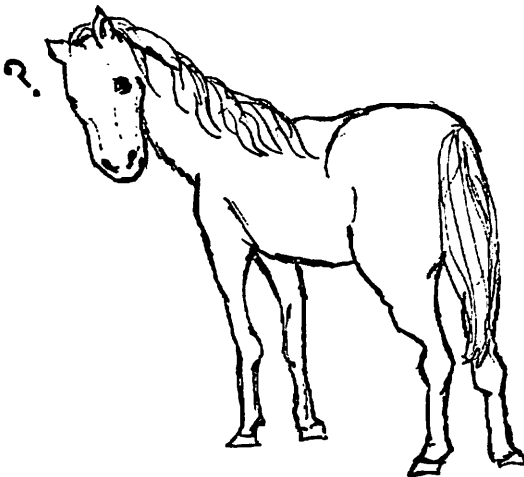
何といっても印象深いのは、毎夏の遠征。特に1年目の盛岡と、最後の帯広での日々。それから冬の凍付く銀世界を薄明の中、先輩に連れられて駆け廻ったことも思い出されます。各々が一連の風景画の様に脳裏に甦ってきます。

私が2年と少ししか部に在籍していなかったというのは、入部したのが教養2年の6月という中途半端な時期だったからです。その後、幾度となく何故馬術部に入ったのか尋ねられましたが、自分自身はつきりと答えることができませんでした。とりたてて動物が好きだったという訳でもなく、むしろ憶病で犬、猫にさえ触れることも昔はできなかったのです。一方スポーツが何かしたかった訳でもありませんでした。ただ馬という動物ののってみたいなという単純な動機だった様な気がします。障碍を飛び越えるなんて考えてもいませんでしたし、試合がクラブの中心にあるということさえ想像もしていませんでした。今考えてみると何と無謀を試みだったことでしょう。もともと無茶な傾向はありましたが、馬術部に入部したというのが、最大の無茶ではないでしょうか。どうかこうにか卒部できたということ自体夢の様です。その影には先輩諸氏の忍耐強さと思いやりが大きく作用しているのではないのでしょうか。

物を見るとき近くで見ているときよりも遠く離れてみた方が全体を把握し易い様に、部を離れてみると、馬というものがどれだけ私という人間の中で大きな部分を占めているかということがわかりました。そう思うと心もち、顔が馬に似て来た気さえします。将来馬に接する機会があることが一番望ましいのですが、もしそういう機会に巡り会えなかったとしても、馬というこの世で一番愛らしい、また愛すべき動物たちのことを忘れはしないでしよう。何故か彼等のことを思うと一抹の憐憫を禁じ得ません。もっともっと溺愛されてもいいのではないかな？

追伸 とにかく編集委員長の島村君には大変迷惑をかけたので、ここにお詫びします。

5。 それから後輩の皆さん、あまり良い先輩でなくてごめんなさ



あすなる物語

雑 感 国 枝 保 幸

春。わけのわからなかった春。すべてが珍らしくて。夏。楽しかった日高合宿。すべてが夏の暑さにほかさされていた夏。秋。つまらなくて、つまらなくてクラブにしがみついていた秋。冬。皆が去っていった冬。さみしくてさみしくて。早く春がこないかな。

今の私には、これだけしか書けません。正直言えば、馬術部生活における雑感ほ他にも単刀直入な表現を持って書かれるべき事がたくさんあります。

しかし私にとってそうする事は、馬術部にそして馬に尽している人々に対して済まないような気がするのです。成すべき事をしていない私に、一体何が言えるというのですか。否、成すべき義務を全うしていたとしても、馬術部そして馬に尽すやさしさを批判する事は自分に対して、すべての人々に対しても許し難い行為です。

なををいっているのかわかってはもらえないかもしれませんが、この馬術部と、そして可愛い馬達に関りを持つ人々と、突き詰めて見れば、馬に対する気持ちには大きな違いはないと信じているからなのです。

馬術のために

と言うには貴女を愛し過ぎているし

伝統のために

と言うにも貴女を愛し過ぎている

貴女を愛しているからこそ

私は貴女のそばに居続けたい。

北海道の冬は、憂うつな心には恐いほど苛酷です。春の訪れが待ち遠しいのは、私だけなのでしょう。

僕のボーズノート

太 田 敬

あの朝、駆けつけるとボーズはコンクリートの通路に、どうと横臥していた。暗潜と冷たい日が続いていた。やって来られた獣医の先生はちょっと診て、「殺せ、こりゃ殺さねばだめだ。おれが殺してやってもいいぜ、いや、本城、やっばりおまえ殺せ。獣医は殺すことを覚えなきゃだめだ。」と言われた。この時、僕は事態が取り返しをつかないことを思い知らされた。

*

入学の頃、入口にいつもいる馬、クライムカイザー風だなど、その男性的な競走馬的な体型に、彌生賞でボールドシンポリをかわしたあの黒鹿毛のイメージをもって見て、ブラシをかけながらそう呼んでいた。

これも入部の頃、佐野さんが「競馬と馬術の違いは三年の後半になるとわかる」と言われた。自分は分っているつもりだった。競馬の発生は「より速いもの」を求めた、対して馬術は「より役立つもの」を求めているのではないか。だから競走馬は、その競走馬での

死ですら、彼の欲びの赴くままという風情がある。彼はいつかその進化の線上を離陸し、人の手の届かぬところへ行くのもうなづける。

＊

10月の或る日、札幌競馬場の一室で公報を眺めながら、僕は胸の昂まりを抑え切れなかった。かなりの馬と思っていたが、かなりの馬だったのだ。僕がもう数年早かりせば、セントオールを記憶に留め得たはずだった。ダイシンボルガードというダービー馬が北大に在るが、セントオールはあの胸さわぐクラシックロードを最初から駆けた早熟な若武者だったのだ。

＊

初め、畜産事務所へ行っていろいろ調べてもらっていると、奥から出て来た四十位の人が、「セントオール？あ、そりゃ中央の馬だ。うん、星川の馬で清水の出美が乗ってた。」こういう馬に関する記憶力抜群の人、わかるなあ。

＊

僕は公報の索引ナンバーでレースを捜すのだが、まるで本当のレースがこれから始まるかのように、セントオール勝てと念じて、部厚いページをめくるのだった。もうはるかな昔に結果は確定しているのに。

＊

北海道三オステークスの勝ち馬。(これらの名のどれかになにかの思い出をもつ人は多いはずですよ。) ソーウニムサシ、カミイチ、プロスバラス、カーネルシンボリ、ユウシオ、トモエオー、ロングワン、ハイプリンス、ブルボン、キタノダイオー、リュウズキ、ハーバーホープ、フジマサ、セントオール、ずっと昔、トキノミノル。

最後の曳き馬の時、教養前の雪の道で、速歩になってしょうがなかった。「ポーズ、ポーズ」と抑えると、首を寄せて来たのが忘れられない。帰って来て、顎下の化膿の手当てをする時、何故か神妙に静かだった。

＊

ある晩思つたこと

島村 努

馬術部に入部して、もう8ヶ月になる。今だに、馬にのることはもちろん、作業なども何一つ満足にできない次第である。

真に馬術部に没頭するにはバカにならなきゃだめだと言われたことがある。もちろん、ここでいうバカとは、他の欲望を断つということだろう。それができないのである。色々やりたいことがある。

その反面、大学時代に何か一つ、「俺はやり通した」と、胸をはって見えるものが欲しい。この両者がからみあい、戦いあう、ある時は前者が勝ちそうになり、ある時は後者が勝ちそうになる。後者の欲望を満たす事は、なかなか難しい。しかし、満たすことができたら、きつと確かな充実感を得ることができらるだろう。

それにしても、いろいろなことがあったものだ。ある男らしい奴にひかれて、彼と多く接した。彼の性質を知れば知る程好きになつた。何と勇ましく、そして、どこまでも純真だった奴。そんな彼が、自分の目の前で立てなくなつた。何度も立ち上がるうとしたけどダメだった。今あるのは、彼の髪と血のついた包帯と、脳裏に焼き

ついた彼の姿……と、彼に対する「すまない」という気持ちと、自分という人間を分折してみた後の情なさである。彼のことを考えるときまってここに到達する。……………
ああ、もう、やばい。眠らなくちゃ。あしたのために、その1、早く眠ること。

ざっかん

成田 慎 二

「あっ……。」という間に一年が過ぎてしまった。でも、今思うと高校時代の事や受験勉強なんて遠い昔の事、いや、他人の事のように思える。それほど僕の生活は変わってしまった。あんなに好きだった深夜放送は全く聞いていないし、毎晩飲んでいたコーラが、いつのまにか酒に変わり、僕のまわりには、いつも紫煙が立ちこめる。これが普通なのだ。内面的にはどうかと言うと、本を読まなくなつた事による知識の不足、友人と話す事は「人生論」でも「青春論」でも「恋愛論」でもなく、馬術部の事だけ……。だからこの一年は空しいのかと言うと、むしろ今までが一番充実した一年間だった。それほど僕にとってこのクラブは魅力がある。二年目となる今、新たな目標を持って、いざ進まん。

ひとりごと

あすなろ

ジーー。
くそー、もう時間か。
ジーー。
うるさいなあ。
よいしょ、ウー、寒。
何時や、五時十五分か。
まだ、もうちょっと時間あるな。
五分程、ふとんに入っとこ。
しかし眠いなあ。
昨日は二階の奴がうるそうて、
寝たん二時ごろやったもんな。
くそー、三時間しか寝てないんか。
どないしょうかな、行くの。
昨日も行けへんかったしな。
二日も休んだらまずいし。
そやけど、なんぼなんでも
三時間では持てへんしな。
もう、ええわ、寝よ、寝よ。
明日からまじめに出たらええやろ。

雑感

日南田 ゆり子

太い脚の女の子って、強い母になれるって。私ってなれそう。
「ネ！バスボン！とまッ、安定感のある下半身を持ちつつも、鞍の上
に安定してなくて、落馬の常習犯。落ち方も人並ではなくて、一
番重いお尻から落ちるので、とにかく痛くてねエ。ニブさには定
評のある私メ。少しくらい、いいとこなくちゃねエとせせと励ん
だのが、料理裁縫。でも、いろいろあって、楽しい一年でした。

雑感

水島 洋子

特に馬が好きというわけではないが、馬の傍にいと騒々しい人
間社会から隔絶され、ゆったりとした気持ちになります。

ある人にとっては音楽や オートバイが心の慰めになるのと同じ
ように、私は生き物と接することで、いやなことが全て解消されま
す。だから北大入学にあたり、心の安住の地を求めて行き着いたと
ころが馬術部でした。

「馬」の魅力が馬術にどう結びつくかわかりませんが、馬術
部員として籍を置くからには、ヒトとしてのウマとのつきあいだけ
でなく、骑手としてどのようにつきあうかを考えることも必要だと

思います。

「雑感」

吉田 円

東京の大学で馬術部にはいろいろと思っていました。大学は予定を交
更したのに、クラブだけ予定どおりにしたのは、不条理だったので
しょうか？やっぱり北国の朝は寒いのです。

寒空に輝く星はきれいです。銀世界に昇る朝日も、とってもきれ
いです。けどそんなことよりも、凍てついた足が痛いのです。

北海道へ来たことも、馬術部にはいったことも、ちっとも後悔し
ていないのが我ながら不思議です。

幼かりし日に愛唱した歌を、今は実感たっぷりに……………

うまささん、うまささん、乗りたいな

乗ってバカバカ走りたいな

………

………
しゃがんでのせてくださいいな、うまささん

自己紹介・他己紹介

卒部生の部

平野 雅 裕 兄

法学部

四年前馬術部に入ったのだと云ったら、皆からおやおやと云われました。

そして主将をやることになったと云ったら、皆がへエーって目を丸くしていました。

そして今度卒部だと云ったら、よくぞまあお前が続いたと褒められました。

前回の主将という大役を果たした兄は、最近、やっと肩の荷がおりたという感じでホッと一息ついておられるようです。兄は、大人っぽいところと、子供っぽいところの両方を持ちあわせている人です。馬上及び練習中の鋭い眼光は、非常にきびしいものがあります。また、その反面、帯広遠征中の花火大会でのあのハシヤギ様は印象的です。

兄は、口のうまい人でもありません。毎年部報委員の原稿請求をごまかしては泣かせています。ある原稿請求係の言、「平野さんに電話をかけたら、お茶くみに来いって言うの。困っちゃうな。」先輩、一生のお願いだから早く書いて下さい。

理論派なのか実践派なのか。自論をとことんまで押し通す人。話を聞いてみると、さすが法学部、なるほどと思う。でもちょっと考えてみると、あれ、何か変だなと思う。人をけむに巻くのが好きなようです。

桑 田 壮 平 兄

工学部衛生工学科

入部した当時の写真に写っている自分の顔を見ると、その何と可愛らしいこと！やはりあの頃はたくさんの夢を持っていたのだなあと思う。

そして今、少し老けたかなと思ってみたりしている。そう、これが本場の僕なのです。（引ッ込めー、三流喜劇人！）スマセン。

ピニアな顔がクリスタルビューーからのぞく粋な男性で、行動する男の魅力をブンブンさせている人。クラブに顔を出さなくなっただけめっきりおシャレになり、慶応ボーイも真青。4年目の中では唯一の卒業生で次は工学部の院に進学予定とか。最近には珍しい勉強、スポーツ両刀使い。4年間御苦労様。

一年目の目から見た兄は、勤儉実直誠実努力、勇猛壮絶かつ繊細、シビアエリートジャイアント、そして兄はこわい人。

そして約一年「うそや、うそや」と言いながら童顔をほころばせる兄を見ていると、可愛さとやさしさを感ずる今日此頃である。

また兄の前では、今「卒論」と「大学院」の2つの言葉は一切禁句となっております。

追伸 3月16日昼、兄、ピースサインをかざして部屋に現われる。院合格したとのことでありました。

佐野淳之兄

農学部造林学教室

その一端

産地 小樽

好きな季節 冬(今だから言える)

言葉 及び青春

愛用の煙草 模範的且つ異端的標準語

血 液 長い平和

O型Rhプラス比重一、〇五八

概 馬に乗らなくなってから、①腹ら脛や腿の内側の毛が伸びてきたこと。②知らない犬が簡単には寄

ってこなくなつたこと。③体重が5Kg増えたこと。

・62+馬術部生活||67+0:馬術部生活||5

四年間で

取った優の数 十数個(四十単位弱)

キープレットの数 十七本

散髪した回数 六回(うち二回は矢田理髪店)

使った金額 百八十万円弱

食った「エラム」の数 五皿

買った本の数 三百余冊

洗濯した回数 十四回

三日続けて徹夜し、部報の原稿を書いていた回数 一回(現在

真最中)

長い間、部の陽となり陰となつてその屋台骨を背負って活躍し、今は亡き北準の最後のチーフとしてその大役を果たしてくれた兄を思い浮かべると、北準に騎乗している姿よりも、北準の怪我の治療に専念している姿の方が強く印象に残っている。その苦勞は人一倍であつたろうが、「亀の甲より年の功」という言葉の通り、持ち前の人生経験の豊かさで冷静に事に処せられたのは大したものである。兄も今度は「学生」として大学生活を謳歌する為に後一年、大学に残られる御様子。これからも堂々と我が道を進まれん事を期待しております。

兄は、一種独特な風格の持ち主です。その落ちつきと繊細な感情は、四年間の馬術生活の根底を流れているのではないでしょう。その姿は、風貌は、一昔前の北大生(すなわち北大生の本質)というものを感ぜさせます。兄の美的感覚というものは、深くつき合つてみないとわかりにくいかもしれません。

今は亡き、愛馬北準号に乗った兄の姿は、人馬共々非常によくマッチして、すばらしいものがありました。ポーズが亡くなって埋葬する時、自分のシャージ、キョロットをいっしょに埋めていた兄の姿は忘れられません。最近、林学の実習で凍傷になつたそうです。

が、あまり無理をしないで下さい。

石川 淳子 姉

理学部高分子学科

横 沢 敏 夫 兄

農学部農芸化学科

長い3年半の間穴倉の様なアパートと馬術部を往復して来た。穴倉に籠っていると原始人に戻ってしまったのか、馬に乗った後は食って寝る生活が身につけてしまった。

今クラブから離れて、書物や衣類の散乱した部屋で煙草を吹かしている、何か突き上げて来る。暴れたくなる。来年度四月からは学校の方が非常に忙がしくなる。さっそく、部屋を穴倉から城、とまでは言わずとも、改造することから 人間の改造を始めて行こう。

部室のストーブに火がともると思いつくのは横沢さんです。火が消えているストーブに率先して、火をつけてくれたのが横沢さんであり、長靴棚常置の将棋で私どもの相手になってくれたものも横沢さんであつたからです。

今年の冬がひときわこたえるのは、こんな兄がいないのにも一因があると私は感じています。

発明王エジソンの様な人。実にこまめに手を動かされ、廃品利用修理一般にかけては、他の追随をゆるさないほどのアイデアに富み、日夜新案特許を生み出してゆかれています。

いろいろ、失敗の多い四年間でありました。が、また、収穫の多い四年間でもありました。馬社会から、人間社会へと移行した今、私の足どりは、相かわらず のんびりムード、ゆっくりリズム。足がもつれるといけないから。

かつて、キャキャキャキャンディーズ
そして今、ぐっと押えて…… でも、キャキャキャ キャンディーズ、

少しおしりが大きいけれど、その姿、愛らしくもあり、楽しい人である。

ワインを好み、ブーツの似合ひ女性です。

他のことは、本人では無いし、亭主でも無いのでわかりません。

街で出あうと、満面笑みをもってむかえてくれる姉ももう卒部。女性には珍しくお酒が好きそうです。でもこのごろは、ちっとも飲んでくれません。あのほほえみも部室で毎日見ることができなくなつて淋しいが、いずれ姉も卒業すれば、顔を見ることもできなくなつてしまふでしょう。ただ一つ心配なのは、姉が結婚して、はたまた一児の母となつてうまくやっついていけるかどうかです。大きな不安とさらに大きな興味ある問題です。北勇の離厩の時に見せたあの戸は忘れられませぬ。惜しむらくは、勇クンに騎乗して道の大会に出場する姉を見られなくなったことです。

水 井 とく子 姉

理学部地球物理学科

矢 田 明 兄

三年目

また今年も、この自己紹介なるものを書かねばならない日がやってきました。これが最後の機会ですが、何を書いても、恐らく「百聞は一見にしかず」と申すが如くでしょう。私自身、自分をどうやって表現し、紹介して良いのかまるきりわからないのです。どうか気を悪くなさらず他己紹介をお読み下さい。

疲れをいやし、悩みを消し、心をなごませてくれる姉。その一言の対話だけでそうなってしまうのです。しかし、眼鏡をかけると、その風貌は幾年月の練磨を経てきた文学研究者のものに一変してしまいます。姉は卒業が卒部を追い込してしまつたので、昨年8月で馬をおりられたのですが、今となっては、ポロの中で当番をなさつていた姿は想像できない感じがします。そう、一寸高貴なところがあるといおうか……。

いつも笑顔のたえぬ姉であります。実はなかなかの才女であります。＃いくら食べても太らないわ＃とおっしゃる姉。真にうらやましい次第。しかしあの細身の身体で、ドンにもヒラリと飛び乗りする様は、女子部員の羨望的でありました。そんな姉も追コンの時の堅く真面目な表情は、今も忘れられませぬ。卒部なさり、早く素敵な殿方に嫁がれる事をお待ちしています。

昭和三十一年一月三十日生
体高百七十一センチメートル
体重六十六キログラム

性別 男

癖 女癖

己を表現するとは、非常に不可解な作業であるとともに、実に魅力的な事業である。それは、当然、一生を費して為される可きであり、常人は人生と呼ぶ。

ミーティングに於けるユニークな馬心理学の講義、馬場に於ける声のおっかなさ、東北大の人を驚かせた丸坊主にサングラスの着流シスタイル、どれも矢田兄らしさであるが、何よりも矢田兄はコンバの大将である。その飲み歌い騒ぐ様は、旧き時代の学生の高歌放吟とはこんなであつたかと想わせる趣がある。コンバに於ける彼の衣鉢を継ぐ者はあるのだろうか。

その矢田兄も最後の学年、期する所大なのは、最近ツバメ君が、その顔、その動作に主体性を押し出してきたことから推し量れると、僕は思うのである。

自然児という代名詞がびつたりの彼である。自然食品がもてている近ごろなのに、自然児の彼が、なぜもてないかは、不思議である。が、矢田くんのもつ、自然と一体化したような野性味は、この煩雑な社会で生きる人の心をすくってくれる。それが、彼のよさではないだろうか。主将は、本当に大役である。最後まで、矢田く

んらしさを売りものに、がんばってほしいものだ。

長屋清隆 兄

三年目

最近なんとなく思う。俺は案外「平穩無事」とは共存できないたちなんじゃないかと。何もかもプチ壊してみたい。血が迸り全身に力が漲る。そんな時、己が身の若さを感じてみたりする。

全日学、オールジャパン、国体に、スターライトと出場し、オールジャパンでは見事優勝の副将として部に「カツ」を入れ、栄光の大馬術部を目ざす姿勢には、きびしいものが感じられる。しかし、その実体は、コンバが終わるとニンジンをもって「ライト」／＼と女房にしつこくせまり、山田荘なる オンボロアパートの象徴ともいえる部屋に、帰っていくのである。鬼の副将、長屋兄は、その過程をたどると、一年目の時は「ボク、ナガヤデース」のかわいいうち後輩であった。二年目は、作業班長となり、「ボク、ナガヤデース」から脱皮したもようであった。そして、三年目はなんと、すでに鬼と呼ばれる、副将 さて、今年四年目は……：仏の長ちゃんか。

彼、長屋兄は、クラブに生きる男、クラブのことを考え、クラブのことだけを考えている男です。彼の一日は朝五時に始まり、朝の八時半に終わるのではないでしょう。残る時間は、ひたすら翌日

の早朝のためのエネルギー獲得に費されているといった感じ。だいたいクラブ以外の話題が彼の口に昇るのは、そうそうあることではないような気がします。いったい、クラブ生活を終えた時、彼はどうなるのでしょうか。今から楽しみであり、かつ不安（彼のために）を感じます。長屋兄の性格は誰もが御存知のとおり、短気で爆発的、最上級生になってからというもの、クラブの目的を考えるが故に爆発する頻度が多くなったような気がします。思ったことは、お腹の中にためておかず、すぐさま吐き出してしまいうことを信条としている兄。でも君のお腹の調子はいいだろうけど爆発の振動ってのは、けっこう、はらはらさせられるよ。しかし、本当の彼は、けっこうデリケートで、やさしい奴なんですよ。

半浦 剛 兄

三年目

僕には、理念などないようです。気持ちがあふききれないので。かといってろくな事は考えてないのです。平静を偽っているだけです。だから勢い、一見穩健リベラルな、ハト派に見られるでしょうが、真のハト派ではありません。勿論、タカ派にはなりたくともなれません。言うなればスズメ派です僕は。三年目の半浦です。

土木工学を修めておられる兄は、昨年中は測量実習とやらで、夏の遠征中も、東奔西走、忙しく立ち回っておられました。今年も、主務という役柄上、さらに身に鞭を打って働き回らねばならない

でしようが、そこは前回の陽気さで持ちこたえ、円滑な部活動の設計図を描いてくれることでしょう。

いつも可愛らしいと思っていた兄も、いつの間にか立派になられて、部員総会等でも、とてもシビアなことを言われたりして、言葉につまることがあります。しかし、変わってない点も幾つかあります。例えば、「国枝ア、何か食わしてくれ。」とか、大声で言っているのをよく見かけます。ある時、部室で兄が間違ひ電話をした時、「アッ間違えた、アツハハ。」、ガチャンなのです。このように兄は何でも笑いとばしてしまふことのできる人です。

本城敬文兄

三年目

早いものでもう入部してから3年の月日が流れました。歴史の中の人の一生はその一部でしかなく、一年はまた人生の一部でしかない。しかしその一年が人生を大きく変えることもあり、歴史の流れを左右することもある。私はなにも歴史を変革しようというのではないが、やる気になれば人は一年間にかなりのことができるという可能性を有している。この一年でいったい何ができるか、凡人には凡人の域を出ることは無理なのであろうか。凡人は凡人なりに自分の流れの中で精一杯生きればよいではないか。それが生き甲斐というものだろう。最近急に減った下級生を見て思うことである。

自分は何か、今までどう生きてきたのか、これから先はどうするか、現役部員としてあと一年まして学生としてあと一年。自分に負けないようにやるだけやるしかない。
こんなことを考える人間が私です。

牡 二十二才

鹿毛 白班無し

産地 大阪

癖 首を右に振る、人を追いまわす。

口を開けて、目を開けて眠る。

年を考えて数年前から用役用に調教されて来た。実に良く働

たまに変な笑い方をするが、気にしないことにしている。

性質は一見 穏やかだが、意地を張る所も見られる。調教過程に於て実に良く生かされている。短節な足運びが気になるが、良い前進氣勢を持っている。

頼りになる馬である……… あゝ

小柄で細身、一見ひ弱そう。合宿に於けるあの鬼トレーナーぶりはどこから来るものなのだろうか。日高合宿の作業でも、一番黙々と働き続けておられた。兄の辞書には疲という文字がないのか、又は耐の文字でうまっているのか、それ以外には考えられませぬ。また、馬たちの homelidactor でもあります。その為の知識をどんどん仕入れようという努力もたいしたもの。きつと良い獣医になられることでしょう。

パワーと気力に満ちた男。獣医外科の勉強は馬術部にとっても彼

自身にとっても大変益になっていくようです。愛するダックスから四ツ輪へ衣替えするという噂もチラホラ。事故にだけは気を付けて下さいなネ。

注意してほしいと思うことは、短気にならず、かつ不和雷同せぬこと。電気をつけっぱなしにして、教科書を枕にコタツで眠らぬこと。私より先にガールフレンドを見つけないこと。

この場を借りて、馬術部で車の免許を持っている人の中で、私が助手席に座ったことのある人の運転について、その感じたことを話しますと

半浦兄…あの有るか無いかの目を溺かせ、しかも落ち着き払って後ろも横もバックミラーも見ずに、ひたすら前方のみを注視し、自らの道をひた走る。

私は、本当に起きているのか覗き込んだり、左右前後をキョロキョロ、ヒヤヒヤ。

△自己中心的名ドライバー▽

山本兄…風貌通りの運転。但し、ちょっとしたところに凶太さと繊細さの交錯を感じる。

私は、とりとめもない事どもを考えながら煙草でもふかす。

△人間主義的名ドライバー▽

長屋兄…走りながら何かあるとすぐに文句を言う人。オタオタしている車が前にいたりすると、あのちょっぴり髯の生えた

可愛い顔でドナリ、又は車の中で口をとがらせる。

私は、そっと肩に手をかける。(ジョーダン！ジョーダン！)

△経験志向的名ドライバー▽

矢田兄…おーいやだいやだ！

免許取るまでは馬だけに乗っていなさいね。と私は敢えて泣くであらう人の為に忠告する。

△自称名ドライバー▽

本城兄…現代の車文明社会では、こう人の事を上手い運転手と言うのだろうか。スピードと急ハンドルを多用し目的地を目差す。また、酔った正月には金網にもぶついたりしながらただ前進あるのみ。

私は、初めのうちはいろいろ話しかけて、極力彼の本性を現わしめないように努め、後になると命を彼に預け、足を前に投げ出し、帽子を深くかぶり直して目をつぶる。

△合理自存的かつ時差的迷ドライバー▽

PS 彼の名替の為に、最近乗った人の報告を述べますと、怖い部分は長屋兄に返上し、年と共に慎重さの度を深めつつあるとの事でした。ホッ。

最近、部屋でみんなと意味のない酒宴でさわぐことがなくなったのが、大変寂しい、今日このごろの僕です。皆さん、もっと酒を飲みましょう。恐ろしいことは、もうしませんから。

兄を観察した結果を二、三報告してみたいと思います。

一つ、機嫌の良い時と悪い時の差異が如実であること。前者の場合、目がニコリと笑っていますが、後者の場合、口がへの字に曲っています。馬上では、口はへの字ではありませんが、視線が定まらないのでどちらも言えません。当番の時は、一般的に後者のようです。

当番の時は、ほほえみを絶やさずに //

一つ、兄の口からふと漏れることばの実にシビアなこと。真をつらっているだけにつきいのです。

一つ、ゲップ多発性。ところとき構わず、相手構わず。Ladyの前では慎んで欲しいものです。

ついに兄も「仏」から「鬼」に変身したようです。今年は、ハイ・エイムに乗っておられますが、転倒にはくれぐれも注意して下さい。

おお、何とたくましい人だろう。その外観、その顔つき、その言葉、そしてその生活力。そうです。兄は、男の目からみて、(女の目から見たらどうかわからないけれど)どこかひかれる所があるのです。大酒飲みで、大めしぐいで、無宿者という感じですが。でも憎めません。

兄の馬上での姿は武者という感じですが。その安定した騎坐には定評があります。最近はいエイム、北美の両方の調教をしておられます。また、飼料という役職に、畜産の学問的知識を生かし、每晚一杯やりながら考えておられるようです。

山川 恵 姉

三年目

単純、明朗、丈夫で長もち、とは一年目のときに書いた自己紹介であるが、この二年間でどういう変化が起こったか。「単純さ」、これは変化しうるものなのか。しかし、一年目の時の単々とした楽しき日々比べると、要ることも要らぬことも少しはゴチャゴチャ考えるようになった。額にしわをよせ、ウーン、ウーンと頭の中でどうなっている。しかし、いささか背伸びをしているもよりもなきにしもあらず。「明朗」これは大学一年の時の新鮮さも色あせてきて煤けてきた感じ。「丈夫」「長もち」こっちの方は、たいした支障もなく、いたって丈夫に、これからも長もちしうだけれど、でも、こころで新鮮な空気を吹き込まないと頭の奥は、くたびれかかっているようだ。

全く頭が下がる思いです。彼女には。どこからあのスマートで華やかならだからあのエネルギー的なバイタリティが溢れ出るのですか。北離(明2才)相手の格闘で、生傷の絶えない彼女ですが、

勇敢にも奴に立ち向い、遂には、制してしまふ迫力には、誰しもが
圧倒されるのではないですか。

彼女の特異性は数々ありますけど何と言っても、自転車ですね。
学内でも、季節、天候も問わず、自転車で活動する女性は、珍しい
ですね。いつぞやは、暗い雨の中、車とけんかして、愛車をひん曲
げられ、己の頭脳まで狂わされたのですが、いつの間にか、いつも
のように、練習後、風々と雪のエルムの彼方に漕ぎ去って行く彼女
の姿が、復活しているのです。パンク修理などは、実にうまいもの
ですよ。

ちよっと男性的イメージが強いようですが彼女は、ちゃんと女で
す。腹を減らして訪ねれば、メンも食わしてくれるし、スカートだ
って持ってますよ。でも欲を言えば、二十才過ぎの女性なんだから、
可愛いだけでなく、もっと色気出して欲しいですね。

姉はとっても子供っぽいところがあるのです。一年生のいたずら
っ子が遊んでいると、近くで見守っています。「山川さん、い
っしょに遊びませんか。」と誘うと、目を輝かせて「やってみよう
か。」と言って仲間に入り、いっしょにはしゃぐのです。また、す
ごく負けず嫌いで、作業でも何でも男子と同じ事をするのです。ラ
ンニングでは負け人人も少くありません。今年は四年生、ますます
がんばって下さい。

笠間 淳子 姉

三年目

もう、三年間が過ぎてしまった。まともに乗れるのはあと半年。
がんばらねばと思う一方、早くおわってほしいとも思う。何かにせ
きたてられて過ぎてゆくこのごろ。でも、ちよっと待って。もう一
度最初のあの新鮮な気持ちに戻れないものだろうか……。

論理的思考に長け、信条を持ち、心の強い女の子です。向上心が
強く、為に冒険心も有り。一方では女の子のやさしい面ももちろん
持ち合わせているのです。あまり悪口は書けないからねえ、でもこ
れほど。

北日学での風間VS笠間の女と女の壮絶な戦いは、実に見ものであ
った。結局、濁点の差で負けた(?)のだが、あの時の姉はまさに
凛々しかった。関東女子では、張り切り過ぎて、腰の骨にヒビが入
るほど。でも、今は治って元気に練習に励んでおられます。姉は、
山川姉もそうですが、「締まっている」という感じで、時には鬼に
思えることもあるくらい。いつもは、やさしい女らしい人です。

岩田 正勝 兄

二年目

北海道の自然にあこがれては来たものの、毎年、冬のきびしさに
負けているアカンタレなのです。子供子供と思っているうちに二十

も過ぎ、酒も煙草も覚えてしまい、一体どうなることやら。一度でも、冬を楽しく過ごしてみたい。

入部してきた当初は、長髪でサングラス、おまけに奇妙な関西弁ちよっとツッパツタ感じの男の子だった(?)。そうですが、今では信じられないくらい髪を短かく刈り込み、銀縁の眼鏡なぞかけて大中にイメージチェンジをしております。中味もだいぶ変わったのでしょうね(?)。

思ったことは、飾らずばりと言う方なので多少きつくて、勝手な様にも見受けられます。でも本当は繊細で、優しいのでしょう。そう信じていますが。

神戸出身、関西弁をしゃべりまくる兄は、とても陽気な人です。また留置だと、くやしそうに言いながらも、少したてば、また陽気にしゃべりまくっているのです。そんな兄も、もう鬼の三年目。下から、がなりたてる日も近いようです。

兄の私生活

きれいな好きさなようでもあり、無精でもある。兄の所に飯を食べにきてまず皿洗いをさせられているある一年目の言。「飯を喰うということは大変なことなんだなあ。」料理は、うまいが、もとでに困窮し、最近では、隣のS兄にならって、のりの佃煮、マーガリン飯の回教が増えてる。最後に一言「ひもじいねエ」。

木村憲子 姉

二年目

運動部とはとても言い難い肉体労働的馬術部に入って、早二年が過ぎ去ろうとしています。「ねむい、ねむい。」と思っているうちに、自分を見詰める暇など見出せないうちに月日が経ってしまいました。

馬のあの澄んだ青い瞳に魅せられているうちに、咬まれもし、踏まれもし、ひきずられもしました。馬と戯れているだけで満足だった私も、そこから少しずつ抜け出さなくてはならないと思う今日此頃です。

黙々と練習に励まれ、単々と作業に取り組まれる姉は馬術部に欠かせない人です。作業という地味な仕事を通し、姉の「まじめさ」がクラブにいかんなく発せられていると思います。

彼女に「とり」はタブーである。

ハトポッポなどつきつけようものなら、最近のオカルト映画そのものの絶叫が楽しめる。ヘビ・カエルならいざしらず、「とり」であることがみそである。

そのくせ肉ならなんでもないとこのだからどうなっているのかよくわからない。

ひとたび馬に跨れば、脚の長さもさることながら、その柔軟な騎乗ぶりは群を抜き(?)、野郎どもの心胆を寒からしめるものがある。男であれば、二年目のエース間違いないのだが……………

どことなくピントがボケてる気がしないでもないが、女子部員の中では近年になく(?) 気立てがいい(ホメすぎて手がふるえる)

龍華聡之兄

二年目

いけない！これではいけない！

長い髪は部内第1位か!!というウワサも耳にいたします。後ろ姿は、細っそりとした身体にかぐや姫の様な髪。繊細な神経とデリケートな心、そして優しさ。何故か、クラブ内の女の子よりずいっと女っぽく見えるんです。気怠い様な大阪弁と、一見ソクラテスかプラトンか!!という様な表情。いやいや一見ではありません。兄は常に真剣であります。考えすぎるくらい考える人、とにかく、衝動的行動のとり様を兄ではないと思っています。

龍華さんは知る人ぞ知る競馬狂。札幌競馬場へ一諸にバイトに行った時も、閑だったのでいろんな人も賭け(夕食などを)たりしている。しかし、そういった反面、龍華さんは優しい人だなど思う。あるちよつとやっかいなことがあったときも、自分のことのように気使ってくれた。男は優しすぎるぐらいの方がちよつどいい。

マキシム

中島孝幸兄

二年目

常に追いたてられながらの生活ではありませんが、蹄跡もこれで二周したところです。今、鏡の前を通過して、横目で自分を眺めて姿勢をどうこう言うよりも、普段から拳は立てて、背は伸ばしていたほ

うがいいのです。

名寄産、L型、耐寒性大、耐久性大、耐アルコール性小、音声柔らかく、言動慎しみ深く激せず、動ぜず……。なあんていってると悟りきった聖人君子みたいだけど、蓋をあければ玉手箱、煙にまかれただけだった、てなことにもなりかねない。しかし、2と3本、いや5と6本抜けたところが人間臭い。

これが道産子かと思われるようなおおらかさを持ち合わせているが、それは、良く言えばであり、実際か、悪く言えばか、少々、いや、あちこち、空白の部分が多いようである。

道産子は道産子でも、超極寒の地名寄産のためか、寒さにいじめられ、ふだんは硬派で、えらく無表情、冷酷さを呈し、何を考えているのか、わからない面もある。しかし、酒の力には勝てないようである。

一見大人(老けた?)のようで、アグネス・チャンが好きなどころがあり、そうかと思えば、どんな顔をして見るのか知らないが、ボルノ映画を鑑賞するとも言われている

浪内陽子姉

二年目

ナンジャクッ子 パートII

運動神経のニブサは天下一品、入部当時某兄に「おまえの運動神経はマイナスに傾いている!!」と言われた事、つくづくと身にしみ

て感じています。実習へ出るとい、つちゅうま、えの看護婦の顔してはいますが、実は本人、内心は自信ないのです。しかし、そこは患者さんに不安を与えてはいけません。自信のない事でももう100べんも経験している様な顔をして、やっています。将来の事考えると、「これでいいのかしら!」もと勉強しなくちゃあ」と思うけど、やはり睡眠には勝てません。テストなるべく一度で通りたいとは思っていますか……。

この頃、少しは遅くなったかな?!と思うけどまだまだナンジャクツ子。筋無力症かなあ?!自己嫌悪。

みなさんに負ぶさっています、もう少し負ぶさって行って下さい、お願い致します。

昨年、岩見沢で行なわれた公認大会でのコンパでは、はでに飲み狂った末、正体不明の典型を身をもって示してくれたものだが、最近は何やら色々考えてる様子で、なかなか、オッカナクだった。

二年目の中で最もシビアである。

姉は北大看護学校に通っておられ、又馬術部に於いてもその知識を利して「薬品」の方を担当されています。時々ボカもされる様ですが、芯はしっかりしておられ、すごく親しみの持てる先輩です。

第一、姉がいるかぎり、我々は安心して落馬出来るんですから。

三好功悦兄

二年目

すべての感情を、しょっぱい水で胃袋に流し込んで、消化不良を起した時、こんな顔になるのでしょうか。

坊主頭に黒ブチメガネ。これが兄の定着したイメージである。文学部社会学科。クラブにおいてなにかとやる事の好きな兄である。兄は一年目を除けばクラブで一番若いのですが、最後にひとつお願いがあります。あまり年の事を言わないでください。傷つくのです。

二年目男性陣で唯一の学部生。佐野兄、島村兄、北隼とのカルテット。リッターワー講読会主催。カメラを手に走りまわる文化の花形(?)。

しばしば、軽蔑を含んだような笑い方をするために、少々敬遠しておりました。が、私にも人を見る目ができてきたのか、もともと深い所にある何かに気付きかけているようです。それが何なのか……これから発見の喜びを味わうことになるでしょう。

兄の煙草の吸い方はなかなか素敵です。

太田敬兄

一年目

前撮きを初めて見て、馬の愛らしさを垣間見た気がしたのは、皁月賞のパドックのギャロップである。オークスシャダイターキン

が駆けていくのを、妙に閑散とした府中競馬場の金網越しに見ていた。そして傷心のタマアラシの馬房の前に立ち戻し、彼の舟揺すりを眺め、タニノムーティエのダービーの追い切りの朝には、何かの予感に満ちた五月の大きに思わず哄笑。天皇賞には、銀否の黄金の落葉を踏んで、その向うには樺の並木が漆黒に沈み、リニューズキ、マーチスが頸を伸ばして回る。かくて僕に於いて世界は動かず、時世粧いを知らず、ただレースと共に季節が深まる日々。

しかし、全ては彼岸に属していた。僕は「トロッコ」を眺める少年のように、馬達を眺めていた。

僕にとって「馬、この神的な生き物」（三島）は、この上なく美しく、この上なくはかない、浪漫的なものとして確かに存在したが、決して近づき得ない、決して触れ得ない、その意味であのアイデアという存在に極めて似ていた。コミットの道は、東京スポーツ、競馬週報、Blood and Breeder's Review……………。

ところで、初めて馬術部へ来た日、北勇に寝わらをかけなさいと言われた時から、その世界に突然、僕は触れることを許された。そしてそれからは語るのも憚られるような至福の日。あの生き物は、僕の手から餌を食べ、おしりに体温計を入れられる。その世界の門戸はこんなに容易に開かれてよいのだろうか。僕はブラシをかけ、脚を入れ（ああ、畏れ多い）あまつさえ蹄鉄検査。夏の札幌で、僕は、Tポイ、Cカイザー、Kブラヤオーの左前後肢に触れ、その蹄鉄を検査するという信じ難い幸運に遇った。これ以上の光栄は、ダービー馬にまたがり府中コースを一周することしかない。そしてそのことを想像するだけで僕は喜びに狂うのである。

大の競馬ファンが一転、今度は騎手となった。兄は○オであるに

もかわらず、実にお若い。兄はいつも実に楽しそうである。学祭では「ひづめがとある」の大干板をサラサラッと描き、夏は「三つ目がとある」のTシャツを着て（これが似合うのだから、やはり若い）競馬場のバイトは勿論大張り切り。日高合宿では、牛追いをカウポイになったつもりでやって、秋の七帝遠征では、馬事公苑での騎手学校の朝練を興味しんしんで見ていた。そして今は、トウシヨウポイ（凍傷BOY）になりながらも、北の果てからシッココ通ってきている。この一年は、兄にとって有意義であったことだろう。とにかく、一緒にいると、こっちまで楽しくなるような人です。

久びさの大人が入部致しました。馬券を買って捕導されなければよいのですが、新聞に名前の載る年令ですからからお心配です。彼は久びさの医進なのです。体は堅いのですが、人当りの軟らかい好青年です。期待してます。

国 枝 保 幸 兄

一年目

「北大に馬あり」という言葉にひかれて入部。なかなか、否、とてもしんどいクラブですね。顔に似て力弱いのでこの一年のつらかったこと。「もういやだ。もういやだ。」と思いつつ一年がたつてしまった。振り返って見ると楽しいこともあったけれど。今ではかなり慣れてきたようだ。苦しみを喜びに、涙を笑いに変えながら、続けていこうと思つて居る今日此頃です。

初めて見たのは半沢杯の時である。

ペローとしたやつだなあと思った。次には不覚にも彼の後ろ姿を女子部員と見誤まった。最近「こんにちには」へ、ピザトースト＋コーヒーを食べに行く。彼の中核は、構築的、物質的な、(原理的、直観的)対比する意味で)傾向である。馬場でも作業でも料理でも、一片づつ処理して完成を目ざす。或る日突然成就するのではなく、曲折を厭わぬ確実な上昇がある。だから何事かを安心して任せられる。こう書くときまるで期待される人間みたいだが、現物は、チョンと登ました少年なのだ。

国枝君、君には次の言葉を贈ろう。

「それに触れてはいけない。彼の上昇の存在なのだ」

一見軟弱そうで、実際にもたくましいとは言いかねる。でも体力の分は頭脳と精神力で。何といっても医進ですから。馬術においても人一倍考えているようです。でも考えているだけでは何もできない。何事も、まずやってみること。体力なんて、これからつけるのです。若さあふれる行動力に期待したい。

島村 努 兄

一年目

自己紹介なんてとても書けそうもない。でも、立場上、書かざるをえないから書きます。何もやらせてもらっても、どうもうまくいかない。生まれもっての無器用で、失敗ばかり。でも、何回か繰り返せば、できるようになるつもりです。どうか、こりずに相手になってやって下さい。中学・高校とやっていたスポーツとは、まったく正反対な馬術部に入部して、もう八ヶ月。馬術に不似合いな体を使ってがんばっています。何一つ満足にできません。

出身||埼玉県都会地方

スポーツ||馬術、柔道

役職||北牟のサブ(一月現在)

趣味||写真、いも虫旅行

性格||優しく、ロマンチスト

(うそと思う人は、僕をよく知らない人)

好きなおかず||のりのつくだけに

外見を、一言で表わすと「こまわり君。」顔は大きく、目は細く、胸は太く長く、足は短かく太く。でも、いやらしさはありません。粹質、そのものです。

中学、高校と、柔道で鍛え抜いた剛の者かと思うと、部屋に小鳥を飼って、自分はお茶漬けでがまんしても、餌を与え続ける優しい心の持主です。

学業においては、普段の理知的思考能力の欠如の表れとしか思えない言動とは裏腹に、部内にも数多い獣医志望者の内、実現できそうな数少ない者の筆頭として、頑張っているのです。

そして最後に、部内においては、なんと、仏の顔に身を陰した鬼の部報委員長として君臨し、皆をジワジワと苦しめているのです。

アナ、オソロシヤ、オソロシヤ

彼は外見と中味が全く違う人間だと思う。というのは、彼は、あ

の顔、中年ぶとりの腹、短い足に比べて、意外や意外、とても純粋で優しいのである。例えば、競馬場でのバイトの時、ある馬が傷をし、殺されたという話を彼は目に涙を一杯浮かべながら話してくれたことがあった。彼はそういう男である。

中島 哲彦 兄

一年目

「自己紹介」と言う言葉のニュアンスって、何だか笑わせよう泣かせようとしているのが見え見えの、全然まったく面白くない喜劇を見た後の「かったるさ」と似ているみたい。得体の知れないはずかしさや諦念が襲って来たりして……。

餓鬼（北騮）が大好きで自分を主人だと思っているのだけれど、本当は、いつも遊び相手にされている迄なのです。いくら低い鼻の下にチョビヒゲをばやしても、気取って煙草をふかしても、餓鬼の前では型無しです。

「函館に行く時には一緒に連れてお行きなさい。遊び相手が居なくなっちゃ淋しそうだから。」

彼の風貌、身なり、住居を見てごらんなさい。よく見なくたっていいのです。すぐわかるから。親しみやすく、どこか、おいどんのような雰囲気があります。彼の住居、ポロ北荘へ行ってごらんください。サルマタケが生えていそうです。でも彼を見くびってはいけま

せん。ヘルメットをかぶった馬上での姿は、精悍で、きまってるのです。そして見かけからは想像もつかない知識人なのです。彼の恋人？は北騮。馬場で、北騮と遊んでいる彼。その姿が、彼の外面と内面をよく表わしています。

成田 慎 二 兄

一年目

札幌に自宅がありながら、自炊をしている変わり者です。小生のことを、酒好き、コンバ好きと言う人もいますが、それは大きな誤りです。世の中で酒と女ほど恐ろしいものはないと常に考えているのです。でも、何事にも立ち向って行くという勇敢な性格を持っている宿命で、いつも、「今日こそ飲み勝ってやろう。」と思って、いどむのですが、酒に飲まれているのが現実です。だからあれは、好きで飲んでいるわけではないのです。この場を借りて釈明させていただきます。

一見、なよなよとしているようですが、作業となると断然はりきる、さすが日本男児。お酒に強いんだか弱いんだかわからない。飲むほどによく喋り、よく笑う。だからそばにいととも楽しいのです。

兄はよく女の子の間違えられます。入部して初めての部員総会の時、（この時、兄は入部したのです。）隣にすわっていた、ある純

情な部員は、女の子と違って、緊張したとか。しかし、内面は、非常に強く、たくましいのです。特に馬術に対する情熱は、ものすごく、馬術部にとってなくてはならない存在です。兄のこの一年間の生活は、馬場と下宿の五百mの距離を往復するのみだったようです。今年こそは、講義にも顔を出した方がよいのではないでしようか。また、兄は、女の子のように、まめな男です。部屋はいつも整っていて、料理もうまいようです。腹をへらした部員は兄の所へ行きましょう。

兄の趣味は踊ること、歌が聞こえると、もう大変、特にピンクレディの大ファン。キャーキャー奇声を発します。

西川理一兄

一年目

クラブにおける自分を考えた場合、今の状態というのは、まったく、中途半端だなと思う。どちらかと言えば、出ないときの方が多いような今の自分を紹介することは恥づかしいこと以外の何ものでもない。もし、来年しぶとく、また自己紹介を書くことがあったなら、その時こそ、自信を持って書けるようにしておきたい。

大勢いた一年目も少なくなり、体力で勝負できそうなのは、彼と吉田姉だけとなってしまいました。

発達した目の上の骨と顎を持つ顔は、栄養失調のアントニオ猪木を思わせます。

事実、よく格闘を繰り広げます。おかしコンバの時、恵迪裏で一人、地球を相手に飛びまわり、翌日、保健管理センターに、生々しい傷だらけの顔を、なんのためらいもなく平然と晒し、要人を震えあがらせたり、皆尻込みをする、ガキに、デス・マッヂをいどみ、結局、顔中血だらけになって一言「チクショウ」とうめきながら部屋に飛び込んできたり……………。

しかし普段は、信じられない程温厚な好青年なのです。今年一年、体力に物を言わせて、頑張ってください。

奇人・変人の多い部内ではかなりまともな方です。そして、うらやましくなる程潔癖。いつも理想に近づこうと努力しているのがわかります。でもあんまり無理をしないで下さい。

日南田 ゆり子 姉

一年目

幼くて甘えん坊で、ドジで間が抜けてるんです。こんな私ですから、地元のを生かして夏冬の休みにシッココ通ったかいあって鞍数は多いほうですが、実力がそれに伴わないのです。しかし、メゲずに続いているのは、根っから楽天的な性格のせいかしら、とも思います。食いしん坊で、帰省組のお土産に舌鼓を打つのが楽しみです。いつまでたっても大根足のまんま。今年こそは、スマートになつて、おんまさんに楽をさせてあげたいな。

少し離れた大きな目、厚みのある大きな口、それほど高くはない鼻、一見ちぐはぐな様だけれど、アンバランスの美と言うか何となく愛着のわく顔、それが姉である。おっとりしていて、どこか抜けている姉の趣味は料理、特にケーキ作りにおいては名人の域に達しているのです。そこで要望、これからも、もっとクッキーなどを焼いてさし入れてください。

水島 洋子 姉

一年目

気の向くままに行動し、理性がないというか単純というか、感情をすぐ表にあらわす方ですね。先輩、同輩の皆様には「とびおり」「とびのり」の号令の際たいへんご迷惑をおかけしております。

丸顔にクリッとした黒い瞳。小粒でかわいらしい女の子です。馬の背にちょこんと跨っているようですが、馬上でのフアイトはなかなかのもです。ライト嬢の曳馬も、二人で息を切らして帰ってくるので、どちらが曳かれていたかわからないみたいですが、四年間もこのクラブで過ごせば、いやがおうにもたくましくなります。

実に童顔。外見上は、何才にでも歳をごまかせそう。しかし内面的！と言っても馬術部と言うかぎられた所での君しか知らないんです。がーには、気の強い一面を持っている様です。全くの誤解かも知れないけど。ニヤニヤ笑っているだけが「水島洋子」でない、そん

を感じがします。

吉田 円 姉

一年目

もうすぐ、はたちになります。
すてきなこいびとがいてもいいころだろうと、おもっているのですけれど

急募 炊事洗濯掃除の好きなかわいいお嫁さん求む。

割と芯の強そうな人である。絶対の自分を持っているようである。その反面、それ以外の部分に対してはどうでもよいと割り切っているように見える。何かに酔う（自分がなくなるほどに）ことも必要じゃないかな。とにかく頼もしく強い女の子である。

○全身所見 体軀の発育良好。やや大柄。どうにかY体。まとまった身体である。

○局所々見 特になし。眼鏡使用せず。髪、軽くウェーブ（パーマかどうかは不明）丸顔。鼻にぬける声。

○疾患 皮膚細胞の低温感受性が高く凍傷になり易い。足指部重度凍傷は完治したもよう。冬期末梢循環の促進に注意を怠ると発症の恐れ。

○内面的所見 脳細胞の発達程度はかなり良好。その発現結果とし

での成績優秀。高度な目的意識を持ち、大動物臨床獣医を希望。知識の吸収と経験に努む。周囲の要求はよく受容し消化する。人当り良。

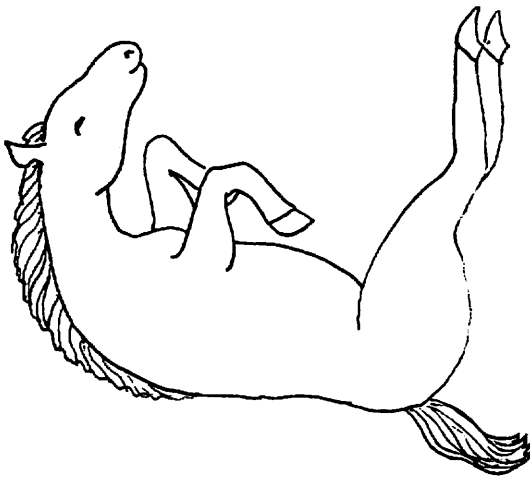
。総合的解析

決局、馬鹿な娘。

しかし、バイタリティー溢れる娘。

やっぱり、男でない娘。

でも、いい娘。



馬のひとりごと

天 龍 山

僕の自慢は、ネヴァービートの子という血統と、ひたいに光る星です、ゲブ。好みは少しかわってまして、ライトのような美馬はあんまり好きになれないのです。むしろ騎馬の方が……。のんびりしてると言われますが、割とデリケートに出来てるのです、ゲブ。体の方も少し自信があつて、手入れが良いと、まばゆいばかりに黒々と光るのですが……。ゲブ。先程からのゲブというのは私の癖なのでお許し下さい。この為に、いつも首輪をされて、もう首の回りがかゆくてかゆくて。ついつい頭を下げて、かいてもらうんです。だから、私が頭を下げて、卑屈なゴマスリ馬だとは思わないで下さい。本当にかゆいんですから。反対に、私は他の馬のようにガンカツ飼をねだったりしません。

ハ イ エ イ ム

あたしエムンチョ。オーストラリアから、やって来ました。やつと寒い冬が終わって助かりましたわ。あたし、デッチョさんみたいにも深くありません。吹雪だっていうのに、朝五時から出されるのは、たまりませんの。

あたし、ちょっぴり 気が強い。だから厩友とは、あまり馬が合いません。あたしのグラマーを胸、尻を見て、みんなひがんでるんです。デッチョおぼんなんて、ひどいひがみようですわ。あたし、可愛い所たくさんあるのよ。あたしの寝顔なんか、チーフ、サブの人たちの人気のまよ。可愛いらしい少女を連想するんですって。

あたしの一番好きな時はネ、昼寝している時と、ごはんの時よ。ごはんの前はネ、つい気が立ちやちやちやって、そこらじゅう、けりまくっちゃうの、ゴメンナサイネ。生きてるのネ。

一番、生きがいを感じる時はネ、やっぱり高い障碍をとんだ時よ。今年けきつと、皆さんの期待に答えて、がんばるワ。あたしの脚力を使ってネ。

北燕「純粋馬性批判」序説

第一章

私が表題の論文を完成するに到った、あるいは主観によらぬ本来馬性の解析に成功するに到った事情は、私の生い立ちに大きく依存している。私の半生を語るることによって表題の論文の概括たりうると思ふ。

私が若し父からあの四角な腰と広い胸を受け継いでいたなら、「サラブレッドの宿命」というやつで、白い埒に囲まれた楕円形のターフを駆けていたに違いない。しかし、今にして思えば幸運にも、私は仲間達と競い合う必要はなかった。私はテストに合格しなかったのだ。不合格が死を意味するかも知れないことを予期して、あらん限りの力で駆けたにもかかわらず私の力は及ばなかった。恥づかしいことだが、その時私は、私にとって今や最も基本的なテーゼである「ひとを憎んでうまを憎まず」とは似ても似つかぬ感情をいだいてしまったのだ。強い仲間がうらやましかった。美しい仲間が大きく見えた。私は寂しかった。

その後私は暫く牧場にいた。何故殺されなかったのか不思議で

あったが、思うに私は殺すには余りにも高価だったに違いない。

そしてそのあと、私は「ひと」を知り、「うま」を観て、この論文を執筆することになった「北大馬術部」へ来た。初めはこの人間達が今までの牧場の人間達とは種類が違うことに気付かなかった。それ故私は恐れ続けた。そうなのだ、正に私が（あるいは「うま」が）恐れるものは人間しかなかったということ、今、断言することが出来る。唯、当時だいていた恐れとは全く別の意味においてではあるが。要するに、この観点からすれば、前言とは矛盾することになるのだが、北大の人間も牧場の人間も大した違いはないのかも知れない。

さて、ともかくも私は日々、人を背にのせて走ってきた。また、食って寝てきた。そして、観て考えてきた。最後の2つを除いては（あるいはまさにその2つのことのために）私の振舞いは大袈裟で、素直なものと写ったことだろう。今、私は、本能と「ひと」には逆らわない積りだ。今では、「ひと」に対して有難いと思うことすらある。これが私だ。

スターライト

某日深夜、スターライト嬢に独占インタビュー。

小生 最近調子はどうですか？

ライト嬢 調子というと？

小生 つまり、体の事です。

ラ嬢 女性に体の事を質問するのは失礼ですわ。

小生 謝りながら用意したポケットの燕麦をひとつかみ出す。

小生 現在コンビを組んでいる長屋さんはどうですか？

ラ嬢 駿人間ですわ。

小生 せっかく気が知れても一、二年で相手の人間が変わって

っちゃあなたも大変でしょう？

ラ嬢 ええ、でもこれも雌馬の宿命まんなと思ってあきらめてるんです、

わたし。

小生 性別は関係ないと思うけど……

——カ——

小生 昨年の試合の思い出を何か。

ラ嬢 バジコーエンの芝は排気ガスの臭いがしてまずかったわ。

小生 ……………

ラ嬢 そうそう、聞いて下さる？ たしかサガコクタイとかいう所へ行った時ね、ヘンな人間が「馬と美少年か」なんて私達のことを評したの。競技中にそれが聞こえた時私どきっとしてあやうくバレーを落す所でしたわ。だって、おにあいの夫婦（ポッ）なんて言われたよりなものなんですもの。そう思いませんか？ でもどうせなら「駿馬と美青年」と言ってほしかったわ。ナガヤサンだって「美少年」では不満でしょうし。それには、ナガヤサンてね、うふっ……………

——カ——

小生 僚友とはどうですか？

ラ嬢 あんまり馬が合わないんです。わたし悍わんが強いから。それに

たいていみんなヘンな癖があつて……………

小生 たとえば？

ラ嬢 エムン子さんなんて美容にいいからといってポロとネワラを

ねり合わせたのを顔にぬりたくったりして。馬糞バックとか呼んでいましたわ。それからこの馬房の配置になってからテンちゃんとツバメ君がうるさくて、ほら、馬房が真向いでしょ、その上趣味が同じときて、毎晩「ウーッ、ウーッ」って。時々朝まで何回できるか競争なんかしてるんですよ。それからねーえ、

—————カ ャ ャ ト —————

小生 全日本優勝の時の気持ちは？

ラ嬢 そうね、タンビンドラドラハイテイッモって感じてしたわ。

小生 役満の感じじゃないんですか？

ラ嬢 それにはやっぱり全日学で団体優勝しなくちゃ。

小生 今年の目標は？

ラ嬢 チンロートーをあがること

小生 ムッ／＼

ラ嬢 ジョーダンよ。結果はともかく全力を尽すのみです。

小生 最後に一言。

ラ嬢 エンバクくれ／＼

疾 風

ぼくの名前は疾風。みんなからは「トキ」と呼ばれています。また、どういうわけか「ペロペロキャンディ」などとも呼ばれています。ぼくとしては、ペロペロなめるのは、えさが欲しいのと、親愛のしるしとしてやっているのですが、馬術部のみんなは、なにかぼくをおもちゃと感違いしているのか暇つぶしに遊んでいるみたいで

す。

今ぼくは去年に引き続き四年目の本城さんに世話してもらっています。ぼくは馬一倍憶病なので、曳馬なんかでもすぐ驚いたりするのですが、本城さんはやさしいので、細かいところまで気にかけてくれるので、安心して外へ行けます。しかし、かといってあまり、本城さんに甘えてばかりではいけないとも思っているんです。去年は、憶病なのと甘えとあまり華々しい成績をあげることにはできなかったけれど、今年の本城さんのためにも一生懸命がんばりたいと思っています。

ドンホッパー

昨年は、全国縦断DonnerHopperワンマンリサイタルを見事に成功裡に終了させ、増々DonnerHopperの名を高らしめた。帯広に始まり佐賀、東京と巡って来たが、数名の伴をつれ車で日本を旅するのも楽しいことである。今年も頑張って色々な土地を見て歩きたいと思っている。将しくDISCOVER JAPAN馬でも私ぐらいの知性派になると、遠征してもその土地土地の文化や風土を研究する様になる。例えば、佐賀でコソソリ人の目をごまかして飲んだシューチューがうまかったとか、服部乗馬クラブから貰った乾草は珍味であったとか……。今年も十和田へ行くのと聞いているが、ヒメマスでも食って、時間があまれば秋田県へ寄り、秋田おばこを見物し、出来れば桜田淳子のサイン等ももらってきたい。何か、わけのわからん自己紹介になったが、最後に一言だけ述べしておく。

巷では、私のことを「助兵衛」な馬だと言う人間がいるが、それは誤解である。私の美しい肢体を見ると、女性の方から寄って来るのである。ウンだと思ふなら羊子に聞けばいい。おそらく自分がもてないから、そんな陰口をいうのだろう……ウシン……。



羊 蹄

昨年は、色々私の一人息子北騷が御手数をかけてしまって、どうもすみません。今年は一層手がかかるかと思いますが、どうかよろしく御願ひ致します。この紙面を借りて一言御礼を述べさせていただきます。

さて、困ったワ。部報委員長から自己紹介を書けと頼まれたりして。私みたいな、内気で甘えん坊の女性には、とてもじゃないけど自己紹介なんて書けないですもの。まあ、見ていて下さい。今年には母としても頑張らなければならぬ年ですから。

北 騷

……不平不満ブツブツ……

大体、人だって馬だって育ちざかり遊びざかりってものがあるんだ。そんな時は、同じ歳頃の仲間達とはしゃぎ巡り、追っかけっこしたり、じゃれあつたりするんだ。でも僕には遊び友達がない。生まれて以来、北大の馬場しか知らず、そこにはほかの仔馬なんて一頭もいやしない。仲間がいたらなあ、とつくづく思う。人間と遊んだって、ちっともつまらない。考えてもみたらいいさ、人同志でずもりを取っても何も起こらないが、人とネコがずもりを取ったら、ネコは死んじゃうよ。馬と人との力関係は、人とネコのそれと同じなんだよ。その上仕末の悪い事に、人間は自分に不都合な事は総て馬の責任にして、蹴ったりなぐったりしてくるんだから。全く厭になつてしまう。仔馬同志がじゃれあつてるのを見て「ほほえましい」等と言っておきながら、同じ事を人間にすると勝手に怒りだすんだから。あーあ、僕だって、同じ歳頃の仲間達と広大な草原で、思っきり遊んでみたいよ。

……だけど……

僕だって、今はやんちゃ坊主と嫌われてるけど、今に見ておれ僕だって、天下の駿馬になつて、人間達をびっくりさせてやるんだ。僕、コッコは、強いんだから。

北 楽 院

初めまして。僕の名前は北楽院、去年の五月に入院しました。北楽院で何か年よりっぼく聞えますが、まだ六才の青年です。趣味は、かむ事、人でも木でも鉄でも、近くにゐるものは全てこの対象となります。でも、これは悪趣味だと評判が悪いので、最近、御機嫌

をとろうと、さかんに「キス」をします。これは、女子部員の中では、なかなか受けているようです。性格は、強情、でも食べ物を見せられると決意がゆるぐ欠点もあります。人を見ると「ブヒヒーン。」といなき、燕麦をねだり、もし燕麦がないとわかるとすぐスネルあまえん坊です。

北 稜

去年の秋に引っこしたばかりで一番 new face だから、小さくなっているだろうって？とんでもない！そりゃあ初めは私もちょびり戸惑ってたからなじめなかったけど、今では気ままにくらしているわ。

私、毎日思っているのだけど、皆、どうしてあんなにのんびりと食事するのかしら。あんまり時間かけてるから、見るとイライラしてきちゃうのよ。きつと、量が多すぎて食べるのに苦労してるのでしょね。だから、いつも手伝ってあげることになっているの。それなのに、横取りするなんて悪口言われて、その揚句に最近は、わざわざ食事を済ませてから馬場に出てくる馬までいるんだから。気分悪いたらないわ。

自分で言うのもなんだけど、私って、駿足だし、誰かみたいにみじめっぽい泣き声あげたりもしないし、それに、とってもきれいな好きなの。私がきれいな好きなのは人間も知ってるらしくて、私の部屋は、毎朝ちゃんとそうじしてくれてるわ。他の馬達は、あんな汚ない部屋で寝るから体がベタベタ汚れちゃうのに、皆平気な顔してて、見ちゃられないわ。私は汚ない所で寝たりしないから、ちっ

とも汚れないのよ。清潔はいちばんのお洒落ですもの。ただ、それを認めてくれる人が少なくてちょっと不満だけど。

私の性格は、寝糞を食べるのが好きなことや、夕方に散歩の嫌いなことだけじゃないっていうこと、わかってもらえるかしら？
だあれ、ぜんぜん信じないで笑っているのは？

北 美

私、北美。通称メールと申しますのは、もとの名がメールエクスプレスという、いかにも走りそうな名だったからです。今の私は、名前からして、美しいでしょう。長身の美女ですよ。歩き方も、どことなくしなやかで、飼い付けの食べ方も、上品ですよ。（何となく、お高くとまってるみたいになってしまった。馬になりかわっての紹介ってのも楽じゃないねエ。編集長殿）山本兄のご指導のもとに、北大馬術部の未来の栄光をしょって立つべく、私頭張りますわ。皆さん、よろしくね。

北海道大学馬術部名簿

歴代部長

氏名		住所	郵便番号	電話	勤務先	電話
永井 一夫	初代部長	札幌市中央区南2条西12丁目	060	011 211-2435	北大名誉教授	
高松 正信	第二代部長	物故				
黒沢 亮助	第三代部長	物故				
太秦 康光	第四代部長	札幌市中央区南1条西21丁目	060	011 621-0781		
松本 久善	第五代部長	物故				
半沢 道郎	第六代部長	札幌市中央区北6条西12丁目	060	011 221-2286	北大農学部名誉教授	
河田啓一郎	第七代部長	// 北区北24西13	065	011 711-7470	酪農学園大学獣医学部教授	
小池 寿男	現部長	札幌市白石区南郷通8の北14	062	861-1521	北大獣医学部助教授	内5228

特別後援会員

氏名		住所	郵便番号	電話	勤務先	電話
野間口英喜		東京都杉並区永福2-36-19	166	03 321-7617	太田区羽田空港2の8の1東京 航空食品(株) 日航ホテル社長 川崎日航ホテル社長	571-4911
滝沢 政雄		東京都目黒区目黒1-1-16 目黒台マンションC-305	153	493-0741		
原島つる子		札幌市中央区北2条西22丁目	063	011 621-1451	原島洋装院院長	
庄内 貞夫		// 白石区白石中央53-3	062	011 861-2504	歯科医	

武田 忠幸	札幌市中央区南6条西20丁目	063	011 561-3286	北都ハイヤー、北都バス社長	711-7214
小野 忠	// 北区北18条西5丁目	065	011 721-1526	北大モータース社長	
片寄 暲	// 北区北18条西6丁目 静山荘	065		北大農学部大学院	
佐合 義弘	// 西区手稲西野410番地-53	063		札幌市民生協協同組合理事	
加藤 和男	東京都太田区南馬込6丁目29番-1号	143	03 751-4601	フシマン株式会社	
田中 昭志	札幌市西区琴似4条5丁目 国鉄宿舍7号	063	011 731-8489	札幌鉄道管理局	
岡沢 尹大	(在カナダ)				
柴田 好	札幌市北区北15条西3丁目 中村AP		011 742-3776	北大医学部学生	
大東美奈子	// 西区八軒8条東5丁目		011 711-5262		

後援会員 (卒業生)

氏名	卒業年度	住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話
中野友二郎	昭4 農農	東京都多摩市桜ヶ丘3丁目33の4	192-02	0423 75-8600	日本私学教育研究事務局	
平山 常介	4 工機	横浜市鶴見区獅子ヶ谷町1222の19	230	045 572-4208	日本海事業興業	
中谷 勝紀	5 工機	杉並区桃井1-15-23	167	370-3450	ヤンマー船舶機器(株)	542-0211
間 克市	6 農畜	新冠郡新冠町節婦町71-4	059-24		日高軽種馬共同育成公社 取締役場長	
岩垣 駿夫	6 農農	神奈川県川崎市多摩区生田6983-173	214	044 96-0297	本州製紙KK 囑託	
河崎 秋三	6 農畜	八王子市高倉町62	192			
藤居金太郎	7 農化	(在ブラジル・サンパウロ)			漁業	
永松 四郎	7 農畜	太田区北千束1-58-9	144	03 717-3484	永松商事	

半沢 道郎	8	理化	札幌市中央区北6条西12丁目	060	011 221-2286	北大農学部名誉教授	
武田 朝男	8	農畜	品川区旗ノ台6-1-2	142	03 781-1097	日本製酪協同組合副理事長	264-8421 ~4
東園 基文 (7主)	9	農農	目黒区五本木3-30-1	153	711-8877	宮内庁掌典長	400-0451
田畑 武夫	10	医	札幌市中央区南5条西2丁目	060	511-3733	田畑産婦人科医院院長	
植村 勘一	10	農畜	東京都世田ヶ谷区等々カ2丁目13-11	158	03 701-4826	北東興業KK取締役会長	
本田 桓康	10	工機	" 港区六本木7-2-2 ファミール六本木402号	106	405-6867	プレス工業KK専務取締役	044 266-2581
久葉 昇	10	農畜	岐阜県各務原市那加織田町148	504	0583 82-5632	名古屋保健衛生大学衛生 学部教授	
加藤 英天	11	医	清水市有東坂554-19	424	0543 45-6329		
脇田代子郎	11	農化	神奈川県藤沢市辻堂西海岸6366	251		千代田区丸ノ内三菱ビルディング 三菱モンサント化成工業KK社長	212-1570
大道 明德	11	理化	東京都狛江市覚東320-6	182	428-4817	大迫技術士事務所	480-9717
高杉 直幹 (9主)	11	理化	札幌市中央区北7条西13丁目	060	251-3720	北星大教授	
吉見 一郎	11	農経	東京都狛江市小足立620	182	489-0491	雪印乳業KK常務取締役	357-3111
渋谷 周平	11	農畜	" 渋谷区代々木1-22-10	151		東京飲用牛乳協会	
森山 武雄	12	医	青森県南津軽郡浪岡町国立岩木療養所 弘前市樹木4丁目1~1	360		国立岩木療養所所長	901-4169
滋賀 秀明 (11主)	12	医	港区白金台5-3-20	108	441-5667	大同製鋼KK東京診療所所長	
小村 達夫	13	農生	岡山市足守861	701-04		岡山大理学部教授	
山下 正亮 (12主)	13	農畜	札幌市白石区本通818の135	062	861-5667	酪農学園大教授	
石井 昌長	13	農化	千葉県船橋市夏見台町夏見台団地14-105	273	0433 62-9785	アルコール海運倉庫KK	
小笠原義顕	13	工電	川崎市多摩区宿河原2223	214	044 822-3609	旭電気工業KK取締役社長	
樋本 勝登	13	農経	東京都杉並区西荻北2の27の8ライオン ズマンション西荻第2D-608	164	395-3548	中央技能検定協会監事	

氏名	卒業年度	住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話
松平 梯	13 農農	神奈川県葵野市鶴巻963-18	257	0463 77-2116	成城グリーン・プラザ取締役	484-6781
黒沢 良雄	13 農経	鎌ヶ谷市道野辺16-1 鎌ヶ谷グリーンハイイツ48棟404号	273-01	0474 43-5147	日動火災海上保険KK顧問	
小田 昇	14 農畜	東京都目黒区上目黒3-44-19-205	153	424-8666	実業(香澄旅館)	
池内 武夫	14 農畜	物 故				
中尾 敦司	15 工鋳	船橋市西習志野2丁目23-10	274		カミタルクKK石巻港工場 取締役工場長	
西村 雅吉 (4主)	15 理化	函館市松蔭町1-3	040	0138 51-1624	北大水産学部教授 (水産化学科) 函館市港町	41-0131
木谷清喜貞	16 農実	金沢市片町2-2 20号木谷ビル	920	0762 21-5041	瓦土建(自営)	
石井 和彦 (15主)	16 農畜	鳥取市湖山町1960-158 合同宿舎RCKI-201	680		鳥取大農学部教授	
河原 清作	16 工土	物 故				
熊沢 光	16 農実	札幌市北区北13条西3丁目 公団北13条 アパート701	065	742-0392	小柳商事㈱	
関 義人	16 医	秋田県湯沢市御田地町4-18	012		関内科小児科医院	
高木 史朗	16 工鋳	茨城県東茨城郡茨城町大字駒渡1244	311-31		波崎高等学校校長	
林 健爾	16 農実	札幌市西区手稲福井49-13	063	661-9707	札幌三光印刷㈱	
半沢 宏	16 工機	// 中央区北6条西12丁目	060	261-7455	北大工学部教授	内 2191
伊関 悦郎	16 工鋳	函館市宮前町27-15	040		函館水産高校	
門池 正夫	16 農実	名古屋市千種区丸山町3-24	464		協和工業㈱社長	
福光 幸彦	17 医	札幌市豊平区平岸3の14	062	511-1843	福光延寿堂院小児科	
岡田 光夫 (16主)	17 工土	// 中央区南7条西22丁目	064	562-2223	熱供給公社	011 241-4401
石川 恒	17 農畜	// 北区北24条西16丁目	065	721-0052	北大獣医学部教授	内 5231

白取 善三	17	農実	弘前市大字薬師堂熊本9の2	038-03		津軽平川土地改良区理事長	
小林 五郎	17	工電	神奈川県中郡大磯町東町2の64	255		沖電気工業KK特殊機器開発部 次長	
山根 乙彦	17	農畜	鳥取市湯所町2の422	680		鳥取大学農学部教授	
前田 正義	18	農実				雪印乳業名古屋マーガリン工場長	
大戸 進	18	農林	名古屋南区加福町3-7	457		三井木材KK酒志野工場長	
小池 栄一	18	工土	札幌市南区南36条西10丁目	064		(株)日特建設 札幌支店長	
平井 宏和	18	工電	東京都町田市玉川学園8-18-9	194	0427 26-6231	日本電気衛生通信開発室 常務取締役	044 41-1111
安部 孝	19	工電	" 小金井市貫井北町3-19-5	184	0423 81-4100	高見沢電気製作所取締役 通信機営業部長	
坂井 弘	19	農化	埼玉県鴻巣市東4丁目51-41	365	0485 42-6533	農業試験場環境部長	
田口 暢茂	19	医	東京都世田谷区中町2丁目11-6				
稲葉 恵一	19	農化	大阪府高槻市天神町2の16の15	569	0726 5-2759	日本油脂KK取締役油化事業部長	
福岡 邦泰	19	農農	札幌郡広島町北進町4-7-3			道立中央農試副場長	
大手 英夫	19	理化	東京都新宿区西大久保2-219	160	365-4523	東邦シートフレームKK	272-2811
岸田幸三郎	20	農化	大阪市東淀川区山口町145-1	533	322-6738	自 営	
富塚 治郎	20	農畜	東京都福生市能川福生住宅537	197	0425 57-7107	東京都畜産試験場長	0428 31-2171
羽島 栄治	20	工土	横浜市港南区上永谷町4058~20	233	045 844-2861	西武建設常務取締役	03 984-3211
小林 正英	20	農畜	東京都杉並区阿佐ヶ谷北3-26-10	166	337-3196	東京都経済局農林部畜産課長	212-5111 内 2883
木全 幹雄	21	農化	東京都杉並区清水1の6-8	167	03 398-0417	防衛庁武器補給廠副廠長	
山崎 治雄	21	工治	東大阪市西堤623 狩勝工業KK	577		狩勝工業KK 大阪市城東区放出町2179	
宇津見千之助	21	農畜	栃木県小山市中央町2-6-1	323		印刷業	

氏名	卒業年度	住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話
上野 新次	22 農農	新潟県関屋金鉢山町53-1集合公舎24号	951		新潟県教育委員会指導課	
和田 晴	22 農畜	札幌郡広島町高台町3丁目6-1	061-11	467-2815	北海道競馬事務所長	
宮崎 利昭	22 工機	東京都港区高輪1-5-33パークマンション312	108		三井物産KK 開発本部海外建設部	
武田 祐幸	22 理地	横浜市磯子区洋光台1-28-6	235	045 773-1581	国際航業KK地質部長	262-6221
田之上家久	26 農水	大阪府枚方市招提194の1 牧野ハイム125号	573		日本放射線同位元素協会 大阪事務所	
後藤 義英	28 農獣	札幌市中央区円山西町2097	064	621-0962	札幌市環境衛生事業所長	
斉藤 善一	28 農畜	弘前市松原東5丁目8-14	036		弘前大農学部教授	
鈴木 敏夫	28 農畜	虻田郡洞爺村字洞爺町四町内公住	049-58		洞爺高校	
渡植貞一郎	28 農畜	名古屋市昭和区川名山町128公務員 入中住宅3-43	466		名古屋大農学部助教授	
鳶野 保	28 農畜	札幌市豊平区羊ヶ丘北農試宿舍G-5	061-01		北海道農業試験場草地開発部 第5研究室	851-9141
永井 重翁	28 農獣	花巻市石神町77の3	025	23-4017	雪印乳業KK花巻工場原料課長	
梶谷 晴男	28 農水産	大阪府生野区新今里町4-4-13	544	06 753-0387	三菱商事(囑託)	0798 33-5008
吉本 正	28 農畜	千葉県松戸市松戸648千葉大松戸宿舎108	271	0473 65-0465	千葉大園芸学部助教授	0473-63- 1221(内376)
古谷 昌司 (26,27主)	28 農畜	浦和市別所3-38-10	336	0488 61-5073	古谷製菓KK技術部	0488 31-5873
下飯坂 隆	28 農畜	東京都杉並区成田西3-7-12	166	385-3269	日本軽種馬登録協会	429-5101
佐藤 巖	28 農畜	札幌市中央区南16条西8丁目	064	011 511-4772	雪印乳業KK技術研究所 札幌研究室	
福島 務	29 医	福島市三河南町7-17	960	0245 34-7223	福島医大産婦人科教授	0245-23- 1111内360
阿部晃一郎	30 工鉦	新居浜市庄内町3-1-9	792-01	0897 34-2879	住友金属鉦山(株)別子事業所 総務課長	
鎌田 正人 (28,29主)	30 農畜獣	浦河郡浦河町西幌別446	057	01462 3-284	KK鎌田牧場	

田中 浩	3 0	工治	大阪府東区北浜3 大阪神鋼ビル内 神戸製鋼溶接棒技術サービス課	541		神戸製鋼KK	
正宮 宏之	3 0	理動	美唄市東5条南7丁目	072		専修大学美唄農工短大教授	
斉藤 成俊	3 1	農経		063	621-4770	北海道信用農協連電算室長代理	
佐伯 和夫 (旧石塚)	3 1	獣	白老郡白老町萩野23	059-08		昭和工業KK	
大久保利彦 (30主)	3 1	獣	物 故				
加藤昌太郎	3 1	理物	立川市栄町5-24-13	190	0425 35-3538	(財)法人 日本総合研究所科学部 次長 千代田区平河町2-16-15 (北野ビル) タクタリ動物病院 久我山センター病院長	03-265- 2371内356 344-3536
加藤 元	3 1	獣	東京都杉並区久我山3-7-27	167	334-3536	中央競馬会競走馬保険研究所 研究 二課長	429-2311
千田 哲生	3 1	獣	// 世田谷区弦巻5-26-3-302	154	425-3462	十条製紙KK東京事業所	
岡本 洸	3 1	農生	浦和市針ヶ谷4丁目1-23 (3-404)	336	0488 33-5824		
荒川 清	3 2	経	札幌市中央区界川町495			札幌トヨタ北区支店	711-7191
榎本 幸人	3 2	理植	兵庫県津久郡淡路町岩屋神戸大学理学部 岩屋臨海実験所	656-23		神戸大理学部岩屋臨海実験所	
岡部 満雄	3 2	農畜	札幌市西区琴似八軒5条東5丁目道公宅206	063		北海道総務部審議室	231-4111
斉藤 実	3 2	経		930		不二越鋼材工業KK	
宮沢 寛	3 2	農林産	逗子市山の根3丁目12-10	249	0468 71-2487	日本揮発油KK 保全部	045 731-1261
伊藤 亮	3 3	獣	河東郡音更町中音更 同場公宅			農林省十勝種畜牧場経営指導課長	
池田 環	3 3	医薬	札幌市中央区大通西23丁目円山ビル601	063	621-4251 円山ハウス		
乾 直道	3 3	理動	藤沢市辻堂新町2丁目4-12	251	0466 36-9162	癌研究所病理部	418-0111 内 472
栗原 康	3 3	工鉦	東久留米市大門町2-3-6-403	180-03	0424 72-9064	通産省貿易振興局経済協力部技 術協力課	511-1511
渡辺 俊弘	3 3	工応化	上尾市大字上字堤下359 上尾シラコバト 公団アパート17-401	362	0487 71-8640	北炭化成工業KK	
柴田 久男	3 4	工電	札幌市西区手稲町西野937	063	661-8709	北海道電力部火力計画課長	

氏名	卒業年度	住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話
今田 哲	34 農化	西宮市苦楽園4番町18の16	662		武田薬品KK研究所	
生田 勝一 (33主)	34 経	習志野市袖ヶ浦3-4-5-202	275	0474 74-5206	読売新聞社千葉支局	
菅原 照雄	34 文哲				毎日新聞社北海道支社	
土井 敦	34 農畜	札幌市西区手稲前田368の30	061-24		ホクレン本所生乳共販課長	251-1905 261-8525
山本 智	34 水	斜里郡小清水町7区	099-36	0152 62-2573	小清水高校	
粟津健太郎	34 水	札幌市西区発寒834	063	661-1092	銀座屋 (製パン業)	
村山 哲	34 経	北九州市小倉南区若園第18.重州苑	802		本田技研工業	
樋口 正明 (32主)	34 法法	東京都世田谷上馬5-23-8	154	424-9496	東京都衛生局医務部	212-5111 内2582~4
千葉 幹大	34 獣	// 世田谷区弦巻5-26-4-206	154	426-1858	中央競馬会馬事公苑教育課長	429-5101
中村 美幸	34 経経	// 中野区鷺宮6-31-9	165	999-2443		
佐伯 雄二	35 農畜	群馬県館林市大字成島2544 森永住宅31	374		森永乳業KK館林工場	
本橋 幹久	35 農畜	(在サンパウロ)				
奥野 静子 (旧片山)	35 文英	札幌市中央区北2条西23丁目	064	611-8414		
小長谷善高	35 水	川崎市中原区丸子天神町73 NHK寮	211	0424 93-0791	NHK	
田中 紀介	35 農林産	静岡県清水市宮代町6	424		富士合板KK研究所	清水 34-1271
長谷川邦夫	35 法法	立川市栄町5-28-1 公社250	190	0425 35-7461	岩崎通信機KK経理部	
門奈 駿	35 医	茅ヶ崎市旭ヶ丘13-4	253	0467 82-5744	国際興業航空サービス部	281-2341
森本 梯次 (34主)	35 農林産	埼玉県北葛飾郡吉川町加茂694	342	0489 95-0951	自 営	600-5330
稲垣 修一	36 理化	愛知県知多郡阿久比町白沢みのかげ 10の10	470-22		大同製鋼KK	

佐藤 典子 (旧佐藤)	36	医	(在アメリカ)				北大病院第2内科	
高林嬉子代 (旧高階)	36	医	横浜市磯子区岡村町238	235	045 751-4431		虎ノ門病院	583-6871
河原 紀夫	36	理地	西宮市天道町20-16-302	663			アジア航測KK	429-2151
湯浅 止之	36	農畜	船橋市坪井町600-59	274	0474 65-3742		伊藤忠商事KK畜産課	662-5111
吉田 亨	36	工衛	八王子市打越町715-203	192			高砂熱学工業KK技術企画部課長	251-7121
千葉 祐記 (36主)	37	農畜	小平市喜平町860-1小平団地2-4-409	187			雪印乳業KK販売促進部調査課	357-3111
広岡 暢夫	37	農畜	沖縄県那覇市字楚辺54 みはらしマンション4011	902			全販連	279-0411
森 弘津	37	工精	名古屋市北区辻町2の36 大隅鉄工所第一寮	462			大隅鉄工製造部生産技術課	
四柳 智久	37	医薬	(米国留学中)				東京大大学院(薬学部)	
木塚 信次	37	農畜	横浜市戸塚区名瀬町784-10	244	045 811-8417		横浜市神奈川保健所食品衛生係	045 891-1921
伊藤 公一	37	医	虻田郡俱知安町北4条東1丁目 俱知安厚生病院	044			俱知安厚生病院	
大場 善明 (35主)	37	文史	東京都足立区栗原2-6-14-104	123	883-8245		読売新聞広告部	242-1111 内 4134
鶴見 好博	37	理化	東京都葛飾区金町5-19-3	125	600-2186		三菱瓶斯化学KK	600-2131
小島 杏介	37	水	横浜市神奈川区菅田町2872	221			淀橋保健所	368-6186
小山 毅	37	教	世田谷区南烏山2-6-8-106	157	300-4775		専修大文学部	044 95-71
市川 瑞彦 (37主)	38	理物	札幌市西区八軒95 公務員宿舎612-51	065	642-9491		北大教養部物理学教室助手	内 2691 5427
小出 秀達	38	医	大阪市阿倍野区美幸園1-8-24	545				
宮崎 健	38	文露		222	044 63-2501		夕刊フジ	
玉沢 一晴	38	医薬	埼玉県南埼玉郡白岡町大字上野田 1013の2	349-02	0488 82-3436		山之内製薬KK中央研究所	460-2171
岡田 征至	38	法	札幌市豊平区西岡138-35 シーアイタウン				北海道拓殖銀行事務部 札幌市南8条西8丁目	521-4111

氏名	卒業年度	住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話
志水 一允	38 農林産	世田谷区太子1-5-15-308	154		農林省林業試験場	711-5171
清水 洋	38 農畜	横浜市港南区日野町藤ヶ沢5791 藤ヶ沢住宅7-105			農林省畜産局家畜生産専門指導 官 東京都千代田区霞ヶ関201	在オキナワ
原 重一	38 農農	北区赤羽台4-17-18-1103	228	908-0503	交通公社調査部	内3575 211-3211
堀川 芳男	38 農畜	東京都中野区上高田2-16-9	164	385-8685	KKソニーオーディオビデオ取締役	
実吉 峰郎	38 医薬	(在カナダ)	150	461-5550	国立ガンセンター研究所	
新原 輝久	39 理地	東京都北多摩郡狗江町泉1284	182		国際航業KK	
中村セツ子 (旧田中)	38 農工	// 世田谷区奥沢6-24-14	158	702-1365	高千穂交易(株)東京支店	
恩田 正臣	39 農畜	群馬県太田市矢田堀190	373	027288 -2222	群馬県農政部畜産課	027288 7又12
横沢喜美子 (旧入江)	39 薬					
小林 則子 (旧寺江)	39 農畜	札幌市東区北36条東6丁目	065		天使短期大学講師	
高木 佑太	39 農畜	横浜市港区南綱島町10-22	223		台糖ファイザーKK	
小島 武	39 医薬	神戸市北区山田町上谷上字上の開地 42の30	651-12		鐘ヶ淵化学KK	
荒木 伸也	39 水	三浦市三崎2-22-10 大光水産株式会社 第二大光丸気付	238-02			
三浦清一郎	39 教	埼玉県草加市旭町2丁目1番37号1-406	340	0489 31-2043	文部省学術国際局 国際教育文化課	03 823-0241
田村 雅英	39 工合	立川市柏町4-51-1 柏町団地9-306	190	0425 35-1670	小西六写真工業KK日野工場管材課	0425 83-1521
八木 正己 (38主)	40 理生	札幌市豊平区里塚95番地12美里団地	061-01	881-4961	札幌市役所自然保護課	211-2532
野田 行文	40 獣	多摩市諏訪2-1-5-803	192-02		中外製薬総合研究所	987-7111
大木 誠示	40 理数	埼玉県入間郡富士見町大字鶴馬2824	354		ユニックKK	
吉田 賢一 (旧御坊田)	40 工治	横浜市港区南大久保町559-2	233		日本揮発油KK横浜営業所	

守屋 正	40	工精	相模原市上溝4800 三菱アパート3604	229		三菱重工KK相模原製作所	
萩原 雅典	40	経		192	0426 42-9974	日立製作所中央研究所	0423 23-1111
滝沢南海雄 (39主)	40	理植	旭川市川端町11丁目 美園マンション305	070		道立林産試験場	
松永 武彦	40	工電子	東京都小平市学園西町1211 日立一ツ橋社宅N-23	184		日立製作半導体事業部 IC開発部技師	
水野 佑亮	40	理化	北区北23条西13丁目南新川公務員宿舎10-301		711-7568	北大結核研究所助手	内 5536
横田 肇	40	農化	小平市大沼町1丁目181	187		明治乳業KK生産部技術課	
菅野 弘	40	農畜	江別市南樹町道職員アパート1-408	069-01		北海道農務部酪農草地課	
大沢 竜子 (旧 牧)	40	薬薬	札幌市西区手稲東1北6 王号館	063			
植木 迪子 (旧滝沢)	40	文独文	豊平区北野374の14			北大文学部助手	
松尾 英彦	41	水産	広島県佐伯郡五日市町栄々園5-11-22 日魯社宅	738	0829 22-7919	日魯漁業	0822 92-5322
八木多賀子 (旧八木)	41	文哲	札幌市豊平区里塚95番地12	061-01	881-4961		
桜田 慧子 (旧大堀)	41	法法	札幌市北区北21条西13丁目 南新川住宅518-53	001		北大法学部助手 退会	
黒沢 道雄	41	工機	千葉県鎌ヶ谷市道野辺16-1 鎌ヶ谷グリーンハイツ48-404	273-01	0474 43-5147	藤倉電線KK施設本部設備課	
高野 文彰	42	農農	千葉県松戸市松戸1155 コマツマンション201		0473 65-8281	高野ランドスケープ プラニン グ(株)代表取締役	03 208-7405
小栗 紀彦 (40主)	42	農畜	札幌市北区北21条西13丁目 合同宿舎新川住宅518-23	063	741-7335	北大農学部助手	内 2576
近藤喜十郎	42	文史	名古屋市中区大須3丁目31-23	460	052 241-1181	自 営	
高橋 昭夫	42	獣	野付郡別海町西春別駅前西町	088-25		別海農共中西別家畜診療所	
八木沢守正	42	理生	(在アメリカ)			ウイソコンシン大学	
山村 勝	42	農林	山形市南栄町2-10-20-101	990		山形県農林部林務課	
加藤 正昭 (41主)	42	工衛	帯広市大通り8丁目10	080		加藤家具店専務	

氏名	卒業年度	住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話
田中 悼	44 医	浦和市北浦和3-20-14 県公社		682-0567		
阿部 勝彦	43 農林	足立区千住東町2-21千住東団住宅1-1205			大昭和製紙(株)	
五十嵐 章 (42主)	43 法	前橋市古市町418-1			モ-ビル石油	
池田 統洋	43 工機	埼玉県上尾市二ツ宮705-4	362	0487 74-2051	東京芝浦電気KK原子力技術部プ ラント技術第一課東京都千代田 区霞が関3-2-5霞が関ビル4階	581-7311
入江 圭	43 工衛	東京都調布市布田4-31-13 美和荘		416-7531	都清掃局工事管理部公害対策課	212-5111 内 4722
高倉 宏輔	43 獣	八尾市八尾木22八尾合同宿舍342	581	0992 54-1380	農林省動物検疫所 神戸支所大阪出張所	
降旗 正忠	43 工電子	船橋市山手2-3-36 菱電アパート2-405	273	0474 31-5320	三菱電機KK 宇宙開発担当	
狩野 和子 (旧仙波)	43 教	小樽市桂岡町274		047-02		
山本 絃明	43 経	千葉市幕張町5-221 三洋電機幕張荘501	275	0472 72-8135	千葉三洋販売株式会社	0474 32-0321
浜岡 秀洋	43 工機	大阪市寝屋川市東大和6-5 浜明男方	572	0472 21-2509	三洋電機KK	
斉藤 勝雄	44 農機	札幌市澄川12の8	061-21	831-6281	ホクレン農業機械課	
田中 力	44 獣	水戸市石川4丁目4028-9	310		雪印乳業KK	
春田 恭彦 (43主)	44 農畜	宮崎市花ヶ島町大原2347 日本中央競馬会 宮崎競馬場	880	0985 25-3448	中央競馬会宮崎競馬場	0985 25-3448
村井 弘一	44 農畜	横浜市神奈川区千若町3-1			協同飼料(株)関東支店	
山本 進	44 水化	横浜市保土谷仏向町1723 栗田工業相模寮			栗田工業	
寺崎 弘恭	44	大阪府豊中市刀根山町4-7-10	560		大阪大学在学中	
建部 雅子 (旧今井)	45 農化	豊平区羊ヶ丘1番地北海道農業試験場宿舎 C-7-1		851-5344		
小野 政則	45 農林	堺市桃山台1丁目3番2棟304号	590-01	0542 61-0311	永大産業(株)名古屋出張所	

加藤 公敏	4 5	理化	福岡県大牟田市上白川町 2 - 3 0 8 三井東庄白川アパート 6 - 1 - 2	837		三井東庄KK	
橋口 庸	4 5	医					
本田 徹 (4 4 主)	4 5	医	東京都豊島区高田 1 - 1 - 1 9		03 983-3524		
太田 清澄	4 6	農農	茨城県土浦市中貫 2 5 日本住宅公団職員住宅 3 の 1 号	300		日本住宅公団研究学園都市開発局	
堤 秀世	4 6	獣医	札幌市北区北 2 7 条西 1 1 丁目	001			
中寺 清久	4 6	工機	明石市川崎町 2 - 5 - 3 0 5	673		川崎重工KK技術本部制御技術部	
松井 亮 (4 5 主)	4 6	医	石川県金沢市小立野 4 丁目 4 - 7 1	920	0762 21-7102	金沢医科大学助手	
今井 敏郎	4 7	理化	札幌市北区北 1 3 条西 4 丁目 偕生荘	060		北大理学部大学院生 (博士)	
大見 太一	4 7	文美	福岡県北九州市八幡区久喜町 1 丁目 陣山 2 丁目 1 0 - 2 9	806		自由業	
梶村 哲世 (4 6 主)	4 7	獣	船橋市二和町 1 5 7 - 2 7	274	681-8326 682-8667	第一製薬	681-8326 682-8667
中村 慎一	4 7	水産					
榊井 明	4 7	工鋳	札幌市北区北 2 0 条西 7 丁目 幌北荘	001		北大大学院博士課程	
田崎 拓明 (4 7 主)	4 8	獣医	鹿児島県曽於郡末吉町岩崎 3 6 1 3	899-86		開業	
近森 憲助	4 8	獣医	徳島市八万町下福万 1 2 3 大一ビル 3 1	770		徳島大学医学部助手	
西村正二郎	4 8	農林	島根県松江市西川津町 1 0 1 5 野津方	690	0852 21-0592	島根県庁	
横山 豊昭	4 8	獣医	滋賀県栗太郡栗東町大字御園 1 0 2 8 東 5 - 4 0 4 号	520-31	07755 8-2146	中央競馬会、栗東トレセン	
南部 孝一	4 9	農農化	札幌市東区北 2 0 条東 4 丁目 北沢方	065	741-3753	木田製粉	
則近 彰 (4 8 主)	4 9	文独文	岡山県真庭郡勝山町原方 教職員住宅 6 号室	717		勝山高校	
景山 博文 (4 9 主)	5 0	文中文	東京都中野区丸山 1 - 1 4 - 8	165	03 388-3305	地方競馬振興会	
吉野 勝之	5 0	農林学	東京都葛飾区金町 5 丁目 6 - 1 1 サニ-コ-ボ-A-101	125	608-3584	ヨシモトボール(株)	03 216-5931

氏名	卒業年度	住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話
相川 宗巖	50 農農	札幌市北区北20条西7丁目 幌北荘	001		北大農学部大学院生	
江口 州志	50 理高分子	" " "	001		北大理学部大学院生	
佐伯久美子	50 農畜	香川県丸亀市塩屋町82				
則近 和子 (旧常田)	50 工応化	岡山県真庭郡勝山町勝山1091-3 教職員住宅6号	717			
添田 昌一	51 農畜産	滋賀県栗田郡栗東町御園1028 西独身寮東12号室			栗東トレーニングセンター	
柴沼 俊	51 理化Ⅱ	札幌市北区北15条西2丁目 奥村方	001	711-3973	北大理学部大学院生	
阿部 一哉	51 経済	岩手県一ノ関市弥栄市茄子沢123	029-02	019143 -2973	県立一ノ関第一高等学校	01912 3-4311
水野 豊香	51 獣	府中市天神町4丁目2-1 武蔵野寮内	183		日本中央競馬会	
本村 洋文	51 農経	愛知県知多市八幡字荒井140の1 第1山公荘	479	0562 32-4273	王子コーンスターチKK	
若松 光子	51 農畜	大阪府羽曳野市南恵我ノ荘1-6-2	583			
阪上 泉	51 水産	東京都千代田区飯田橋3-2-5				
新野 晶子	81 水産	札幌市西区手稲西野555の21 嵐川方	063	622-2272	北大歯学部技官	
森 巖	51 水産	函館市中道町9 北大北農寮	040	0138 52-1160	北大水産学生	
石川 淳子	52 理高分子	札幌市北区北19条西3丁目 藤原AP	001		北大理学部学生	
桑田 荘平	52 工衛生工	" 北区北20条西7丁目 金木方	001	711-7811	北大工学部大学院生	
佐野 淳之	52 農林学	" 豊平区月寒東2条2丁目 月寒学寮		851-0856	北大農学部生	
平野 雅裕	52 法	" 中央区南11条西23丁目		563-0479	北大法学部学生	
横沢 敏夫	92 農農化	" 北区北20条西7丁目 幌北荘			北大農学部学生	
水井とく子	82 理地物	" 北区北32条西9丁目 石神方		721-8444	北大理学部大学院生	

現 役 部 員 名 簿

氏 名	学年	学部学科	現 住 所	帰 省 先
笠間 淳子	4	農 農 化	北19条西3丁目 藤原アパート (721-8587)	宇都宮市桜4丁目17の14
長屋 清隆	4	工 応 物	北18条西6丁目 山田荘	岐阜市上土居743-53
半浦 剛	4	工 土 木	北15条西3丁目 中村アパート (741-4549)	東京都練馬区北町7の16の3
本城 敬文	4	獣 医	北17条西5丁目 ゆり荘 (731-7806)	大阪市天王寺区堂ヶ芝町14
山川 恵	3	農 農	北21条西8丁目 さつぼろハウス (741-8515)	神奈川県藤沢市亀井野1850
山本 裕介	3	農 畜	北19条西4丁目 弥永方 (711-2575)	根室市幸町5 運輸合同宿舍501-12
失田 明	3	農 土 木	北16条東1丁目 クラブ荘	静岡県田方郡大仁町宗光寺
岩田 正勝	2	理 類	北19条西4丁目 弥永方 (711-1358)	神戸市灘区桜ヶ丘町13-8
木村 憲子	3	文 文	北30条西12丁目 (751-6021)	同 左
中島 孝幸	2	文 類	北22条西2丁目 協和荘	名寄市西8条北4丁目
浪内 陽子	3	北 看	北14条西5丁目 北看寄宿舍 (711-1161) 内線 5872	網走市西3丁目
三好 功悦	3	文 文	北15条西3丁目 中村アパート (741-4549)	群馬県高崎市下小鳥町367-3
太田 敬	2	医 進	北27条西7丁目 向陽ハウス (751-9628)	三重県松阪市小黒田町417
国枝 保幸	1	医 進	北15条西3丁目 中村アパート (722-4206)	埼玉県戸田市川岸2-5-12
島村 努	2	理 類	北19条西4丁目 弥永方 (711-1358)	埼玉県川口市弥平2-10-19
中島 哲彦	1	水 産	北20条西7丁目 幌北荘	大阪市住之江区粉洪3-1-3

氏名	学年	学部学科	現住所	帰省先
成田 慎二	1	理 類	北17条西6丁目 ゆり荘 (731-7806)	豊平区北野227の304
西川 理一	2	理 類	北17条西8丁目 恵廬寮 (742-7333)	大阪府堺市深井中町323
日南田ゆり子	2	文 類	北21条西7丁目 沼沢方 (741-4403)	広島市瀬野川町中野長者原
水島 洋子	2	理 類	北19条西6丁目 小池荘 (742-7784)	静岡市田町6丁目40
吉田 円	2	理 類	北18条西5丁目 明和荘 (741-3365)	東京都文京区向丘1-6-6

勝手ながら、住所変更等の際には部宛に御連絡下さる様御願ひ致します。

はなはだ不備ではございますが、お気づきの点がございましたら、御口添えいただければ幸いです。

大久保 利彦君の逝去を悼む

半 澤 道 郎
(第六代部長)

昭和三十一年獣医学部卒業の先輩大久保利彦君が五月一日に静養先の福岡市で前途有為の身を以て病に倒れられたことは誠に痛恨の極みであります。

君は馬術部が戦後復活した翌年の二十七年に入部され、部員として活躍されましたが、特に二十九年自馬繁養に当って、マネージャーとして長年の夢を実現し、三十年には主任として部を統率し、現在の部の基礎を築いてくれた大思人の一人であります。

北大馬術部三十年史に詳しく記されているように、馬術部中興の先輩で、卒業後馬には直接関係の無い雪印乳業の酪農課に勤務されて居りましたが、有力な後援会々員として、常に馬術部を応援して来ました。会社にあつては困難な労使関係の仕事に寧日の無い活躍で上司の信頼も厚く、大いに将来を属目されていたようで私共も期待して居りました。過労も手伝つてか一昨年六月悪性の病魔(肺癌)に犯され、八月に一方の肺を取り骨をけずる大手術をされた後、小康を得て十一月再び出社され、病軀をおして勤務をして居られました。が、昨年六月から郷里に帰って静養され、大部回復されて近く札幌に帰って来られるというのを聞いて喜んだ矢先の計報で、奥様と中学一年と小学校三年の男の子を遺して死んだ彼の心中を思うと本当に無情のことです。

私が彼と最初に話を交わしたのは、北大に來られて馬術部に入られたばかりの時、札幌競馬場の正門の近くでありました。第一印

象は舟せ型で眼の大きい紳朴な紅顔の美少年で、細い身体を制服の上着でキチンとした乗馬服の姿でしたが、その後の彼の行動は第一印象とは違つて、なかなか気骨のある努力家、実行型で渉外も得意で、自馬をもつた部の経済難を救うために、ダンスパーティーをやつたり、部の馬を競馬に出走させたり、その他いろいろ部の歴史に残るようなことを実行したのには感心したりビクビクさせられたり、当時札幌の若い女性の間で馬術部主催のダンスパーティーは大変な気があり、他の運動部主催のダンスパーティーとは断然差があり、私は暴力団や街の与太者の闖入を心配したり、下足番の手伝いをさせられたりで、これも大久保君のお蔭であつて、今では懐かしい思い出です。

君が札幌に來られてから、時々会社に行つて勝手なお願ひをしつたりして居りましたが、四十五年札幌乗馬会ができてからは會員になつて頂いて、彼にとつて思い出多い札幌競馬場で、数回乗馬を乗りむ機会を持つことができました。十七年振りの乗馬で最初は鞍はまりが悪く思うように運かないと嘆いていましたが、二回目からは昔鍛えただけあつて、馬場も障害も堂に入つたものでした。札幌乗馬会々報の創刊号に寄稿してくれた文には、満洲で育つた小学校時代にロバに乗つたこと、中・高校時代には九州の田舎で中間種に乗つたこと等を、大学時代のスペイン常歩、パッサージュ、障害飛越の写真を添えてあり、今は悲しい記念になつてしまいました。

大久保君を知る多くの人々、一諸にダンスをした女性達も、彼の死を悼み心から冥福を祈つてゐることでしょう。

編集後記

厳寒の冬が過ぎ、とうとう暑い季節がやってきてしまいました。そして、ここに、ようやく部報第22号を世に送ることができる段階になりました。部報発行のために御協力いただきました半沢先生、河田前部長、小池新部長、岡田監督を始め先輩諸氏、並びに慎重に時間をかけ、そして、血の出るような努力をしてくださいました現役員諸兄弟姉妹に深く感謝すると共に、私の無能さのために、このように発行が、大幅に遅れましたことを深くお詫びいたします。

畜大の部誌に掲載されていた『厩舎教室と「草原馬」刊行のこと』という文章の中に、次のような一節がありました。「編集委員、編集責任者というのは、本当にエライのである。エライ人でなければならぬのである。そして、同時に、その仕事がまた、エライ（シンDOI、キツイ）のである。」私は、この文中にあるようなエライ人間ではないし、またそれを真似することさえできませんでした。申し訳ありません。しかしながら、私は私なりに、他の一年目の協力を得て、がんばったつもりであります。

今回の部報には、我が部のカラーを軸として、我々一年目のカラーが、ある程度表われていると思います。この部報が、過去に卒部なされた先輩諸氏と現役との間をつなぐ一冊子になることができましたら幸いです。

(文責・島村)

編集委員

島村 努・成田慎二・吉田 円・

その他一年目

部報 第二十二号

昭和五十二年七月初旬 発行

発行者 北海道大学馬術部

札幌市北区北十七条西六丁目

編集者 北大体育会内

編集者 部報編集委員会

印刷所 北大生協プリント部

非売品

庄 内 歯 科

院 長 庄 内 貞 夫

札幌市白石区本通2丁目北71

TEL (861) 2504

クリーンサッポロ!!自動車公害追放整備

札幌陸運局指定民間車検工場

北 大 モ ー タ ー ス

札幌市北区北十八条西五丁目

721-1526

江戸考

政寿司

割烹 一品料理

本店 小樽市 物見所 畔
電話 ④ 〇〇二二 ② 〇〇一
支店 札幌市 南 五 丁目 西 小 路
電話 (511) 〇 田 〇 田 〇 二 〇 二 七



塩野屋

北18西4 北18条ハイツ地下

飲むほどに
酔うほどに...



自然と愛馬精神を大切にする人達の社交場
フロンティアライディングパーク

フロンティア乗馬クラブ

馬場 北海道厚田村しっぶ165の3

01336⑥3858

コーヒーと乗馬用品

喫茶 フロンティア

札幌市北区北6条西6丁目

TEL 711-9427
741-4903

北海道名物

ジンギスカン専門店

義経本店

札幌市北18条西5丁目

TEL (721) 一七二三
義経本店

馬具靴
製造販売修理

安くて丈夫

中野馬具店

札幌市白石区南郷通七丁目

TEL (863) 五七六三

スポーツ・レジャー用品の
総合センター
馬術用品コーナー開設

■北専・札幌版・住友・ダイナース・ダイヤモンド・HCB・ユニオン・ミリオンの各クレジットカードを
ご利用下さい。高価商品には「北専ローン」を、最高24回払いまであります。

 **スポーツハウス**

さっぽろ中央区南3条西5丁目 ☎ 221-1111

支店. 旭川・釧路・岩見沢・帯広・北見・青森。

キャッスル

ボリューム満点の
カッカレーに君も
挑戦してみよう!!

北17条西3丁目

和洋酒・煙草・食品

川端商店

札幌市北17条西4

Tel (742) 〇三八八

できたての

おいしいパンの店

北海十字

店 北区北17条西4丁目

工場 北区北20条西3丁目

男のための本格派スーツ。

アメリカカンタイフとヨーロッパの最新ファッションを
分けた遊びやすいコーナーへ男の館ヤングマンズが参上



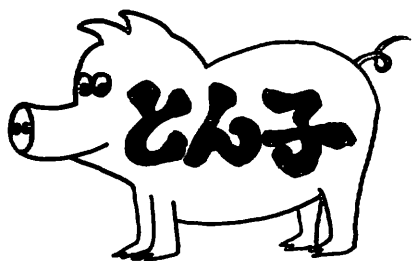
寿司，鍋もの，天ぷらなど（出前迅速）

各種御宴会・御会合等 承ります。

大将 鮎

北区北18条西4丁目

TEL 742-7202



北
18
西
5

TEL
742-5829

とんから
とんの子

乗馬用長靴

スキー・スケート・登山靴
各種靴製造と販売

札幌加盟店

三浦靴店

札幌市南一条西八丁目八番地
TEL (代) (231) 0901

雑穀飼料問屋

渡部商店

札幌市中央区北13西18(競馬場前)

TEL 711-7034

日本中央競馬会

札幌競馬場

札幌市北14条西19丁目

TEL (721) 0461~5

場長 室屋 浩一郎

産科・婦人科

田畑病院

院長 田畑武夫

札幌市中央区南五条西二丁目

TEL 531-7770

Coffee

味とかおりを
創る店



サッポロ北区北11西4
TEL 741-2345
741-3174

●北大関係作品

北海道大学創基百年百周年記念映画

北大医学部癌研病理・学術映画

『大なる楡』 カラー35分

『異物化』—癌免疫の秘密を探る—カラー25分

●記録映画 ●学術映画 ●PR映画 ●CM ●VTR

株式
会社

電通映画社北海道支社

札幌市中央区北一条西七丁目三番地

電話 (251) 6071

●(本社)東京 (支社)札幌・名古屋・大阪・九州

●『大いなる楡』のプリント御用命の節は当支社迄御連絡下さい。

クラシック名曲と珈琲

CREMONA

クレモナ

N16・W5近代店舗ビル1F

(地下鉄北18条駅より3分)

TEL: 742-7599

医薬品卸



ホシ伊藤株式会社

本店 札幌市南八条西十四丁目一三九七番地
支店 帯広・釧路・北見・函館・旭川・滝川
室蘭・苫小牧・岩見沢

札幌市東区東苗穂二八番の一六二

太田装蹄所

おふくろの味

食堂
まこと屋

札幌市北14条西4丁目
TEL 742-7794

- 季節料理
 - 大小宴会
- } 御予算に応じて各種
コンパを承ります。

仙 楽

中央区南五条西六丁目 新生ビル2階
TEL 531-5622

すずらん乗馬クラブ

北海道ならではの豊かな自然の中で
乗馬を楽しめます。

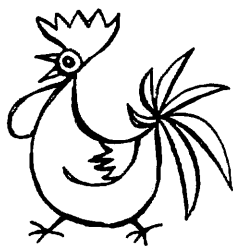
- 会 員 制
- 遠乗コース有り
- 個人指導，競技選手養成
(初心者歓迎)

馬場 恵庭市西島松 自衛隊補給所前

TEL (01233) 6 - 6386

夜間 (松崎) 6 - 8519

やきとり



なると

北区北24条西4丁目

メトロ会館

751-1628

酒・たばこ・食料品・塩

土野商店

北18条西5丁目

TEL711-2575

くらしと健康を守る

市民生協

札幌54店・旭川6店・小樽4店

本部／南1条東1丁目

TEL 271-7711

かあさん の 堂々



火曜よる9:00

長年住みなれた土地に劇場が建設されることになった。
そこに住むタバコ屋の未亡人と5人の子供達を中心に
ドラマは展開するのだが……!?

出演●京マチ子・渡瀬恒彦・酒井和歌子・杉浦直樹・益田喜頓・松本ちえ子・泉ピン子 ほか

白い波紋

金曜よる8:00

17年前の誘拐事件が三つの家族と
その世代を見えない糸で結びつけた。
女子高校生(片平なぎさ)をめぐる
展開するジュニア・ロマン。
親子とは…愛とは…!

出演●田中 健・片平なぎさ・司 葉子
松坂慶子・栗田ひろみ・二谷英明 ほか



安全・親切・快適

全日空限定乗合・一般観光貸切・一般乗用の

北都交通株式会社

取締役社長 武田忠幸

本 社 札幌市東区北30条東1丁目 ☎代表751-1631
ハイヤー部 札幌市西区北23条西16丁目 ☎代表711-4181
バス部 札幌市北区北7条西4丁目東センビル内
貸切バスセンター ☎代表721-6371